幻想世界英雄列伝フェアプレイズ ＩＦ

黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想世界英雄列伝フェアプレイズ　ＩＦ

【Ｎコード】
Ｎ７８８１Ｍ

【作者名】
黒

【あらすじ】
アシュリアーナ。そこはもう１つの世界。業を背負う魔王が復活する時、物語は動き出す。――　別に連載する『流星のロックマン　ｓｅｃｒｅｔ　ｓｔｏｒｙ』としばしば絡める予定。――※この小説は、打ち切りになった岡田芽武先生のフェアプレイズという作品を自分なりにその後を書いた物です。また、オリジナルキャラを出したり新しい設定をと先生の書きたかったであろう作品から遠くなってしまうと思いますので、「岡田芽武さんの書いた作品でないと認めない！」という方は『戻る』をどうぞ。

キャラクター紹介（前書き）

その名のとおりです。主要なキャラクターの紹介はこちらに書いております。

キャラクター紹介

サイ

かつて、復活した業魔王との闘いに敗れて今は亡き存在。

業魔王エリアード・ジーン

暗い灰色の肌と白い長髪の男性。巨体で、ヒト１人を片手でガッシリ掴めるほど（つまり、ヒト一人の身長＝手の平サイズ）。

周囲には水晶のような球が浮いており、淡い光を発して照明代わりになるなどにも使える。

天

サイを護る『天魔伏滅』の一角。２０代前半の男性。修行僧が持つような硬い棒を持ち、屈強な筋肉も持ち合わせている。

魔

天と同じく『天魔伏滅』の一角。１０代後半の女性。天のように目に見える得物は無いが……？

伏

『天魔伏滅』の一角。年は天と同じくらい。端正な顔立ちで、クールで理知的な印象を与える。闘い方など詳細はまだ不明。

滅

天魔伏滅』の一角。体はマントで覆っており、顔は鼻から下をマスクで隠していて表情も詳細な歳も分からない。魔や伏と同じく、闘い方など詳細はまだ不明。

王女リュート

四王国に護られしジュリアネスの王女。歳は１０代前半ほどだが、強大な魔力を持っている。業魔王に魔力を奪われて殺されたようだが、その前に……。

キョータ

本名『斉木陽太』。小学４年生。赤い髪に緑の瞳。者だろうと物だろうと大事にする性格で、明るく快活。やや向こう見ずな所があるが、意志が強い。

後述のボボウと一心合体する事でザラマンデルとなる。

ボボウ

キョータと心を通わせた相棒とも言える存在。属性は炎。語尾に「なのら～」などの変わった口調を付けている。

カナデ

本名『琴井奏』。キョータと同じく小学４年生。少し紫がかった藍色の瞳と、瞳と同色の長髪を持つ少女。おっとりしているが人見知りは無く、ハキハキ話すタイプ。キョータに想いを寄せている。

後述のシャララと一心合体する事でウンディーヌとなる。

シャララ

カナデの相棒。属性は水。元はシノブやシノブの姉の素体だった

が、登録を書き換える事で現在はカナデの素体となっている。言いたい事は遠慮なく言う強気な性格。

キーン

本名『月島数騎』。上の2人と同じく小学4年生。金髪金眼で、魔術師が着る様な藍色で大き目のローブを纏っている。言ってしまえば、極端なまでの魔法使いフェチだ。だがその実、おおよその事が出来てしまう秀才で、キョータの一番の理解者で親友。

後述のフーイと一心合体することでズルフェとなる。

フーイ

キーンの相棒。属性は風。キョータ達のクラスメイトの金光の素体、エジーを元に作られた妖精型の素体。物静かで冷静な性格だが、厭世的ではない。

シノブ

本名『皇志乃武（すめらぎシノブ）』。緑髪で丸メガネを掛けた中性的な少年。気弱だが優しく、穏やかな性格。現実世界からザラマンデル達へのバックアップがメイン。

余談として、ネーミングセンスは彼も彼の姉も壊滅的。

こげちゃ

シノブの素体。黒猫の姿をした獣型素体。闘うチカラは無いが、想いを明確なチカラに変えて味方に送る事が出来る。

金光

キョータ達のクラスメイトで、典型的な嫌味キャラ。本当に大事

なのは高級品などの主義を持っている。

キーンの兄
　国外にいるというキーンの兄。……色々と謎な存在。

柊ゼン
　キョータの学校に転向してきた者。ボボウやフーイ同様、動く素体『クーエイ』を持っているが、彼等がするのは心の闇を使ってする『邪心合体』。
　アシュリアーナと現実世界を行き来して暗躍する。
　なお、苗字は現実世界のある少女から借りた。

クーエイ
　狐のような素体。口調はやや弱気。ゼンと邪神合体を果たす事で黒王グリフィアスとなる。操るのは大地。

キョウ
　オリジナルキャラ。
　黒髪で黒いローブを纏い、ダークという黒猫を連れている。とある約束があってアシュリアーナに来ているらしい。

天野先生
　キョータ達のクラスの先生。アシュリアーナの天と似ているが全くの別人。

ダレス

業魔王四天王、四天滅殺の一角。２０代後半の男性。長身で鼻に掛けるタイプの丸メガネと長髪が特徴。フェルシア流降魔符印術の使い手。言ってしまえば、降魔と呼ばれる人造人間を自在に操り敵を倒す闘い方。

得体のしれない、何を考えているのか読めない性格。

ジュリ

業魔王四天王、四天滅殺の一角。１０代中盤の男性。顔立ちは中性的だが、己が肉体のみで敵を薙ぎ払うクルダ流交殺法の使い手。余談として、ネーミングセンスは皆無。

ナラカ

業魔王四天王、四天滅殺の一角。中世の騎士のような甲冑を被り、反面東洋の侍のような服を着ている老剣士。穏やかでゆったりした口調だが、キシュラナを治める王。キシュラナ流剛剣士術の使い手。

コユキ

業魔王四天王、四天滅殺の一角。歳は１０代中盤と若いが、樹霊王国リキトアを治める王。ハキハキした性格で言いたい事はハッキリ言うタイプ。牙族。草木や岩、水など、自然物を自在に操る能力を持つ。

キサヤ

盗賊稼業の少女。機敏さと動体視力に優れており、後腰に剣を差している。僕っ子でラフな口調。戦災孤児を集めて料理や稼ぎ方な

どの生き方を教える先生役もしている。

皇言霊（すめらぎホツマ）

ニライカナイのキャラクター。歳は２０代前半。茶髪で穏やかな口調。飄々としており、その奔放さから時折乱空を困らせる。

柊乱空（ひいらぎらんくう）

ニライカナイのキャラクター。１７歳ほどの少女。自分の心に素直な感情的な少女。ホツマと乱空、２人で１人の音使い。

なお、前述の柊ゼンの苗字は、情報屋の甲斐が彼女の戸籍から無断で拝借したもの。

甲斐真紅（かいシンク）

ニライカナイのキャラクター。情報屋を営む男性。歳は２０代後半。喫煙者で、夏だろうがコートを着ている。……裏の顔もあるようだ。

レヴィアタン

オリジナルキャラ。ダレスの部下。頭から足までマントで隠している。

用語集（前書き）

おおよそ大きなネタバレにならない範囲で用語を出しています。

用語集

フェアプレイズ
　世界規模のオンラインゲームとして知られているが……。

アシュリアーナ
　フェアプレイズの舞台となる世界。クルダ、リキトア、キシュラナ、フェルシアの四国がメインの舞台。

素体（フレーム）
　人型や妖精型、動物型、キメラのような幻型など、様々なタイプのある人形。フェアプレイズを開いたパソコン（またはゲーム画面）の前に置く事で使える。
　ゲーム起動時は、コントローラーで画面の素体を動かす事で現実の素体も動く。
　また、素体と真に心を通わせた者の素体は現実世界であろうと自分の意志で自在に動く事ができる。

一心合体（マインドユニオン）
　素体と心を通わせた人間と合体する事で、特殊な魔導形態となる事が出来る。ザラマンデルやウンディーヌ、ズルフェがそれだ。

武装合体（アーマメントユニオン）
　現実世界の物を現実世界の素体に持たせる事で、ゲームの中の素体に強化アイテムを送る事が出来る。（例、ボールペン：槍　グロ

ーブ：巨大な拳。ロケットパンチのように撃ち出す事が可能）

邪心合体
　いわば正統派の一心合体に対し、心の闇にある暗黒のチカラで合体する。

邪神合体
　ジュリを始め、業魔王から四天王に渡された特殊な素体と合体する事。

音使い
　乱空とホツマの事。ずいぶん特殊な能力のようだが、現在では名前のみ明らかになっている。

プロローグ（前書き）

まずはプロローグ。あらすじにも書きましたが、『流星のロックマン　Ｓｅｃｒｅｔ　Ｓｔｏｒｙ』と平行させて進ませます。って言っても、書きたい方を書くって感じなんで平行して進むかは分かりませんけどね。けど、「あぁ、この話の時向こうではこうなってんだな」っていう絡みや、直接の絡みも書いていきます。

それと、元々漫画なのを小説にしたと言う事で、小説にした時に分かりづらい所はカットする事もあります。

前書きが長くなりましたが、お楽しみ頂ければ幸いです。

プロローグ

鎧を纏う屈強な戦士達がひしめき合う城内。彼らはとある者を倒すために城に乗り込んだのだ。……自分達の平和を掴むために。

……だが、熱く、殺気立っていなければならないはずのその空間には動揺が広がっていた。

「大変だ!!!　勇者サイがいないぞ!!!」

「まさか……やられてしまったのか!?」

中心人物である『サイ』の不在。その事実はその場にいた者を不安にさせ、その不安は見えない生き物のように伝播していく。

「バカ者!!　そんな訳あるか!!　戦闘の混乱で見失っただけだ!!!」

しかし、その不安の波は1人の男性によって塞き止められた。

歳は２０代中盤から後半。修行僧が着る様な緑の衣を纏い、肌の色は褐色。髪は黄色で首と頭の境目辺りで結っている。目は蒼（暗い青）色。額には黒い布が巻かれており、自身の二つ名が書かれていた。左頬には過去の戦闘で負ったと思われる傷跡がある。

「最後に勇者サイを見たのは誰だ!!」

「私よ、天!」

「魔か！　何処で見た!?」

黄色髪の青年の声に答えたのは少女だ。凛とした声で、歳はおおよそ高校生くらいだろうか。オレンジ色の髪に水色の瞳。額には自

身の瞳と同色の宝玉がある。髪は短く、耳の横辺りの三つ編みは肩まで来ている。青年の額に書かれている二つ名だが、【 魔 】という少女から呼ばれたように、ただ1文字、『天』と書かれている。

魔はサイに関しての情報を天に伝えた。

「それが……私達四天王を置いて1人で戦っていて……業魔王の門の近くで見えなくなって……」

途切れ途切れなのも無理は無いだろう。彼女の言葉どおり、戦闘の最中そこまで周りに気を配っていたら自分が倒されてしまう。そして、業魔王と言うのが彼らの倒すべき敵だ。

「業魔王の門で消えた……？　……まさかっ！　魔！　他の仲間を業魔王の門に集めろぉ！！」

「わ、分かったわ」

魔は天の気迫と声に若干押されながらも応え、他の四天王を呼ぶべく駆け出す。そして、彼女が駆け出すと同時に【 天 】も走り出した。

勇者への若干の怒りを込めながら。

「ちきしょうあのバカ！！　たった1人で業魔王と戦うつもりだぞ！！！」

――業魔王・門前――

ヴヴヴヴヴゥ……バチッ！　……ヴヴヴヴヴヴゥ……

天と、一足早く戻ってきた魔の前にあるのは巨大な門だ。自分達

の身長なんてゆうに越すような、巨大な門。そして、門の隙間から逆る雷により空気中のチリが爆ぜる。門の真ん中に縦に走る隙間があり、それは誰かが門の向こうに入っていった証だ。

天はその雷とわずかに開いた門を見て、悔しげに歯を食いしばる。

「門の封印が解けている。やっぱり1人で中に入ったんだ」

魔もまた、サイに対する心配と納得できないと言う感情の元に、足を地面に打ち鳴らした。

ザスッ！

「どうしてよ!?　この門は1度入ったら業魔王を倒すまでは開かないのよ！　仲間を置いてなぜ1人で入ったのよ!!」

「王女リュートが捕らえられたからだ。……だから私達を置いて行ったに違いない」

その声の持ち主は天とは違う。

蒼いローブを身に纏い、薄い緑色の長髪に細い切れ長の目。整った顔立ちの男性。天のような精悍さは無いが、その代わりどんな状況でも冷静でいられるような思慮深さを連想させる雰囲気だ。

そして彼は四天王が1人。その名は――。

「伏！」

天が青年を呼ぶ声の後、天井から軽やかに舞い降りる者がいた。

フワッ

「滅か？」

「業魔王は王女の魔導力を手に入れた。……そのチカラは無限」

声より、姿より先に気配でその存在に気付いた天。滅は天の声に応えた後、腕を組んで続きを語る。

なお、滅の容姿は他の3名とは一線を画している。鼻先まで覆うマスクに仕込みが仕組まれていそうな大き目の服。一見して忍のような出で立ちだ。目と髪は灰色である。

「勇者サイは我々仲間の身を守るために、あえて1人で最後の戦いに向かったのだ……。1人では勝てないと知っていながら……」

ドンッ！

天が壁を強く叩く。彼の言葉は天の推測と合致していたのだ。……サイは、自分だけが犠牲になる道を選んだ。

「王女を護れなかったのは勇者のせいじゃ無いだろう！　俺達4人が揃って【　天魔伏滅　】！！　……勇者の1番の仲間のはずだろ！？　例え勝てなくても、5人で戦って……それで死んでしまっても悔いは無い！！！」

その天の叫びは自分を犠牲にする勇者への怒りか、必ず戻ってくるようにという懇願か。

「護るべき人々と自分の仲間と……全ての命を背負って……。たった1人で戦うつもりなのか！！　勇者サイ！！！」

門の内と外では世界が違う。業魔王の持つ膨大な魔力が門の内側を別の世界に変えているのだ。荒々とした暗い大地を、たった1人

で創りあげたのである。

ヴゥ……とんっ

その世界と外を繋げる門から1人の人間が入ってくる。時折、雷による光でその人間の姿は一瞬だけ現れるが、それは文字通り一瞬。この世界には、人工的な光はもちろん、太陽の光も届かないのだ。

『……ようこそ勇者サイ。我が居城へ。……我に破壊されるために自分から我の前に現れたか……』

サイは真っ暗な中響いてくる声に臆する事無く、声が聞こえてきた方に口を開く。

「破壊されるつもりは無いが……ここまでくるのはずいぶん苦労したよ。その労を分かってくれるなら、明かりぐらいは点けてくれても良いんじゃないかな……？」

穏やかな声色。しかし、その中には強い意志が渦巻いている。だが、若い。凛々しい顔立ちが大人っぽく見せるが、顔にはあどけなさが残る。精々、中学生くらいだろう。額には緑色の宝玉が成された装飾を持ち、瞳は宝玉と同じ穏やかで、気高さを思わせる緑色。髪の色は赤だ。

臆する事も油断する事も無い。その気高い闘志を感じてか、業魔王は不敵な笑い声と共にその世界に明かりを宿した。

通常の人間の4倍以上ある身長。真っ白な長髪。肌は反対に暗い灰色だ。それが、業魔王。

彼はあぐらを掻き、自身の頬杖を膝に付けている。また、その世界を照らす光は業魔王の周囲に浮かぶ球から発せられている。業魔

王の魔力に応えて様々な働きをする球だろう。
業魔王のそばには、花とツタでできた牢がある。その中には、1人の女性の姿があった。

『ふふふふ……そうだな。お互い顔を見て話をしようか。ゆっくり話し合いをしよう。……それが終わったら、殺し合いをしよう……』
「勇者サイ!!　私を助けるためにたった1人でここまで来たのですか!」

花の檻に閉じ込められた王女は悲しそうな声で勇者に向かって叫ぶ。藍色を基調としたドレスに、少し紫がかった青い目と髪。優しく、穏やかな顔立ちだ。

『ふふふふ……王女よ。お前の持つ魔導力は我が奪った……。我がチカラは無限!　このチカラを前に、勇者は己が勝てぬ事を知るのだ!!!』

降魔王はそう言いながら王女へと手を伸ばし、花の檻を破壊して王女を巨大な手で鷲掴みにする。

『だから己の仲間である天魔伏滅の名を持つ4人を置いてきた。これ以上無駄な血を流させぬために、1人で殺されに来たのだ』

王女リュートの魔導力が奪われていた。
その事実と業魔王の断言的な言い方によりサイの眼差しは一層鋭くなる。そして、断言的な言葉を否定した。

「違う。……私はここで倒れる運命かもしれん。……だが――」

ザッ

サイは一歩踏み出し、真っ直ぐに業を背負う魔王と向かい合う。

「天魔伏滅の４人は私を継ぐ勇者と共に闘い、勝利するだろう」

『ふはははははっ！　貴様達が我に勝利する事なぞ……愚かな考え！　我は全てを破壊するために生まれし生物！　故に魔王！！』

その強気な言動どおり、業魔王の不敵な態度は崩れない。サイが立ち向かっているのは、破壊その物の様な……例えて言えば天災に挑むようなモノだ。

『勇者よ、貴様に世界なぞ救えぬ。われの破壊の意思から逃れる術なし。世界もお前も破壊する！　……そして――』

業魔王は自らが握り締めているリュートをサイの前に突き出した。

『お前の愛する王女も、破壊の意思によって死ぬのだっ！！』

それは恐怖からか、または自分のために犠牲になる者達への悲しみか。王女は澄んだ瞳に涙を浮かべながらもサイに向かって叫ぶ。

「勇者サイ！！　私に構わず魔王を倒すのです！　……護る者、だからこその勇者！　……私の命で……この地を、世界を救うのです！」

「……出来ません……王女リュート」

そのサイの言葉どおり、彼は右手に持つ剣を振り上げようともしない。無限の魔力を持つ魔王に臆したわけでは決して無い。

「大切なモノを犠牲にして得られる幸せでは、真の救いにはなりま

せん。私にとって、あなたも世界も、この地に住む全ての人々も、みな尊い命なのです」

「ッ。……」

サイの言葉がリュートの心に染み渡る。互いに想い合っている者同士の言葉は、実に響くモノだ。

「全てを大切にし、護るモノ。……それが、勇者」

『立派な事だな、サイ！！　だがっ！　――』

業魔王の手が黒味を帯びた炎に包まれ、サイへと迫る。人間の視覚が捕らえ、肉体が動くより早く、魔王の業火を帯びた手はサイを握り締めた。

『――この場で壊れる者に全ては救えぬ！！』

「ッ！！　サイイィィィィィィィッ！！！！」

目の前で愛する者が殺意に満ちた炎に焼かれる所はリュートに悲しみと絶望の叫びを上げさせるのに十分な理由だったろう。

黒き、強大な握力と禍々しい炎はサイを蝕むが、その凶悪な炎の中、サイは目を閉じて笑みを浮かべている。

（……貴様の言う通り、私はここで死ぬ。……だが、全てを護る優しい心を持った者が、必ず貴様の前に立つだろう）

ポロッ……ザクッ

サイが右手に持っていた剣が地に落ち、突き刺さる。勇者の命の灯火は、禍々しい破壊の意思とチカラによって、消されようとしていた。

（……護るという心は……不滅なのだから……）

そして、勇者は死んだ。逃げられた者も居ただろうが、勇者の仲間はその大半が魔王に殺されるか、囚われた。だが、誰も気付かなかっただろう。サイの意志が剣に宿り、姿も形も無い、我々が『神』としか呼べぬ者がサイの意志に応えた事に。

【……神よ、我の心を継ぐ者にどうか伝えて欲しい】

ぽうっ……

サイの剣に淡い光が宿る。小さく、か細く、弱々しいが、それでも消えないその光は人間の『生』に対する意志の様だ。

【人を護る優しい心を……全てを大切にする正しい心を……】

その光は誘われるように上に向かい、業魔王が作り出した世界を飛び越えて別の世界に飛び立つ。

【その優しい気持ちが、全ての悪を打ち倒す本当の力なのだと】

場所と世界は変わって、電信柱のそばの、ご近所奥さん御用達のゴミ集積所に、妖精を思わせるようなぬいぐるみが捨てられていた。額には炎を思わせる装飾に、耳は神話に出てくるようなピクシーのように尖がっている。

ゴォッ！！

光は彗星のようにぬいぐるみに落ち、光は……意志は……炎となってそのぬいぐるみを焦がす。真っ黒に、焦がした。

炎が静まり、残されたのは真っ黒に焼けた人形。不思議な事に周りのゴミは全く燃えていない。否、それどころか焦げてすらいない。

『……』《……ここは……どこなのら……？》

人形は動く事も出来ず、話すことも出来ず、意思だけが目覚めた。

……終わりは始まり。このぬいぐるみをとある少年が拾う所から、物語は始まる……。

プロローグ（後書き）

次話から文字通り本編スタート。次話はすでに出来上がっているのですが、書いてて「この作品も十分に個性豊かな面々が揃ってるな」とか思ったり。

このプロローグを含めて3話目が出来たら更新します。

第1話　電想神話フェアプレイズ（前書き）

いや～やっぱり元があるといくらか楽だわ～。早くできる。……まぁ、オリジナルの要素を加えるので結構悩みそうですけどね。そういう意味を含めて『ＩＦ』ってタイトルに入れたんですから。

前の話の補足として、業魔王の肌の色はノアの一族のような感じです。浅黒いあの色ね。

第1話　電想神話フェアプレイズ

――――１９９９年・神奈川県――――

町に当たり前にある、朝に奥様達がゴミを置きに来るゴミ集積所。そこには1つのモノが捨てられていた。真っ黒に焼けたぬいぐるみが。そんな汚いぬいぐるみを見た人間のリアクションはこんな所だろう。どれも通り過ぎる時の言葉だ。

買い物帰りの奥さんと学校帰りの少年の言葉。

「うわっ、キタネェ人形！　真っ黒だぜ！」

「やだっ！　誰よゴミ燃やしたの！　ダイオキシンが出たんじゃないの？」

どこかの兄弟の言葉。下の子は真っ黒になった人形を触ろうとする。

「ボロボロだ。……捨てられたんだ。古いから」

「コラッ。触るんじゃない。汚いし、もう壊れてるよ！」

だが、兄は下の子が人形に触れようとした手とは反対の手を掴んで引き離し、そのまま兄弟は人形から離れる。

『……』

それは人形にとって苦しい時間。見向きもされず、関心を示す者が居ても悪い評価だけ。その苦しみは、味わった者にしか分からない。

だが、その時間は終わりを迎える。

「ありゃ？　どうしたお前？」

元気な声。それは人間の友人に宛てられた言葉ではなく、正真正銘人形に宛てられた言葉だった。

緑色で、真っ直ぐな目をした少年。髪の色は赤。帽子のツバを後ろに回して被っている。歳は小学生頃だ。

「真っ黒焦げのボロボロじゃんか。誰だか知らないけど酷い事すんなぁ」

少年はそう言いながら人形を手に取る。優しく、握りつぶさないような強さで。

誰かがイタズラで燃やしたと思ったのだろう。少年は一瞬だけやった者に対してのため息を付くが、すぐに人形に向けて安心させるように笑いかける。

「でも心配すんな！　オレに任しとけっ。オレが直してやるからさっ、友達になろうぜ！」

そして少年は笑みのために目を閉じていた状態から目を開け、すぐにまた目を閉じる。ただし片目だけ。俗に言う、ウインクというやつだ。

「オレはキョータ。斉木　陽太だぃ！　略してキョータだぜぃ！お前もこのままじゃやだろう。今直せる所くらいやってやるか。キョータ様のオリジナル大改造ツールの出番だ！」

キョータがバッグを探り、中から取り出したのは『大改造マル秘（〇の中に秘の文字がある）ツール』なる物。パテや接着剤など、

その少年の修復ツールが詰まっているのだろう。

「おぉ！？　結構良い感じジャン！　カッコ良くなんぜ～、動くなよ。……って、動かねぇか」

少年はご機嫌な様子で歩きながら人形を修理し始める。

「キョータく～ん」

キョータの後ろから彼を呼ぶ声が響く。高い声から、キョータと同年代の女の子の声だと思われる。だが、キョータはただ今絶賛修理中。少女の声が聞こえるわけが無し、人形の修復作業に没頭する。

「キョータ君ってばぁ～！」

「んお？」

自分の声がキョータに届いたのを確認した少女は改めて少年に話しかける。少女の容姿は少し紫がかった藍色の瞳と長髪を持つ少女。ほんわかした雰囲気で、おっとりした印象を受ける。

「下ばかり向いて歩いてると危ないよ、キョータ君。ねぇ、そんなに一生懸命なにしてるの？」

「よぉ！　奏（かなで）か。さっきそこでコイツ拾ってさ」

そう言ってキョータは真っ黒だった人形を奏に見えるように持ち上げる。

「へぇ～、また壊れてるオモチャ直してるんだ。キョータ君っていつも物を大切にしてるよねっ」

「あぁ。……だってさ、どんな物だって壊れたままじゃカワイソウ

じゃん。コイツだってそうさ。耳を澄ませばコイツの声が聞こえてくるはずだろ？　『オレはまだ生きる』ってさ。ホラッ！　見ろよ！　ちょい直しただけでこんなにカッコ良いだろ？　コイツはまだ終わってないぜ！！」

そう言ってキョータが奏に見せた人形は確かに真っ黒な状態とはまったくと言って良いほど違っていた。あくまで応急処置という事でまだ焦げ目は残っていたが、それでも別人のようだ。

額には孫悟空のようなリングに、そのリングの上部には左右に伸びる角。角と角の間（顔の中心ラインに沿った位置）には炎を思わせる装飾が成されている。尻尾もあり、龍と2頭身の可愛い妖精を合わせた様な感じだろうか。

それを見た奏は素直に驚き、同時に感心する。

「すごーい！　この子本当に壊れてたの!?」

「あぁ、プラ版とかマーカーとかでちょっと手を加えただけだけど、カッコ良いだろ？」

「うん！　カッコ良いね♪」

奏は人形が直って満足げに微笑んでいるキョータにそう言い、以下の事を思う。

（……でも、そうやって壊れたオモチャを助けるキョータ君は、もっとカッコ良いよ）

奏のキョータに対するキラキラフィルターから考えて、というか考えるまでも無く、奏はキョータにドストライクを食らっているわけだ。

その時、キョータの携帯からメールの着信音が鳴る。キョータは人形をバッグに入れるとその内容をチェック。および、彼の顔が焦

りに変わる。

「やべぇぇぇっ！！　校庭で数騎（かずき）と待ち合わせしてたんだっけ！」

……人形を直すのに必死ですっかり忘れていたらしい。

「あ、そうだ。奏も来るか？　きっと面白いぜ！？」

「うん、行く。何をするの？」

「外国にいる兄ちゃんに何か送って貰って、すごいから一緒に見ようってさ！　行こうぜ！！」

――――学校――――

時間はもう夕暮れ。『キーんコーンカーンコーン』というお決まりの鐘の音が聞こえてくる。そんな時間、グラウンド内にあるコンクリートの小山（　登りやすいように車のタイヤが埋め込まれている　）の上に、1人の少年が立っていた。

「ふふふ……良い感じにテンションが上がってきたねぇ。……これなら行けそうです。偉大なる魔法がバシバシ使えそうな感じですよぉぉ」

少年は怪しい笑い声を上げながら、先端に丸いリングがある自身の杖を振るう。

「大魔法使い【　キーン　】様の強大な魔力を見よ！！」

それから彼はどこで学んだのか。妖しげな呪文を唱える。……が、ここはあくまで魔法ではなく科学が信じられる現代日本。何も起こ

らない。
　キーンと名乗る少年の容姿は金髪金眼で、魔術師が着る様な、藍色で大き目のローブを纏っている。

「……ちっ。何も起きないか……。気分が乗ってたからぱぁぁぁんと凄い事出来そうだったのになぁ。気分だけじゃだめか」

　唇を尖らせて、いかにも「ちっ！」というつまらなそうな顔をしているキーン。だが、この程度で諦めるほど彼の魔法好きは弱くない。

「やはり！　正式な儀式とか必要なようですね！！」
「……お～い……。か……数騎さ～ん……。なんか邪悪なんですけど……」

　一度や二度の失敗ではへこたれない。それがキーンだ。そして、そんなキーンに遠慮がちに話しかけるキョータ。キーンは不満そうにキョータを睨む。

「遅いじゃんキョータ君。それに僕の名はキーン。授業中以外はそう呼んで頂きたい」
「分かったよ。……ったく、魔法使いフェチだな～。大人になったら本物にでもなる気かよ」

　キョータの半分呆れと慣れが含まれた問い。キーンは視線をキョータから逸らし、あらぬ方向を見る。念のために言って置くと、奏の方でもない。

「当然です。当たり前じゃないですか」
「がっ、頑張ってね……」（　誰に言ってるの？　）

キョータの内心での問いに答えるならば、カメラ（　作者　）に向かってだ。

「それで数……キーン君、面白い物って何なの？」

「ふっ、奏さん話が早い！　それならばお見せいたそぅ！！」

そう言ってキーンがローブの中から取り出したのは一冊の古ぼけた本。表紙の上の方には五紡星が描かれている。

「昨日イギリスに留学中の兄上から届いた凄い品です。本物の魔法の本、魔導書です！」

「おぉ！　なんだこれ！　すげぇー。本物みてぇ！！」

「失敬な、本物ですよ」

キョータと奏はパラパラとページをめくり、これには流石にキョータも驚いたらしい。まぁ、ただちにキーンからのツッコミが入るが。そこで奏は不意に、本の内容に関してこんな事を言う。

「ねぇこの本さ、全部外国の言葉で書かれてるみたい。……英語……かな？」

彼女の言う通り、その本に書かれているのは異国の文字。小学生の彼らは一回も見た事の無い文字だ。そして、挿絵も相当グロテスクな物が揃っている。ＣＧで描かれたようなリアルな絵で、スライムに手足が生えたようなモノもある。

一方、キーンにはいけないスイッチが入ってしまったらしい。

「ふ……ふふふ……ふはははははははぁぁぁ！　これぞ本物。いよいよ魔法使いの野望に近づいて来ましたよぉぉ！　召喚したるで

～～～」

「キ、キーンさん……なんだかとてつもなく邪悪なんですけど……」

元気でハッキリモノを言うキョータにしては珍しく、おどおどした態度でキーンを現実に戻そうとする。

「わはははは。相変わらずキョータも数騎もバッカだねぇ」

良くありげな嫌味なクラスメイトAの登場だ。何かしらの用事でキョータ達より遅い下校なのだろう。なお、キョータ、奏、キーン、嫌味な少年Aのバックはそれぞれ違う。校則上、ランドセルへの一律ではなく、それぞれ教科書等を入れるバックは自由で良いのだろう。

「それが何かも分からんとは、無知にも程があるぜ。キミ等」

自慢げな上から口調。嫌味な少年の外見の特徴と言えば、一本だけ『ピンッ』と立ったアホ毛くらいだろう。一方、キョータはその態度にムカッと来たのか、目の前の少年を睨みつける。

「何だよ金光！　別に良いだろ、これが何だってさ！　キーンの兄ちゃんがせっかく送ってくれたんだぞ！　バカにすんのかぁ！？」

「ふんっ！　そんなの知るか。塾行く前におバカなキミ等に教えてやろうと思ってね。感謝しろよー」

嫌味な少年金光は依然として自慢げな口調でビシッとキョータ達を指差す。本来ならカチンと来そうな態度だが、この少女に至っては例外だったらしい。

「ホント？　金光君、良かったら教えて？」

奏はおっとりなのだ。

「当然じゃないですか！！　奏さん！　何でも教えますよぉぉ！！！」

そして金光は大喜び。どうやら奏に対して惚れているらしい。態度を急変させた金光に対し、キョータとキーンは怒りの眼差しを金光に送る。

それに気付かぬ金光はキーンの持っていた本の説明を始めると共に自分のバックからノートパソコンを取り出した。

「その本は魔導書じゃなくてゲームの攻略本、全世界対戦型アクションロールプレイングゲーム。電想神話フェアプレイズの本さ」

金光が取り出したのはノートＰＣだけではない。両耳から左右に羽が伸びた人型の人形も取り出した。そして、ＰＣの画面には『ＦＡＩＲ　ＰＬＡＹＳ』という文字が浮かんでいる。ゲームの起動画面らしい。

キョータは金光が取り出した人形を見た後、自らの手にある炎の妖精を見る。

（……あれっ？　この人形、コイツと似てる？）

《……キョータ……》

それは妖精からの語りかけ。人形の瞳に炎を思わせるゆらゆらした光が一瞬だけ宿った。

「ッ！」（あ、あれ？　目が光った！？　……それに今、誰かに呼ばれたような……）

キョータが自分の人形を凝視している事に気付いたのか、金光は意外そうな声を出す。

「なんだ、キョータも素体（フレーム）持ってるじゃないか。……しかも、妖精（フェアリーフレーム）素体なんて安い素体（フレーム）……カッコワリー」

「素体（フレーム）？」

聞きなれない単語に疑問を持ち、キョータは眉を下げて尋ねる。

それに対し金光は、意外にも懇切丁寧な説明をしてくれた。

「フェアプレイズっていうのは人工衛星とかネットワークとか使ってやるゲームの事さ。パソコンとソフト、それにその素体（フレーム）さえ持っていれば日本だけでなく、世界中とやりあえるゲーム。だから、同時プレイ人数なんて何万人もいるんだ。ゲームの中で戦って勝ち続ければ、地球で一番になれるのさ」

手っ取り早く言うとオンラインゲームだろう。

ここで再び金光は嫌味モードに戻る。

「まっ、キョータには無理だろうけどね。そんな安っちい素体（フレーム）じゃサ。ボクのエジーは人間型素体（ヒューマンフレーム）。最高級品さぁ！　素体で最強なのは【　人間型　】。最弱なのが一番安い【　妖精型　】。キョータの持っているそれさ」

「なんだよ！　コイツをバカにすんなー！　物の価値は高いとか安いとか値段じゃないぞ！！」

「おやおや、まだ分からないみたいだねっ。じゃあゲームを見せてやるよ！　高いのが優れている所を証明してやる。行くぞエジー！　戦いの世界、勇者のいない世界、アシュリアーナへ！！」

金光がゲーム操作に使うコントローラ（プレステみたいな感じ）を握り締め、ゲームをスタートさせる。そして画面には、現実世界にあるエジーの姿が映された。奏はもちろんの事、キョータとキーンも興味津々に画面を見る。

「なっ、なんだ!?　ゲーム画面の中にロボットの姿が映ってる！」
「……現実の世界の素体（フレーム）がゲームの中に入ってる……。まるで魔法だね。……でもちょっと素敵」

キーンの唸る声を聞いて金光は絶賛得意げ中だ。

「そうさ！　これがフェアプレイズだ。自分の分身をゲームの中に送り込んで、たくさんのライバルやモンスターを倒しながら魔王に支配されたアシュリアーナを救うのさ！　素体（フレーム）を自由に動かして行きながらね。見てろ――素体合体（フレームユニオン）！」

ゲーム内で左手での高速パンチを披露するエジー。金光が操作しているのはゲームの中のエジーなのだが、なんと現実のエジーも同じ動きをしている。

「すげぇ!!　画面の中と外のロボットが同じ動きをしてる！」

キョータの驚きの声。『素体合体（フレームユニオン）』というのは、現実と仮想の素体の連動の事らしい。……一般的な意味合いにおいてだが。それはさておき、金光はさらにそのゲームの面白さを見せ付ける。

「ふふっ。これが素体合体さ。でもこれだけじゃない。外に動いているロボットにはちゃんとした意味があるのさ。例えば……この鉛筆をコイツに持たせれば――武装合体（アーマメントユニオン）！」

金光がカバンの中から鉛筆を取り出して現実のエジーに持たせる。
そして、画面の中のエジーの手には細く、それでも強靭そうな鋭い槍が現れた。

「鉛筆が画面の世界の中で槍になったのか！？」

キョータが関心と驚きを込めた声を出し、金光は自慢げに人差し指を立てる

「そうさ！　これが武装合体（アーマメントユニオン）。アシュリアーナの世界ではこれで戦うのさ。現実世界で素体（フレーム）を改造すれば、その分アシュリアーナにも影響するんだ。自分のキャラが無限に強くなる！　それがフェアプレイズさ！」

キーンは感心した様子で顎に手をやり、唸る。

「むぅ。確かに凄いゲームです。……全世界でやる事が出来るなら、外国語の攻略本も必要です。……でも、金光は全然凄くないね。だって強いのはエジーであって、キミじゃないもんなぁ」

それはもっともだろう。言うなれば、高スペックを持つ機体に素人パイロットを乗せるようなモノだ。一方、金光はキーンのその発言で自分のプライドが傷付けられたのか怒り心頭なご様子。

「なにぃぃぃ！！　だったら強いとこ見せてやろうじゃねぇか！　キョータ！　勝負してやる！！」

「へっ？」

キョータへのとばっちりだ。

「ボクのパソコンにそのヘボ素体（フレーム）を登録すればゲームに参加できるんだよぉ！」

「……ゲームをやればコイツ……動くのか？　コイツと一緒に生きられるのか……大好きな友達みたいに……」

「？　キョータ君？」

奏は素体を見つめているキョータに不思議そうな視線を送り、金光は全力で呆れている。

「はぁ？　何が友達だよ。素体（フレーム）なんかタダのオモチャじゃねーかよ。良いからそれ貸せよ！　登録してやるから」

そう言って金光がキョータから素体を取り上げた瞬間、素体の目に炎のようなゆらゆらした光が揺らめき、キーンの持っている本も光りだした。キーンは動揺した様子だ。

「うわぁぁ、なんだぁ！？　本が……光ってる！？」

「コ、コイツ……！！　――」

「ッ！きゃぁぁぁ！！」

だが、異変はそれだけではない。

奏は目の前の事態に驚いてキョータにしがみ付き、キョータもまた奏が驚いている事態に驚いていた。キョータの持っていた素体（フレーム）が、金光が取り上げた素体（フレーム）が――。

「――燃えてる！！！」

炎の妖精の姿をした素体（フレーム）は燃える。だが、それを持つ金光や、自分さえ傷つけない不思議な炎を出していた。

カッ！！！

突如迸る眩しい閃光。それと共に、少年達は現実世界から消失した。

第1話　電想神話フェアプレイズ（後書き）

やっぱり小説と漫画って違いますね。漫画では引き立てに有効なセリフが、小説だと組み込みづらいセリフと化しますから。

それでは、次話もお楽しみに。相当マイナーなファンフィクションだと思うけど、これからもよろしくお願いします。

第2話　その名はボボウ（前書き）

ようやく原作1話分です。やっぱ長いわ～（笑）。

これの次の話は息抜きみたいに短いのでこんなに早く更新できるわけです。原作に逸らせると言いつつ、ちゃっかりオリジナル要素も加えてますよ。前作を見た人はピンと来るでしょうね。

第2話　その名はボボウ

ドカァン！！

突如本が光り輝き、キョータ達はどこかに飛ばされた。キョータは痛そうに頭を抑えながら周りを見る。

「あつつつ……。皆、大丈夫か？」
「……とりあえず大丈夫ですけど――」
「いったい何が起こったのかな……？」

キーンの疑問を奏が引継ぎ、金光は返事の代わりに驚愕の声を上げる。

「お、おい！？　見ろよ！！　これボクのエジーじゃないか！　何でこんなデッカイんだよ！？」

金光の素体（フレーム）、エジーはすぐそばで静かに佇んでいた。なお、キョータ達との身長差は1．7倍ほどだ。キーンは抑えきれない笑みを浮かべながら金光の認識を正す。大きくなったのではなく……。

「違うね。コイツは本物になったんですよ。学校だって無くなってる。つまりここは、本物のアシュリアーナです！！」

ふはははははは。と、再び高らかに笑うキーン。……まぁ、岩石だらけの荒地に、キョータ達の上に石の橋がぎょうさんあるような非日常の世界を目の当たりにすれば、嫌でも異世界だと思わざるを得ないだろう。

「えー？　ゲームの中にオレ達入っちゃったって事かぁ？」（笑っとる場合か）
「どうすれば帰れるの？」
「いや……それよりもアシュリアーナだとすれば面白い……じゃない。大変ですよ～～～？」
「お、おい……――」

ちゃっかりキーンの本音が聞こえた気がしたが、あえてスルーしたい。ところで、金光はある事に気付いたようだ。顔面蒼白である。

「ここがアシュリアーナならモンスターが出ますよ♪」
「出たぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

キーンの後ろ、そして気配に気付いて振り返った金光の正面には、ゲル状の化物がいた。顔は無く、ずんぐりした腕がある。

「ッ！　あぁ！　ねぇ、アレさっきの本に出てきた奴じゃない？」
「あ！　そうだ！　キーン見てみろよ！」

奏が思い出した事にキョータも挿絵のモンスターを思い出す。及び、キーンに本を見る用に促す。だが、その本に書かれた文字が読めない事は現実世界で分かっているはずだが……。

「……おや？　これ読めるぞ？」

読めてしまったらしい。だが、それはあくまでキーンだけだったようだ。キョータは頭に疑問符を浮かべている。

「そうか？　オレにはさっぱりだけど……」
「だって読めるんだも～ん。読みますよ？　……他の世界から来た

者の最初の試練。この試練を達成できれば帰る事が出来る」

それを聞いた金光は復活。現実世界に帰るため。最高級品のエジーのスペックを見せ付けるため。そして、（　たぶん　）奏に良いカッコを見せるためにエジーに指示を飛ばす。

「って事はアイツをやっつけりゃあ帰れるんだな！？　行け！　エジー！　アイツをやっつけろぉ！！　最高級品なとこ見せてやれぇ！！」

ぼっこ～ん！

「……ねぇ、動かんうちにやられてますけど……」

ゲル状怪物のアッパーカット炸裂。エジーは吹き飛んだ。それも、金光がエジーに指令を出した直後。キョータはその事を教えて、一方の金光はパニック状態だ。

「ぎゃぁぁぁ！　なぜにぃぃぃ！？」

「本にはこうも書いてある。【　素体（フレーム）を自由に動かせるのは、本当に心を通わせた者だけ　】だって」

キーンは本に書かれている内容を伝え、金光は自分の素体（フレーム）（それも最高級品）が簡単にやられたショックでひっくり返った。

「うぅ～ん……高かったのにぃ～」

「やっぱ全然強くないですね、キミは」

キーンはそう言って（　むしろ愉快気に笑っている　）魂が抜けて失神している相手に塩をすり込む。一方、少しずつ、ゆっくり、

確実に迫ってくる怪物を前に、奏は怯えた声を出す。

「どうしよう、私恐いよ！　私達は皆あの化け物にやられちゃうの！？」

「いいや！　そんな事無い！」

キョータはそう言って正面から奏の両肩を掴み、目を逸らさず、意志を込めた目で奏と向き合う。

「お前はオレが絶対に護ってやる！　絶対、家にだって帰るぞ！！　諦めなければ壊れた物だって生き返れるんだ！　オレは絶対！　諦めない！！」

《……そうらよね。キョータ……》

「ッ！　だ、誰っ！？」

不意にどこからか聞こえてきた声に周りを見渡すキョータ。その視線の先にあったのは、真っ赤に燃える火の玉。その火の玉から、可愛らしい声が聞こえてくる。

《絶対あきらめないその気持ちが、自分じゃない誰かのために……諦めない心を持つ事が、本当に凄い事なんらよね》

「……お前……まさか……」

キョータの中に浮かぶ火の玉の正体の可能性。それは、自分が拾って直したあの素体（フレーム）……。

《さぁキョータ……。オイラを拾った時のような優しい心でもう一度手を差し出して。オイラの名前をキョータが決めて……。大きな声でオイラを呼んで！》

名付けとは、現象であれ人であれ、人々が脈々と行ってきた事。言うなれば、人の歴史と同じだけ続けられてきた呪術的な儀式。その者をその者と定義し、その者であるという証明。そのモノの魂の一部であり、縛り付ける鎖。……チカラにも、重りにもなる。……それが『名前』。

キョータは火の玉に手を差し出しながら、静かにその者の名を決める。

「……お前は炎で焼かれても負けない凄い奴だ。だからお前の名前は――」

《オイラを直してくれた優しいキョータ……オイラは――》

キョータが名を決める時、その者もまた自らの思いをキョータに伝える。

「――オレの友達の名前は『ボボウ』だ！」

『――オイラは、いつだってキョータのそばにいるのら！』

火の玉から炎の妖精が生まれ出た。ボボウはキョータに飛びつき、キョータは抱きかかえる様にボボウを受け止める。

『キョータ！　直してくれてありがとうなのら！』

「何言ってんだよ。友達だろ？　当たり前じゃん！！」

――素体（フレーム）と心を通わせた者だけが素体（フレーム）を自由に動かせる――

キーンは本に書かれていた内容を思い出しながら呟く。

「……これが本当の素体合体（フレームユニオン）……」

「ッ！　キョータ君大変よ！　化け物が……こっちに来るよ！？」

すぐそばまで来ていたスライム状の化け物は拳をキョータ達に叩きつける。キョータ、キーン、奏はどうにか回避し、金光は運良く激突のショックで転がって事無きを得た。始めから狙いが悪かったのも要因の1つだろう。また、代わりに攻撃を受けた岩は砕けている。当たったらタダでは済まないだろう。

『皆逃げるのら！　オイラが盾になるのらー！！』

「何言ってんだよ！　そんなんダメだ！！　皆助からなきゃ意味無いだろ！」

「でも……オイラ今武装合体（アーマメントユニオン）出来ないのら。戦う武器が無いのら。外の世界の物じゃ無いと武器に出来ないのら。……今、何も無いれしょう？』

そう。アシュリアーナでの戦闘は武装合体が主流。ただでさえ単騎としての戦闘力に欠ける妖精素体（フェアリーフレーム）に拍車が掛かる様な物だ。だが、キョータはそれを聞いて1つの選択肢を見い出す。

「ボボウ！　外って……つまりオレ達の世界のモノなら何でも良いんだな？」

『ん～～～。基本的にはそうなのら』

キョータはそれを聞くと自分の中で決意を固め、自分の胸にトンッと拳を当てる。

「ボボウ！　オレの体を使うんだ！　それなら武装合体（アーマメントユニオン）出来るだろ？　何たって、オレは外の世界のモノなんだから！！」

「だ、ダメよ！　そんなの危ないわ！」

「そうですよ。そんな無茶、本にだって書いて無いですよ？」

下手をすれば怪我では済まない。キーンと奏はその事からキョー

タを止めようとするが、彼の気持ちは変わらない。

「大丈夫！　なんとかなる！　……だってさ、オレは諦めないから！　絶対諦めないで出来る事をするんだ！　それに――」

キョータは奏とキーンからボボウに視線を移す。

「オレボボウを信じてるからさ！　２人でやればきっと出来る！！」

『……キョータ……』

キョータとボボウは互いの手を握り合う。握手という奴だ。

『そうだよね……きっと出来る！　諦めないで信じればきっと出来る！　出来るってオイラも信じる。……だから、絶対に負けない。だって――』

刹那、２人を中心として眩しい光が迸る。光が収まった時、中から現れたのは炎の騎士を思わせる存在。

全体的な色は赤で、装甲の縁等（ふちなど）は黄色やオレンジだ。龍のような尻尾に、羽が２枚。また、羽と同じ位の大きさの刃が、本来２枚であるはずの翼を４枚に思わせる。

『――この合体は心と心で繋がる最強の合体だから！！』

その合体の名は、【　一心合体（マインドユニオン）　】。そして、勝負は電光石火。一瞬でつく。

ボォォォォ……ズシャッ！！

炎の騎士は紅蓮の炎を纏い、炎の弾丸となって一撃の下に怪物を

焼き消したのだ。

カッ！！

怪物が倒されたのをキーン達が確認した後、本から光が迸る。それは、アシュリアーナに来た時と同じような光だった。

「あ……あれ？　ここ……どこ？」

「どこって……アレは僕らの学校ですから戻ってきたみたいですよ？」

キョータの問いにキーンは持っていた杖で学校を指差す。なお、キョータとボボウの合体は解けている。

「全部夢だったのかな？　ボボウが喋ってたのも……。今は……人形だし」

キョータはそばに落ちてたボボウを拾って意思が無い事を確かめる。目はパッチリと開けているが、全く動く気配が無い。だが、キーンはほんの少し辺りを見渡し、にやっと笑ってある物を指差す。

「……そうとも言い切れませんよ。御覧なさい。金光のエジーが壊れています。……これきっとあの化け物にやられたんですよ」

キーンの指差す先には、手足が千切られて羽が辺りに散乱している無残な姿のエジーがあった。キョータはそんなエジーを見て「うわぁ」という顔をする。

「うへぇ～、これ高いんだろ？　もったいねぇな～。……しゃーな

い。直してやるか！」

キョータはそう言うとエジーを優しく拾い上げる。一方、キーンは口を尖らせて不満を露にした。

「え～金光のじゃん。わざわざ直さなくたっていーじゃん」
「まぁまぁ、誰のだって良いじゃん。コイツはコイツ。直ればエジーも金光も喜ぶぜ？　……って、あっ！　金光の奴気絶しっぱなしじゃん！？」
「あーそういやそうでしたね」（　ケッ！　）

キーンは酷いくらいの他人ぶりで応え、奏はここで初めて金光がそこに倒れている事に気付いた様子だ。キョータはため息を付き、やれやれといったように金光を背負う。

「よいせっ。……本当にしょうがねぇ奴だな。ほんじゃ、オレちょっと保健室行ってくるよ。あと頼む。カバンとか拾っといて」
「へ～い、了解～。全くお人好しだね、キョータ君は。行ってらっさい」

キーンも何だかんだでお人好しのキョータに慣れているのか、ひらひらと手を振ってキョータと気絶した金光を見送る。

「……本当に……お人好しかもしれないけど……でも、戦ってた時のキョータ君、オモチャを直している時のキョータ君……。今日たくさんのキョータ君を見てきたけど、今の姿のキョータ君が一番カッコ良く見える……」

そう言う奏の視線の先にあるのは、金光を背負うキョータの姿。キーンは彼女の言葉に目を閉じ、「ふっ」と優しい笑みを浮かべる。

「きっとキョータ君にとって、自分の周りの全部が【　大切　】なモノなんですよ。その【　大切　】を護るために頑張る諦めない心が、すごくカッコいいんだろうね」
「でもさっ。今日の事って本当にあった事なのかな？」
「ん～～～。正直なんとも言えんなー。……まぁ、またさっきみたいなモノを見れれば信じられる……かな？」

キーンは唸りながら奏の問いに答え、その後2人はカバンを回収し始める。その様子を学校の屋上から、1人の人影が見ていた。砂漠を越えるような大きくて鼻先まで覆うマントに身を包んだ者が。
……いや、その者だけではない。その者が真横に伸ばした左手の上に、狐を思わせる鋭角的なフォルムのモノが乗っている。

『勇者が復活したみたいだねっ。……弱っちぃ感じだけど』

狐のようなモノの言葉に、マントの者は応えた。

「確かにな。……だが、復活は事実。……全ては今日から始まる……。幕が上がったんだ……戦乱の幕が」

――――アシュリアーナ・某所――――

「……ん？」
『どうしました？』

街から街のを繋ぐ街道。歩く影は2つ。1つは人型だが、もう1つは猫だ。そして、人に尋ねたのも猫である。漆黒の名に相応しく、引き込まれる程に綺麗な毛並みを持つ猫だ。

黒髪の少年は猫に対し、ふっと優しく微笑みかける。

「ようやく始まりそうだ。……あれから2年。早いものだね」

『では、もしかしたら近い内に逢えるかもしれませんね。小さな勇者さんに』

「さぁ……どうだろうね」

黒髪の少年は黒猫を持ち上げて自分の肩に乗せると、再び歩を進めた。背はこの世界に来た時よりも伸びて、顔もいくらか大人っぽくなっている。……まぁ、それでも中学生くらいだが。

「……出逢いもまた、必然だから。……けどまぁ、逢えたら逢えたでキサヤや子供達への良い土産話になりそうだ」

黒いローブと首の後ろの方で結った黒髪を揺らせながら、少年は楽しげに笑う。最初の言葉はある人の受け売りだが、自らも身に染みている事だ。自分が変われたのも、出逢いのお陰なのだから。

黒猫は肩透かしの多い主（あるじ）に慣れ切ったため息を付き、自分の主の首に頭を預ける。

『少し休みます。何かあったら呼んでください』

「へいへい」

少年は軽い返事を返し、チラホラ星が見え始めている空を見上げた。

（……元気でやってれば良いけど）

第2話　その名はボボウ（後書き）

さてさて、今回張った伏線、使うのはしばらく後ですかね～。あ、黒髪君の事じゃないですよ。

なお、2年というのはあくまでアシュリアーナでの時間です。つまりは……うふふのふ～♪

それでは次話もお楽しみに！

おまけ　1（前書き）

単行本にあった話と話の間にあるおまけシリーズ。短いが故に前回の1話→2話と連日更新できたわけです。

おまけ　1

キョータ達が始めてアシュリアーナに行った日の夜。

「うわあぁぁぁぁぁ！！！　しまったあぁぁぁぁ！！！」

……キョータこと斉木　陽太は叫んでいた。

「明日の宿題全然やってねぇ――――！！　超やべえぇぇぇ！！　金光のエジー直すのに夢中で忘れてたよ！！」

金光の素体（フレーム）、エジーはアシュリアーナの化け物との戦いで壊れてしまい、キョータはそれを直していたわけだ。キョータのそばにはボボウを直した時のような応急処置用の道具だけでなく、大きめのスプレーも多数置いてある。

ほぼ作業が終わっていたという事もあり、キョータは宿題の方に思考をシフトする。

「くそー！　こうなったら徹夜覚悟だ！　朝までに絶対に終わらせてやるぅ！！」

そう言ってキョータが取り出したのは国語や算数などのプリントやノート。……量は、キョータが半泣きになって書いているという事実からご想像願いたい。

「オレは出来る！　やれば出来る！！　キョータ！　今こそ神になれぇぇぇ！！！！　……問１クリア！」

……健やかな小学生が徹夜して、さらにはこんな自己暗示をしな

いと終わらせられない宿題の量っていったい……。そんなキョータの後ろで、健やかで静かな寝息を立てているモノがいた。

『すー。すー……。ふぁ？』

炎の妖精、ボボウのお目覚めだ。ボボウは両手を上に大きく伸ばしながら大欠伸（おおあくび）をする。

『ふわぁ～……良く寝たのら～。一心合体したせいで、疲れて動けなくなっちゃってたのら～』

どうやらアシュリアーナから戻ってきた時に動かなかったのは寝ていたからしい。……だったら目を開けて寝るな。紛らわしい。

ボボウは周りを見て、信頼の対象であるキョータを見つけた。

『キョータ……？　どうしたのら。なんらか大変そうなのら……』

「どうしたって、宿題だよ宿題！！」

キョータはただ今勉強にほとんどの神経を向けているため、色々な事に気付いていない。例えば、ボボウが喋っている所とか、動いている所とか、空中に浮いている所とか。

一方、ボボウはキョータの言った事で分からない事があったらしく、首を傾げながら尋ねる。

『？　キョータ、宿題って何なのら？』

「何だよ！　宿題知らないのかボボウ！」

ここでキョータは後ろのボボウの方を向いて半泣きのまま宿題の事を説明する。

「宿題！！　そいつがあるだけで外でサッカーも、家でゲームもプラモも作れなくなっちまうんだ！　全国の小学生が心から恐れる悪魔みたいなものだ！！」

『ッ！！　悪魔なの――！？　大変なのらあぁぁ！！　キョータ、今助けるのら！！』

ボボウは宿題というのが分からないくらいこの世界に疎い。そんなボボウがやろうとしている事で、不安を感じた方がいれば、その勘は正しい。

「えっ？」

『燃え尽きるのらあぁぁぁ！！！』

ボボウの小さな赤ん坊のような手から炎が沸き上がり、その炎は悪魔たる宿題へと放たれる。

「ッ！　ぎゃぁぁぁぁぁ！！」

キョータは即座に回避したが、宿題のノートとプリントは全焼。机は奇跡的にもほんのちょっとの焦げ目だけで済んだ。一方、悪魔退治の大儀を成し遂げたボボウは大喜びでキョータに笑いかける。

『やったのらキョータ！！　悪魔はオイラがやっつけたのら！！！』

だが、キョータは呆然とし、万歳の形をとりながら気絶した。

「……宿……題……が……」

バタッ

キョータは宿題が燃えた事に驚いて気絶し、同時にそのショックでボボウが動いている事実にも気付かなかった。さすがに1回だけの体験というのもあり、今日あった事は夢という解釈をしていたのである。

『ありゃ？　キョータ、悪魔がいなくなって安心して寝ちゃったのら』

当のボボウにキョータが気絶した理由が分かるはずも無く、ボボウはキョータのベッドから毛布（　掛け布団　）を引っ張り出してキョータにそっと掛ける。そして、自分も毛布の中に入ってキョータにくっつく。

『オイラも一緒に寝るのら～♪　風邪引かないように毛布を掛けるのら』

キョータはそのまま眠りに付いた。……翌日、大丈夫だろうか……。

おまけ　1（後書き）

……キョータ、宿題どうするんでしょう？　原作だと、少なくともシーンでは翌日の学校でもお咎め無しですから。

次話はちゃんとした本編です。……流星の方を思い出しました。

次話のサブタイがねぇ……（苦笑）。

第3話　転校生（前書き）

今回は結構なキーキャラが登場します。

第3話　転校生

キーンコーンカーンコーン

朝の学校にお決まりの音が鳴る。クラスは４－３。その中でキーンは顎に手をやって考えを巡らせている。机の上にあるのは兄から送られてきた魔導書だ。

「……う～む、見れば見るほど面白い本だな……。しかし、アシュリアーナに行った時は確かに読めたはずなんだけど、今は全然分からない。……不思議だなぁ。やっぱり魔導書だと思うんだけどな。……こうなると、やはり欲しいなぁ、フェアプレイズの素体（フレーム）……」

素体（フレーム）とフェアプレイズは何かしらの関係がある。そうと分かった以上、鍵を握る（と、思われる）素体（フレーム）はぜひとも手に入れて置きたい所だ。

「じゃあキーン、こんなのどーよ？」

後ろから近づいていたキョータがキーンの机の上、つまりキーンの視線の先においたのは妖精素体（フェアリーフレーム）だった。

大きな特徴は頭部から左右に伸びる羽。上の服は鼻まで覆っている。

「ッ！　こっ、これは妖精型の素体（フェアリータイプ フレーム）！」

「へへ～っ。結構良い感じだろ？　こいつは羽にこだわって作ったんだ。風の妖精って感じ？」

「作ったって……どうしたんですか、これは？　……まさかフルスクラッチ？」

なお、フルスクラッチというのは全くゼロの状態から作る事で、主にプラモ等の方面で使われる単語だ。ガンプラで例えるなら、手先や頭部の目を含めて、設計から作る所まで全て自分でする事だ。

尋ねられたキョータは若干表情を曇らせる。

「いやさー、昨日壊れた金光のエジー直してたんだけどさ、妖精素（フェアリーフ）体（レーム）みたいになったら、ちっちゃくてヤダからいらんとか言うんだぜ!?　ひどくね？」

「当然だろ！　ボクは高級品しか使わねぇ～の！　つまり、人間型（ヒューマン）素体（フレーム）しか使わないの。本物志向ってやつよ」

「きゃーん、可愛い～♪」

……奏の方は羽の妖精が気に入ったらしく、目をハートマークに変えて素体（フレーム）を見ている。その態度に不意を突かれたのか、金光がずっこけた。

「羽付いてる♪　すごーい。この子、キョータ君の？」

「いいや、今キーンにあげたとこ」

「……あ……それボクのエジーだったですよ……？」

「い……良いんですか？　キョータ君。これ作るの凄く大変だったでしょ？」

「おい、僕に聞けよ！」

「いいさ、キーンだからあげるんだしな」

「聞けちゅうにボケぇ！」

……哀れ金光。必死に話に加わろうとしているのに全く相手にされていない。なお、キョータ達に悪意は無く、単に金光の影が薄くなった事で気付かれなかっただけだ。一方、キョータはキーンだからこそ渡したその理由を話す。

「だって、一目でオレが頑張ってコイツを作ったの分かってくれたじゃんかよ。そうやって人の事を考えてくれるキーンだから、きっとコイツも大事にしてくれるってオレ信じてっから！」
「……キョータ君……」
キーンはキョータの友人思いな優しさや自分への信頼で、心が温かくなるのを感じていた。
「ねぇキーン君。この子の名前なんていうの？」
「あ～そうか。名前決めてやらなきゃなぁ……」
奏から尋ねられて再度顎に手をやって考え込むキーン。
「むきーーー！　だからボクに最初に聞けって言ってんだろぉ。勝手に盛り上がんなぁぁ！！」
「くぉら」
ドゴスッ！！
……今日は金光は厄日らしい。生徒簿による一撃は金光の額から顎まで縦一線に捉えた。そして、小学校において生徒簿を持っている人はこれしかない。
「あ……天野先生……！」
そのキョータの声色には若干の恐怖があった事は言うまでも無い。
一方、天野先生はキーンの席に集まるキョータ達を注意する。
「なに騒いでんだー？　チャイム鳴っただろ。着席せぇ着席ぃ～！」

褐色の肌に黄色い髪。広い空を思わせる青い瞳。それが４－３の担任、天野先生だ。

「先生！　金光が気絶してます！」
「ほっ、保健委員、保健委員を！」

一方、顔面に縦一線のあざをもらった金光からは魂が抜けている。……どんだけ強い力で叩かれたのだろう。
キョータはキーンに向かってひらっと手を上げながら体の向きを自分の席に向けた。

「やばいやばい。席戻んね、また後でなっ！」
「あっ……キョータ君」

途中で呼び止められ、キョータはキーンの方を向く。

「……ありがとう。ボク、大切にします」
「おう！」

親しさを込めて視線を交わす2人。……ここまでは良いのだが……。

「我と共に、いざ魔導の世界に行こうぞ……」
「……仲良くすんのほどほどにな」（そっち方面では）

そう言って羽の妖精に語りかけるキーン。キョータは一応といった感じで忠告する。
授業が始まる前、天野先生はクラスの子供達に呼びかけた。……なお、金光は気絶したまま椅子に座っている。

「おーし！　今日はこのクラスに転校生が来たから紹介する！　新しい仲間、柊（ひいらぎ）　前（ゼン）くんだ。皆、仲良くしろよー！」

そうしてドアを開けて現れたのは、白い髪に赤い瞳を持つ少年だった。表情は乏しく、顔は美形。一言で称すれば、クールというモノだ。故に、クラスの女子はというと……。

「や～んうそー！　超美形！　カッコ良いぃぃぃ！！」

……ドストライクを食らった女子が多かったらしく、その目にはキラキラフィルターが掛かっている。なお、奏の方はそうでもないようだ。男子は冷静なもので。

「なんだ、アイツ……。でか過ぎねー？　本当に小学生かよ。頭身違うやん……」

キョータの真後ろの男子生徒の意見。確かにその転校生は身長が小学生とは思えないくらいだった。とはいえ高校とかそこまでではなく、中学2年といった所だろうか。だが、同じ男子でもキョータは疑いも不快感も抱かなかったようだ。

「足なげー。運動会で主力になるね、アイツ♪」

賑やかになるクラス。天野先生は冷静にクラスを見渡し、空いてる席を見つけるなり柊にその席を指差す。

「あー……じゃ、後ろの席空いてるからそこに行けや」

「……はい」

クラスを縦に渡る柊に再び女子の目はキラキラになる。

「きゃ～♪　歩いた～♪」
「当たり前しょうが」
「カッコ良い～♪」
「いちいち煩いっちゅうの」

女子、男子、女子、男子の順だ。
キョータは横を通る柊を呼び止めて握手を求める。

「柊君！　オレ斉木　陽太。よろしくな。ちなみに略してキョータね」

柊は顔と視線をキョータに向けながら異様なまでに冷めた目を投げる。

「……知ってる」
「へっ？」

戸惑うキョータを構う事無くそれだけ言った柊は後ろの席に歩いていく。キョータのそばでその様子を見ていた男子は頭にムカマークを浮かべながら柊の後姿を見る。

「何だよアイツ、ムカつくなぁ～！」
「……いいよ。……それより知ってるって……どっかで会ったかな？　……んお？」

柊が後ろを見せた事で確認できたのだが、彼は腰のベルトに小さなポーチを下げている。そのポーチには小窓のような穴が在るのだが、そこから見えるのは目だ。顔の全体像すら見えないが、推察す

るに先端になるにつれて細くなる、言うなれば狐のような顔をしているらしい。

（……フェアプレイズの素体（フレーム）！　アイツもゲームやってんのかな？）

キョータがそんな事を思っていた時、ポーチの中に入っていた素体（フレーム）の目がギョンッと動き、真っ直ぐにその視線はキョータに向けられた。

「ッ！」（目がっ！！　……気のせい……か？　……でも、確かに今、目が動いた！！）

たった1回の経験というのもあり、キョータの中では昨日の事は夢と判断していた。だが、現実に起こった事もまた事実。そのため、安易に軽視も出来ない。

柊は無言で椅子に座り、キョータに鋭い視線を送り続けた。

学校が終わり、キョータは自分の家に帰宅する。出迎えたのは母親だ。

「母さんただいま～」

「お帰り、陽ちゃん。おやつ食べる？」

キョータの母親は、ショートヘアーで目はパッチリ開き、若々しい印象だ。キョータはというと、おやつという単語に反応する。

「え！　おやつ！？　何があるの？」

「へへへ～。実はねぇ、ケーキ焼いてみたの。凄いでしょー」

「マジで？　カバン置いたらすぐ食べる♪」

「早くね♪」

キョータは「いやっほう！」というテンションで音を立てながら階段を駆け上がっていく。自分の部屋のドアを開ける直前、キョータは今日の学校での事を思い出していた。

「……アイツの素体（フレーム）……。動いたように見えたけど……やっぱ気のせいだよなぁ……」

『キョータ！　お帰りなのら～！！　1人ぼっちで暇だったのら～！　お話しよーなのら！！』

ドアが開かれてキョータの姿を見たボボウは大喜びでキョータに近づく。補足を加えるならば、空中に浮いてだ。

「おう！　ただいま、ボボウ」

『学校面白かった？　教えて～何あったのら？』

「面白い事か……そうだな……」

キョータの脳内にあったのはもちろん、柊の素体（フレーム）が動いた事だ。

「今日学校に転校生が来たんだけどさ、何かちょ～と変わった奴でさ」

『？　変わった奴ぅ？』

「一度も会った事無いのにオレを知ってるとか言うしさ。……それに、そいつの持ってたフェアプレイズの素体（フレーム）……動いたような気がしたんだ……」

キョータはここまで言った後、憂いを吹き飛ばすかのように明るく笑う。

「まっ、気のせいだよな！　昨日の夢じゃあるまいし！　素体（フレーム）が動くわけ無いよな～」

あはははははははは。……ッ！！？

「うわあああああああああああ！！！！！！？」

笑いから一転。突然パニック状態になるキョータ。ボボウは尋常ではないその状態が心配になり、キョータに問いかける。

『どうしたのらキョータ！？』

だが、今のキョータには余裕が無い。キョータはボボウの声に構う事無く、自分のケータイに手を伸ばす。

「キーンか！？　今すぐ俺んち来てくれ！！　奏も呼ぶから！　…ボボウが動いてんだよぉ！！！」

『……キョ……キョータ……？』

先程も言ったが、キョータは先日アシュリアーナに行った事を夢だと判断している。無論、素体（フレーム）が動いた事も夢だと判断してるのだ。

だが、目の前でボボウが浮いて喋って動いている様を改めて見て、パニックになったという訳だ。

第3話　転校生（後書き）

次回は再びアシュリアーナへ行きます。どこで話を分けるかってのは考える所なんですよね。スパッとキリの良い所で終わる保障はありませんから。

それでは、次話もお楽しみに！

第４話　再び冒険の世界へ（前書き）

前回、ボボウが動いている事でキョータがパニクってキーンに電話した続きです。

第４話　再び冒険の世界へ

ピンポーンッ！

斉木宅に響く玄関のチャイム音。キョータの母は出迎えるべく玄関に向かう。訪れたのは、息子の友人の少女だった。

「あら、奏ちゃん。いらっしゃい」

奏は履いてきた靴を玄関に揃えながらそれに答える。もちろんつま先は玄関の方に並べてだ。

なお、奏はボボウが動いている事を知らされていない。おそらく、奏に電話する時にはキョータも落ち着いていて、電話で話すより実際に見た方が信じてくれると判断したのだろう。彼が奏に言ったのは、ノートパソコンを持ってきてくれという事だけ。

「あ！　お邪魔します、おばさん」

「さっきね、数騎君も来たわよ。２人して待ってるみたいね。あとでおばさんの焼いたケーキを持って行ってあげるわ」

ケーキと聞いた奏は目をキラキラさせる。お菓子、それもケーキと言えば、料理に興味を持つ歳の女の子は作ってみたくなるのだろう。

「えー！　おばさんケーキ作ったんですか!?　素敵！　私も作ってみたい！」

「ホント？　いつでも教えてあげるわよ♪　……あ、そうだ。なんかね、陽ちゃんから伝言よ。オレの部屋に入っても驚いて気絶するなよ。ですって。……また変な物こしらえたのかしら？」

「？　はぁ、分かりました。……何で私が気絶するのかな？」

「来たよ、キョータ君♪　電話で言われたからノートパソコン持ってきたけど、一体何に使うの？」

部屋のドアを開けた奏はノートパソコンを出しながら尋ねる。そして、彼女の目の前にはキョータとキーン、そして……。

「おーサンクス！　奏！　何かボボウが、アシュリアーナに行くのにどうしてもいるって言うからさ」

『わぁ♪　奏ありがとうなのら。これで冒険の世界へ行けるのら～』

動いて喋って浮いているボボウがいた。

「……ボ……ボボウ……ちゃん？　……う～」

パタリ

奏は気絶して後ろ向きに引っくり返った。

「わぁぁ！　そんなお約束なぁ！　だから驚くなって言ったのに！！」

「ま、アレが普通の反応か」

キョータの動揺とキーンの冷静なリアクション。……言動から察するに、キーンは引っくり返らなかったらしい。流石といった所か。

奏が目覚めた所で、キョータ、キーン、奏は囲うようにボボウを見る。

「……そーか。っつーか、昨日の事は本当だったんだ……。オレ達本当にアシュリアーナに行ったんだな」
「イヤー。こりゃもぅ疑いようの無い現実ですね。うへー♪」

改めて現実を確認するキョータに、将来の夢が本気で魔術師というキーンは大喜び。だが、ここでキョータはある事を思い出す。昨日、金光はフェアプレイズというゲームに関してこう言っていたのではないだろうか。……『魔王に支配された、勇者の居ない世界』と。

「待てよ！　じゃああの世界が魔王に征服されて住んでる人達が困ってるっていう事も……」

ボボウはその言葉で今までの可愛らしい顔に緊張感を持たせる。

『……全部、本当なのら……。キョータ達のいるこの世界からは見えないけど、すぐそばにある別の世界。それが聖王国アシュリアーナ。……魔法のチカラで済んでる人達は皆幸せに暮らしていたのら。……でも……』

ここからボボウは、さらに声を暗くする。悲しむように。

『ある日、ずぅ～っと昔に英雄が封印してくれた悪い魔法使いが甦っちゃったのら。魔法使いは凄い魔力で聖王国に侵略して、たった1人で世界の半分を破壊したのら……。世界を護ってた勇者も負けちゃったのら……。聖王国を邪王国に変えちゃった魔法使い……それが、業魔王』

ボボウが一通り話し終えたという事で口を閉じた時、キョータはワナワナと拳を振るわせる。

「業魔王……酷い。……なんて……なんて――」
「なんて素敵な人なんでＳＨＯＷ（しょー）！！」

……２つ目のセリフは予想の付いてる方も多いと思うが、キーンだ。キョータは慣れの中にも礼儀ありの原理でキーンに掴みかかる。

「どうしてそうなんだよー！　そこは普通、【　なんて悪い奴なんだ　】ってセリフだろおぉぉぉ！！　バカ――――！」
「あぁん。何言うんですか～♪　魔法使いとして世界征服は最大の目標じゃないですかぁ。ナイス魔力♪」
「……キーン君って……ある意味凄い人だよね……」

一方、奏とボボウは呆れ半分、苦笑い半分といった様子だ。……無論、見習うモノでも無い。

「だからって……どんな凄い目標でもそのために人を傷つけちゃダメだろ！　そんなの目標じゃなくて、単なるワガママじゃないか！！　そんなのは……ゆ――」
「許せない。って言うのでしょ？」

キョータの言葉を遮ったキーンはニヤッと微笑む。

「分かってますよ、キョータ君。冗談ですってば！　どんな凄い事でも、それが悪い事ならハッキリダメだって言えるのがキョータ君です。……だからボボウ君はキョータ君の所に来たんですよ。どんなに大変でも、どんなに辛くても、どんなに苦しくても、自分に助けを求めた人を決して裏切らない。……だからボボウ君は世界を救ってとキョータ君に頼みに来たんです。……大丈夫ですから、頼んでみなさいな。ボボウ君」

ボボウはその言葉で意を決し、それでも手をもじもじさせておどおど俯きながらキョータにお願いする。自分の恩人を戦いに引き込んでしまうのだから、そういった態度にもなるだろう。

『……あの……キョータ……オイラね、あのね……』

「……みなまで言うなって。どんな願いだって大丈夫！　オレの友達のボボウが言う事だぜ？　オレに出来る事なら何だってするさ！　ボボウが頼むなら、勇者にだってなってやる！」

ボボウの柔らかい鼻を押して言葉を止めさせた後、力強く拳を握り締めるキョータ。その優しさと力強さに、ボボウは自然と涙を流した。

『……キョータ……。ありがとう……ありがとね。キョータ……ありがとう』

「よぉし！　そうと決まったら、とにかくアシュリアーナへ行こうぜ！！」

『うん！』

キョータはそう言いながら勢い良く立ち上がり、ボボウも涙が若干残っている嬉しそうな笑顔で手を上げた。

「奏は危ないから待ってろよ。パソ借りるぜ？」

「え？　う……うん」

思い立ったが吉日。キョータの決断の早さに奏は戸惑いながらもノートパソコンを差し出す。だが、意外にも真っ先に行こう行こう言いたがるキーンがキョータに話しかける。

「ちょ～と待った。それならバッチシ対策を練って行きましょ！」
「えっ？」

キーンの言葉はもっともだし、普段のキョータなら「確かにそうだな」と納得するのだが、今のキョータは少し困った顔をしている。そのキョータの視線の先には、目を閉じて意識を集中しているボボウの姿が。

「……でもボボウさ、もう行く気満々みたいだぜ？」

キョータがボボウを指差し、キーンがそれに気付いた時には遅かった。ボボウの目がカッと見開かれ、キーンの本が輝く。部屋に光が満ち溢れ、光が収まった時に部屋の中にいたのは奏のみ。
奏は呆然としながら目をパチクリさせる。

「ほへぇ……。キョータ君？　キーン君？　……消えちゃった。……ッ！　あっ！　パソコンの画面に2人が映ってる！」

その頃、キョータとキーン、そしてボボウは……。

「あたた……大丈夫か？　キーン」
「まぁねぇ、平気だけど……ここは昨日とは違うとこだね」

キョータとキーンは打ちつけた体を摩りながら立ち上がる。そしてキーンは周囲の風景を見てこう評した。

「な～んか、どっちかと言うたら気味悪いとこって感じだね。なんつうか、ボク向きの世界？」

一見して鍾乳洞（しょうにゅうどう）のような環境だ。暗くてジメジメして、オドロオ

ドロしい。その感想はキョータも抱いたらしく、気味悪げにこんな事を言う。

「うはぁ……いっ、今にも幽霊とか出そうだな……。やだなー」
「そら当たり前だなぁ」
「ッ！　ぎゃん！！」
「ッ！　わぁ♪」

突然背後から声をかけられた。普通の男性の声だが、今にも幽霊が出そうな環境だったため、キョータとキーンは驚いてしまった。
……キーンの方は喜んでいるきらいが見えなくも無いが……。
振り返ってみると、後ろにいたのは予想通り男性だった。黄色い髪に屈強な鍛えられた肉体。手首には鎖が付けられており、上から吊るされる様に立っている。吊るされていると言っても、足は地面に着いている。
青年は澄んだ青い目を開きながら口を開く。

「さわやかな日当たりの良い場所って訳にはいかねぇだろうよ。なんたって、ここは牢獄だ」

そこは牢獄。かつて勇者と共に闘った者が捕らえられ、幽閉されている場所だ。

第４話　再び冒険の世界へ（後書き）

やたらとキャラの濃いキーン君ですが、原作でもあんな感じです。極力原作に沿うようにしてますからね。……すでに前作のオリキャラ出したけど。

第5話　真名（前書き）

お待たせしました。……って、待ってくれてる人がいるかは分かりませんが（苦笑）。

とにもかくにも、『第5話　真名』更新です。読みは『しんめい』。……まぁ、『マナ』って読みもあるかな。

第5話　真名

2度目のアシュリアーナ。そこは牢獄で、出会った人物は褐色で黄色い髪に青の瞳を持つ青年。異世界のはずだが、キョータ達にはその人物に見覚えがあった。

「天野先生!?　どうなってんだよボボウ!　ここって本当にアシュリアーナなのか?」

キョータの動揺交じりの問いにボボウも戸惑いながらも答える。

『えっ……。アシュリアーナのはずなのら。……でも、どこに出るかなんてオイラ分からないのら』

「?　先生?　オレが?　そんな仕事した事もねぇぞ。ずっと捕まってるしな」

「ッ!　お～っと、ちょい待ち!　本がまた読めちゃいますよ～ん♪」

キーンの持っている魔道書がまた読めるようになったらしい。天野先生に似た人物は疑問符を浮かべるが、急に話を逸らされて不快な表情を浮かべていない所からして、子供の事は嫌いではないらしい。

キーンは読めるようになった所を読み始める。

「……他の世界から来た者の次なる試練。仲間救出。勇者と共に戦い、そのために業魔王から捕らえられし僧侶を助けよ。僧侶を助け、仲間にすれば冒険の頼もしい力となろう。……でもさー。」

キーンは視線を本から天野先生似の男性へ移し、また本へ戻し、

再度男性を見てこう言った。

「この人、僧侶って面じゃないよね～。コイツ助けるのかな～？」

「酷いぞ！　人を顔で判断しちゃダメだぞ！」

……キョータが男性をフォローしているように思えるが、顔で判断してはいけないと言っているという事は否定はしていないという事だ。つまり、男性の顔が『悪人顔』という事である。

「……そういう話は本人の前でしない方が良いんじゃねぇの？　お前等」

以上、男性の無表情ツッコミ。男性はその後気持ちを切り替えるような息を吐いた後、キョータ達を見る。

「……とにかく、どっから来たのか知らねぇけどよ、すぐ帰れ、な？　ここには怖い見張りもいるし、この鎖はどうしたって切れねぇんだよ」

「だ、大丈夫だよ！　オレ達が何とかするよ！　だから味方になってくれよ！！」

キョータの言葉に男性は僅かに表情を険しくする。

「味方？　なんのだよ。……まさか、業魔王を倒そうとでも言うのか？　バカな事をするのはよせ……。奴に勝つなんて無理だ。オレのこの鎖も、力じゃ切れねぇしな。……これは呪いなんだよ。【勇者のチカラを持つ者】で無ければ切る事は出来ない。……勇者が復活しなければオレの呪縛は解かれねぇんだ」

ジャラララ！

その音の意味に気付いたのは男性だけだ。その場にずっと捕らえられていたからこそ分かるその音。自分をずっと捕らえてきた鎖と、その先に繋がれている化け物。その音に気付いた男性はキョータ達に声を張り上げる。

「もういいから逃げろ。オレのこの鎖の先に繋がっている奴が来るぞ！　オレを見張ってやがる化け物がお前達を殺しにくる！」

『グルォォォォォ！！！』

一歩遅かったらしく、現れたのは双頭の龍。岩のような硬質な体を持ち、首には男性の手を封じる鎖と首輪がある。そしてその龍は侵入者たるキョータ達に襲い掛かる。

「「や……やられるぅぅぅ！！」」

前回のスライムと全くレベルが違っているというのもあるだろう。突然という事もあり、キョータとキーンは悲鳴を上げる。

メキメキメキ……

人間の肉体からこのような音が鳴るだろうか。男性の上・前腕の筋肉が盛り上がり、思いっきり鎖を引っ張った。

「おぉ！！」

ズドォォン！！

龍の首に付けられた鎖は男性が逃げないように繋がっているが、逆に言えば男性が剛力を加えれば軌道を捻じ曲げる事は出来る。龍

は軌道をずらされて岩盤に激突。轟音を立てながら頭を岩に埋もれさせた。

男性は子供達を傷付けようとした龍を睨みつける。

「……てめぇ……子供を殺す気か？」

鎖が付けられている男性の手首からは出血している。それもそうだろう。自分より何倍もでかいモノの力を強引に力で捻じ曲げたのだ。何も反動が無ければむしろおかしい。だが、男性にはそれでもそうした理由がある。キョータ達を護った理由が。

「未来を生きる大切な命を殺すのはオレが許さねぇ」

未来を生き、未来を作っていく存在のために。

男性は視線を龍に向けたままキョータ達に語りかける。

「……名も知らんボウズ共、ここまで来た事は褒めてやる。だから今はまだ死ぬな。いつか大きくなって人を護るチカラを手に入れたら――」

男性はここで顔をキョータ達に向ける。表情は笑顔。微笑みと言っていいほどの微かなものだったが、それには力強さと優しさが溢れていた。

「――その時もう一度ここへ来い。お前達が真の勇者になっていたなら、この鎖は切れてオレはお前達と共に戦うだろう。……だから、今日は逃げろ。オレが絶対お前達を護ってやるからよ」

「……違うよ、おじさん」

キョータは男性と向き合い、無言で右手をボボウの方に向ける。

ボボウがその意味に気付き、キョータの手を取る。そして、キョータは男性に自身の言葉を伝えた。

「大人も子供も関係無い。……何かを護ろうっていう心は誰にだってあるんだから！　オレ、さっきボボウと約束したんだ。この世界を護ってみせるって！！　そのためだったら――」

キョータとボボウを中心にして眩しい光が洞窟を照らす。

「オレは勇者にだってなってやる！！」

「ッ！！　これは一心合体（マインドユニオン）！！！」

光の中から出てきた紅い騎士に驚愕する男性。そして、その意味も知っていた。

（全ての魔法を超えた位置に存在する究極のチカラ！　そのチカラを持つ者は選ばれし者！　……真の、勇者！！）

ゴゥッ！！

ボボウと一心合体したキョータの拳から炎が湧き上がる。それと同時に跳び上がり、龍の額に拳を打ち付けた。

ゴキッ……

「ッ！！！　いってぇぇぇぇ！！！　手首くじいたぁぁぁ！！！」

「……勇者ってのは気のせいか？」

男性は思わずため息をついた。

キョータは手首をプラプラさせながら一旦龍から距離を取る。

「何だ!?　この前みたいに簡単にやっつけられないぞ!!　何でだ!?」
「キョータ君!　属性のせいですよ!!」
「属性!?」

キーンはキョータに向かって声を張り上げ、キョータは龍の攻撃を避けながら耳を傾ける。

「キョータ君のチカラはボボウ君を見れば分かります!　チカラの源は炎!!　その龍は炎を自分の力にしてしまうんです!　だからキョータ君のチカラはほとんど効かないんですよ!!」

そこまで見切れたのはキーンの洞察力の賜物だ。後の話で語られるが、彼はいろんな意味を含めて並みの小学生では無い。

「なんだって!?　じゃあどうしたら良いんだ!?」
「炎以外のチカラで攻撃しないと、あいつドンドン元気になっちゃいます!」

キィッ!!!

龍の口に紅蓮の色が垣間見える。ＲＰＧに登場するドラゴンの代表的な技、炎の息である。手早く言えば火炎放射だ。

（やばい!　オレはともかく、生身のキーンとおじさんは耐えられないぞ!）
「キョータ君!!」

キョータの焦りとキーンの声。直後、龍の口から炎が放たれた。

「ッ！！　うぉぉぉぉぉ！！！」

キョータが選んだのは、キーンと男性を護るために自分の身を盾にするという選択肢だった。その光景を見て、男性は昔共に戦った者の事を思い出す。

（ッ！　友達だけじゃなく、オレまで護るために自分の身を盾にした！？　似ている……この優しい心は……あいつが生まれ変わってきたみたいだ……。勇者サイが帰ってきたみてぇだ！！）

そして、キーンは熱気と攻撃の余波に押されながらもキョータの事を案じた。

「だめですキョータ君！　このままじゃ3人ともやられます！　僕達の事は忘れて戦いに集中しないと、死んじゃいますよ！！」

「いやだッ！　だってオレ勇者だぞ！？　どんな時でも絶対に誰かを見捨てたりしない！　大事な友達を忘れたりしない！　……オレが……オレがキーンの事を忘れるわけ無いじゃないか！！」

だが、徐々にその体は熔けて行く。炎を真っ先に塞き止めている体の部位、腕、その指先が。比喩ではなく、正真正銘、熔けて来ている。

（体が熱で熔けてるのに……僕のために……！）

キーンを襲うのは無力感。自分に何も出来ないという感覚と、何も出来ないがために友人を傷つける事になっている苦しみ。そして、その感覚を感じているのは現実世界にも居た。

「どうしようどうしよう！　このままじゃ皆死んじゃう！！　私……どうしたら良いの！？　ボボウちゃんもこっちで燃えてるし！」

現実世界でキョータとキーンを待つ奏だ。なお、ボボウが燃えていても床は燃えていない。普通の炎とは違うモノなのだろう。

「何か……何か助けを送らなきゃ！　ッ！！　そうだわ！！　……これ……キョータ君の作ったキーン君の妖精素体（フェアリーフレーム）！」

何かを思いついた奏は涙を流しながらキーンのカバンをあさり始め、そして見つけた。学校でキョータがキーンに渡した羽の付いた人形を。奏は人形をボボウの隣に置き、祈るように訴えかけた。

「お願い！　助けて！！　皆死んじゃいそうなの！！　……お願い……皆を……助けてっ！！！」

溢れる涙。そして泣いてるという事で途切れ途切れの言葉。奏が涙のために両手で顔を塞いだ際、一粒の涙が羽の妖精の額に当たる。

「ッ！　きゃっ！」

直後、妖精から眩しい光が迸り、奏は短い悲鳴を上げた。そして再びアシュリアーナ。キョータの体の溶けている所が増えているという点を除けば、状況に大差は無い。

《……我が主よ》

「ッ！！」

キーンの上から静かな声と白い羽根が舞い降りる。キーンが上を向くと、頭部から左右に羽根の生えた素体（フレーム）が在った。

《我は主のチカラとなる者。主の願うチカラを与えん。……我が名を呼び、求めるチカラを願え……》

その者には、まだ名は無い。名をキーンが決めて、求めるチカラを願えと言う。

「……僕の求める……チカラ……」

キーンの求めるチカラ。それはもう決まっている。キーンは手を高く掲げ、その者の名を呼ぶ。

「汝の名は風の妖精【　フーイ　】！！」

『承知！！』

名付けられた妖精は命を吹き込まれたかのように動き出し、手を伸ばしたキーンの元へ向かう。

「そして我が望むチカラは……絶対の魔力でも……世界征服のチカラでもない！！！　我が望むチカラはただ１つ！！！」

キーンとフーイの手が結ばれた時、キョータとボボウの一心合体の際の、あの眩しい光が迸る。

「……我が友を、救うチカラなり！！」

光の中から現れたのは、頭部から羽を伸ばした者だ。片翼だけでも自分の身長くらいあるような長い翼を持っている。長いローブもあり、龍騎士を思わせるキョータとボボウと比べると、魔術師を連想させる。

「ッ！！　キーン！　その姿は！！？」
「話は後で。……私が奴の炎を取り除きますから――」
キーンはキョータにそう返しながら、左手に雷を集め、龍へ向けて放った。その雷は竜巻のように唸り、回転しながら龍を飲み込んだ。
『グルゴァァァァ！！！』
龍の悲鳴。暴風のような激しい雷はキョータから吸収した炎をかき消し、吹き飛ばす。
（ッ！　しめた！　奴の炎が消えた！！）
その好機はキョータも読み取れ、飛行用とは別の羽、切り裂くための巨大な剣を羽のように広げながら龍へ向けて飛翔。
「おおっ！！」
ズパッ！
猛スピードの突進からの斬撃。それは双頭の龍の首を切り裂き、頭と体を分離させた。それを見た男性にあるのは驚愕だ。
「ッ！！　倒しやがった！　何て子供達だ！！」
直後、男性の鎖が鈍い光を発し、徐々に崩れていく。鎖を壊していく。

「ッ！　鎖が……切れるっ！」

バキィィン！

長く男性を捕らえていた鎖は無くなり、男性は喜びの声を上げる。最初は実感無さげに、徐々に喜びが溢れてくる様子だ。

「……自由……か？　おい！　自由になったぞ！」

男性は自分を助けてくれた少年達にお礼を言おうと思ったが、その時には既に少年達は消えていた。

「ッ！？　いない……。風みたいに消えちまった。……まぁいい……。オレが自由になったってこたぁよ、あの子供達が勇者って事だ。……良いぜ。名も知らん小さな勇者達。風の中で聞くが良い。……オレの名は【　天　】。次に逢った時は、お前達と共に戦う仲間だ！」

その後の天の言葉は、風に溶けて消えていく。

（そして……業魔王を倒し、平和な世界を取り戻そう！！）

一方、キョータとキーン、ボボウとフーイは現実世界に戻ってきていた。

「うっ……天？」

微かに聞こえた男性の名。それはキョータにも聞こえたらしく、戻ってきた際に打ち付けた頭を押さえながら呟き、起き上がる。

「ッ！　わっ！？」

キョータの側面から突然物理的衝撃が襲い、キョータは体勢を崩すが何とか堪え、飛び付いて来た主を見る。

「か……奏！」

大泣き状態の奏がキョータに抱きついて来たのだ。

「良かった！　私もうダメかと思ったよ！　……キョータ君達が帰ってこなかったら……どうしようって……怖かったよぉ！！」

「……そっか。帰って来れたんだな。……心配掛けてゴメンな」

キョータはそう言うと、抱き付いている奏の頭をぽんぽんと優しく叩く。

「どうやら奏さんがフーイを送ってくれたみたいですね。おかげで助かりましたよ」

「キーン！　さっきはありがとうな！　助かったぜ！」

キョータの心からのお礼に対し、キーンはなぜか腕を組みながらため息を付いた。

「全く、勿体無い事したなぁ。どんなチカラでもくれるって言われたのに、魔力をもらわなかったんですから」

そう言われると感謝の気持ちが遠のき、逆に申し訳ない気持ちになる。キョータがそういった思いで苦笑していると、不意にキーンは表情を崩し、にやっと笑顔を浮かべる。

「でも、友達のためだし。仕方ないか」
「ッ！！　キーン！」

ザッ……

全てが丸く収まろうとした直後、パソコンの画面にノイズが走り、砂嵐状態になる。そして、パソコンから誰かの声が響く。

「……炎王ザラマンデル。……風王ズルフェ」

暗い画面から響く声。キョータは驚きの声を上げる。

「ッ！　な……なんだ今の！　誰が喋った！！」
「……覚えておくが良い。それがお前達の名前だ……」

静かだが、キョータ達に向けられた明確な悪意の声。徐々に砂嵐が弱まり、徐々にその者の姿が映る。姿は人型。２本の角が後ろに真っ直ぐ伸び、通常の腕に加えて攻防の補助となる腕が左右で計４本ある。

「……勇者というのなら、自分達の真の名ぐらい名乗れなくてはな」

キョータは一瞬その者の姿と悪意に圧されたが、意を決して強い口調で尋ねる。

「お……お前誰なんだ！　何でオレ達を知ってるんだ！？」
「我が名は黒王グリフィアス。……お前達を裁く者だ」

ザッ……

画面は再びアシュリアーナの景色に戻る。その後、キョータ達の中で最初に口を開いたのはキーンだった。

「消えちゃいましたか。一体何者なんだったんでしょ？　……ちょっと悪そうで良かったな♪」

黒王グリフィアスのダークな雰囲気にときめいてしまったらしいキーン。奏は苦笑いを浮かべながら自身の感想を言う。

「なんか……怖い人みたいだったけど……」

一方、キョータが抱いたのは2人とはまた違う事。

「……黒王……グリフィアス……。あいつ……なぜだろう。どっかで……どっかで会ってる気がする。……黒王グリフィアスを……オレは知ってる気がする」

一方、アシュリアーナの天が捕らえられていた場所。すでに天がその場から離れた後だ。

『……これは……』

「先を越されたみたいだな。……リュート姫との約束、果たせると思ったんだけどね」

黒猫と少年の会話。少年にあるのは約束を果たせなかった事による苦笑と、面白そうな笑みを混ぜた笑いだった。約束というのは、彼がこの世界に来る時に交わした約束だ。黒猫は油断無く周りを見渡しながら自分の主に話しかける。

『これからどうします？』
「う～ん……。やっと手に入れた捕らわれし者の情報も振り出しになったからな。また情報を集め直すさ。……そろそろここを離れよう。異変を察知した業魔王が使いを送るだろうから。……いつも通り頼むぞ？　ダーク」
『分かりました、キョウ』

黒猫から闇が広がる。暗くても、わずかに見えていた土が黒一色となり、少年と猫を引きずり込んでいく。闇から闇へ。影から影へ。ダークの移動手段だ。
ダーク。月の属性で闇を司り、眠りと沈静も司るモノ。風と水を統べるモノ。そして、少年の『キョウ』という名は、元の世界に戻るまでの偽名である。

第5話　真名（後書き）

これでやっとこさ原作2話目終了。次回は（　話の配分的に　）短いです。

第6話　魔王軍四天王

ビシャーン！！

暗い大地に迸る雷光。そこにいるのは5人と1体。４人は岩の上に乗り、1人と1体は下から4人を見上げている状態だ。なお、上の４人の内立っているのは1人だけだ。

４人の中の1人が、少々バカにしたような鼻で笑う笑い方で下の者に話しかける。

「裁く者……か。大きく出たもんだ。……果たして貴様に出来るかな？　ゼン」

下に立つゼンと呼ばれた者は口も額から上も覆うマントを着て、肩には狐のような素体（フレーム）を乗せている。

「所詮は子供が3人。……お任せを」

下のマントを着る者の返事に、最初に彼に話し掛けた男性が隠す事無く愉快げな声を出す。

「よく言うぜ、おませさんよぉ。お前だって子供じゃねぇか。大丈夫かよ？　それに甘いぜ、認識を改めた方が良いな」

ここで男性は広くは無い岩の上で易々と立ち上がり、雷光が４人の姿を露にする。

「例え相手が子供だとしても気を許すな。その子供（ガキ）達は、まぎれもなく勇者なんだからな」

ここで４人の容姿の説明をしよう。

右から順に、一番右の岩にいるのは見た目１８くらいの少女で、髪は猫耳ヘアーで背中まで来る長さだ。首の付け根の辺りから外側にはねている。……目も瞳孔が縦で本物の猫を思わせる。

次が最初にゼンに話し掛けた男性。髪は長くストレートで、腰の辺りまで伸ばしている。歳は２０代後半くらいだろうか。また、鼻に掛けるタイプの丸メガネも着けている。

そして、３人目は目元も覆う甲冑を被っている。甲冑といっても中世のそれのような重い物ではなく、本当に軽装な代物だ。まぁ、それももっともだろう。それを着けているのは４人の中で最も身長が低い。厳密に言えば、口元の髭から考えておじいさんだ。服は武士が着るような物で、刀を左腰に下げている。

一番左側にいるのが、見た目高校生くらいの褐色の肌を持つ少年。体格はスマートだが、無駄な筋肉を持たず、引き締まった体つきをしている。

最初にゼンに話し掛けた丸メガネの男性はその子供達が勇者たる理由を話した。

「奴等は仲間の天を解放している。強いぞ」

天は勇者のチカラを持つ者でなければ解放はされない。逆説、それが現状で解放されたとなれば、それはつまり勇者がこの世に現れたという事。

一番左側に居た少年はメガネの男性に賛同したように、隣のおじいさんに話しかける。

「そうだよ！　ああいう奴等を放っておいたってろくな事ねぇよな

？　ナラカのじっちゃん」
「ふぉ、ふぉ、ふぉ。そういうジュリは自分が戦いたいだけじゃろ？」

ナラカと呼ばれたおじいさんは甲冑の顔を隠す部分を上げて顔を露にする。髭と口調でおじいさんである事確定。
そして、一番右側の少女はナラカの言葉に賛同の様子で、呆れたように少年に対してため息を付く。

「ほんとほんと。結局なんでも力ずくなんだよねー。ジュリはさっ！　体力バカって奴？」
「うるせぇなコユキ！　お前に迷惑かけてねぇだろ！？」

常に力ずくで体力バカ。この言葉はジュリと呼ばれた少年の心にグサッと刺さったらしく、口元を引きつらせながらもコユキに反論する。だが、その時には既にコユキはメガネの男性の岩に跳んでいた。及び、抱き付いた。

「その点ダレスはあんたと違ってクールで良い男よ～♪　あ～素敵な毛並み♪」
「ひっつくな！」

ダレスは自分の髪に頬擦りするコユキを引き剥がしてからゼンに話しかける。ギャグパートは終了。シリアス表情だ。

「奴等は一心合体（マインドユニオン）が可能な者達だ。並みの獣魔（モンスター）では倒せまい。奴等を倒せるのは同じ能力を持つ者だけだ。……お前のようにな」

同じ能力。そう言われたゼンは目を鋭く、細くし、不快感を露にする。

「……同じ能力ではない。……奴等よりも……オレのが強い」

強く握り締められるゼンの拳。その中にある苛立ちなどの感情を察した上で、ダレスは挑発的な笑みを浮かべた。

「言うじゃないか。なら、やってみせろよ」

ビシャーンッ！！

「「「「魔王軍四天王の我々に見せてみろ」」」」

稲光が逆光により四天王を暗く映し、４人の声は重なる。そして稲光が収まって再び４人の色が見えた時、ダレスは鋭い眼光をゼンに向けた。

「ゼン、お前のチカラを」

「言われるまでも無い」

ゼンもまた同じように鋭い視線を返し、マントを翻して背を向けた。

「四天王の方々は業魔王様のそばで見守っていてくれれば良い。戦うのはオレが率いる魔王軍なのだから」

ゼンが立ち去った後、ジュリがむくれた様子で腕を組む。

「何だよアイツ、魔王軍の兵士長ってだけじゃん？　オレ達四天王のが位高いのに何でタメ口かねぇ。アイツ」

ダレスは腕を持ち上げてメガネを押し上げながらそれに答える。
静かで落ち着いた声だ。

「……アイツは業魔王様のお気に入りなんだよ。……それに、いわゆる特別な存在って奴なのさ」

ダレスはここで稲光が迸る暗雲を見上げながら呟いた。

「……失われし王国の忘れ形見……か」

第6話　魔王軍四天王（後書き）

さて、次話は長いので覚悟してください。原作3話目、分けるの苦労しました……。分け所は決まったので、後は書くだけです。

活動報告のをそのままコピペしました。

フェアプレイズの声優（決まっていた奴や個人的に合ってるんじゃね？って奴）を書きます。

決まってる奴ってのは、実は『フェアプレイズ』って主要キャラは声優が決まっていたんです。アニメ化とかゲーム化の話が持ち上がっていたんですが、無かった事になったみたいですね。でも、おまけCDとして声が出ました。

では……。

キョータ：並木のり子
ボボウ：望月久代

キーン，フーイ：鈴木真二

奏：水樹奈々々

んで、こっからは個人的に合っていると思う人。

天：藤原啓治（天は苦労人なイメージがあるので）
伏：関俊彦（原作において、この人の雰囲気が『とある』のアレイスター＝クロウリーと似てたから）

ダレス：三木眞一郎
ココユキ：ゆかな
ナラカ：柴田秀勝

魔と滅。そしてジュリは迷ってるんですよね。最新話見た人で、「この人はどうだろう」という人います？

第7話　邪力法典（前書き）

お待たせしました。……えっ？　原作あるのにここまで遅れた理由？　そんなもの、暑いからに決まっているじゃないですか。この暑さが執筆する元気を奪っているのです。

っていうか、これを書いているのが作中と同じ夏だからね（笑）。なんつうか、暑さ倍増って感じで書きました（笑）。

第7話　邪力法典

――アシュリアーナ・とある王城跡――

壁は所々崩れ、かろうじて原形を保っているような城。その中で、ゆったりと黒いマントが歩を進める。そして辿りついた部屋には、机と、一見してパソコンのような物があった。無論、科学の代わりに魔法が存在するような世界で純粋なパソコンなんてあるはずがない。キーボードはある。だが、ディスプレイに当たるのは本だ。古めかしい、縁取りのなされた本。

『どうするの？　ゼン。……奴等と戦うんでしょ？　アシュリアーナにあいつらを誘き出さなきゃね』

机の上にチョコンと座った狐を思わせるモノに黒マントの少年は言葉を返す。

「大丈夫だ、クーエイ。この【　邪力法典　】を使う」

少年がイスに座ったと同時に閉じられていた本が開き、空白のページが顔を出す。そしてゼンはキーボードを叩き始めながら口を開く。

「この本はアシュリアーナ世界の全ての自然現象を操る能力がある。……この本に書かれた天災は、アシュリアーナでも本当に起こる。……見せてもらおうじゃないか。勇者の持つ正義の心を……」

――現実世界・小学校――

季節は夏。キョータのクラスである４－３と、隣のクラスである４－２は合同プールの時間だ。現在、４－３のある生徒のタイムを計っているのだが……。

「おー早いな」

「すげぇ！　ぶっちぎりじゃん！！」

「６年生の記録破っちゃうんじゃない？」

天野先生の平坦ながらも感心した声に４－２の男子の驚き。今タイムを計っている女子と同じクラスの少女も感心した様子だ。まぁ、４年生が６年の記録を破ろうとするほどのスピードとなれば感心もするだろう。

そして、それほどのスピードで泳ぐ奏は２５メートルを泳ぎきり、ゴール地点の壁に触れると水から上がった。

「タイムどのくらい？」

今の奏は水泳時に使うような帽子とゴーグルを付けている。

一方、泳ぎきった奏に送られたのはクラスメイトからの賞賛の声。

……特に金光。

「凄いですよ奏さん♪　新記録ですよ！」

「６年生の水泳部のタイム破りましたよ！」

「じゃあ自己新かなぁ？」

上から順に金光とクラスの女子の賞賛。そして奏の事後認識。金光はデレデレ顔で奏にタオルを差し出す。……やはり６年生のタイムを破っていたらしい。それも水泳部を相手にだ。

ここで奏は思い出したように周りを見渡し、金光に尋ねる。

「あれ？　ねぇ、キョータ君達は？　どっか行っちゃったの？」
「あー数騎のバカが倒れちゃったんで、キョータが保健室に連れて行ったんですよ」
「えぇ！　キーン君が！？」

解説するまでもなく、金光はヤレヤレといった態度だ。一方奏はその事実を聞くなり即座に動き出す。

「先生、私も行ってきます！　保険委員ですから」
「おー。髪ふいてけよ、風邪引くぞ」

天野先生は奏を見送った後、金光の方を指で突付く。

「金光、オレも一応様子見て来るわ。んじゃ、頼んだぞ」
「ッ！！　ちょっ！　先生！？　頼んだってどうしろと！？　何故僕が！？」

近くに居たから。……だろうな。

――――保健室――――

「しっかし無茶だよキーン」

キョータはキーンに呆れ半分、心配半分な言葉を宛てる。まぁ、そのキョータの言い分にはもっともな物があるわけで……。

「この暑い中そんな厚着でいたら熱中症だか日射病になるだろ」

そう。キーンの服装は学校指定のスクール水着ではない。彼専用

のオーダーメイドであり、彼の普段着でもある、分厚い魔法使いを思わせるローブだ。
キーンはキーンで額に氷の入った袋を乗せて、苦しそうに唸りながら反論する。

「何を言うんですかキョータ君。魔法使いたる者、どんな時でもローブは手放せません。……命ですよ！」

最後に振り絞るように強く言い切ったキーンは、次の瞬間怪しい笑みを浮かべて両手を上に掲げた。

「な～に、この程度、僕の魔力を持ってすればすぐに治りますよ。……エロイムエッサイム、我は求め訴えたり～」
「……魔力っつぅか、限りなく呪いっぽいよね」

キョータはそう突っ込んだ後、コップに入った水をキーンに差し出す。

「んな事は良いや。水飲めよ。保険の先生来るまでいてやっからさ――」

ピッ

「「？」」

ポーン

不意に聞こえた異音にキョータとキーンは顔を見合わせる。

「……何の音？」

「さぁ？　隣から聞こえましたね」

ベッドとベッドをしきるカーテンを開けると、メガネを掛けた中性的な顔立ちの少年がパソコンを操作していた。丸メガネで緑色の髪。歳は小４のキョータと同じくらいだろう。

そして少年はキョータ達に気付くと申し訳無さそうに謝ってきた。

「あ……ゴメン。煩かったよね。今止めるね」

「あ、や……別に良いけど。キミは……え～っと……」

パソコンを閉じようとした少年にキョータは閉じなくても良いと言ったは良いが、緑髪の少年をどう呼んだら良いか迷ってしまっている。

緑髪の少年はそれを察したのか、穏やかな微笑を浮かべながら自身の名を名乗る。

「僕、４年２組の皇（すめらぎ）　志乃武（しのぶ）です」

「隣のクラスじゃないですか。……でも、２組は僕達と合同でプールの授業の日じゃないんですか？」

キーンは頭に冷えた氷袋を乗せながら上体を起こし、志乃武に尋ねる。……なお、頭からはプスプスと湯気が出ている。志乃武はその言葉に対し、少し寂しそうな表情を見せると窓の外を見つめた。

「……僕、体育はいつも欠席なんです。体が弱いから仕方ないんだけど……。だから１人でいる時はこっそりこうやってゲームやって……体育が終わるのを待ってるんだ。……１人ぼっちでいるのはつまらないし、寂しいから……」

「何で？　１人じゃないじゃん」

「えっ？」

志乃武はキョータの言葉で俯かせていた顔を上げる。

「オレ、斉木　陽太。略してキョータね。こっちは月島　数騎！」

「キーンと呼んでください。魔法使いらしく」

キョータとキーンは自分達の名を名乗った後、志乃武に向けて力強い笑みを送る。

「今は1人じゃないぜ。オレ達がいるじゃんか！　友達といればつまらなくないし、寂しくも無いじゃん！」

「……キョータ君……」

「まぁ、クラス違うし、授業中だから遊んでちゃダメなんだけどさ。でもオレ、今シノブと友達になりたいし、後で怒られても今仲良くしておきたいんだよ」

キョータはピッと親指を立てた後それを解き、その手をシノブに向ける。握手するためだ。

「大事な友達を作るチャンスは、オレしくじらないぜ！」

「……うん！　……僕も……キョータ君と友達になりたい！」

シノブはキョータの手を握り返し、次のキョータの言葉と共に保健室で賑やかで明るい笑いが響き渡る。

「よぉし！　じゃ、今日からオレ達仲間だぜ！！」

「キーンと楽しい仲間ですなー」

「うん！」

という様子を屋外の物陰から見ている天野先生。天野先生は感心

するような、一目置いた悪ガキを相手にする時の教師のような笑みを浮かべる。

「まったく、とんでもねぇ奴等だな！　オレの授業バックれるたぁ良い度胸だ」

次に天野先生が取った行動は、【　キョータ達を連れ戻す　】のではなく、【　暑そうに頭を掻きながら立ち去る　】だった。

「……サボリを見逃すのは今日だけだぞ。あちぃーだりぃー」

一方保健室では、キーンが何かに気付いたらしい。

「？　あれ、シノブ君。そのパソコンに映ってるの、フェアプレイズじゃないですか？」

「うん。……お父さんが部屋にいても遊べるようにって買ってくれたんだ。お姉ちゃんの素体（フレーム）を借りてやってるんだよ」

そう言ってシノブはそばに置いてあった素体（フレーム）を取り出した。

「お姉ちゃんのだから女の子型（フィーメールタイプ）で恥ずかしいんだけど、水中用の妖精（フェアリーフレーム）素体なんだ」

「おぉ！　すげぇじゃん！！　オレにもいるぜ、ボボウっていうんだ！（……喋るなよ、ボボウ）」

『《了解なのらー》』

キョータは小声でボボウに語りかけ、次はキーンが続くと思ったが……。

「……あれ？　キーン、フーイは？」

「家ですよー。学校つまらないって言うんで。本しか持って来てないですよ。……で、シノブ君。今どこらへんやってるんです？」

キーンはずり落ちそうな氷袋を頭の上に整え直しながら尋ねたのだが、シノブは拳をグーにして思い悩むように口元を押さえる。

「……うーん……それが変なんだぁ。今まで見た事も無いイベントが突然始まったんだ。……まるでシステムが暴走したみたく……」

シノブの視線を追ったキョータとキーンの目に入ってきたのは、山が膨大な水に襲われている様だ。

「フィールドにあった大きな湖がいきなり溢れて大洪水になっちゃったんだ。このままだと、この地方の町は洪水のせいで全滅しちゃうよ。……リアルタイムバトルみたいになって何をしても止まらないし……それに――」

シノブはフィールドの真ん中辺りの岩に立つ、顔まで隠すマントを着たキャラクターを指差す。

「ほら、ここにも見た事も無いキャラがいるんだ」

「ッ！　こいつ……」

キョータがそのキャラクターを見て何かを察したように顔を強張らせる中、シノブはパソコンを操作してそのキャラクターに話しかける。

「このキャラ、何を話しかけても同じ事しか言わないんだよ」

【　炎の王よ、真の正義を裁く者に見せよ　】

その言葉は、キョータとキーンの心当たりにビンビンとヒットした。キョータは拳を握り締め、顔を真剣なそれに変える。

「……オレだ」

「えっ？」

キョータの声が小さくて聞き取れなかったか、またはその呟きの意味が分からなかったか。シノブは疑問符を浮かべる。

「……コイツはオレを呼んでいる！！」

その言葉の意味をシノブは知らない。だが、キーンにはちゃんと伝わっていた。

「キョータ君無茶です！　今はフーイもいません。1人で行く事になるよ！」

「ダメだ、オレは行くぞ！　だって、あの世界で起きているのは本当の事なんだぜ！？　そして……その事をオレは知ってる。町の人を見殺しに出来ない！　無理でも……無茶でも、オレが行かなきゃ誰が行くんだ！」

『行くんらね、キョータ！』

「ッ！！　うわぁぁっ！！　素体（フレーム）が動いたぁ！！！」

シノブがボボウが動いている様を見て驚いている中、キーンの持っていた本から光が迸る。

「ッ！　本が光って……発動する！！」

カッ！！！

保健室全体を包み込むかのような眩しい光。その光は、自分達を異界へと送った光は、保健室の前まで来ていた奏が気付かない訳が無い。

「ッ！　この光は……まさかまたっ！！」

彼女が保健室に入った時には光が収まり、キーンと見慣れない男の子がいるだけだった。奏の存在に気付いたキーンは事の次第を知らせる。

「か……奏さん。キョータ君が1人で……」
「1人で……アシュリアーナに行っちゃったの!?」
「……キーン君、これって一体どうなってるの？　魔法!?」

心配そうな奏と呆然＋動揺しているシノブ。キーンは視線をパソコンの画面に移しながら言葉を発した。

「話は後で。……とにかく今はキョータ君が心配です。……キョータ君、無茶だけはしないでくださいよ……」

「すごい洪水だ、時間が無いぞ！　ボボウ！」
『分かったのら!!』

一方アシュリアーナ。キョータとボボウが出たのは空だった。つまり、アシュリアーナに移動した彼らを待っていたのは重力に従った落下だ。

「『一心合体！』」

キョータとボボウの体は重なり、紅蓮の騎士は焔を纏いながら落下する。

「よし！　行くぞ！！　水を全部燃やしてやる！！」

「そこまでだ。炎王ザラマンデル」

「ッ！！」

だが、不意に自分を呼ぶ声に反応して一旦適当な大地に足を着けた。

「……どちらにしても、貴様の炎では洪水は止められん」

焔の熱によって水を蒸発させる手があるが、それには水の量が多過ぎる上に時間がない。それが『焔』では不可能という理由だろう。

（ッ！　コイツがオレを呼んだ奴だな！！）

キョータは自分を呼んだ者を確認。自分の邪魔をしないように訴える。

「誰だか知らないけど邪魔するな！　一心合体したオレと生身で戦うのは無理だぜ！！」

「……オレを……知らないだと？　……オレがお前より劣るというのか……。笑わせるな……」

目の前のマント少年が右手を僅かに上げた時、その隙間から服とマントの間から飛び出る存在がいた。三角耳に鋭角なボディ。一見して狐のような素体（フレーム）が。

（ッ！！？　素体（フレーム）！？）

キョータが驚いている中、狐と少年を中心にして禍々しい光が辺りを包む。

「オレが何者かをその瞳に刻み込め……」

……そして現れたのは、後頭部に後ろに長く伸びた角がある者。通常の腕の他に、３つの爪が付いている攻防補助用の腕が左右で２本ずつ。計４本ある。

「忘れるな。……このオレは、お前を裁く者だ……」

第7話　邪力法典（後書き）

次回は戦闘。……早くオリジナル（原作で終わった後）を書きたいです。

次の更新は流星となります。交互に更新していくつもりですからね。

第8話　水王ウンディーヌ（前書き）

前もって言っておきます。一心合体した状態では、普通の素体と同じようにピシッとひびが入ったり砕けたりします。
合体を解いた後は素体も人間もどこかしら砕けているというのはありません。

第8話　水王ウンディーヌ

目の前の少年は狐のような素体（フレーム）と合体し、黒く、禍々しい姿に変わる。そして、その存在をキョータとボボウの合体した炎王ザラマンデルは知っていた。

「ッ！！　黒王グリフィアス！？　お前も一心合体してるのか！？」

「一心合体？　……そんな弱い力は求めない。……我は心の闇にある暗黒のチカラで合体する。その名も――」

黒王グリフィアスは左手に小さな光球を作り出し、次の言葉を言いながらそのチカラを自分とザラマンデルの真横に解き放つ。

「――邪心合体」

ドゴォォォン！！！

グリフィアスから放たれたチカラは大地に触れるなり弾ける。まるで、予め地中にダイナマイトを仕組んでいたように、大地は岩となって空へと上がる。

ザラマンデルは四方に弾ける岩に驚き、とっさに腕で頭を庇う。

「ッ！　わっ！」

そしてその場に残ったのは、直径5メートルほどのクレーター。

「……地面に……穴が開いた……！！」（凄いチカラだ。……これが邪心合体のチカラ！）

そのチカラの強大さにキョータが驚いている時、グリフィアスは驚くべき発言をする。

「……オレなら洪水を止められる。大地を自由に操れるからな。水の流れを変えて町を救う事が出来る。……人々を助けてやっても良い。……その代わり、オレにお前を殺させろ」

「……本当に……皆を助けてくれるんだな……？」

「信用しろ。……安心して――」

グリフィアスの左手に光球が現れ、ザラマンデルの前に放たれる。

「――……死ね」

ドゴゴゴゴゴッ！！

先程とは比べ物にならない量の岩が弾け飛び、ザラマンデルを襲う。溶岩ではない噴火のような物だ。硬質の岩がザラマンデルの身体に打ち込まれ、装甲を傷付けていく。一方、現実世界にいるキーンはキョータの決めた事に納得しているわけが無い。

「キョータ君無茶ですよ！　そんな約束護るわけないでしょうが！！　今から急いで家に帰ってフーイを連れてきます！」

キーンはそう言うなり即座に行動に移す。日射病や熱中症なんてものはこの事態のおかげでとうに吹き飛んでしまった。だが、そのキーンを止めたのは意外にもおっとり系の奏だった。

「無理言わないで！　キーン君もシノブ君も倒れちゃったんでしょ！　私が行く！！　素体（フレーム）貸してね！」

奏が手に取ったのは、元がシノブのお姉さんが持っていた素体（フレーム）だ。人魚のように足ヒレがあり、髪型は両サイドにお団子風に小さく纏めるタイプだ。危うい発言をするなら、銀髪の甘党侍が出てくる漫画の夜兎（やと）族の少女のような髪型だと思ってもらいたい。

「ダメですよ！　女の子1人をあんなとこに行かす訳にいかないでしょう。……それに、そのフレームはシノブ君が登録しています！　二重登録じゃ奏さんの言う事を聞きませんよ！」

そのキーンの言葉は奏の事を思ってだ。いくら魔法使いフェチだとしても、女性の事を気遣えない程アブノーマルでもない。

「ま、待って。良く分からないけど、登録を消去すれば良いんだね？」

これはシノブの言葉。キーンはその言葉に眉を顰めて「うえっ」という顔をする。

「え？　出来るの？　行かせたくないのになぁ……」
「元々コイツだってお姉ちゃんのデータを消して使ってるんだもの……」

シノブはキーボードに手を伸ばし、叩き始める。

「……僕、運動はダメだけどパソコンは自信あるから。短時間で登録を初期化するのは難しいけど……キョータ君のためなら……やってみせるよ！　……ッ。やった！　消去（デリート）した！」

シノブの言う通り、画面には『ファイルを削除しました』という文字が表示されていた。

「凄い。難しいと言っときながら一瞬で作業終わった！　もしかして天才？」

それはキーンの驚き。まぁ、無理も無い事だろう。シノブのタイピングスピードは速く、ミスが全く無かったのだから。奏は人魚のような姿の女の子型素体（フィーメールタイプフレーム）を強く抱きしめながら同じだけの強さで願う。

「お願い。……私をアシュリアーナに……キョータ君の所へ行かせて！　いつも皆を助けてくれるキョータ君を、今度は私が助けてあげたいの！！」

キィッ！

キーンの本から光が迸り、保健室に眩しい光が満ちる。そしてその光が収まった頃には、奏の姿が消えていた。

「消えた！？」

「奏さんがアシュリアーナに1人で行っちまったよ……」

上から順に、もろ動揺のシノブと弱り果てた様子のキーンだ。

一方、奏が飛ばされたのはキョータの時のような空中ではなく、水中だった。

（ッ！！　ここはどこ！？　水の中！？　地面じゃなくて……洪水に出ちゃったんだ）

奏はその事を理解するなり手足を動かして洪水の激流の中を進もうとする。

（凄い流れ……！　……でも……泳がなきゃ……。キョータ君を……私が……助けなきゃ……）

底の岩のでっぱりを取っ手に徐々に奏は進んでいく。ほんの少しずつ進む彼女に、彼女と同じように現実世界からやってきた人魚型素体が話しかける。

《なぁ～にやってんのよ。全く、鈍いわねぇ》

（ッ！！）

奏が声の聞こえた方を見ると、藍色の球体が水の流れに圧される事無く奏の前に存在していた。それはシャボン玉のように軽やかで、水面に反射する光のように、揺らめくように輝いている。

《あんたがあたしの主ね。どうする？　助けよっか？　死にそうだしぃ」

声と口調から、ラフで勝気な性格である事が伺える。そしてその声は奏の頭に直接響くもので、手早く言うと【　テレパシー　】のようなモノだと思われる。

（……私は良いの。それより大事な人が大変なの！　私が出来る事なら何でもするから！　お願い！！　キョータ君を助けて！！）

《そういう大事な事は自分でやらなきゃダメよ～。……でも、自分より人を助けたいとこは好き。戦うチカラをあげるわ。……私に素敵な名前を付けてくれたらね～》

（……泡が光って……とっても綺麗。……水の中でも綺麗な音を立ててるみたい。……貴方は、シャララ　）

名前とはそのモノを定義する重要な要素（ファクター）。日に照らされた水面のように輝く泡から現れた素体（フレーム）の目には確かな生気が宿っていた。

『シャララ……うん。素敵ね！　気に入ったわよ！　じゃあ、お礼に貴方にチカラをあげるわ。女の子のチカラ、見せてやろうじゃない！！』

シャララは、激流が全く影響が無いと言わんばかりにするりと奏に近づき、キョータとボボウ、キーンとフーイのそれのように暖かさを思わせる優しい光が、清らかな鈴の音のように水中に響き渡る。

《大好きな人を護る時、女の子の勇気は無限大よ！》

光の中から現れたのは、まさしく人魚だった。素体（フレーム）の頃にお団子風だった髪はお下げに変わっている。

（……私のチカラ。これがそうなの……）

奏は両手の平を鏡合わせに自分の前に構える。手と手の間に細かい糸のような青い光が収束され、やがて1つの光球となった。

（水を……操れる！）

青い光は両手の平に纏われ、奏は腕を左右に広げる。その途端で変化は現れた。水が……。

「……何？」

その声はグリフィアスのモノだ。彼の目の前で、大量の水が液体ではなくなっていく。

「洪水が凍る。……このチカラは……水王ウンディーヌか」

バキィン！

凍った水の中から水王と化した奏が姿を現すが、彼女の目に入ってきたのは考えたくなかった光景。

「ッ！！　キョータ君！！」

キョータはまだボボウと一心合体した状態だったが、うつ伏せに倒れたきり動く気配が無い。足が人魚のそれだとしても陸地の移動は平気らしく、奏はキョータの元へ向かう。……というか、空中を浮いて進んでいるから陸地の移動が平気なのは当然だろう。

彼女がキョータのそばに着いた時、黒い者がそばにそびえ立つ。

「洪水を止めたのは見事だったが、遅かったな。……ザラマンデルも1人で死ぬのは嫌だろう。一緒に死んでやれ」

グリフィアスが目をウンディーヌに向けたまま腕を横に伸ばすとその方向にあった岩が浮き上がり、グリフィアスが腕を前に向けると共に岩がその腕の動きにあわせてウンディーヌの方に飛ぶ。

だが、その岩は直撃ルートであるにも関わらずウンディーヌを襲う事は無かった。

「おおっ！！」

「ッ！　キョータ君！」

倒れていたザラマンデルが無理やり自分の体を動かし、拳で岩を弾き飛ばしたのだ。

「か……奏なんだな？　助かったぜ、もう少し遅かったらバラバラにされてた……」

そのキョータの言葉は大げさな例えではない。現に、先程岩を弾き飛ばした衝撃で彼の拳にヒビが走っているのだ。

「……でも、もう大丈夫。今度はオレが奏を護ってやるから」

「……キョータ君……」

水王となった奏の目から涙が流れる。それは自分の好きな人が自分を護るために傷付く事への辛さだろう。自分のせいで誰かが傷付くという事は、自分がその誰かを傷つけてしまうという事とも取れてしまう。

「どう護る気だ？　そのボロボロの体で」

風を斬り、グリフィアスの補助腕2本がザラマンデルを掴んで持ち上げ、もう2本がザラマンデルの胸を貫く。

「お前が勇者だと言うのなら無駄が多過ぎる。無駄に人を信じ、無駄に傷を負い、無駄に死ぬ。……勇者の存在が無駄という事か」

「……」

ガシッ

ザラマンデルは無言のまま自分を貫いている鋭い腕をしっかり押さえる。貫くというのは必殺の攻撃手段に思えて、実際にはリスクの大きい事だ。貫いた後相手に攻撃する精神が残っていた場合、強力なカウンターを受ける事となる。……まぁ、中には貫かれた周辺

の筋肉を引き締めて強引に刃を止めるという猛者もいるだろうが……。

「……無駄……じゃない」

そのザラマンデルの言葉には確かな意志があった。反撃する余力があるからではない。自分の意志のチカラで炎王としてのチカラを引き出そうとしているのだ。

「……人を信じる事も……人を護って傷を負う事も……無駄じゃない！」

ザラマンデルの姿が龍騎士を思わせる姿だとは前に言ったが、彼の頭部は龍の形のヘルム（甲冑のような物）で護られている。ちょうど、龍の下顎の下にザラマンデルの顔がある状態だ。その龍の瞳がギョンッと動き、上顎と下顎が開いていく。

そしてその口の中には、紅い焔が収束されている。

「人の想いを無駄にしないで、その想いをチカラにするのが勇者なんだ！！」

ザラマンデルの言葉と共に龍の口の中の焔が炸裂。至近距離のグリフィアスに襲い掛かる。

ドゴォォォォォ！！！

高熱・必殺の一撃は今まで余裕の態度だったグリフィアスに短い悲鳴をもたらした。彼の補助腕は熱と炎の勢いで砕けていく。

「うあ！！　……フ……閃光（フレア）……破裂（バースト）！！」（炎王の最強攻撃を誰

にも教わりもせずボロボロの体で放つとは！）

傷付いたグリフィアスはよろめきながら後ずさる。

「……流石は勇者……見事なり……。今日は引き分けだ。……だが、次は殺す」

最後の殺すという言葉には上辺だけではない意志と鋭さがあったが、そのような事が分かるほどキョータも奏も殺伐と育ったわけではないし、現在2人はそれ所ではない。

「……消えてく……勝ったの……？」

奏は先程の戦闘からの警戒心から抜けられず、キョータはというと……。

どさっ

「ッ！　キョータ君！？」

ザラマンデル状態のキョータはうつ伏せに倒れてしまった。……それだけ彼が戦闘時に受けたダメージが大きかったという事だろう。最後に放ったのが炎王の最強攻撃とあってはその攻撃の反動も計り知れない。

「キョータ君しっかりして！　キョータ君！！　ッ！　あっ！」

急いで彼のそばに駆け寄って呼びかける奏。言葉の最後に驚いたのは、ザラマンデルから光が走ったからだ。その光が収まった時、ウンディーヌは奏の姿へと変わっていた。彼女のそばにはシャララ

もいるから、合体が分離されたのだろう。

「……一心合体が解けちゃった……。……それに――」

奏の視線の先にはキョータがぐったりと倒れていて、奏はキョータの頭に優しく、そっと手の平を乗せる。

『う……』

ボボウの方は目覚めたらしく、目を擦った後キョータを見て慌てふためく。その大き目の目からは涙が。

『キョーター!!　一心合体を解いたのに目を開けないのら!!……きっと……酷いダメージなんら。……このままじゃ……このままじゃキョータ死んじゃうのら!!』

「えぇ!　そんな!!　私のせいだ!　私、結局キョータ君に助けてもらっちゃって……そのせいで!」

『うわぁぁん!!　オイラがもっと強かったらキョータはぁぁぁ!!!』

奏とボボウ、ただ今号泣中。一方、シャララはというと腰に手を当てて、頬を膨らませて呆れている。なお、シャララはウンディーヌの時同様空中に浮いている。

『あぁもう!　泣いてるんじゃないわよ!　そろいも揃ってみっともないわね。泣いてもしょうがないでしょ!　とにかく、治療できる僧侶を探すのよ!!』

「?　僧侶?」

奏は涙を拭いながらシャララに尋ねる。シャララは視線をキョー

タに向けて続けた。

『キョータの傷は大きいわ。これ、魔法じゃないとダメよ！　私達妖精は聖なる魔力を感知できる。治療できる僧侶を探すのよ！』

『……。あ……感じるのら！　あの山のふもと辺りに聖魔力を感じるのら！！』

『私もよ！　じゃあ、行くわよ！！　全速力だからね！！』

『分かったのら！！』

そう言って、ボボウとシャララは猛スピードで飛んでいく。……奏とキョータをその場に残した訳だが、まぁ、大丈夫だろう。

第8話　水王ウンディーヌ（後書き）

なお、貫かれた後自分の筋肉で刃が抜けないようにするという猛者は同じ作者（岡田芽武さん）の作品で登場しています。……全力出したらブロリーとだってやりあえるかも……。

まぁ、いずれこの小説にも出ますけどね。その子。

次の話は比較的短めなので、原作1話＝小説2話くらいとなります。

第9話　エリアード・ジーン（前書き）

今回は長いぞ～。まったり読んでください。

第9話　エリアード・ジーン

山のふもと。そこでは、1人の男性が屋外作業をしている真っ最中だった。

ガシャン！

長い棒が硬質な音と共に地面に突き刺さる。そして男性は、息を切らせながらも満足気な表情を浮かべた。

「やった……。ついにここまで来たぞ！　長く、苦しい日々だった。……だが、オレは諦めなかった！　オレは……やり遂げたんだ！！……天様自作野菜畑、完成だぁ！！」

そんな訳で、天は自分の家のそばに野菜畑を作っていた。右手に農作業用の長い鎌を持って万歳をしている。

「ふふん～♪　野菜好きのオレにとっては家庭菜園は夢だったからな～♪　……あ、そうだ。家に戻って何を植えるか決めながら茶でも飲むか」

そう言って、天は体の向きを180度反転。自分の家の方を向く。だが、悲劇はこの直後起きた。上空から迫り来る2つの物体。それは天が苦労して作った畑にみるみる近づき……。

ドッカーン！！

……耕（たがや）したばかりの柔らかい土が舞う。天の畑には、見事なまでの大穴が開いた。そして、そのクレーターの中心にいるのは2人の

妖精。

『けほけほ。……ちょっと速すぎて上手く止まれなかったのら。……何か壊れちゃったみたいら』

『あ！！　あんた僧侶ね！！　怪我人がいるの！　一緒に来て！！』

怪我をしたキョータを治療出来る人を探すために飛んできたボボウとシャララだった。

ボボウは目と口に粉塵が入ったらしくむせており、シャララはビシッと天を指差しながら頼んでくる。……いや、この態度はどっちかというと命令するって気もするが……。

一方、苦労して作った畑を壊されてさらにはそのような一方的な命令を聞いた天は怒るという事はしない。だからといってあっさりすぐに付いて行くという事も無かった。ただ……。

「……オレの……畑が……うぇ～ん」

ショックで泣いていた。上からライトが当たっていれば、演劇での悲劇の場面のようだ。

『ちょっと！　何落ち込んでんのよ！！　緊急って言ってんでしょ！　こらぁあああ！！！』

……シャララは鬼なのだろうか。

一方、現実世界ではキーンとシノブが狼狽していた。

「キョ、キョータ君！？」

「ど、どうなったのキョータ君？　……負けちゃったの？」

「いいえ……。見る限り相討ちでした。……グリフィアスは逃げたって感じですね」

そう答えるキーンにやや冷静さが戻っていたのは、彼の持つ小学生とは思えないほどの理性からだろう。

「で、でもキョータ君のダメージは相当酷く見えたけど……」

「画面も変わってます。……どうやらこの家の中に2人ともいるようです」

キーンの言う通り、画面に映っているのは先程の岩のせり立つ山地ではなく、のどかな一軒家だ。キーンは体の向きを反転させてドアの方を向きながらシノブにこれからの事を伝える。

「とにかく、僕は家に戻ってフーイを連れてきますよ。シノブ君はパソコンを見ててください」

「え……うん。……うぅ……キョータ君、大丈夫かな……？」

シノブはキーンを見送ると視線を画面に戻す。その目にあるのは心配だけだ。

一方、キョータは右も左も上も下も無い空間に浮かんでいた。夢の中だ。その夢の中で、キョータに語りかけてくる者がいた。

『……お前が新しい勇者か。ずいぶんと小さな子になったものだ……』

「ッ！！　だ、誰だ……！？」

戦闘の疲労と痛みからか、キョータの目は半分しか開いていない。

『生まれ変わって、またも我に逆らうのか。……勇者サイよ。だが、その小さな体で我に勝てるとは思えん。……そうだろう？　……サ

イ』

「サイ！？　違うぞ！　オレはキョータ！　お前は誰だ！！」

平和な日本で普通の小学生として暮らしてきたキョータには、かつての戦いは分からないだろう。

ヴンッ

真っ暗だった空間に鈍い光を伴う球が浮かび上がる。それは複数あり、何より大きい。球1個でキョータの腹部を丸々覆うほどだ。

『キョータ。……勇者キョータ。……勇者の名を持つ者が、我の名を忘れるはずは無い……』

そしてその者は現れた。予め目の前にいて、ただ単に今までそれが見えていなかっただけかのように、悠然と存在していた。

『我が名は業を背負う魔王！　……業魔王、エリアード・ジーン。……全ての命を、滅ぼすモノ』

業魔王の手が、指が、鋭い爪がキョータに迫る。

「ッ！！　うわあぁぁぁぁぁぁ！！！」

キョータは叫び声を上げて上体を起こし、同時に夢からも覚める。

ゴンッ！！！

「ぐげっ！」

「あ”っ！！！」

そして、自分を看病してくれていた人に強烈なヘッドバットを食らわせてしまったのだった。恐らく奏はうなされるキョータを心配して顔を覗き込んでいたのだろう。だが、前記の通り強烈な一撃を喰らってしまった訳だ。

背中が仰け反るほどの衝撃を受けた奏は一撃で気絶。今度は逆にキョータから心配される事となる。……だが、頭を打った人間の肩を掴んで揺するのは悪い対処だと思う。

「うわぁぁぁ!!　奏!!　いるの気付かなかった!!　スマン!!　……つぅか、さっきのは夢？　……それに――」

ここでキョータは周囲の様子をまじまじと見る。

「――ここはどこだろ？　学校じゃないし……」

木の柱に石膏（セッコウ）の壁。壁には剣やら盾やらが飾っており、部屋を照らしているのは蛍光灯といった近代的な物ではなく、ランタンのような物だ。

概して、ファンタジックなお部屋と言えよう。

ガチャ

木で出来たドアが開かれる。そこから現れたのは長身で褐色の肌を持つ男性とボボウだ。男性は頼りがいのあるお兄さんのような笑みを浮かべ、ボボウはキョータが目覚めた事に嬉し涙を流している。

「よぅ！　目ぇ覚めたかボーズ！　大怪我してたんだからあんまり急に動くなよ？」

『キョータ!!』

「天野先生……じゃなかった、天さん!?　……だったよな」

現実世界に戻ってくる中、微かにキョータは天の名を聞いている。

一方、ボボウは泣きながらキョータの胸に飛び込む。

『キョーター！　良かったのらー！　元気になったんらねー！　オイラ……キョータが死んじゃったらって思ったら怖くて涙が止まらなかったのら～』

キョータはボボウを両手で受け止めて笑いかける。

「へへっ。大丈夫だよ。……ちょっとだるいけどさ」

「治療が早かったからな！　オレを探してお前を治療させた2人に感謝するこったな！」

天のその言葉に、キョータはキョトンとした顔で首を傾げる。

「2人？」

『そうよ～。私とボボウのおかげな訳よ。感謝してちょ～だいよぉ』

「うわっ!?」

その声はキョータの後ろから聞こえてきた。低めの棚の上にシャララがいたのだ。金魚鉢に、元からご在宅の金魚さんと仲良くまったり入っている。

キョータはここで気付いたのだが、自分はその人魚のような者を見た事がある。

「……キミは、確かシノブの素体（フレーム）……」

『そう！　でも今は奏の素体（フレーム）よ。名前はシャララ。私達妖精素体（フェアリーフレーム）は聖なる魔力を感知するチカラがあるんだから！　天はさぁ、顔は悪

人面だけど、これでも僧侶だから聖魔力を出してるの。だから見つけられたのよ』

シャララはそう自慢げに言うが、天はショックを受けている模様。

「……お前……人に助けさせといてそゆ事言うかっ！？」

……自分が気絶している間に何かあったのだろうか。天の目にはやや涙が見える。キョータがそんな事を思っている時、ボボウが大変言い辛そうに一同に話しかけてくる。

『……あのね、お話の途中申し訳ないんらけど……。奏がさっきから動かないのら』

「「『ッ！！？」」』

キョータに天、シャララまで全員ビックリ。及び、動揺パニックに陥る。

「うわぁぁ！！　忘れてた！！　奏！　しっかりしろおおおぉぉぉ！！！　傷は浅いぞおぉぉぉぉ！！」

『ちょっとあんた僧侶でしょ！？　何とかしてよ！！』

「とととと、とりあえず水で冷やすか？」

「奏えええぇぇ！！　大丈夫かあぁぁぁ！！」

「わわっ！　あんま揺すんな！」

上から順にキョータ、シャララ、天、再びキョータに天の順だ。

……泡吹いてる人間に傷が浅いというのは言葉として合わない気がするが……。

騒々しくも平和な一軒家。その様子を高台から見下ろす人影があった。顔は布で隠しており、紅い目と水色の髪だけがその者の表情

を映している。

（……騒々しい。……でも、その方が都合が良い。一仕事させてもらう！）

水色の細い後ろ髪を風に靡（なび）かせながら、その者は懐から一枚の札を出す。六紡星が描かれている薄いお札だ。微かに光っており、何かに反応しているようだ。

「……聖魔力を感じる。……これは……僧侶の気配！」

一方、天の家では奏が目覚め、天が温くなったタオルを冷水に入れた所だ。

「さ～てと。どうだい、お嬢さん。少しは元気出たかい？」

「は、はい！　もう大丈夫です。どうもありがとう、天さん」

奏は上体を起こしながら額に冷たい濡れタオルを当て、笑みを浮かべている。天から借りたのだろう。左肩を結び目にして布を下げている。流石にアシュリアーナにいる間ずっとスクール水着という訳にはいかないだろう。

「ごめんな、奏。助けに来てくれたのにオレ酷い事しちゃって……」

キョータの言っているのは額にヘッドバットの事だ。奏は首を横に振り、嬉し涙を流しながらキョータを見詰める。

「ううん。……良いの。キョータ君が無事で……本当に良かった」

「……奏……」

キョータも奏を見詰め、シャララとボボウはちょっと外側で頷いている。

『恋する乙女の涙は美しいわ』

『オイラもうれちー！』

天も嬉しそうなのは違いないが、一応と言った様子でキョータに自分の怪我がどれだけ酷かったのかを教える。

「無事って訳でも無かったんだぞ？　何しろ、呪符まで使って傷を治さなきゃならない大怪我だったんだ」

「じゅ……呪符……？　って、何？」

シリアス口調から子供っぽい口調に戻ったキョータに天はずっこけた。そして、起き上がった時に涙を流しているのは痛いからではないだろう。

「……キョータ……お前勇者だなんて言って置きながらこの世界の事も倒す敵も分かってねぇだろ？」

「全然～♪　オレ、プラモもゲームも説明書（マニュアル）読まないタイプなんだよね♪　何とかなるモンで」

てへっと笑うキョータに天はしょうがないという笑みを浮かべると、こう切り出した。

「ったく、しょうがねぇな。少し説明してやるよ。この世界の魔法を」

パチッ！

天が魔法と言う単語を口走った直後、目の前に電気が迸る。

「なに？」
「さぁ？」

キョータと天の問答。これから分かるとおり、天の起こしたモノではない。雷は次第に大きくなり、現実世界からキョータの友人が現れた。

「大魔法使い（自称）キーン参上！」
『……風の妖精、フーイ参上……』

魔法と言う単語に反応して魔法使いフェチの登場だ。

「僕抜きで魔力とか魔法の話しちゃうっていうのは頂けませんな～！　将来の夢は魔法使いです！」

……。

キョータ達沈黙。

「おや？　何か驚いちゃってますか？」
「ッ！　キーン！　お前どうやってこっちに来たんだよ！」

我に返ったキョータの問いに対し、キーンはあくまでマイペースに「むふふ」とした顔で微笑む。

「ふふふ～ん。家に帰ってフーイと一緒にパソコンを立ち上げたら中に入れたんですよ。ボボウ君がアシュリアーナに来ていれば、本とフーイだけでもこっちの世界に来れるみたいですね」

どうやってという問いには答えてくれたが、キョータとしてはもう1つ気になる点がある。

「いや……そりゃ良かったけどさ……。家帰っちゃまずいだろ、やっぱ。……授業中じゃん。プールどうしたの？」

「だーいじょーぶ！　残っているシノブ君が何とかしてくれますよ」

キーンが自信満々でキラーンと指を立てるが、現実世界はシノブは冷汗を掻いていた。

「……な、何とかって何？　どうしろと？」

困り果てていた。

再びアシュリアーナ。天はキーンの言葉に若干ムスッとした様子だ。

「何だか良く分からねぇけど、ちゃんとする事ぁしろよ！　……それよっかキョータよぉ、体、まだあちこち痛いんじゃねぇか？　やせ我慢してねぇで言ってみろや」

「う……実は結構辛い感じ。……なんつぅか、ギシギシする痛み？」

それを聞いた天は棚から長方形の箱を取り出し、蓋を開けながら言った。中には長方形の薄いお札が入っており、真ん中には六紡星が描かれている。

「良い機会（チャンス）だから自分で確かめてみろ。いわゆる、魔法のチカラってヤツをさ」

天は人差し指と中指で札を持ち、唱える。

「……我が名は天。その天が符に問う。答えよ。……其はなんぞ？」

薄い札に『治』という文字が浮かび上がり、それと同時に幼い女の子の声が響き渡る。

『……我は治癒。優しき治癒。貴公の傷付いた友を優しく包み込む者なり』

声だった者は実体を成し、羽の生えた妖精へと姿を変える。そしてその妖精は優しくて柔らかな光でキョータを照らす。

「ッ！　紙の呪符が……天さんの問いかけに応じて妖精になった！……わぁ……」

「……あ、れ？」（体の痛みが……ちょっとだけ軽くなった……）

スゥ……

だが、安らぎを与える妖精はすぐに消えてしまった。治癒の時間はほんの少しでしか出来ないらしい。残されたのは六紡星も何も描かれていない真っ白な紙だけだ。天はひらひら舞うその紙を掴みながら口を開く。

「どうだ、これがアシュリアーナの魔法だ。この世界には魔力を持った人とは違う、小さな神様がたくさんいる。普段は見えない神様達の力を少しだけ貸してもらうのが魔法なのさ」

ここで天は口調をやや重く変える。『しみじみ』と似ているが、それよりいくらか重い。

「……昔は人と神様は仲良しだった。……この呪符なんて物を使わなくても、お願いすればいつだって神様はチカラを貸してくれた。……でもな、聖王国アシュリアーナの中心部、聖地ジュリアネスが汚されてしまってな」

以下、天の語り。

業魔王がジュリアネスを侵略して、神様と一番仲良くしていた王女リュートを攫ってしまった。そのために聖地の神様から借りていた大きな魔力は奪われ、人々が使える魔力も小さなものになっちまった。

ジュリアネスは周りにある4つの守護王国に護られていたんだが、業魔王はその強大な魔力で4王国を支配し、洗脳して自分を護るための魔王軍四天王にしてしまったんだ。

自分の肉体だけでどんな魔物でも倒すクルダ流交殺法を使う傭兵の住む国――傭兵王国クルダ。

刃から殺気を型にして出現させ、剛剣士と呼ばれる化け物を操るキシュラナ流剛剣士術を伝える国――剛剣王国キシュラナ。

木や岩など、生命ある森の自然を自由に操り、攻撃する能力を持つ『牙』族と呼ばれる半獣半人が住む国――樹霊王国リキトア。

『降魔』と呼ばれる人造人間を意のままに操り、敵を倒すフェルシア流降魔符印法をあみ出した国――降魔王国フェルシア。

4つの闘法を併せて四天滅殺と呼ぶ。……そして、四天に護られている者こそ――業魔王、エリアード・ジーン。

「……エリアード・ジーン……」（夢で遭った奴と同じ名前だ……）

自信の夢で見た者の名を思い出し、反芻するキョータ。一通り話し終えた天はとある方向に視線を変えながらキョータに尋ねる。

「……なぁキョータ、1つ聞かせてくれ。……オレはどっちかって言うと恐ろしい話をしたつもりなんだが、この輝く瞳は何だろうか？」

天の視線の先にいるキーンはホントに幸せそうな笑みを浮かべており、祈るように自分の胸の前で両手を握り締め、頭の上に花を咲かせている。目はキラキラとおとぎ話を聞くが如く。

「……多分、キーンは魔法使いとして魔王とか侵略とか支配って言葉に惹かれてるんじゃないかな？」

キョータはそれだけを天に伝えるとキーンをお説教。

「キーン！　分かってんのか！　業魔王ってのはやっつける相手なんだぞ！！？」

「分かってますよ～♪　でも今ちょっとだけ幸せな気分に浸らせて♪　って、あれ？　本が光って、また読めるようになっちゃいましたよ」

本が光った事で現実に戻ってきたキーンはページをパラパラとめくり、あるページを開いて読み上げる。

「……他の世界から来た者のもう1つの試練。勇者の証。自分の秩序の中で生きる自由な者を助けよ。その者は風の如く速き者。仲間とすれば、冒険の頼もしいチカラとなろう。……」

「「……風のように自由な者？」」

「あー。それは虫だな。食い残しに寄って来る黒いの。すばしっこいぜ！」

「者って書いてあるから一応人間じゃない？　多分それはゴキ」

それは天のボケだったのだろうか？　キョータは苦笑いを浮かべながらツッコミを入れる。

先程まであった、緊迫した話から生じる空気が霧散し、穏やかで警戒心の欠片もない空気が部屋に満ちる。それは良い事なのだろうが、この時ばかりは良い事とは言えなかった。

高台から見下ろしていた者が窓の外まで来ており、家の中に一枚の紙を下ろす。それはキョータ達の死角で見えず、ひらひらとゆっくり床に降りた紙は突然アクションを起こした。

ボォッ！！！

炎が勢い良く上がったのだ。

「うわっ！！」

「なっ、何だ！？」

突然の火事で一同混乱。特に酷いのは、皮肉にも炎王となるキョータだった。

「かかかかか火事だぁ！！　防災頭巾だ！　机の下だ！！」

「違いますよ！　こんな一気に燃えないでしょう！　変です！　これって放火ですよきっと！」

キョータに比べてキーンの方はいくらか冷静で、自信の推測を述べる。おまけを言えば、キョータの言っているのは地震に対する対処法だ。

「……オレの……お家が……」

まぁ、最もダメージを食らったのは家主であるこの人だろう。天はそばにあったイスに力無く腰掛け、項垂れる。

「……灰になる……何も残らない真っ白な灰に……」

「わー！　天さん燃え尽きないでよー！」

天の燃え尽き具合（強いて言えば日本の誇るボクシングアニメの如く）を心配、及び動揺したキーンは慌てて励ます。そんな中、奏はある事に気付いた。先程キョータの傷を癒した呪符が入っており、まだ大量の呪符が入っていた箱の中身がすっからかんに無くなっていた。

「そいつですよ！　放火して泥棒したんです！」

「分かったよ！　皆、天を頼むよ！　オレ追いかけるから！」

キーンの言葉にそう答えたキョータは窓から外に出て犯人を追いかけ始める。

「よし、行くぞボボウ！！」

『無理しちゃダメなのら。キョータ元気無いから合体できないろ？』

キョータはボボウの忠告を聞きながら足を速める。

第9話　エリアード・ジーン（後書き）

今思えば、岡田芽武さんも自分の作品を色々混ぜてるんですよね。４つの王国の名前、特にクルダは『ＳＨＡＤＯＷ　ＳＫＩＬＬ（シャドウスキル）』のメイン舞台ですし。

第１０話　盗賊（前書き）

この話で1巻分は終了です。

第１０話　盗賊

「ッ！　アイツだ！」

天の呪符を盗んだ犯人はまだ遠くに行っていなかったらしい。相当な早さで走っているが、早期に見つけられたのは幸いと言えるだろう。

「大丈夫さ！　見てろボボウ！」

キョータが大丈夫だと言ったのはボボウが言った一心合体が出来ないって点に対してだ。盗賊の捕捉も出来たし、何より遠く離れた相手に届く物が足元にたくさん転がっている。キョータは足を振り上げ、思いっきり前に蹴り出した。

「喰らえぇ！　オレのスーパーシュートォ！！」

直径５センチほどの岩を蹴飛ばしたのだ。回転の加わった岩はみるみる距離を詰め、犯人の後頭部に真っ直ぐ進む。

「ッ！　とうっ！」

だが、後ろから迫り来る気配に気付いたのだろう。犯人は振り向き様に腰の短剣を抜刀。岩を横一文字に切り裂いた。

その際、顔を覆っていた布も外れてその顔が明らかになる。犯人は追いつかれたにも関わらず、依然余裕の態度でクスッとキョータに笑いかけた。

「僕に追いついてくるなんてやるじゃん！　褒めてやるよ、あんた

！」

「うぎゃー！　生足で岩蹴ったあぁぁぁぁ！！！」

対するキョータは地面をゴロゴロ転がりながら呻いていた。……蹴ったのがちょうど弁慶の泣き所（足首のちょっと上）となれば、それは痛いだろう。犯人は先程の笑みを一転。呆れたそれに表情を変える。

「……前言撤回。……バーカ」

キョータは右足を押さえながら何とか立ち上がり、ケンケンしながら、かつ泣きながら訴える。

「おっっ……お前かぁ！　家に火を付けて泥棒した奴は！」

『キョータ大丈夫？』

キョータ、ボボウの心配の言葉に答える余裕無し。

「そぉだけど？　だから何？」

「……そんな堂々と答えなくても……」

あっさりと認め、開き直るくらいのテンションで犯人は言い放ち、流石のキョータも呆気に取られてしまった。犯人は両手の拳を腰に当て、キョータに意味不明人間を見るかのような目を送る。

「僕はキサヤ。通り名は【　風神　】のキサヤ。ちょっとは知られた盗賊（シーフ）だもん。盗みは僕の商売（ビジネス）！　堂々としてて悪い？」

堂々としてもらっている所で容姿を説明しよう。

一人称は僕だが、性別は女性だ。歳はおおよそ１６，７。目は紅

く、髪は水色で、首の真後ろに一房（ひとふさ）だけ伸ばしている。短刀は腰に差しており、横に引き抜いて抜刀するタイプだ。

あえて言おう。僕（ぼく）っ娘（こ）登場である。

「そっ、そっか。ここはファンタジーの世界だから盗賊（シーフ）は有りなのか！？」

『そうらね。立派な職業なんらよ？』

正論通用せず。だが、ここで引き下がるキョータでもない。

「でも火は酷いだろ！？　あれじゃ誰か死んじゃうじゃんかよ！」

「はっ？　火はすぐ消えたはずだけど？　呪符で見せただけの幻影だよ。ビックリしても燃えたりしてないでしょ？」

反撃も効果無し。

その頃天の家では、キサヤの言う通り火は綺麗さっぱり消えていた。

「ほら！　天さん、火は消えましたよ！」

「元気出して！」

四つん這いで項垂れている天を必至でキーンと奏が励ましている。

「じゃあ、キサヤも魔法が使えるのか！」

「ちょっとだけだよ。呪符を使えばね。でも、そんなにしょっちゅうは使えない。呪符は高価だかんね！」

キサヤは次に、天から盗んだ呪符の束を取り出して低く真上に投げては受け止めるを繰り返している。

「あの僧侶、たくさん呪符を持っていたからこっちも気合い入れてたんだ。切り札の幻影呪符まで使ったんだから、そう簡単に返せないよ！」

「そっか……。じゃあ返してもらうのは無理だなぁ……」

キョータは口を尖らせて悔しそうだが、それでもその言葉を言ったのは事実。キサヤは呆れや驚きを込めて苦笑する。

「驚いた。それでも返せって言うとこじゃないの？」

「だって、キサヤは命懸けで自分の仕事をしたんだろ？　それで盗られちゃったんだからオレ達の負けだ！　呪符はオレが働いて天さんに弁償するよ！　良いさ、キサヤの勝ちだ！！」

力強く、明るく、真っ直ぐな笑みと共に、キョータは右の拳をグッと握ってみせる。そしてキサヤもまた、そんなキョータを可笑しそうに笑う。嘲りではなく、敵対心の無い安らんだ笑いだ。

「あはっ。変な奴だね。本物の勇者にでもなるつもり？」

「？　本物の勇者？」

キョータが目を丸くして興味を持つのを見て、キサヤはコクリと頷くとキョータに説明した。

「そうだよ。勇者って魔法使うのに呪符がいらないんだって。心が綺麗な勇者には神様が直接チカラを貸すから、勇者と神様が１つの姿になって魔法を使うんだってさ」

ボゴッ……

キサヤの足元で何かが蠢く異音が出るが、キョータもキサヤもボ

ボウも気付いていない。キサヤは続ける。

「でも、そういうチカラを業魔王は許さないんだって。業魔王は自分の魔法で世界中に呪いをかけて、そういう勇者の可能性のある人を殺してるんだってさ」

ここまで話した時、キサヤは思い出したようにあさっての方向を向いてため息を付いた。

「……まぁ、例外もあるみたいで、強い魔法を使えるからって必ずしも心が綺麗って訳でも――」

『ッ！　キョータ！！　危ないのらぁ！！』

「ッ！　わぁぁ！」

「ッ！　キサヤァァ！！」

突如地中から巨大な手と化け物が現れ、キサヤはその怪物の手に足を掴まれて持ち上げられた。

化け物は一見して土の置物のようだ。ボウリングのピンのような全体像にカエルの顔。腕は細くなっている位置で浮いている。

「ボボウ！　コイツはいったい何なんだ！？」

『きっと、今キサヤが行ってた業魔王の呪いで出来た魔物なのら！　オイラに反応して出てきちゃったんらよ！』

『オオオオオォォォォォッ！！！』

怪物は雄叫びを上げながらぶら下げるように持っていたキサヤを上に投げ、胸から足首まで掴む持ち方に変える。

「くぅ……何て力……」

キサヤの抵抗は全て剛力の前では無力。それを悟ったキサヤはキョータとボボウに声を張り上げる。

「キミ達逃げなよ!!　僕はもうダメだから」

「バカ言うな!　今助ける!!　ボボウ、合体だ!」

『えぇ!　ダメらよー。キョータ元気になって無いのら!　そんな時に合体したら危ないのら!!　合体は負担が大きいのら。キョータ死んじゃうかもしれないろー?』

それはボボウのキョータに消えてもらいたくないという思いからなのだろうが、キョータはその想いを理解し、受け止めた上で自分の言葉を口にする。

「……ボボウ、勇者って何なのかな。ゲームに出てくる勇者は皆カッコ良いよな?　……あんなカッコ良い勇者には、オレは成れないよ。……でも、どんなにカッコ悪くても、オレ、キサヤを助けたい。……例えみっともない姿になっても、オレは戦いたい」

キョータはその目に確かな意志を宿し、ボボウを見詰めながら右手に力を加えて握り締め、自分の胸の高さに上げる。

「カッコ良いって何だろう?　カッコ良い服着る事か?　女の子の前で良いカッコする事か?　そうじゃないよな!　本当にカッコ良いって、そんなんじゃ無いよな!!」

ボボウはそれを聞いて、嬉しそうに満面の笑みを浮かべる。

『……そうらよね。……キョータ、勇者らもんね。……絶対に誰の

事も見捨てないんらよね。……今のキョータ、すっっごくカッコ良いのら！　……だから――』

ボボウの言うカッコ良さとは、自分の意志を持って、他人のために自分のチカラを使える事へのカッコ良さだ。

キョータとボボウは互いに手を差し出し、握り合う。

カッ！！

その一心合体の閃光は少し離れた天達にも確認する事が出来た。

「ッ！！　あの光……まさか一心合体！」

「あのバカ。……キョータの奴あんな体で！」

天はギリッと歯軋りをするといち早く駆け出した。

「行こう！　何が起きたんだ！！」

その頃、キサヤはキョータとボボウが合体した事実に驚いている。

「一心合体（マインドユニオン）！？　……これが本当の魔法！？」（じゃあアイツ……神様と心を通わせられる選ばれた者……！？）

一方、キョータとしてはキサヤのためにも早くケリをつけたい所だ。だがしかし、彼の意思とは反対に体がそれを拒否する。

「ッ！？　ぐっ……ぐぐっ……。体が思うように動かない……！」

《キョータ、焦っちゃダメなのら！》

「ボボウか！？　頭の中に直接聞こえてくるぞ！」

《大丈夫！　オイラとキョータはいつも一緒なのら》

一体化しているから、同じ存在として自問自答するような感じだろうか。別の例えを言えば、電波変換した人間と電波体の会話のようなものか。

《落ち着くんらよキョータ！　今の炎王はキョータの残った体力分しかチカラが無いのら。……全力の攻撃は……一回が限界なのら》

『分かった！　だったら一撃にかけてみる！』

中途半端な一撃で仕留め切れなかったらそれこそ対抗できない。そういう点で、ザラマンデルの考えは正しいと言えるだろう。

「この間無意識で出た技だけど……グリフィアスを倒したヤツで決める！！」

ザラマンデルのヘルムの龍の目がギョンっと動き、上顎と下顎が開いていく。灼熱の炎を相手にぶつける閃光破裂（フレアバースト）だ。

エネルギーが龍の口の中に収束されている中、ボボウは焦ったようにそれを止める。

《ダメらよー！　閃光破裂（フレアバースト）はダメージが大き過ぎるのら！　そんなの使ったら、キサヤまで巻き込んじゃうろー》

「ッ！！　何だって!?」

キョータもそれを聞いて慌てて中止。だが、動揺しているのと急に技を解除した隙を突かれ、土人形のような化け物の拳がザラマンデルを襲う事となる。

バゴンッ！！　ズズンッ……

ザラマンデルはその衝撃で地面にうつ伏せにめり込んだ。

「ッ！」（アイツ……僕がいるから思い切った事出来ないんだ！）

それを察したキサヤはキョータに叫ぶ。

「何やってんだよ！　良いからやっつけろよ！！」

「嫌だ！！　オレは諦めないぞ！！　だからキサヤも諦めるな！！　絶対助ける！　オレを信じろぉ！！」

キョータは一歩も引かずに言い返し、キサヤはそれに反論する事は無かった。だが、余裕が無い事は誰よりも自分自身で分かっている。

（……くそ。とは言っても今の一撃で全身の力が抜けちゃったぞ。……自爆覚悟で突っ込むしか無い！！）

その頃現実世界。先程の攻防を見ていたシノブはこれからキョータが選ぶ事が想像できていた。

「大変だ！！　キョータ君ムチャやるつもりだ！　……どうしよう……」

ここでシノブはある事に気付く。今キョータ達がいるのが何の世界なのかを。

「そうだ！　これフェアプレイズなんだ。ボボウ君にこっちの世界のモノを持たせれば、武器に出来るはずだ……」

そう。キョータ達がいるのは現実世界の物を武器に変えて戦う世界。ならば、例えばボールペンはどうだろう。

ボボウとシャララは意識の無い真っ白な目でシノブのパソコンのそばに置かれている。フェアプレイズの世界に行ってるのは本体のようなもので、シノブの前にあるのは言ってしまえば物質だけの存在……抜け殻のような物なのだろう。

「こんな物しかないけど、キョータ君に届いて！」

シノブはボールペンをボボウに持たせた。

一方アシュリアーナでは、ザラマンデルの右手に炎が湧き上がっていた。

「ッ！！　これ……は？」

《外の世界から何か送られてきたのら》

「ッ！　シノブか！　よぉし！　シノブの気持ち、オレが受け取るぜ！！」

ガシッ

ザラマンデルがおぼろげな実体の無い炎を掴むと、それは1つの型（カタチ）を形作る。両端に長い刃を持つ槍。刃には炎を纏わせている。武装合体だ。

「炎の槍（ファイアランス）！！」

ザラマンデルは勢い良く駆け出し、化け物の胴体に灼熱の一閃を繰り出した。

ザシュッ！

その一撃は化け物の体を焼き切り、壊した。キサヤの方も無事らしく、不安定な空中でもバランスを取りながら着地。ザラマンデルの技の威力に驚いている。

「ッ！！」（凄い魔力！　このチカラは呪符なんかじゃない！　…これが勇者のチカラ！！）

スゥ……

「ッ！　……き、消えた……」

自分を助けた龍騎士は消えていく。カメレオンが周りの景色に溶け込むように透明になっていき、仕舞いにはいなくなってしまった。

「まぁーた消えちまった。いっつもあいつ等突然消えちまうんだよな」

「ッ！　ゲッ！　あんたは!?」

被害者の天登場。まぁ、キョータとボボウが一心合体して戦闘しての間なら簡単に追いつけるだろう。彼の後ろにキーンと奏がいない点を見ると、どうやら彼らも元の世界に戻ったらしい。

そして、天は盗賊少女に自身の名を告げる。

「オレは天。あいつ等の仲間だ。呪符盗まれちゃうような間抜けな僧侶だよ」

その天の言葉でキサヤは可笑しそうな笑みになり、呪符を差し出しながら呆れたように肩を竦める。

「ホントに間抜けだね。そんなんじゃ勇者の仲間って言えないじゃん。……しょうがない。今日だけは勇者に免じて返してあげるよ」

一方、現実世界では戻ってきたキョータが安心した笑みを浮かべている。

「やった！　キサヤは無事だぞ！」
「それに、学校にも帰ってこれましたねー」
「……重い……」

上から順にキョータとキーン、シノブの順。現在、シノブの上にはアシュリアーナから戻ってきた3人が乗っかっているのだ。
キーン、奏の順で順々に降りて行き、キョータは上体を起こしながらシノブに話しかける。

「それもこれも、シノブのお陰だなぁ」
「そ、そんな。……僕は全然……」

シノブはそう言って遠慮するが、キョータは明るい笑みで親指を立てながらウインクをする。

「何言ってんだよ！　シノブが武装合体させてくれたから勝てたんだぜ！？」
『ホントなのら。ありがとうなのらっ！』
「それに、シャララちゃんと友達になれたのもシノブ君のおかげだよ？」
『まぁ、元々シノブは私の主だし、凄くて当然だけどね♪』

キョータとボボウに続き奏とシャララの言葉。そして、それを肯定するようにキーンが頷いた。

「そうですね。今日はシノブ君が一番ですよ。誰よりも僕達を護ってくれたんですから」

その言葉は、いや、子供達の言葉はシノブの心に響き、そして、シノブは自分自身の手を握り締めて嬉し涙を流した。

「……僕が……護る……。こんな僕でも……誰かを護ったり出来るんだよね……。諦めないで頑張れば出来る事って、たくさんあるんだね……」

「あったりまえじゃんか！」

キョータは明るく、優しい笑みと共に手の甲を上に向けて前に出す。キーン、奏、シノブは順々にその手に重ねて行き、最後にキョータはこう言った。

「シノブはオレ達の仲間で、オレ達４人で勇者なんだからさ！！」

そのキョータ達の様子を見ていた……いや、顔をそちらに向けていないから聞いていたという方が正しい。

柊　前はキョータ達に背を向け、歩き出した。今日の所は休息に専念し、翌日にはある場所を訪れるつもりだ。なお、翌日は日曜日で学校は休みである。

（……その友を思い、盗賊すら救う甘い心が勇者の証だとすれば、貴様に世界は救えない。……オレが、貴様等を壊してやる）

校庭に黒い影が伸びる。少年の背中には、狐のような頭をした素体（フレーム）が乗っかっていた。

――アシュリアーナ・某所――

ザーッ……

晴れの場所もあれば雨の場所もある。それは現実世界もアシュリアーナも同じ。黒髪の少年は片手に本を開きながら傘を差して歩いていた。

だが、不意に目の前の光景に足を止める。その先には村があった。文字通り、過去形だ。

「……魔物か魔王軍にでも襲われたか」

『酷いですね』

彼に付き添う黒猫の言う通り、酷い有様だった。家は壊され、木材の破片や切れ端には雨で洗い流されていない血が残っている。戦闘……いや、一方的な虐殺が行われてそう時間が経っていないのだろうが、雨により腐敗臭や血の臭いが洗い流され、死体が転がっている状態だけが残っている。

「……ついてない」

黒髪の少年、キョウはそんな事をぼやきながら歩を進める。血生臭い場面に出くわしたからではない。自分がその場に居合わせなかった事だ。だが、そんな事になれば……。

『……キョウが考えている事は分かります。ですが、そんな事になればあなたの右腕は……』

「あぁ。……制御が効かなくなって、傷付けるはずじゃない人まで傷つけちまうだろうな。……分かってるよ、それは……」

少年はダークの言葉に舌打ちを堪えて自分の右腕を見る。指先から肩まで右腕全体を覆うような包帯が巻かれており、その包帯には特殊な呪印（じゅいん）が組み込まれいる。

「っ。おやっ？」

またもキョウは足を止める。彼の視線は進行方向とは真横に向けられ、その先には幼い少女が今にも崩れそうな家の残骸で雨宿りしている。

キョウは当然とばかりに少女に近づき、傘を突き出す。

「……生き残りか。……一緒に来るかい？」

「……」

少女は不安そうな顔で少年を見詰めている。少女の容姿は、歳は5，6歳くらい。髪はクリームのようにフワフワな白で、瞳の色は水色だ。……幼いなりに両親がいなくなったというのが分かっているのだろう。何時間も泣いたらしく目が赤くなっており、心を閉ざした状態だ。

「大丈夫だよ。……良い先生役もいるし、同じような子供達もいる。……ここで泣いてるよりも、そっちの方が良いと思うけど？」

キョウは少女の不安を察して優しげに話し掛けた。少女はキョウの顔をまじまじと見て、キョウのズボンを掴んだ。行くという事だろう。

それを見たキョウは、少女の頭を撫でながら微笑む。

「ありがとう。……それじゃあ、一緒に行こうか。……名前はなん

て言うのかな？」

「……ジア」

キョウは、本を傘を持つ手に持ち替えて一緒に持ち、もう片方の手をジアとしっかりと握り合って歩いていく。

第１０話　盗賊（後書き）

う～ん、次の話どうするかな。２話連続でフェアプレイズを書いたから次は流星と行きたい所だけど、次の話はとうとうニライカナイのキャラが出てくるんだよね。……困った。

あ、ちなみに2巻からはアシュリアーナの情勢とか、諸々の考える要素が増えて面白くなります。……3巻は一章のクライマックスの巻って所かな。

第11話　キーン宅（前書き）

まずは3分の1話。3話目の途中からはニライカナイを元に作ります。

第11話　キーン宅

――――傭兵王国クルダ――――

高い塀が街を囲い、その奥にはコロシアムを思わせる円柱状の王城が建っている。また、塀と言っても無粋で品が無く、地味なそれでなく、十数世紀のヨーロッパを思わせるような綺麗な建築様式だ。

それが、一騎当千の傭兵が集う国、クルダである。そして、王城では国王が部下の報告を受けていた。

「……なんだって？　グリフィアスがやられちゃったってか？」

ラフで若い男の声。業魔王四天王の一角、ジュリはイスに座って足を組みながらため息を付く。

「はぁ。……それで？　今後はどうなるの？　とりあえず、その勇者ってのをぶっ殺せば良い訳か？」

『いいえ、邪王国からの勅令は共同戦線です』

対する部下の返答は上の通り。国王と言っても、直に勅令を受ける訳ではない。むしろ、国王は国を護るためにおいそれと国を離れるわけにはいかないのだ。故に、簡単な用事や緊急を要するような連絡でない限り、部下が伝言役を果たす。また、部下は白い布を頭から足まで被っており、自分の姿が見えないようにしている。部下の数は４人。親衛隊とも言える側近だろう。

そして部下は邪王国からの勅令の続きを語る。

『私達クルダ以外の三王国、キシュラナ、フェルシア、リキトア。全ての王国の力を結集して勇者を滅ぼせとの事です』

確かに、確実に対象を討ち取るのにここまで良い策は無いだろう。
迂闊に多くを動かせばそれだけ小さな戦力に圧されているとも見られてしまうが、そうこう言ってる間に足元を掬われては意味が無い。叩く時は早急に、全力で、完膚なきまでに叩かなければ、手遅れになってからでは遅いのだ。
だが、ジュリはそれに不服なようで口元を引きつらせながら頬に怒りマークを浮かべる。

「何？　他の三国なんて知るかよ！　四天王が治める四王国の中でもこのクルダが一番強えぇんだ！　それを証明してやろうじゃねぇか。オレ達だけで勇者を殺すぜ！」

ジュリは立ち上がり、眼差しを先程までの「あぁ、役職ってめんどくせぇ」的なものから、鋭い、野心的な眼差しに変える。

『『『『　御意！　』』』』

そして、声を揃えて低頭する部下達。ジュリはその中の1人を指差し、白羽の矢を立てた。

「よぉし……フィスト、お前が行ってこい」
『承知』
「ちょっと暴れて勇者をおびき出してやれや。人に迷惑かけりゃあすぐにやって来るだろ？　……何しろ、アイツ等は正義の味方って奴なんだからな」

――――現実世界――――

「え、キーン君の家？」

日曜日の午後、キョータと奏、シノブはキーン家に向かっていた。奏の言葉にキョータは頭の後ろに腕を組みながら答える。

「あぁ。なんか、また兄ちゃんから届いたんだって」

「何が送られてきたのかなぁ」

「分かんねぇけど、大きいらしいぜ？　学校には持っていけねぇから家に来いってさ！」

送られてきた物が何かを聞いたのがシノブ。答えたのはキョータだ。

3人の服装は夏と言うのもあり、半袖だ。しかし、下はバラバラである。キョータは長ズボンで腰にポーチを取り付け、サンバイザーを付けている。奏はスカートでふわふわの髪を下ろしたストレート。日差し避けの帽子も付けている。シノブは半ズボンで帽子など日差しを遮る類の物は付けていない。

「そーなんだ。私キーン君家初めて」

「実はオレもなんだよね～。今まで一度も言ってなかったから住所と地図貰ったんだけど、全然分からないなぁ……」

前もってキーンが渡したのであろう地図を見て周りを見渡すキョータ。周りは高い塀ばっかりだ。

「この辺のはずなのにね。……お巡りさんに聞く？」

「……う～ん……」

奏の助言にキョータの唸り声。キョータの中で、「他の人に聞いても良いかな？」という考えが浮かび始めた頃、シノブが2人に話しかけてくる。どうもいつも以上に自信無さげな口調だ。

「……ね、ねぇ皆……。これって……もしかして……さっきからグルグル回ってる道の横にあるコレって……家じゃないかな……？」

シノブの視線の先。そこには横に並べられたレンガが縦に積み重なって塀となり、奥にあるのはレンガの外壁のご立派過ぎる建物。

「えぇぇ……。ま、まさかぁ。図書館とか病院じゃねぇ？」

「じゃああれさぁ――」

戸惑うキョータに奏が目の前の物に視線を移すように促す。

「――めちゃめちゃでかいけど……玄関？」

ここまで来ると呆然とする他無い。玄関、というか門はキョータ達の身長の倍近くあり、門の両脇の上部には豪邸の門に付けられるような装飾が取り付けられている。龍の背中に宝玉が乗っているような装飾だ。

そして、玄関にローマ字で書かれた文字は……。

ＴＵ　ＫＩ　ＳＨＩ　ＭＡ

キョータは一文字一文字確かめるように文字を指差しながら読んでいく。

「……月……島。……オレの記憶が正しければキーンのフルネームは月島　数騎でぇす！！　っつう事はここかい！！」

「……なんか……金光君の家より凄そう……だね……」

キョータが自分の頭を抑えてギャーっとわめき、奏は呆然としたような意見を零す。現に、目が点だ。

「あら、お客さんですか？」

恐る恐るといった様子で門の中に足を踏み入れたキョータ達を最初に出迎えたのは花の手入れをしていた女性だ。土作業という事で手袋をしている。手早く言えば、メイドさんだろう。歳は２０代前半と言った所か。

「もしかして数騎様のお友達ですか？　でしたら中へどうぞ。私、お手伝いの金子（かねこ）　亜希（あき）と申します。よろしくねっ」

最後に親しげな挨拶をした所から分かるように、子供に優しく、穏やかで優しい性格のようだ。

「さあどうぞ。数騎様のお部屋はこちらですよっ」

「は、はい。……失礼します……」

代表してキョータの挨拶。だが、心の中では3人ともドッ緊張している。そしてこの時、キョータの中ではある不安が芽生えていた。

（……こんな所に住んでるなんて……。キーン……もしかして家では全然違うのか……？）

キョータのイメージしたキーンを描写化すると……。

足を組んで王冠を被ってワイングラスを持って髭を生やして足元には札束があって、しまいには膝の上にペルシャ猫が乗っているようなそんな姿だ。

もはや誰だよ。

（学校とは違うキーンってどんなだっ！？）

キョータは意を決してキーンの部屋のドアを開ける。

「お邪魔しますっ！」

「よーこそ、我が魔導城へ！」

待ち構えていた……もとい、待っていたキーンはいつものキーンだ。長めのローブを纏ったいつものキーン君である。そして部屋にある物も果てしなく彼らしい物ばかりだ。

ガイコツの上にロウソクが立っていたり、石の床には魔方陣が描かれていたり、怪しげな本や液体の入ったフラスコもある。

まさしく、魔導の間といった感じだ。そして、いつもと変わらぬキーンをみたキョータは自身の想像通りでない事を心から喜ぶ。

「あ～良かった。いつものキーンじゃん♪」

「何を言ってるんです？　ボクは年中無休で魔法使いですよ？」

「……やっぱりキーン君てすごっ」

奏の感心に「色んな意味で」という内心語があった事は言うまでも無い。

『し、死ぬ所だったのら！』

キョータがポーチのチャックを開けてボボウが『ぷはー』と出たのを見てから、キョータはキーンに尋ねる。シャララの方は金魚鉢に入り、シノブが持ってきた水で極楽気分。

「そんで、兄ちゃんから何もらったって？」

「あ、そうか。それがどうもよく分からないんだな。……コレです」

キーんが取り出したのは箒（ほうき）だった。形だけを言えば屋外のゴミを纏めるような薄茶色の箒なのだが、屋外のゴミを纏めるような硬い毛先ではなく、もっと柔らかめだ。日常生活の中では対して実用的ではない。

そう。日常生活では。

「そ、それってまさか……もしかして……」

「「魔法のほうき？」」

キョータの言葉に奏とシノブが声を揃えて言う。

「そう思って、昨日窓から飛んでみたんですがね。全然全くダメでした。庭の花畑に落ちて、亜希さんにめちゃ怒られましてよ」

その頃の亜希さん、「らんら～ん♪」と鼻歌を歌いながら人1人が落ちたぐらいの穴を埋めている。

「……つぅか試すなよ。……死ぬよ？」

そしてその事実を聞いたキョータ達は絶賛青ざめ中。開いた口が塞がらないとはこの事か。

「それにさぁ……。こんな白紙が入っていたんですよね。……なんだと思います？」

キョータの言葉に対して意を介さず、キーンは新たに紙を取り出した。少々薄汚れていて古い質感の白紙だ。

『バカねぇ。ホウキにまたがっただけで飛べるわけ無いじゃん』
「？　シャララちゃん？」

奏の腕の中の金魚鉢に入ったシャララが呆れた様子でため息を付く。彼女は水を追加してもらいながら続きを言った。

『魔力ってのはね、神様のチカラが溢れてる所じゃなきゃ使えないものなのよ。この世界では無理よ。魔導力がい～っぱいあるアシュリアーナじゃなきゃ』

逆説、アシュリアーナでは使えるという事。それに考えが及んだキーンは三日月の笑みを作り、不気味に笑う。

「やはりこれは本物。……いよいよ我が魔導の門は開かれたか……ふふふふふ。……ふはははははは」
『……ねぇ、前から思ってたんだけどさ。……キーン君って変なの？』
「……ちょっと……」

シャララの問いに控えめな様子で奏が答える。……キーンの相棒であるフーイまで呆れているのだが……。

「やっぱアシュリアーナに行って確かめなきゃな～♪　ボボウ君、お願いしても良いですか？」
『キュ？』

ボボウが首を傾げた時、キョータはノリノリの様子で１つ提案する。

「おぉ！　じゃ、皆で行っちゃう！？」
「おおっと待った。それは無しの方向で」
キョータの提案をキーンが止め、シノブもそれに同意する。
「うん。……ボクもそう思う。皆で一緒は止めた方が良いね」
「なして？　皆で行こうよ、仲良く」
「この間みたいに突然何かが起きた時、こっちの世界に残って手助けする人が必要だと思うよ。勇者は皆のためにも負けちゃいけない。……絶対勝って世界を救わなきゃいけないんだもの」
奏は残念といった様子でシノブの言いたい事を理解したようだ。
「……外の世界からじゃ武器になる道具（アイテム）送れないもんね」
「ああ！　そうか！　誰かがこっちにいないと武装合体できねぇんだ！」
「その通り！　だから今回はボクとキョータ君で行きましょう」
そう言いながらキーンが取り出したのはＭＹパソコンだ。……開ける板に『封印』などと書かれた札があるのは彼のセンスに他ならない。
「ボク専用のパソコン、マーリンです。これでアシュリアーナへ行きましょう」
マーリンはデスクトップ型のパソコンだが、戸が外側開きでそこから手前に引っ張ってくる形なので小学生でも移動可能だ。使う時は戸を開いて手前に引っ張ってくるらしい。
だが、例によってその形状は異質だ。ディスプレイの縁やパソコンの側面にはオドロオドロしい装飾が成されている。

「おおっと、その前に旅立ちの無事を祈りましょう。……エロイムエッサイム～」
「……お前さ、魔界とか地獄とかに連れて行く気？」
そう突っ込んだのはキョータだが、もはや慣れっこなので深くまで追求する事はない。
「まぁ良いや。行こうぜボボウ！」
『行くろぉ！』
カッ
ボボウを中心に光が迸り、キョータとキーン、ボボウとフーイはアシュリアーナへ移動した。
――アシュリアーナ――
「はー今日も何とか来たな。着地も良い感じだぁ……」
「そうだね～。……でもさ～」
尻餅を打つ事無く、無事に着地できた事を喜ぶキョータだが、キーンは違ったようだ。彼の視線はスッと下に向けられて……。
「我達の足元に巨大な悪人面の人がいるみたいだよ？」
「きゃぁぁ！？」
そう。着地のショックを和らげてくれたのは人が踏まれたからだ。キョータ達が乗っているのはその人の腰辺り。その人の体は１０センチほど地面に沈んでいる。……ピクリとも動かない相手にキーン

は持っているホウキでグリグリ押し付ける。無論ゴミを集める方ではないが、それでも十分酷いように思えてしまう……。
そしてそんな不幸な目に遭った人物とは……。

「天さあああぁぁん！！　しっかりしてえええぇぇ！！　着地失敗だよぅ！」
「しかしこの人、運悪い僧侶だよね。日頃の行いが悪いんだろうなぁ。……このまま埋葬する？」

キョータは天を心配して呼びかけるが、キーンはため息を付いて上の一言。

「天さんしっかりいいぃぃ！！」
「ちょっと掘ったりしてみる？」

そして、天は頭を押さえながら起き上がった。やはり、相当強い衝撃だったらしい。
なお、今キョータ達がいるのは街から街を繋ぐ街道らしい。木で出来た手すりの先は崖。足さえ踏み出さなければ、綺麗な情景を楽しめる。

「いててて……。しっかしお前達、いっつも変な所から出てくるよなぁ」
「本当ゴメン！　オレ達も毎回どこ出るか分からないんだよ」
「そうなの？　なら地図とか買えよ。んで次はドコ出ても良いからオレの上には出るなぁ。……お？」

天が気付いたのはキーンの持っているホウキだ。それを見た天は意外そうな顔をしている。

「なんだ、お前達良い物もってんじゃねぇか。それ、高速魔箒(こうそくまぼうき)だろ？　そんな便利なもん、何で使わねぇの？」
「や・は・り、ステキ魔法グッズでしたか♪」

天が言った言葉でそのホウキが正真正銘魔法関係だと発覚。その事実はキーンの瞳に光を宿らせるのに十分だった。そしてキーンは身を翻(ひるがえ)し、ホウキに跨って崖から飛び降りた。フーイはホウキの先に腕を組んで立っている。

「我が天翔ける翼となる魔法のホウキよ！　大魔法使いキーン様を初の飛行に誘いたまえぇ！！！」
「……それ、ホウキだけじゃ飛べねぇぞ……？」

……ピュー……

天の言葉の直後、キーンは重力に従って落ちていく。フーイは途中で離脱したようだ。

「……あんな、これは一緒に地図が無いと意味ないの。魔導白地図って道具(アイテム)でさ。……また知らんのかいな」

その後、天はキーンを回収し、自分の肩で布団のように干されているキーンにそう話しかける。

「白地図って、社会で使うヤツかな……」

勉強、並み。アシュリアーナの知識は皆無に近いキョータは唸り、ボボウはそんなキョータに話しかけた。

『キョータ。きっとキーンの持っていたあの白い紙なのらっ』

そして天はキーンと一緒に回収してきたホウキをキーンに返しながら魔導白地図の説明をする。

「魔導白地図ってヤツはな、危険を感知すると地図が見えてくるのさ。高速魔箒は白地図が示した危険な場所へ高速で飛んで行く。まぁ……言ってしまえば正義の味方の道具（アイテム）だな！　いざって時は【ヴゥーン】と鳴って発動するんだ」

ヴゥーン……

鳴った。

「「はれっ？」」

キョータと天の声を合わせた声。そしてキーンが広げた魔導白地図にはどこかの大地が浮かび上がった。

「魔導白地図が……発動してるっ！」

キーンが白地図に浮かび上がった地図で驚きの声を出した後、ホウキは輝き、３人と妖精２人は空の旅に直行。おそらく、とっさにホウキの柄を掴んでしまったといった所だろう。

……まぁ、初めての事は誰にとっても恐い訳で……。

「うわぁ！！」

「と、飛んだぁ！！！」

天とキョータ、若干涙目である。キーンはホウキの上に跨りながら２人に注意する。なお、キョータと天も協力しながらすぐにホウ

キの上に跨った。それでも、文句の1つは言いたくなるし、恐いものは恐い。

「しっかり掴まってて下さいよ！　落ちたら死んじゃいますよ」
「掴まれってコレ1人乗りじゃねのかよおおぉぉぉぉぉ！！！」
「つぅか運転出来るのかよおぉぉぉぉぉ！！！」

半泣き状態のキョータと天。2人の心情を言うなら、殺される～！！　という言葉に尽きる。一方、2人の前に跨っている魔法使い少年は自分の世界に入っていた。

「魔法使いはね……。血で飛ぶんですよね。……血で」
「わぁぁぁん！！　わけ分かんねぇ事言って誤魔化すなあぁぁぁぁぁ！！！」

キョータのツッコミにも必死さが垣間見える。
一方、現実世界でも3人が高速で飛んでいく様子が確認出来ていた。

「すごーい！　皆飛んでる。……どこに向かっているの？」
「待ってください。魔導白地図が表示されています。目的地は……南の方ですね。南には業魔王が治める王国の1つ、傭兵王国クルダがあります。……そこかもしれません」

シノブの言う通り、パソコンのディスプレイには地図と移動するキョータ達の絵が映っていた。そしてシノブはふと思い立ったように「それにしても――」と口を開く。

「――キーン君の本もホウキも地図も全部本物なんですよね。……キーン君のお兄さんって、一体どんな人なんでしょうか……？」

シノブが考え込み始めた時、ちょうどキョータ達が目的地に着いたらしく奏が画面を指差す。

「あっ。皆着いたみたいだよ。……でも、何だか様子が変だよね？　……煙上がってる……」

そして再びアシュリアーナ。奏が見た火事はキョータ達の眼前でも燃え盛り、街を焼いていく。

「なんだろ？　……何か起きてる？　火事……かな？」

「いや、違うな。こりゃ戦だ。……ッ！　見ろ！！」

天はキーンの言葉を否定して視線を街の一点に向ける。

「人々が逃げてるぞ！　何かに襲われてんだ！！」

それを見たキョータとボボウは即座に行動に移す。ホウキから飛び降りたのだ。

「くそぉ。行くぞボボウ！　一心合体だ！！」

『分かったのら！』

落下しながら一心合体を果たしたキョータとボボウはドッシリと着地しながら逃げてきた人々に話しかける。ちょうど目の前に来れた。

「皆落ち着け！　助けに来たぞ！！」

だが、人々のザラマンデルを見た声は喜びではないし、見た事も

ないモノを見て戸惑う声でもない。

「うわぁ！　こっちにも出たぞ！！」
「たっ……助けてくれ！　殺さないでくれ！！」
「せめて……せめて子供だけはっ！！」

恐怖だ。逆に、ザラマンデルの方が戸惑ってしまう。

「なっ……違うよ。……オレは皆を助けに――」
「大変だ！！　ヤツが来たぞ！！」

だが、ザラマンデルの言葉は民衆の声で掻き消されてしまう。彼等の言う奴とは、街を燃やし、人々を襲う者だろう。
白い布を被っていたその者は無機質なプレッシャーを放ちながら布を取り払う。

「……素……体……？」

キョータが呟いたとおり、目の前にいるのは以前金光が見せてくれたようなモノ。上空からそれを見ていたキーンもまた、同じ結論を出したらしい。

「あれは……世界を徘徊する怪物（モンスター）でも、業魔王の呪いで出来た魔物でもない。……間違いありません。……あれは、全世界対応ネットゲーム、電想神話フェアプレイズの人間型（ヒューマンフレーム）素体です！」

人々を襲う素体。それは人型。腕の先は鉄球のように丸く、巨大で、バリバリの格闘型だ。
キーンは続ける。

「アシュリアーナは僕達の世界ではゲームの中。……となれば、敵が怪物（モンスター）や魔物とは限らない。……あの敵は僕達と同じだ。……僕達と同じ、現実世界から来た人間なんだ！」

ギィッ

人型素体の右腕が微かに動く。それは攻撃前の予備動作。直後、巨大な鉄球のような拳がザラマンデルを襲う。

第１２話　フィスト（前書き）

お待たせしました。第１２話、フィスト更新です。

第12話　フィスト

――――沖縄県・石垣島――――

時はほんの少し遡り、キョータことザラマンデルが鉄球のような拳を持つ素体を相まみえている頃。

「ただいまーっ！」

元気な女の子の声が家に響く。

「拳児（けんじ）兄ちゃんいるの？」

女の子の容姿は、見た目7歳くらいで肌は日に焼けたからか綺麗な小麦色をしている。髪は濃い茶髪で、リボンでおさげにしており、服は上下が一体化したワンピースだ。肩の辺りから肌が出ている短めの袖なので、暑くても大丈夫。

「お～？　礼美（れみ）か。部屋に居んぞ！」

その声に礼美が声のした方、つまり兄の部屋に行くと、拳児はパソコンを操作していた。それを見た礼美は不満そうに頬を膨らませて口を尖らせる。

「あ～拳児兄ちゃんまたゲームしてるぅ」

その言葉に拳児は苦笑しながら回転イスを回して振り向いた。

ここで拳児の容姿を説明すると、歳は中学生くらいで髪は礼美と

違って稲穂のような黄色味がかった小麦色。肌は礼美と同じく日に焼けている。両耳にピアスをしており、右腕には小石を繋げた様なブレスレットを付けており、首には銀色の板が一枚付いてるタイプのネックレスを下げている。

「あぁ。……なんかネットゲームの会社からメールが来たんだ。至急戦闘に参加するようにって」

「すごーい！　ゲーム会社から直でそんなメールが来るの!?」

「そりゃ、オレがフェアプレイズ全国大会の沖縄代表だからさ。南の国……クルダに所属する闘士。ゲームの中でなんかあれば呼ばれるんだよ」

心底尊敬の眼差しを送る妹に対して、さりげに凄い事を言う拳児だが、そこに驕りは無い。油断無く、真剣に闘うからこその態度だ。

だが、彼は画面に視線を移しながら怪訝そうに眉を下げる。

「たださぁ、なんか変な指令なんだけどな。なんでか街を攻撃しろって命令なんだよな。……何でだろう?それに……オレの前に居るこの素体……一体なんだろう？　一度も見た事が無いな……」

そう言う拳児の視線の先では、自分の素体と紅い素体が向き合っている様子がディスプレイに映されている。

「……なんか強そうだね？　兄ちゃんの前にいるやつ」

「ははっ。ホントだな」

不安そうな礼美に拳児はニコッと笑い掛け、「でも――」と続けた。

「――兄ちゃんだって沖縄代表になるくらい強いんだぜ？　どうも

コイツとは闘わなきゃいけないようだし。……礼美に見せてやるよ。兄ちゃんがどのくらい強いかサ！　それに、オレのフィストの強さもね！」

そう言って拳児は視線を鋭くし、ゲームのコントローラーを握り締める。

――――アシュリアーナ――――

ギッ……

同時刻、フィストの右腕が微かに動き、ザラマンデルが回避行動に出るより早く鉄球のような拳を叩き込んだ。

ドドガガガガッ！！！

「わぁ！！　……くっ」（何て速い攻撃だ。一度に４回のパンチ！しかも１回の攻撃力がでかいぞ！）

ザラマンデルの言う通り、フィストのパンチは突いて戻す動作が速く、１回の攻撃で４回も殴れる。ザラマンデルはその攻撃により吹き飛び、地面に仰向けで倒れた。

バッ！

そして起き上がる直前、追撃としてフィストが迫る。そして鉄球のような拳はザラマンデルの胴体を打ち付けるべく外側から内側に大きく横薙ぎに振るわれる。

「ちっ」

ガギンッ！

だが、その拳は真横に突き出されたザラマンデルの拳によって弾かれた。それにより戦闘は一旦振り出しに戻り、両者睨み合いとなる。

――現実世界・沖縄――

フィストの拳が弾かれた様子を見た拳児は警戒半分、感心半分でザラマンデルを見詰める。

「……フィストのパンチを弾き返したか……。コイツ……小さいけど強いな……」

だが、次に拳児が見せた表情は真剣勝負を楽しむような楽しげな笑顔。彼は首に下げていたネックレスを取り外した。

「よし！　こっちも全力で行くか……。フィスト行くぞ！　武装合体（アーマメントユニオン）だ！！」

――――アシュリアーナ――――

カッ！

フィストから発せられる閃光。ネックレスは現実世界のフィストの首に掛けられ、それが武装合体を起こしたのだ。

「この光……まさかっ！」

ザラマンデルは腕を前に出して閃光を防ぎながらこの後のフィストのパワーアップを予想する。自分を何度も救った武装合体は、何も自分達だけの専売特許ではないのだ。

そして姿を現したフィストは、肘から先を光の線とし、その先には先程の巨大な拳が付いている容姿となった。

（ッ！　武装合体して鉄球みたいな拳が――）

ヒュッ……バギャッ！！

（――鎖鉄球（チェーンハンマー）になった！！）

そしてその鉄球は遠心力の名の下に威力を上げて、頭部を横から打ちのめし、地面に叩きつけ、ザラマンデルを大地に埋もれさせた。

キョータの言葉の後半は地面に埋もれる直前出された言葉だった。

「キョータ君！！」

キーンとフーイはすぐさま地面に降りて加勢しようとするが、キョータは拳で自らに圧し掛かる岩を砕き、地表に出ながらそれを遮る。

「く……来るな……キーン！　それより……考えてくれキーン、天さん！　オレはどうしたら良いんだ！？　コイツとどう戦えば良いんだ！」

「どうって……そいつ強いです！　全力でやらないとやられちゃいます！」

「違う！　そういう意味じゃない！！」

だが、キョータの気がかりは戦術など戦闘方面では無かったらしい。ザラマンデルは真っ直ぐにフィストを見据えながら言った。

「あいつはオレ達と同じなんだ！　現実世界にいる人間なんだ！しかも、この世界もこの闘いも全部ゲームだと思ってるんだぞ！！

そいつは自分がゲームで遊んでるつもりでも、これは本物の戦いなんだ！　……アイツを壊したら……現実世界のプレイヤーも死んじゃうんじゃないのか！！？」

ヒュンッ……ヒュンッ……

ザラマンデルが自分の言葉を言っている間、フィストも何もしなかった訳ではない。自分の周辺だけで鉄球を振り回し、遠心力を利用して次の攻撃を一撃必殺のそれにしようとしている。

一方、キーンは過去の事柄を思い出し、キョータにそれを伝えた。

「それは……たぶん大丈夫でしょう。あの素体は壊れてしまうかもしれませんが、プレイヤーは無事でしょう。金光ん時を思い出してください！！」

（ッ！　そうか……前エジーが壊れた時、金光は無事だった……！）

「……オレには事情はよく分からねぇが、全力で闘った方が良いと思うな」

それを言ったのは天だ。確かに彼はキョータ達の事情を詳しく知らない。だが、それでも自分なりの意見は言える。天は子供を見守るような優しく、澄んだ目でキョータに語りかけた。

「相手は強い。……あそこまで強くなるには相当な努力をしたはずだ。相手が自分の全てで立ち向かって来るんだぜ？　だったら、全力で迎え撃つべきなんじゃねぇか？」

振り回す時はスピードを殺さず、相手を寄せ付けない攻防のバランスの取れた構え。そこまで自由に素体を現実世界から操るのに、どれだけの努力がいるのだろう。

「……自分の全てで……闘う……！」

そして、天の言葉はザラマンデルにしっかりと響き、闘志という名の焔（ほのお）がその双眸に映る。

ヒュンッ！

そして機は熟した。勢いを殺さず、遠心力により威力を極限にまで高められた鉄球は、２つとも上から下に振り下ろされようとしている。

ザラマンデルもまた、背中の巨大な刃に炎を灯らせる。

「……キミは凄く強い。……素体も大切にしてるんだと思う。……でもゴメン、オレ負ける訳にはいかないんだ。……けど――」

ゴウッ！！　……ズシャッ！！

紅蓮に燃える炎を纏い、ザラマンデルはフィストの左右の鉄球と頭部、鼻のラインを横に断ち切った。技の名は、【焔翼（フレイムウィング）】。

チェーンハンマーは確かに遠心力で威力を上げる事が出来る。しかし、武器の形状の問題で腕をその向きに振るった後に鉄球が付いて来る形になっている。それがザラマンデルの技が先に炸裂した理由である。

腕を振る→鉄球が付いて来るでは、通常の攻撃と比べて攻撃が一拍遅れるのだ。

「――オレがやっているのは遊びじゃない！　絶対勝たなきゃならない、本当の闘いなんだっ！！！」

――――現実世界・沖縄――――

「あぁ！　やられたぁ！！　……わぁ！？」

拳児のパソコンの画面では、フィストの左右の拳と頭が切断された映像が映っており、後半で彼が驚いたのは現実のフィストの頭部も壊れた事だ。それはもう、生首よろしく首からボギッ。

「フィストが……壊れた！？　なんでだ？」
「なんだよー。兄ちゃん負けちゃったじゃぁぁん！」

礼美はブーッと頬を膨らませていたが、兄が思ったより機嫌が良い事に気付いた。兄妹だから、雰囲気で機嫌の良し悪しくらい分かる。

「……負けたのにあんま悔しそうじゃないね？」
「ああ。……そうだね。なんか気持ち良いんだ。オレは全力で闘った。相手も全力で闘ってくれた。お互い全力だったから、勝っても負けても気持ち良いんだよ」

スゥ……

画面からザラマンデルの姿が消える。実際には現実世界に戻ったのだが、拳児にとってはログアウトしたという認識だろう。

「消えちゃったか。残念。……でも、いつかまた、もう一度逢いたいなぁ……」

場所は変わり、キーン宅。

「……帰って……これたかな？」

それはキョータの呟き。キョータとキーン、ボボウとフーイは無事現実世界に戻ってこれたのだ。キーンの隣には高速魔箒が落ちている。

帰ってきたキョータ達に最初に言葉を書けたのはシノブだ。

「お帰りなさい！　無事で安心しました！」

「うふ～♪　見てくれた？　空飛ぶ私の勇姿！　血で飛ぶんです、血で♪」

シノブの労いの言葉にキーンは未だ空を飛んだ感動が忘れられずホウキに跨ってくねくね動いている。

「……」

一方、キョータの様子がおかしい。俯いて黙りこくっている。奏はそんなキョータを心配して声をかけた。

「キョータ君……大丈夫？　なんか顔色悪いよ？」
「……やっぱりオレ達、負けちゃダメだ……」

キョータは顔を上げ、拳に力を込めて握り締めて顔の高さまで持ってくる。その緑の双眸は力強い意志に溢れている。

「何も知らない人達は遊びで人を倒したり……街を壊したりしてるんだ……。でも、それは全部本当の事なんだ！　本当に街は壊れ……人は怪我してる！！　その事を知ってるオレ達は必ず勝たなきゃならないんだっ！！」
「……キョータ君……」

その力強い目は頼もしく思えるが、同時に奏にとっては不安だった。大好きな人が自らの決意のために自分のそばから居なくなり、そのまま戻ってこないのではないかという不安だ。

――同時刻・現実世界・某駐車場――

2台の車の間、割りと大きめにスペースが開いているため子供1人が足を伸ばして座るのには十分な広さだ。

『ゼン……どぉ？　体の具合は？』

膝の上から話しかけてくるクーエイ。ゼンは戦闘によって荒れた街を見ながらそれに答えた。場所さえ分かっていれば、他のパソコンでもその戦闘の様子は見れるだろう。先程のザラマンデルとフィストの戦いはゼンに見られていたという訳だ。

「だいぶ良くなった。……心配する事は無い」
『本当？　……でも心配だよ』
「大丈夫だ。前は油断しただけだ」

パタンッ

「体が治ったら、次は油断なんかしない」
『……でも、見てたらアイツ強くなってるよ？』
「……心配するな。見てろ、クーエイ。――」

ゼンはそう言いながら右腕を上に挙げ、下に下ろしながらその軌道を横に変える。その軌道は、三日月のように鋭く、薄い。次の瞬間、『ズパッ！』という音と共に、ゼンの前方にあった車は切断された。かまいたちにでも遭ったかのように。座席の胴体の位置から上が両断されたのだ。

「――オレだって強い。……勇者を殺せるのは他の誰でもない……オレだけだ！」

その双眸は静かで冷たく、それでいて強い意志が宿ったものだった。

第１２話　フィスト（後書き）

いやはや、外出などで１回モデムのコンセントを抜くと次に接続するまでが異様に長いのですが、逆に執筆に集中できてここまで速く進められました（笑）。

基本的に、何事も自分にとって都合の良いもの（出来事）に変えますからね。何事も考えようって訳でさぁ。やりたい事が出来ないのなら、その間他の事をやれば良いだけですからね。

次は３サイドのお話。時間は少し遡って午前です。ふっふっふ。とうとうニライカナイも絡んで来ますぜ。

第１３話　音使い（前書き）

あえて言っておきます。この作品は複数の目線で物事が進みます。『とある魔術の禁書目録』で例えると、当麻サイドと一方通行サイドに分かれるみたいな感じです。

なお、作中に出てくる学校名はフィクションです。実在しない事は確認済みですたい。

第１３話　音使い

――日曜日・午前――

場所は東京都新宿区。厳密に言えば、地下３階にある非合法情報屋。柊ゼンはそこに依頼があってやって来たのだ。

「ん？　ずいぶん小さなお客様だな」

乾いたドアの音。出迎えたのは男性。歳は３０代前半。服は真っ黒。服の素材は熱を外に出さないタイプ。手早く言うと冬服の素材だ。夏、それも反射熱で暑いであろう新宿に住む者とは思えない。

……まぁ、それを言えばゼンもマフラーを付けているのだが。

男性は机の上に肘を立て、指ではなく左右の指を合わせて目の前の少年を見据える。

「だが、ここに来た者は物々交換でどんな物でも手に入れられる。……ここで揃わない物は無い」

「……」

ゼンが無言で取り出したのは、宝石が散りばめられた豪華なネックレス。先払いの対価というヤツだ。男性はそのネックレスを受け取ると感心した口調で口元に笑みを浮かべる。

「ほぉ。……凄い首飾りだな。これなら十分だ。何が欲しい？」

「身分だ」

簡潔にゼンは答えた。そして、静かな口調で続ける。

「オレはこの世界の身分が無い。……誰にも疑われない、普通の人間の身分が欲しい」

その依頼に、男性は再びネックレスからゼンに視線を戻し、その視線を子供を見るような視線から探るような視線へ変える。それはそうだろう。この世界の身分が無いという言葉を聞けば、不審がるのも無理は無い。

だが、ここは物々交換で何でも得られる非合法情報屋。そして男性は、それだけの技量も持ち合わせていた。

「……分かった。2日したらまた来てくれ」

「……頼む」

ゼンはそれだけ言い、男性に背を向けてドアを開ける。

……そして閉じられるドア。男性が感慨深げに少年の後姿を見ている時、彼の後ろのドアが開かれた。お客様用ではなく、仕事のお得意様が使う部屋だ。

「どったの……甲斐？　お客さん？」

姿を現したのは高校2年生くらいの少女だった。瞳の色は黒。丸いボールが付いたゴムで髪を留めたツインテールに服装はキャミソール。ベルトの辺りにドクロの描かれた金属板（　銀色の装飾　）が付けられた、短めのスカートを穿いている。

甲斐と呼ばれた男性は少女の方を見て答えた。

「乱空か。お前と同じお客さんさ。……しかし――」

甲斐はここで再び目線を少年が去っていったドアを見つめる。

「――不思議な子だったな」

一方、店から出たゼンは街の片隅にあるような小さい路地を歩いていた。

『ねぇゼン……良いの？』

クーエイはゼンのマフラーから顔を出しながら質問をする。

『あの首飾り、ゼンが王子だって証でしょ？』

「良いんだ。……オレの国はもう無い。アシュリアーナでも、この地でも、オレの身分など無い」

以下、ゼンは心の中で続ける。

（……オレに身分などいらない。オレはただ……殺す者……勇者を殺す者であれば良いのだ……）

その頃、甲斐の非合法情報屋では……。

「そういや乱空、お前に謝らなきゃな。こないだもあの子来たんだよ。でな、どうしても学校に行きたいって言うんでお前の戸籍借りたぞ。アイツ、お前の弟って事にしてくれ」

そんな訳で乱空の本名発覚。柊　乱空だ。この後の乱空のリアクションはもちろん……。

「なぁんだよソレエェェェェ！！！」

彼女の後ろに『ざけんなあぁぁぁぁぁぁ！！！』という文字が見えるのは彼女の気迫というか思いが実体化した形だろうか。……無理も無いだろう。突然相談無しに戸籍を弄られて家族が出来ました～。なんて、怒るか混乱するかのどっちかだ。

甲斐も甲斐で悪かったと思っているらしく、右手を顔の前に縦に立てて頭を下げた。

「悪かったって！　今日なんか一奢《おご》るから……な？」

「別に良いけど……。服買うついでに寄っただけだし。――」

つまり、先程まで隣の部屋でお着替え中だったという訳だろう。おまけを言えば、乱空は乱空で今日は別の用事もある。

「――今日はパス。用があんだもん。今日、学校行かなきゃ！」

――午後・京都市左京区今出川通　私立知恩高等学校――

結論から言うと乱空の通っている学校だ。

「それで？　お前どうするつもりなんだ？　来年は卒業だろ。……なのにずいぶん学校を休んでるじゃないか。単位はギリギリ。進路希望も未提出。将来の夢とか色々あるだろ？　ボチボチ……聞いてるのか？　柊！？」

「聞いてるよ、センセっ」

聞いてばっかりで答えない乱空に対し、話を聞いているか疑った先生だが、何だかんだで乱空はちゃんと聞いていたらしい。

「将来なんてどうなるか分かんないよ。……まぁ、今やってる仕事を続けてるんじゃないかな？」
「仕事って……お前何かバイトしてるのか？」
まぁ、高校生の仕事＝バイトというのが通例だろう。中には店を経営している自分家のお手伝いというのもあるだろうが。だが、乱空の言ったのは紛れも無い『仕事』だった。
「うん。……なんつうか、社長の助手なんだけど」
「……はい？」
「おっと！　申し遅れました♪　私こういうモンです。１つよろしく」
流石に混乱する先生に、ご機嫌な口調で名刺を差し出す乱空。名刺を取り出す左手には親指を除く４本の指に指輪がされている。材質は石で艶出しがされており、何とも形容しがたい文字が彫られている。古い物に思えるが、大事にされているのだろう。日に当てると光を反射する輝きを持っている。
態度はアレだが、名刺はちゃんとした物だった。書かれているのは、『皇探求者事務所　探求者　柊　乱空』後は右下の方に小さい字で電話番号が書かれている。
探求者。その耳慣れぬ言葉に先生は怪訝そうに眉を顰めた。
「探求者……！？　何だコレ？　何やってんだ、お前」
「分かりやすく言えば探偵さんですわ。奥さんの浮気調査でも、家出少女の発見でも、何でもやるよ。センセもどう？」
ここで乱空はニヤッと不敵な笑みを浮かべる。

「……ご希望なら、目に見えない怖いモノを見せてあげるよ。……そんじゃま、そういう事で♪」

突然テンションが元のおちゃらけた態度に戻り、先生は机に突いていた肘を崩してしまった。おまけに乱空はその隙に背を向けて歩き出す。行き先は職員室のドアだ。勝手にご退室である。

無論、先生がソレを許す訳が無い。

「こら！　何言ってる、帰っちゃダメだ！　今日はお父さんも呼んでるんだぞ！！」

「てな訳で、失礼しや～す♪」

「ごらぁ！　柊！！　待てぇ！！！」

激昂する先生を華麗に飄々といなし、乱空は職員室の前に置いてあった自分のバッグを手に取る。

「さて、帰るかね」

「乱空」

それは先生の声でもないし、彼女の父親でもない。乱空はその声で若干驚いたかのように目を見開いた。

「言霊（ホツマ）！　……親父は？」

「代理です。仕事が忙しいそうで」

言霊（ホツマ）と呼ばれた男性の容姿はというと、茶髪で白い服を着ており、歳は２０代というのは見た目で分かるが、詳細は分からない。瞳の色は黒っぽい紫だ。また、乱空と同じように石で出来た指輪を右手の親指以外の指に付けているのも共通だ。ただし、彫られている文字は８つの指輪全て違う。

言霊はバッグから包装紙に包まれた箱を取り出した。

「おまけに、京都のお菓子を頼まれました。乱空も食べますか？　八橋」

「……ぶっちゃけ、それが食いたいだけじゃないのか？　親父も言霊も……」

乱空の父と言霊は甘党だ。それが理由か、２人は意気投合。乱空と言霊の予定通り、言霊が乱空のそばに居られるようにはなった訳だが、３者面談で代理まで行くと行き過ぎな感がある。どんだけ信頼されてんだと突っ込みたい。

言霊はここで「それより――」と、口調を変える。静かで穏やかな声の中に真剣さを見せる声だ。

「――先生に余計な事を言ったようですね。目に見えないモノを～でしたっけ？」

「うっ……アレは～つい～……」

乱空の目は分かりやすいくらい泳いでいる。どうやら口走ってはいけない事を口走ってしまったようだ。

「御覧なさい」

言霊が視線を窓の外に向ける。乱空もそちらを向くと、空に異形の怪物が全身を鎖で縛られて浮かんでいる光景が映る。上半身が人。下半身が蛇。腕は４本ある。上半身だけで高層ビルほどもあり、下半身はそれより格段に長い。

だが、そんなモノがあっても民衆がパニックにならないのは他ならぬ２人のお陰だ。

「……あってはならぬモノの存在を、普通の人に勘ぐらせてはいけません。その先は――」
「禍神の復活。……分かってる。速く封じなおそう」
「……えぇ」

乱空はそう言うと左手を上に上げた。言霊もまた右手を挙げ、ハイタッチを交わす。

パンッ！

それは傍から見れば単なるハイタッチ。だが、乱空が言ったようにそれは封印。八音の指輪が奏でる音が響き渡る。
彼等の奏でる『音』の能力は、世界を形創る人の意識を操作して目の前にある危機を感知させない事にある。誰も知らないという事は、実際に遭った事でも無かった事になる。指輪から鳴る高周波で驚異的な広範囲集団催眠術。全ての人に何も無いという幻想を与え、禍神はいないという世界を創りあげた。結果、禍神はいないという概念が世界を支配し、禍神の復活を食い止めているのだ。

「……これで良いよね」
「えぇ。……それから乱空」
「？」

今度は何かと乱空が眉を顰める中、言霊は先程よりも小さい声で彼女に耳打ちをした。

「（……この世界に来た者の居場所は、まだ分からないのですか？）」
「（うん。……甲斐にもお願いしているんだけど、全然）」

乱空もまた、小声で接する。彼等はとある者と会う為に、時間を巻き戻し、再び禍神が存在する世界を創った。禍神がいる世界でなければ、自分達のチカラは使えないから。

「（……そうですか。……私達の知らない所で生きているのかもしれませんね。けど、出会った以上は――）」

「（確実に殺す。……持ってるチカラが強大だから、存在するだけで次元を歪ませて禍神を復活させちゃうかもしれないからね。分かってる）」

――アシュリアーナ――

「うん？」

「どうしたの？　キョウ」

少し前に出逢った孤児、ジアが下から顔を覗き込んでくる。ただ今ちょっと休憩中だ。

「何でも無いよ。……さぁ、そろそろ行こう。もうすぐ街があるから、そこで夕飯の調達だ」

幼い子供の前だから不安な態度は取らないが、内心では警戒している。先程感じた妙な悪寒に。

（……今の感じ……嫌な感じだ。……誰かがオレを狙ってる？　誰が？　何で？）

その後着いた街は、あちこちが戦闘で破壊されていた。何でも、拳が鉄球のような者と竜人のような者の戦闘があったらしい。

第１３話　音使い（後書き）

乱空と甲斐、言霊はニライカナイの人物なのですが、口ぶりとか諸々で今後も関わりそうなので彼等のデータを集めたら、「あぁ、こりゃ本格的に話に組み込まないとダメだわ」って思ったわけです。だって戸籍を借りたとあっては色々、ねぇ？

それと、ニライカナイの話とも、セリフを多少違うくしています。

乱空と言霊の詳細はいずれ彼等の口から言ってもらいます。禍神の事もね。前作の『明日へ』を見た人なら知ってると思いますが、オレは伏線をある程度経ってから回収する事が多いです。気長に待ってて下さいな。

第１４話　スーパー小学生（前書き）

今回、本当に「ありえねぇ……」と突っ込みたい事が出てくるでしょうがスルーしてください（笑）。

第１４話　スーパー小学生

――――アシュリアーナ・降魔王国フェルシア――――

「ふっ。……勢いばかりで押してしまったら勝てるものも勝てないさ

業魔王四天王、フェルシア王国統括者、ダレスは水晶玉を介して会話をしている。

フェルシアの民家はレンガのそれの様な繋ぎ目がない。おそらく、石膏（せっこう）のような物をそのまま使っているか、レンガ等の上から補強として塗っているのだろう。

また、王城は外側はレンガのように岩を交互に組み上げていく形式。中庭には緑もあり、上質な城だ。

ダレスはタバコを吸いながら続ける。周りには部下が４人。いずれも女性だ。

「ジュリの奴、命令を無視して勝手な事をした訳だ。それで自分の手駒を減らした。……自業自得だな……。と言っても、すぐキレるジュリの事だしこのままでは終わらんだろう？　自分だけで勇者を殺すってのにこだわって闘い続ける。……と、オレは見ているが――」

ダレスはここで水晶玉の向こうの人物、ゼンに話しかける。なお、水晶玉に映るゼンはケータイ電話を持っている。アシュリアーナからは相手の顔と声が聞こえるが、現実世界からは音声のやり取りだけ伝わるのだろう。

「――お前はどう思う、ゼン」
「同感だ。……頭の悪い奴は自分勝手に先走り、そのせいで敗北する」
その言葉にダレスは嘲るような笑みをもって言う。
「言うじゃないか。……でもそれはお前も同じだろ？　勇者を殺したくて我慢しきれず、そっちの世界にまで行っちゃったんだろ？……自分勝手に先走るのは同じだ。……敗北するんじゃないかい？　お・う・じ・さ・ま……？」
ゼンの眉間にしわが寄る。ダレスの言葉はゼンに不快感と苛立ちを与えたようだ。
「残念だが、オレは敗北するほど弱くない。……戯言はたくさんだ。定期通信を終える……」
ブゥゥン……
低い音と共に水晶玉からゼンの姿が消える。それを確認したダレスはお茶目に肩を竦めてみせた。
「あ、切れちゃった。……せっかち君だね♪」
「ダレス様……よろしいのですか？　ゼンもジュリも業魔王様の命令無視です」
部下の1人から投げ掛けられる質問。だが、その質問はどこか無

機質で、問うた側の部下も無表情だ。ダレスはイスに深く座り直し、再びタバコを口に咥えた。

「いいさ。……ほっておけ。ジュリもゼンも面白い奴じゃないか……。勝手に潰しあって死ぬが良いさ。オレは楽しく高みの見物だ。……お前もそう思うだろ？　――」

ダレスが語りかけたのは部屋の隅に立っているモノ。顔まで覆うマントを着て、体格も性別も表情も判別不可能なモノ。

「――レヴィアタン」

――――現実世界――――

ピッ

それは通話を切る際の操作音。

「……ダレスめ……」

ゼンは眉間にしわを寄せたまま呟き、ケータイをポケットにしまう。そして、その視線は正面の４－２Ｖ．Ｓ．４－３のバスケ対決に移された。及び、内心で続ける。

（……業魔王四天王の中でも一番危険な男だ。……何を考えているのかは知らないが、オレはオレだ。奴の手駒にはならない……オレ

は、目的を果たせればそれで良い……）

ガゴンッ！

キョータの投げたボールはポストの角に当たって弾かれた。ボールは運良く自分の下に跳ね返って来たが、それでも悔しいものは悔しい。

「ちっきしょぉ！　何で入んないんだあぁぁ！　ムキー！！」

「何やってんだキョータ！　２組に負けちゃうだろ！？」

そばにいる金光は結構焦っている様子。当事者達が熱くなっている中、外野はと言うと……。

「行けぇ！　２組ぃ！！」

「負けんなぁ！　シュートだキョータアァ！！」

「キョータ君頑張って～！」

「２組も頑張れ～！」

上の２人は勝負に熱くなったクラスの男子。３人目は奏で、４人目はシノブだ。

バィーン！！

キョータの２球目、今度は力が強すぎて白い板に当たった後、大きく地面とは水平に跳ねる。

「くっそぉー！　リバウンドだ！！」

悔しがると共に駆け出すキョータ。流石に手元にボールが帰ってくるような偶然は2度も続かない。

「……」

ゼンは無言で手を横に一線。空を斬る。

「ッ！　痛……っ！」

その瞬間、キョータの右足、膝の少し上に裂傷が出来た。深さは約5ミリほど。切れ口の厚さは紙で皮膚を裂いた様に細い。

どたっ……

突然足が斬れた事で力が入らなくなり、キョータはバランスを崩して倒れた。

「キョータ君！」

「おい！　血が出てるぞ！！」

外野は突然の事で驚き、3組の金光だけでなく2組の男子もキョータに駆け寄る。

「わっ。バカ、何やってんだよキョータ！　……大丈夫かよ？」

最初はやれやれな様子だった金光もキョータの怪我を見て心配し、キョータは痛がりながらも答える。

「いちちちち……大丈夫……だぜ。……何だろう、あんま痛くないけど、いきなり切れちゃったよ……」

「大丈夫じゃないよ……とにかく保健室行かなきゃ！　立てる！？」

「ああ、何とか立てそうだよ！」

奏がハンカチを手にキョータに駆け寄り、キョータはなるべく心配を掛けまいとニッと笑顔を作った。そしてその時、天野先生も自身の意見を述べる。

「こりゃ結構酷いな。琴井、一緒に行ってやれや」

「はい！」

琴井というのは奏の苗字だ。だが、天野先生はここで「しかし――」と続けた。

「――キョータも退場で頼りになりそうな柊が風邪で休むとはなぁ！」

「……先生……生徒より勝負が大事なのね……」

天野の顔が物語っている。「負けは嫌！！」と。柊自身は壁に寄りかかっているので、休むと言うより見学に近い。なお、呆れたようなツッコミを入れたのは生徒だ。

「しかし柊はバスケのルール知らないらしいしなぁ。いったい前はどんな学校にいたんだ？」（今度みっちり教えたろ♪）

先生の楽しみが増えた時、キョータの怪我の直接の原因である柊

自身はある事を思っていた。

（あんな攻撃も避けられない程度の勇者など、倒しても意味が無い。勇者には強くなってもらう必要がある。奴が最強になって、初めてオレの目的は成就するのだから……。炎王ザラマンデル、お前は強くなる義務がある……。世界の平和など関係なく、オレのためだけに強くなれ……）

一方、奏はキョータに手を貸そうとしていた。

「平気？　立てる？」

が、当のキョータは……。

「くそー！　このままじゃ2組に負けちゃうぞ、おのれぇ！！」

「興奮すると血が止まらないよ！」

悔しがるキョータ。彼の傷口は彼の感情に呼応するように血を吹き出し、奏はなんとかその興奮を抑えようとする。

ピーッ！

審判の吹く笛。その音とその笛の異形さにより、キョータのテンションは落ち着いた。……いや、むしろ、唖然とした。

「ダメですよ、キョータ君。けが人は速やかに退場してくださいね♪」

「……なんで杖に笛がついているんですか？　つーか、縦笛で審判

すんなよ」

キーンだ。魔術師審判、推参（すいさん）だ。吹いているのは彼が常時所持している杖である。どうやら笛にもなったようだ。キョータが唖然としたのもそれである

「で、でもキーン！　このままじゃ2組に負けちゃうよ！！　負けるのは嫌ー！」

「はぁ。……しょうがないですね。すぐ燃えちゃうんですから、キョータ君は……」

キーンはいかにもしょうがないといった風に顎に手をあて、やがて何かを思いついたのか先生に自身の杖（　笛　）を差し出す。

「先生、審判よろしく。ボクが入りますゆえ。……どうぞ♪　魔笛よ」

「……そんなきしょい笛いらん。マイ笛あるし……」

どうやらというかヤハリと言うべきか、先生の目から見てもその杖の形の笛はきしょいらしい。一方、キーンの参戦と聞いて最もリアクションを大きくしたのは隣の2組だ。

「げぇー！　月島じゃん！！　審判じゃねぇのかよぉ！！」

「汚ねぇぞぉ！！」

盛大なブーイングである。シノブはその理由が分からず、そばにいた生徒に尋ねた。

「ねぇ、どうしてキーン君が試合に出るとズルいの？」

「あ……シノブは体育あんまり出ないから知らないのか！」

「始めぇ！」

ピーッ！！

先生の声から一拍送れて鳴らされる笛の音。２組の大ブーイングの意味はこの後明かされる。

「魔導、エアウォーク！」

「ッ！　わぁ！」

ボールを鷲掴みにしてキーンは駆ける。空中を駆ける。そしてそのまま走って……。

「魔導ダンクシュート♪」

楽々ダンクシュートを決めて見せた。空中を駆け上がっているのだから、ダンクシュートなんて楽勝だろう。

シノブは先程の一連の動作を見て心から驚いている。

「す、凄い！　空中歩いた……」

そう。先程の空中を駆けると書いたのは誤字でも比喩でもない。正真正銘、空中を歩いたのだ。……アレだろうか。足を上げておろす前に反対側の足を上げてそれを降ろす前に反対の足を上げるという……。

一方、シノブのそばにいた生徒はお手上げと言った様子で口を開く。

「あ～ダメだ、負けだよ。月島って見た目は変だけどさ、ものすげぇ奴なんだよ。勉強は学校でもダントツトップ。小学校どころか高校の問題集までクリアすんだって。しかも、体育でもほとんど全部の学校記録は月島が1人で作ってるんだよ」

「魔導ドリブル　&　魔導スティール！」

キーンがドリブルで進み、フェイントを混ぜながら突破していく。その様子に3組はやんややんやのハイテンション。『行け行けGO！GO！！』な印象だ。

「流石キーン！　かっけぇー！」

シノブと話していた男子生徒はこう締めくくる。

「この学校で月島以上の小学生っていねぇよ。……それに何より…凄く不気味なんだよな……」

げんなりした少年の視線の先には、オーバースローでボールを投げるキーン。

「ふはははは～。魔導3Pシュート」

スポンッ

でたらめな投げ方にも関わらず、綺麗な弧を描いて白い板に当たるまでもなくポストに入った。

「……」

その動きの良さにゼンがキーンに関心を抱いた事など露知らず、キーンは親指を自分に立てて笑ってみせる。

「さぁ、キョータ君。安心して退場してくださいな。キョータ君のためにボクが勝っておいてあげます」

「キーン！」

「それとも、我が偉大な魔力で治して差し上げましょうかね♪」

キョータはキーンの思いやりに感動した訳だが、その言葉が災いだったらしい。そそくさと奏と共に保健室へ向かった。

「保健室行ってくるよ……」

「さぁキョータ君！」

手をひらひら動かしていかにも呪ってやる～という感じの状態のキーンだった。……そりゃあ慣れてる相手でも引くだろう。

（……月島　数騎……風を操り、電光で敵を倒す風の王。……ある意味では炎王ザラマンデルよりも、勇者としての完成度は高く感じる。……確かめる必要があるかもしれん。風王ズルフェが炎王を真の勇者に導くだけの力を持っているかを……）

ゼンはケータイを取り出し、ある場所へ電話を掛けた。ケータイの画面には、『魔王軍南部支部』と書かれている。

――――アシュリアーナ――――

フォォォン……

連絡用の水晶玉が濁り、そこにゼンの顔が映し出される。

「ッ！　黒王グリフィアス様……」

応えたのは顔を含めた全身を覆う鎧に身を包んだ騎士だ。その騎士は礼儀正しくグリフィアスに頭を下げた。

『お久しぶりでございます。お元気そうで何より。……魔王軍は兵士副長である私(わたくし)ウルクが責任を持ってお預かりしております。黒王様がおられなくとも……我等魔王軍、黒王様の象徴である黒旗を掲げ、闘っております。魔王軍に歯向かう反乱軍など、全て滅ぼしましょう。……どうか、ご心配なさらず』

「……迷惑を掛ける……」

『何を仰(おっしゃ)います。黒王様のためならば……いえ、我等の王子のタメに、我々魔王軍は戦うのです。ご命令あらば何なりと……』

「魔王軍の一部を動かし、近隣の町を攻撃してくれ。……数は多くなくて構わない。……出来るか？」

『２０騎ほどでよろしいでしょうか？』

「十分だ……」

『御意……。我等が黒旗を掲げ――』

ウルクは立ち上がり、続きを言う。

『――進軍いたします』

第１４話　スーパー小学生（後書き）

後半のウルクとゼンの会話ですが、原作において互いに無表情でやり取りをしていた上に動きもなかったので描写が書けませんでした。セリフばかりですみません。

第１５話　憧れ以上の人（前書き）

付け足す所があったから付け足したら長くなってしまったので２話に分けました。

第１５話　憧れ以上の人

――――現実世界――――

４－２と４－３の闘い、その結果はワンサイドゲームと呼ぶに相応しいモノだった。何せ点差が……。

「凄いなぁ……キーン君。本当に勝っちゃった……１００点差」

シノブの言う通り、ボードには『２５：１２５』という表示が。

……これは２組から大ブーイングが来るはずである。

「そんな事無いですよ。早く片付けないと次の授業始まっちゃいます」

対するキーンはバスケットボールの入った籠（金属製で形状は円柱）を動かして来た。どうやら今まで、体育館中に転がったボールを回収していたらしい。

「あ、ゴメンね。キョータ君の代わりに手伝うって約束したのに」

この後、２人はバスケットボールがたくさん入った籠をゴトゴトと音を立てながら用具入れへ運んでいく。そんな中、シノブはふと思い立ったようにキーンに話しかけた。

「……なんか良いよね、キョータ君とキーン君は……」

「？　良いって何がです？　２人で体育委員なとこがですか？」

キョータとキーンは体育委員。キョータの方は分からないが、キーンにとっては片付けは面倒らしくシノブの問いに眉を顰めて怪訝がる。

「そーじゃなくて……キョータ君はいつだって頑張っててカッコ良いし、キーン君は本当に凄いし……ボク、憧れちゃうな……」

だが、シノブの言いたかった事は違ったようだ。眉の外側が下がり、微かな笑みを浮かべている所から考えて、憧れ＋羨ましいという感情もあるのかもしれない。

「何でです？　こんな事出来ても凄く無いですよ？　魔導トリプルシュート♪」

そう言ってキーンはボール入れから適当なボールを3つ手に取り、1つ目を普通に投げて、2つ目をアンダースロー。そして最後の3つ目はオーバースローで投げる。そしてその3つの球は、『スポポポン』と音を立てながら吸い込まれるようにネットに入った。もちろん、白い板には触れる事は無い。

それを見たシノブは素直な感想を口にした。

「……ちょっと不気味なくらい凄いよ……」

「何言ってるんですか。勉強だってスポーツだって同じじゃん？どうすれば上手く出来るか考えて能率良くやれば結構出来ちゃうもんです」

キーンは自分の投げたボールを回収。それらをドリブルしながらシノブの下へ戻ってきた。そしてボールを籠の中に入れた後、ふいにマイペースな彼らしくない顔を見せる。それは、その時の微笑み

は、先程シノブの見せた表情に似ていた。

「憧れってとこから……それ以上の人になる方がよっぽど大変ですよ」

「？　それ以上の人？」

ブウウウ……

キーンの言葉にシノブが首を傾げた時、低い音がキーンの周辺から鳴る。

「んお？」

「へっ？」

キーン、シノブの順で疑問符の声を上げた直後、キーンの懐から光が溢れる。キーンはローブの中を探り、その光源を見つけ出した。

「ッ！　この光！　魔導白地図が発動してる！！　……ボクのカバンも光ってる……ッ！　中の本か！」

「ま、待って……ノートパソコン持って来てるから……今見るね！」

「お願いします！　……本の方も光っちゃってるんで！」

シノブがノートパソコンを開いてフェアプレイズを起動すると、そこには鎧を着た兵士が街に進行している様子が表示されていた。

『侵攻』ではなく『進行』なのは、まだ街に辿り着いてないからだ。

ＲＰＧでキャラクターがマップ上を進むように、４頭身ぐらいの兵士がゆっくり歩いて行く。

「……やっぱり、戦闘が始まってる！　魔王軍が近隣の町に進軍している！」

そして、さらにここでシノブはある事に気付く。画面には進軍している様子に加えて、時間まで表示されているのだ。『００：０５：２８』、５分２８秒。そしてそのカウントは減っていく。

「これ……リアルタイムバトルだよ！　魔王軍が街に着くまで……５分しかない！」

キーンは自分のカバンの中のフーイを呼ぶ。

「キョータ君に知らせる時間無いですね。……フーイ！」

『お呼びで』

「至急、ボクをアシュリアーナに行かせてください！　出来ますか？」

『……御意』

フーイはそう簡潔に答えると、ボボウに対して念を送る。一種のテレパシーのようなものだろう。

《ボボウ殿……聞こえるか……？　緊急だ……応えてくれ！　ボボウ殿！！》

――――キョータ宅――――

『……ん？　フーイ？　呼んだのら？　何のようなのらー？　寝過

ごして学校に行けなかったのらー！』

どうやらボボウは寝てたらしい。大欠伸と共にフーイの声に答える。

《話は後で。……急いで私とキーン様を聖地へ送ってくれ……》

『ふわぁ～あ。……ふわぁ～い……』

キィィィン！！

ボボウの体から光が発せられ、その光は空を駆け、学校へと向かう。そしてボボウはポテッと横になった。疲れたとかそういったモノではなく……。

『さぁて……もうちょっと寝るのら～』

1・2・3。爆睡（ばくすい）。……寝たかっただけらしい。

――学校――

一方、ボボウから送られた光はキーンの体を包み、キーン自体を光らせていた。

「おお～！　来ましたよ～♪　体光ってますぞ！　魔力充填１２０パーセント！！」

口元を三日月状に引き伸ばし、いかにも悪魔っぽい笑いを浮かべるキーンに、シノブは「誰!?」と一瞬思ったが、今はそんなツッコミを入れている場合ではない。

「キ、キーン君！　ダメだよ！　1人じゃ危ない……ッ！　せめて奏さんにだけでもっ！」

相手が何体居て、その実力も未知数。ともなれば、もしかしたら万が一という事もある。ゲームオーバーでリセットが効くゲームではないのだから。

だが、キーンの心は決まっている。

「……時間がありません。もう4分切ります。……それに、1人じゃありませんよ。シノブ君が居てくれるじゃないですか。……信じてるから、1人で行くのも平気です」

「……キーン……君？」

カッ！

体育館から溢れんばかりの光が迸り、キーンはアシュリアーナへと飛ばされた。

――――アシュリアーナ――――

「あいたたた……。さて、と……どこですかね、ここは？」

毎度の事ながら地面に降り立つ時結構な衝撃が掛かるらしく、キーンは体を擦りながら起き上がる。

ビュンッ！　ドゴッ！！

「ッ！！　おわっ！！」

刹那、キーンの後頭部の辺りを質量を持った何かが掠め、その風がキーンの髪を乱す。キーンは急いで前へ転がる事で回避。地面はその攻撃の質量により破壊された。

「……いきなりなんでしょね！　ビックリするじゃないですか！！」

後ろのモノに対して文句を言うキーン。そこにいたのは……というか、自分を取り囲んでいたのは、最低でも体長が２メートル以上ある兵士達。

「……ありゃ。どうやら魔王軍のど真ん中って奴ですか？」

またの名を『袋のねずみ』。

ゴウッ！　ドドドッ！！

一拍置いた後の連携の取れた剣の連撃。キーンとフーイは紙一重でヒラヒラかわす。

「ッ！　おっと！　……フーイ、ボチボチ行きましょうか？」

『承知……』

「……一・心・合・体……」

剣の軌跡が飛び交う中、わずかな隙を見つけて2人は一心合体を遂げる。光が迸り、巨大な翼を持つ者が現れた。イカズチを操り敵を倒す、風王ズルフェの姿だ。

「行きますよ……」

《雷弾（サンダーブリット）……

そして先手必勝。右手の平に雷を収束させて前方に撃ち出した。

バチッ！！

空気が爆ぜ、鎧を纏う兵士に雷が命中。だが、一瞬怯ませる事しか出来なかった。すぐさま動き出し、ズルフェに剣を振るう。

「ッ！！」（しまった！　敵はどうやら死者（アンデット）……しかも鋼鉄の鎧を付けてる！　……これでは雷が流れて地面に逃げていく！！　それに今度はさっきと違って完成された兵士としての連続攻撃！　……避け切れない！！）

ズシャッ！

「くっ！」

横薙ぎに振るわれる剣をズルフェはバックステップと腕を前に出す事で防御。折り重なるように繰り出される別の兵士による追撃はジャンプをして回避。

そんな中、フーイは風王ズルフェのチカラの基本を説く。

《王よ！　風王ズルフェのチカラの基本は長距離支援型。直接の近距離戦は不得手なのです！》

そんな事は聡明なキーンの事だから分かっているだろう。彼は空中に滞空しながら雷の力を収束して弓矢を作り出した。

「雷のチカラが分散してしまう……。チカラを一点に集中して一呼吸で倒さなくては……！！」

チカラを一点に収束された雷の弓は轟音を立てながら兵士の鎧を貫通する。その兵士は膝を着いて動かなくなるが、まだまだ兵士は残っている状態だ。

第１５話　憧れ以上の人（後書き）

ちなみにこの話で死者の兵というので『学園黙示録』の奴らを思い出してしまいました。どっちもすでに死んでいますからね。

第１６話　なりたい人間（前書き）

何だろうね、『ＩＦ』っていうのを無くしたら書きやすくなった。
……やっぱり自分の書きたいように書いた方が筆が進むのかな？

第16話　なりたい人間

――現実世界――

「ダメだよ！　逃げて！　このままじゃ……やられてしまうよ！　作戦を立て直さないと！！」

そう言いながらシノブはキーを叩く。文字を打つ事で相手に自分の意思と言葉を伝えるのはネトゲの基本だ。だが、キーンはシノブの言葉を聞かない。

――アシュリアーナ――

ズルフェが地上に降りて次の攻撃に備えている時、後ろから剣が振り下ろされる。上から下に一直線。命令に従順な死者の兵だけに、迷いのない太刀筋だ。

《光拳（レイフィスト）》

ズルフェは相手が動く際の空気の流れを感知。後ろの攻撃に反応して自らの拳に雷を収束。正拳突きの要領で兵士の振るう剣へ突き出した。

バギィンッ！

「……ぬう……」

剣を砕いたは良いが、その代償としてズルフェの拳、右手人差し指と中指が砕けた。キーンはその痛みに一瞬顔を歪ませて呻いたが、それでも前を見据えて不敵な笑みを浮かべる。

「……さぁて……まだまだですよ。かかってらっしゃい」

――現実世界――

「……キーン君……どうして……逃げてよぅ……」

弱々しい声。そして懇願。シノブが涙を流しているのは、もし友人であるキーンに何か遭ったらという恐怖と、自分には何も出来無いという無力感からだろう。

――アシュリアーナ――

そしてアシュリアーナでは、そのシノブの言葉が聞こえたかのようにキーンが言葉を発す。

「……まったく、この行動、私らしくない。……理論的じゃないね。

……でも、憧れ以上の人になるためにも、逃げる訳にはいかないのです……。――」

ズルフェの拳はその言葉と共に硬く握り締められる。その力で自らの拳にヒビが入るほどに強い力で。

「――自分のためじゃなく、誰かのために闘って……何度倒れても……もう一度立ち上がって前に進む。……そんな人を、私は知ってるんですから……。私が憧れてなりたいのは魔術師。……でも、それ以上に尊敬し、なりたい人間は、何度傷を負っても誰かのために立つ斉木（さいき）　陽太（ようた）のような誇り高き者！！」

だからこそ、キーンはシノブの言葉を聞かなかった。自分が尊敬できる人間になるために。

――現実世界――

ドクンッ

キーンの言葉。それはシノブの心に響き、彼の足を立たせた。

「……憧れ以上の……尊敬すべき友達……。誰かのために闘う……誇り高き者……。そう……だよ。そうだよね！」（カッコ良いとか……凄いとか……そんなの後で分かる事だよ！　誰かのために一生懸命なキョータ君やキーン君だから凄いんだ！）

シノブは己が拳を固め、ある方向に向かいだした。体育館に必ずある用具室だ。

「確かこの中に……でも危険防止に固く閉めちゃってある！」

目標の物は見つけたが、それは鍵で施錠されている木箱の中。シノブは開けるために上に付いている金具をしっかり掴み、上に引っ張った。

（……ボクだって……ボクだって……！）

メキメキメキメキッ……ブシュッ！

力に皮膚が耐えられず、シノブの細い指から血が吹き出す。それでも、シノブは力を緩める事はしなかった。

「痛ッ！　……諦めないぞ……ボクだって……勇者の1人なんだ！！」

バギィンッ！

「ッ！！　やった！　開いたぁ！！」

鍵は壊れ、木箱が開く。中には黒い球が6つ入っていた。

「陸上の砲丸！　これなら雷を集中できる！！　キーン君に届けぇ

！」

シノブは力一杯砲丸を投げた。砲丸は地面に落ちた後ゆっくりと、しかし、それでも確実に進む。そしてとうとう、フーイの腕に触れた。

――――アシュリアーナ――――

バチッ！

「ッ！！」

《王、外より援護が届きました！》

ズルフェの手の平に雷が迸り、キーンは若干驚く。だが、フーイの言葉で笑みを浮かべる。そして、空高く舞い上がった。

「シノブ君ですね！　ナイスパスです！！」

砲丸を使っての武装合体。それは質量を持った雷となる。

《雷砲弾（ライトニングシェル）》

炎を纏って地球に激突するのが隕石なら、その攻撃は炎の代わりに雷を纏った隕石だ。実質的な質量を持っているから、鎧を砕き、打ち倒すには絶好だ。

ズゴゴゴゴッ！！！

雷を纏った剛球は地面に激突した後周囲に雷を放つ。まるで、隕石落下時の衝撃波のように。高圧の雷と衝撃波を受けた兵士達は粉々となり、黒炭（くろずみ）となった。

キーンは空中からそれを眺め、口を開いた。勝利した事への笑顔と共に。

「どうです？　良いパスから生まれるのは良いシュートです。これが本当の魔導ダンクシュートですよ」

スゥッ……

そして、風王はアシュリアーナから姿を消した。翼を持つ魔導師は空の青に消えていく。

――――現実世界――――

カッ！

体育館に再び光が迸り、キーンとフーイは帰還した。ズルフェの状態で負った傷は無い。おそらく、一心合体している時はキーン自

体が素体（フレーム）となっているため、現実世界では表立った傷にはならないのだろう。

「どうやら帰還できましたね。魔術士らしい鮮やかな闘いでしたよ♪」

「キーン君！　無事だったんだね！」

「当然です。ボクに失敗など有り得ませんね。さぁ～握手♪」

キーンは友好的に手を差し出し、シノブは相変わらずのキーンっぽさに苦笑いを浮かべながら握手に応じる。

「はは……。流石だね。……ッ！　痛っ！」

手を握り締めた途端に顔を歪ませて痛がるシノブ。キーンは急いで手を離し、シノブの手の平を見た。

「ッ！　どうしたんです、手が血まみれじゃないですか！」

「えへへ……包含出そうと思ったんだけど……すごく硬くていっぱい切っちゃった」

シノブは俯いた状態で恥ずかしそうにそう言い、顔を上げて自分に対して苦笑い。

「やだなー。キーン君と違って凄くカッコ悪いね、ボク」

「全くですな♪　落ち着いてやれば怪我もしないのに～」

キーンは「ぷぅ」とやれやれと言わんばかりにため息を付くが、その表情をすぐに笑顔に変える。

「でも、どんなにカッコ悪く思えても、その怪我はボクのためにし

てくれたモノなんですよ？　他の誰が笑っても、僕にとってシノブ君は尊敬できる人です。……助けてくれてありがとう。……シノブ君」

そして、再び2人は握手を交わす。

「おりょ？　2人とも何やってんだ？」

その声はキョータだ。体育館の入り口から奏と共に駆けて来る。

「怪我大した事無いから片付け手伝いに来たぜ！」
「キョータ君！」

キーンはキョータに気付き、彼に声を掛けた。一方、キョータはシノブのパソコンが開いている事とフーイがカバンの外に出ている事に気付いた。

「なんだ？　なんかあったん？　フーイも居るし、パソもついてんじゃんか！」

それに対し、キーンとシノブは一瞬顔を見合わせ、対照的な笑顔で返した。

シノブの方は子供らしい無邪気な笑顔で。
キーンの方は口を左右に三日月風に引き伸ばした不気味な笑顔で。

「「何でも無いですよ♪」」

そこまで息ぴったりに言われると余計に気になる。キョータはキーンとシノブに詰め寄ろうとするが、2人はそそくさと逃げた。

「なんだよぉ！　教えてくれよぉ！！」
「動いちゃダメー！」
「だから何でも無いって言ってるじゃないですか～♪」

上からキョータ、彼の傷を心配する奏。ふよふよと浮きながら逃げるのは気のせいだと思いたいキーンの順だ。シノブは苦笑いを浮かべながらキーンと一緒に逃げている。

（……風王ズルフェ。……予想以上に強いチカラと心を持っている……。上手く事は運んでいるという事だ……）

ゼンが居るのは体育館の外。体育館に背を向け、日陰に立っていた。

（……良いだろう。勇者の友よ。皆でチカラを合わせ、勇者を強くするが良い。……誰よりも……業魔王よりも強くなるが良い！！）

ここから、ゼンは心の中の『言葉』を『音』を伴う声にして『放つ』。

「その時こそ、オレが勇者を殺して目的を達成する。勇者という存在が無意味な幻想だと証明するために、オレはここに来た……」

――――アシュリアーナ――――

「……さぁ、着いたよ」
「……ここ？」
「そっ」

黒髪の少年と幼い少女が辿り着いたのは、静かな街の入り口。２人が歩き出そうとした時、上から声が掛けられる。さも呆れたような声だ。

「また連れてきたのかよ、お前」
「ッ！　帰ってたのか、キサヤ」
「あぁ、つい昨日ねっと！」

街の入り口の木の上には見張り台があり、キサヤは水色の髪を靡（なび）かせながらそこから下りてきた。
キョウはほとんど恒例行事のような自然な流れでキサヤに問う。

「成果は？」
「今回は無し。狙ってた呪符を奪い損ねてね。……言っとくが、その後別の奴から頂いたぜ？」

キョウが「珍しいな」という好奇の目で見ていたからだろう。キサヤはムッとした口調で続けて見せた。キョウはその態度に笑いを堪えるように腹を押さえる。

「くっくっく……そうかい。流石風神の異名を持つ盗賊だ。……あぁ、そうだこの子――」

クリーム色の髪をした少女、ジアがキョウの裾を引っ張ったというのもあるだろう。キョウはジアの存在を思い出し、彼女の両肩に

手を置きながらキサヤの方を見る。

「んで、この子ジアっていうんだけど」

「へぃへぃ。引き取れって言うんだろ？　分かったよ。……その代わり――」

「あー！　キョウ兄だ！」

キサヤの言葉を遮ったのは小さい男の子の声だ。村からテテテテッと駆けて来る。そりゃ、キョウが暗めの紺のローブを着ていれば嫌でも目に付くだろう。

キョウが子供2人に互いの自己紹介を促している間に、キサヤは先程言いかけた言葉の続きを言う。ニヤッとイタズラっぽい笑みで。

「――ちゃんとこいつ等と遊んでやれよ？」

キサヤは盗賊。キョウは1つ所に留まれない流れ者。孤児達にとっては寂しいだろう。だからキョウは立ち寄れる時、なるべく子供達と遊ぶようにしている訳だ。

キョウは苦笑いを浮かべるとジアと男の子から顔を上げて返した。

「それこそ分かってるよ。……明後日の朝には離れないといけないけどな」

「そうか。それじゃ、帰るぞ、ロン。……そして、ジア？」

「ッ！　……うんっ」

名前を呼ばれた事に嬉しそうに頷くジア。名前を呼ぶのは、そのモノをそのモノとして見るという事。家族や親しい間柄なら普通の事だ。……そう。だからジアは名前を呼ばれて喜んだのだ。家族だと認められたから。

ジアはキサヤと、ロンと呼ばれた少年はキョウと手を結んで街へと歩いて行く。それははたから見ると、家族のようにさえ思えた。

（……ツバサ……）

「……ん？」

「？　どうしたの？　キョウ」

突然立ち止まって後ろを振り向くキョウを不思議そうに眺めるロン。キョウは首を傾げながら握っている方とは別の手で自分の頭をくしゃくしゃと掻く。

「……いや。……何でも無い。多分気のせいだ」（……こんな所にアイツがいる訳無いもんな）

見られているような気配を感じて振り向いたのだが、そこには誰もいない。同時に声も聞こえたのだが、彼の中で、その声は空耳として処理された。

第１６話　なりたい人間（後書き）

あ～段々ＳＥＣＲＥＴＳＴＯＲＹとのコラボ点が増えていく～。
今回の最後の空耳は流星の方ではしばらく後です。

次は『流星のロックマン　ＳＥＣＲＥＴ　ＳＴＯＲＹ』の更新を予定しております。

第17話　パルダリス

――――傭兵王国クルダ――――

「まぁーったく、恥ずかしい話よねぇ？　……ジュ～リ？」

一国を治める王に対してこのような口を利く国民などそうそういない。それもそのはず。今ジュリの前に居るのは自分と同等の地位に居る者なのだから。

呆れを含んだ猫撫で声を出す業魔王四天王の一角、コユキはその口調を崩さず、ジュリに畳み掛ける。

「なぁにが無敵のクルダ傭兵なのよ？　間抜けー！」

勝気なジュリが押し黙っているのはコユキのテンションに押されたからでも、部下が倒されて落ち込んでいるからでもない。ジュリ自身の心の器量だ。己が非を受け入れる事が出来ずに、人の上に立てる訳が無い。そんな指導者で成り立つ国ならば、いずれ内側から崩れるのが関の山だ。

また、謁見の間にいるのはコユキとジュリだけではない。護衛もいない（というか、ジュリの実力から考えて護衛など不要だろう）。……いや、『元』部下。と言うべきだろう。コユキの側面には、木の棺に納められたジュリの部下、『フィスト』が納められていたのだから。

頭部、胴体、腕。それらが切断され、見るも無残な状態だ。

コユキはフィストの頭部を手に取りながら言葉を続けた。

「クルダの傭兵は絶対無敵とか言われてるらしいけどさ、あんなガキンちょ1人にやられちゃうなんてね～♪　傭兵王国クルダなんて、ちっとも強くないじゃん！」

ヒュンッ！

フィストの頭部がコユキの手から離れて宙を舞い、緩やかな放物線を描いてジュリの元へと向かう。コユキがフィストの頭部を投げたのだ。

……バシッ！

「……ふん！」

ジュリは憮然と鼻息を鳴らしながら右手でそれを受け止め、対するコユキは咎めるように眉を顰めた。

「……大体、クルダ王であるアンタが勝手に部下を動かしたからこうなったんでしょ？　共同戦線だって話だったから手助けに行ってやったのにさぁ、着いたら戦闘は終わってるし、アンタの部下はやられてバラバラだし……洒落にならないわよ！」

コユキはあらかた言いたい事を言ったらしく、ジュリに背中を向けて首から上だけを振り向く形で右手を挙げる。……もしかしたら、この説教には日頃の鬱憤晴らしも兼ねていたのかもしれない。

「しっかりしてよね！　別にアンタやアンタの部下がどうなったって良いけど、私達四天王が負けるっていう話は面白い話じゃないのよ。分かってる？　――」

コユキの双眸に陽光が入り、妖しく光る。ニヤッと猫が妖しく微笑むように。

そんな表情で、コユキはジュリに笑みを送る。

「――人を支配してる人間ってのはさ、負けちゃダメよ♪」

彼女の言葉の意味は明確だ。

人を統べる者、人の上に立つ者、その対象より上だと自負する者。

……いずれにせよ、負ける事は許されない。勝って当然だからだ。

実質的に立場の違いがあれ、誰かを自分の価値基準で一方的に見下しているのであれ、己がプライドであれ、それが本気ならば、勝たねば己の正しさを証明できない。国を治めるものならば敗北の先に待つのは吸収や植民地化。個人レベルならば、威厳の損失。

「……あぁ。……分かってんよ」

ジュリはそれだけ言い、後はフィストの頭部をジッと見詰める。

「分かれば良いのよ～♪　じゃ、私帰るねぇ～♪　ダレスの所に遊びに行っちゃうのよ～！」

……そうしてコユキは上機嫌で帰っていった。その速さは大好きな魚を求めてダッシュする猫の如く。……さっきまでの真剣味はどこへやらだ。

「……人を支配する者は敗北しない無敵の存在……」

ジュリの言葉が部屋に響く。静けさの中に激情を潜める、そんな声。彼は目を閉じた状態で言葉を続ける。

「クルダの傭兵は絶対無敵。クルダ王も……その部下も……一度だって敗北はしちゃならねぇ……。一度でも負けたら――」

ジュリの右手に力が込められ、フィストの頭部がメキメキメキッ……っと悲鳴を上げる。そして次の瞬間、バキィン！という乾いた音と共にフィストの頭は粉々に粉砕。大小の破片が床に落ちた。

「――無敵は名乗れねぇ……」

そこで開かれたジュリの瞳。そこに宿るは怒りだけではない。己だけではなく、クルダという国そのモノのプライドを傷付けられた事による感情。その瞳は、怒りと呼ぶにはドロドロしない純粋さを持ち、気高さよりも荒々しいそれだった。

「無敵の名を取り戻すために、どうあっても勇者を殺す」

ジュリは紙に文字を連ね、部下を呼ぶ。

「パルダリス、出番だ」

『……はい。ジュリ様』

部下は例によって頭から足まで白い布で覆った状態。ジュリはその紙を大布を被った部下に渡した。

「この手紙（メール）を至急お前の主に届けろ。……最重要でな。お前のチカラを上手く使えさえすれば、勝機はこっちにあるぜ」
『御意……』

――九州地方――

所変わって現実世界。長崎県の某マンション。

「メール？　……緊急の召喚状か……」

パソコンの持ち主が席に着く。デスクトップ型のパソコンで、受信箱には新着メールが届いていた。パソコンの持ち主はメールに添付された画像（ターゲット）を確認する。

「しょうがない。……行くか。倒すべき標的（ターゲット）はこいつ……。焔の邪妖精、ボボウ！」

――神奈川――

一方その頃、キョータとカナデ、ボボウとシャララはキーン宅を訪れていた。

「……そっかー。この間の体育館で戦闘があったのか……」

先日、キーンとフーイ、そしてシノブで乗り越えた戦闘の事を聞

きに来たのだが、それはあくまで『ついで』と言えるだろう。本来の目的は別にある。

「学校2日も休んでるからどうしたかと思って見舞いに来たけど――」

「物凄く重症に見えるよね……」

キョータの言葉をカナデが引き継ぐ。無理も無いだろう。目の前で横になっているキーンはベッドに寝ていない。勿論布団でもない。棺桶だ。ミイラが安置されていそうな棺桶の中に、包帯でグルグル巻きにまかれたキーンが横になっている。手は交差されており、本物のミイラのようだ。……キーン風に言えば、『魔力充填中』といった所だろうか。

ギィィイイイッと鈍く、人に不快感と不気味さを与える音と共にキーンは起き上がり、キョータに言葉を返す。

「もう大丈夫ですよ。……ずいぶん体力が溜まりました。明日には学校行けますよ」

「体力って……その前にミイラと魔法使いって全然関係ないじゃん……？」

キョータのいつもの呆れを入れたツッコミ。手首から先をパタパタと振って『ないない』という仕草を取る。と、このままでは話が逸れてしまうため進路修正。キョータは怒ったように唇を尖らせる。

「それより戦闘があったんなら呼んでくれよな！　心配すんだろー！」

「もーし訳ない！　でもタイムバトルだったんですよ。呼びに行く時間が無かったんです」

そう言いながらキーンは自分の体にグルグルに巻きついた包帯をリボンのように解く。……新体操の選手か。

リボンが解けて寝巻き姿が露になったキーンに、キョータは「そうだけどさぁ……」と声を濁らせながら言う。

「……知らない内にキーンが怪我してたら……オレ、ヤダよ……！」

「……キョータ君……」

それは素直で真っ直ぐなキョータなりの思い。対するキーンはキョータの言葉を深く噛み締めるように反芻し、

「では、我が魔力でボクと同じダメージをキョータ君に与えましょう！」

「それ訳分かんねぇぞ！　意味ねぇぇえええ！！」

キョータ、キーンを指差しての本気の指差し。

プンスカモードのキョータに対し、キーンはニヤッと笑いながら肩を竦める。

「冗談ですよ。……それよりキョータ君、一心合体した時は気をつけなくちゃいけませんよ！」

「……？　……気をつけるって……何を？」

「前回ボクは1人で戦闘には勝ちましたけど、自分も大きなダメージを受けました。そのダメージはこっちの世界に戻っても残っていたんですよ。……体力を失って風邪を引いちゃったみたいです」

その言葉に、カナデは不安そうに眉を下げた。

「……じゃあ、もしたくさんやられちゃったら……どうなるの？」

「おそらく、ダメージが大きければその分体力もたくさん失います。

……自分の体力以上のダメージを受ければ、その時は大怪我をするかも――いや、最悪の場合、死んじゃう事だってあるかもしれません！」

……一心合体をしている間は『人』の肉体ではなく、素体（フレーム）として在る。故に、指や体の一部が砕けたりヒビが入っても、端的に、かつ冷徹な事を言えば、おもちゃにヒビが入るのと同義だ。しかし、そのダメージが現実世界に帰った時に無くなってましたなんて、都合の良い事にはならない訳だ。

そしてその事実により、キョータ達に改めて自分達の踏み込んだ事の重さを理解した。その事を口に出したのはキョータである。

「……そうか……。オレ達がやってるのは本当の戦いなんだから、やり直し（リセット）はないんだ」

そして、子供達を戦いに巻き込むキッカケになったボボウは責任を感じて泣き出してしまった。

『オイラ……キョータ達にすっごく大変な事頼んじゃったんらね……。皆の事考えないで……オイラは……オイラは……っ」

そんなボボウの様子に気付いたキョータは真剣な顔から穏やかな笑みへと変えてボボウの鼻先を指で突付く。ボボウを安心させるためだ。

「忘れちゃったのか？　ボボウ。オレ、ボボウに約束したろ？　オレに出来る事ならなんだってするって！　それはボボウに無理に言われたからじゃないぜ。困っている人や壊れていく世界を救うために、オレが自分でやるって決めた事だ！　誰に言われてじゃない。オレは、自分の意志で勇者になるって決めたんだ！！」

キョータの力強く、明るい言葉に、キーンとカナデも同感だと頷く。

「そうですよ。ボクも好きでやってるんですからね！」

「私もよ、ボボウちゃん」

『み、みんな……ありがとうなのら！　アシュリアーナの人達も皆そう思ってるのら。きっと……きっといっぱい【　ありがとー　】って言いたいのら！　……オイラ……皆の代わりに言うのら』

目元に先程とは違う『涙』を浮かべたボボウはそう言うと、キョータ、キーン、カナデの３人に、順々に頭を下げる。

『ありがとうなのら。ありがと。ありがとう。……ありがとうなのら……』

キョータはそんなボボウを腕に抱き、優しく頭を撫でた。

「……もう良いよ、ボボウ。……あっ、そうだ！　キーン、シノブからお見舞いだって！　シノブ、今日家の用事でどうしても来れないんだって。でも、お見舞い預かって来た」

そう言ってキョータが取り出したのは茶色の巾着袋だ。キーンはそれを受け取ると左手で中を探り始めた。

「ほほぅ。何でしょうね。……魔法グッズかな？　ッ！　これって……携帯ゲーム機！」

さらに細かく言えば、ゲームボーイアドバンスだ。

キョータはキーンに断ってからゲーム機を借りて、そのソフトを

起動させてみる。

「見ろよ！　このソフト……フェアプレイズだぜ！　これで出来るのかな？」

「うーん……。パソコンソフトじゃなくてこういうソフトになるのは良い事ですが……いつも通りアシュリアーナに行けるんですかね……？」

「そっか……。どうなんだろう？　容量違うしなぁ……」

キョータとキーンが「うーん」っと唸り、カナデも声に出す事は無いが考えているらしい。

キーンは少し悩んだ後、気持ちを切り替えるように息を吐き、口元に面白そうな笑みを浮かべながら兄から送られた魔導書を取り出した。

「……まぁ、そんな時は確かめれば分かりますよ」

「そうだよな！　ボボウに頼んでこのゲーム機で行けば良いんだ！」

キーンの言葉に納得した様子のキョータに、キーンはあの魔術師っぽい怪しげな笑みを浮かべて頷いた。

「その通り！　それではさっそく――」

「あ！　ダメだよ！　キーン君まだ元気じゃないんでしょ？　今回はキョータ君と私で行った方が良いと思うな」

カナデは体力の戻っていないキーンを気遣い、ウインク込みで立候補。彼女のパートナーたるシャララも、

『まったく、しょうがないわねぇ。手伝ってやるわよ！』

と、口の割りに上機嫌でＯＫを出した。一方、キーンは不満そうにため息を付く。

「ちぇー。……でも確かにカナデさんの言う通りかも。……じゃあボクはシノブ君の役ですね」

「ああ！　頼むぜキーン！　よぉし！　ボボウ！　行こうぜ！！」

『うー。分かったのらー！』

「ッ！　本が光った！　これなら――」

キーンの持っている本から光が迸り、彼の言葉が最後まで言い切る前にひときわ激しい光を伴ってキョータ達は異世界へと飛ばされた。

２人が消えたのを確認したキーンはゲーム画面の方に顔を向け、安心したような笑みを零した。

「……消えた……。やりましたよ！　画面にも映ってます！　成功ですよ！」

――――アシュリアーナ――――

例によって地面に強かに打ちつけたらしく、キョータとカナデはゆっくりと上体を起こした。

「うまく……いった？」

「……みたいだな！」

キョータは自分の頭を擦りながらもカナデの言葉に答え、彼女に

手を貸しつつ自分も立ち上がる。

「……でも……ここはどこなんだろ？」

周りは静かで、キョータとカナデ、ボボウとシャララがいるのは町の入り口らしい。近くに木が生えており、ちょうど木陰の位置だ。周りに人影は無く、心許ない。

どこなのだろうと口にしたキョータ。その疑問に答える者が居たのだが……。

「傭兵王国クルダが治める町の１つ。キリガの町だよ」

「ッ！！　うわっ！？」

なにぶん予想外の場所から教えられて驚いてしまった。上からだ。キョータとカナデ、ボボウとシャララが驚いている中、その声の主は声と姿を同時に現した。鉄棒にするように、足を支えに木からぶら下がっている。

「こんな所で何してんだよ、お前等」

「キサヤ！」

紅い瞳に水色の髪。短パンで後ろ腰に曲刀を備えている女盗賊、キサヤだった。

第17話　パルダリス（後書き）

作中に出てきたＧＢＡですが、時代からしてそれが妥当だったんですよね。本誌、というか原作でも、この頃２０００か２００１年くらいでしたし。

……って、この作品自体知っている人が少ないだろうから、見てくれている方が少ないってのはちょっと寂しいですかね（苦笑）。

では、次話もお楽しみに！

第１８話　キリガの子供達（前書き）

物凄く遅れてすみません。……待たせた身で言うのは何ですが、資料用の本が届いたのでここからはスムーズに書けるかと思います。

第１８話　キリガの子供達

キサヤの歳はおおよそ１５，６と幼いが、『風神』という二つ名を持つほどの技量を持っている。……だが、何故に木の上から現れたのか。それも、横に伸びた木の枝に、膝を支点にしてぶら下がっている状態だ。

「……キサヤこそ何してんだよ？　何で木にぶら下がってんの？」

冷静になったキョータの問いに、キサヤは手で木を掴んでから足を離し、そのまま地面に着地しながらキョータの問いに答える。もちろん尻餅を付くなんてアクシデントは無い。しっかりその両足で着地した。

「ぶら下がってないって。木の上に居たんだよ。……上、見てみなよ。ここならなら分かるはずだよ」

キサヤが促す視線の先には、壁がなく、骨組みと屋根で構成された小屋が在った。キサヤはその小屋を指差し、それが何かを教える。

「ほら、木で隠されてるけど、アレ、見張り台なんだ」
「見張り台？」

見張り台。それは敵意のある者が接近してきた時、護りたい内側に警鐘を鳴らす役目。穏やかな響きはしない。

キョータの問いにキサヤは答えようとしたが、町から響く声で遮られた。幼い、女の子の声だ。

「……キサヤ……」

声のした方を向くと、白い、ふわふわしたクリーム色の髪の女の子と数名の男女が立っていた。いずれも子供だ。おそらく、大きい子でも7歳がいい所だろう。

そして、今度は別の子が尋ねてきた。

「その子達も僕達の新しい仲間？」

「また……どこかの町が襲われたんだね……」

それぞれ違う男の子の言葉の次、クリーム髪の女の子は優しい笑顔でキョータ達に微笑みかける。

「ここは安全だよ？　皆で一緒に暮らそう」

「違うよ、ジア。こいつらは……ボクの友達さ」

キサヤはそう言って自分に親指を突きつける。クリーム髪の少女の名前はジア。そしてキサヤが迷ったのは、どう説明しようか迷ったからだ。いきなり『勇者だ』なんて言われるのも驚くだろう。

キサヤはチラッとキョータとカナデを見る。自己紹介は自分でやれとの事らしい。その事を理解した2人はキョータ、カナデの順で自己紹介する。

「あ……ああ。オレ、斉木　陽太。略してキョータ」

「こんにちは。私、琴井　奏。カナデって呼んでください」

2人が自己紹介を終えた後、一通り子供達の自己紹介が終わった所で、キサヤは両手を横に広げて子供達に話しかける。

「ほーら！　自己紹介が終わったら皆家に入りな！　外は危ないんだから！　魔王軍に襲われたらまた逃げなくちゃならないんだぞ？」

……まぁ、そうは言っても小さい子というのは好奇心旺盛なもので、自分の気になった事からは中々離れない。

「キサヤ……。この子達って……」

キサヤは最初もう一言子供達に「帰れ」などと言おうとしたのだろうが、キョータの言葉でそれは防がれる。それだけの意味が、キョータの問いにあるのだろう。現に、キサヤの表情はやや曇り、彼女らしくない静かな口調で言った。

「……魔王軍に親を殺されて……身寄りが無くなっちゃった子供達だよ。こんな時代だからね。大人だって生きるのが精一杯。だったら子供だけでも生きていけるように、命を懸けて一生懸命頑張って生きるんだ」

「じゃあ、キサヤさんが皆を引き取って育ててるの……！？」

カナデの驚きながらの問いに、キサヤは風が囁くような静けさで、

「ふっ」と息を漏らしながら笑う。

「違うさ。ボクは子供達がコレから先1人でも生きられるように手伝ってるだけだよ。……誰かに頼らなくても生きていけるように、そのやり方を覚えるまで先生役をしているんだ。ボクは子供だって事を言い訳にしない。子供だって、立派に生きられる1人の人間だからね」

それを言い切ったキサヤの表情は、一方的に子供を護るような親でも、仕方が無いからという嫌々な顔でもない。下の子を想い、色々な事を教えようとする姉の顔だ。

「そうだよな！　頑張れば大人だって子供だって関係ないもんな！」

それはキョータの言葉。キサヤは「ああ！」と頷き、クルッとカナデの方に視線を移す。

「まあーでも、相当頑張らなきゃダメな奴もいるけどなぁ～。お前みたいにぼーっとしてる奴は特にな」

カチンッ！

……カナデは苦笑いで済んだので、その『怒りぷっつん』の音は彼女のものではない。彼女の腕に抱かれた金魚バチの中に入ったシャララだ。

シャララは怒り心頭なご様子でキサヤに喰って掛かる。

『ぬぁんですってぇ！！？　ちょっとあんた何様ぁ！？　カナデは私の主なんですからバカにすんじゃないわよ！！　＝（イコール）、それは私をバカにしてるって事になるのよぉぉおおおおおお！！！！！』

「シャ……シャララちゃん。そんなに怒らないでも……」

カナデはそう言って何とか穏便にしようと思ったのだが、キサヤの次の発言でその努力は灰燼（かいじん）と成す。

「何様って……お前こそなんだよ？　魚か？」

『人魚じゃあ！！』

シャララの音速のツッコミ炸裂。……いつの間にか周囲に町に隠れていた子供達が周りに集まってきた中、キョータの懐から『トゥルルルル』という異音が鳴る。

「んお？　……で……電話？　っていうかケータイ繋がんの……！

？」

そう。キョータのポケットで鳴っていたのは彼のケータイだった。液晶に表示された名前を見る限り、電話を送ってきたのはキーンらしい。

「キョータ君！？　聞こえますか？」

電話の向こうのキーンの声はどこか焦っているように思えるが、キョータもキョータとてまさか通じると思っていなかったためビックリ仰天でキーンの様子に気付かなかった。

「キーン！　これ現実世界から繋がってのかあ！？」

「いや～まさか繋がるとは思いませんでしたよ。これも我が魔力のおかげ～～～」

とまぁ、ギャグから入るのはキーンらしいと言えばらしい。だが、先程言ったようにキーンの声色は焦っていた。それは、それ相応の理由があるという事。

「緊急で話をしたくてダメ元で電話したんですよ！　キョータ君……今、周りに誰か居るんですか！？」

「誰って……キサヤと友達の子供達だけど……。見えてないのか！？」

そのキョータの返事を聞いたキーンは心底驚いた様子で返事を返した。

「子供！？　……そんな風には見えませんよ！！　どう見たってコレは……怪物（モンスター）ですよ！！」

「なんだって！？」
「……もしかしたら、これが業魔王の掛けた呪いなのかも……。たぶん、本のチカラでキョータ君達はモンスターに見えないんですよ！　でも……本のチカラが届かない現実世界のゲームプレイヤーには――」
キーンの推測。彼の言おうとしている事を察したキョータは思わず叫び声を上げる。
「現実（オレたち）の世界からはアシュリアーナの人達が……怪物（モンスター）に見えている！？」
「キサヤさんは僕達の知り合いですから……本のチカラが届いて普通に見えるのかもしれませんが、現実プレイヤーから見れば、アシュリアーナの人は……倒して経験値を稼いでレベルアップするための遭遇怪物（エンカウントモンスター）でしか無いんですよ！」
「……だから……プレイヤーはアシュリアーナの人達を襲うのか……」
そう呟いたキョータの記憶に在るのは、先日の戦闘。鉄球の様な拳を持つクルダの戦士、フィストとの戦闘だ。
だからこそ、フィストが町を襲っていた時、町の者はキョータ、つまりザラマンデルを恐れたのだ。彼らにとって素体（フレーム）とは、自分達の命を脅かす存在でしかなかったはずだから。
キィンッ！　ドゴォッ！
天から1つの光が降ってきた。眩しい光。キョータ達がアシュリアーナに来る時と似た光。その中から現れたのは、頭から全身を覆う布を被ったモノ。
キョータは静かにケータイに声を吹き込む。目は鋭く、目の前の

敵に向けられて。

「……キーン……。電話切るぞ。……戦わなきゃならないみたいだから。……オレ達の世界から、世界と人を壊す奴が来た！」

プッ……。

……短い音と共に、通話が切られた。

第１９話　雨に立つ者

キリガの町の入り口に現れた白い布を被ったモノ。それが意味する事は明白だった。

「ッ！　魔王軍だ！！　皆町に逃げろ！　家に入って、絶対外に出ちゃダメだぞ！！？」

子供達の悲鳴とキサヤの避難を促す声が走る。

魔王軍の襲来だ。

「ボボウ！　行くぞ！！」

『分かってるのらっ！！』

子供達とキサヤが町に向かう中、キョータとボボウは反対に前に出る。なお、カナデは半ば無理やりキサヤに肩を掴まれて子供達と一緒に避難する形となる。

「『　一心合体！！」』

焔と光が２人を包み、龍騎士を思わせる紅き戦士、炎王ザラマンデルの姿が現れた。

「変身したぁ！」

子供達は思わず立ち止まり、驚いたり脅えたり興奮したりと様々な反応を取る。……興奮ってのは言うまでも無く男の子だ。結局子供達はその様子に見入ってしまい、足を止める事となる。

キサヤは、子供たちを無理やり動かすよりその場で護った方が良

いと判断したのだろう。静かにため息を付き、戦況を見詰める。

（ふぅ。……ったく、こういう時にいなくなるってどういう事だアイツ！）

キサヤが思い浮かべたのは1人の少年。何かしらの理由があって1つ所に留まれないらしく、朝早くにキリガの町を後にしたのだ。実力は高く、自分だけでは『護り切れないかもしれない』子供達を『確実に護り切る』という所まで昇華出来る者。……だが、いないという事実は変わらない。文句を言っても始まらないし、相手にも事情があるのだろうが、それでもこういった窮地では文句の1つも言いたくなるだろう。

「おおぉおおおお！！！」

一方、ザラマンデルは先手必勝。焔を纏った拳、炎撃（ファイアブロー）を目の前の白布兵士に叩き込む。……だが……。

「ッ！？」（変だ……効いてない！　……炎が全部吸い込まれてる！！）

そう。ザラマンデルの炎は相手を苦しめず、目の前の白布に吸い込まれているのだ。……いや、その炎の動きはどっちかと言うと、『同化している』と言うべきだろうか。……だが、外側を覆う布はただの布だったらしい。白い布は燃え、中から闘士の姿が現れる。全体的なカラーは黒と紫。尻尾に炎を纏わせている獣……『豹（ヒョウ）』を思わせる形状だ。

「ちぃっ！」（何だコイツ！　人型じゃない……獣だ！　しかも炎を纏ってる！）

それはザラマンデルにとっていい状況ではない。アシュリアーナという世界は結局の所ロールプレイングゲームの中の世界なのだ。『属性』や『相性』というのも存在する。キーンとフーイの雷が土属性たるアンデッドに効かなかったのと同様に、同じ属性なら――。

（俺と属性が一緒だ……！　攻撃力が半減する！）

――長崎県・長崎市――

「よーやく見つけた♪　邪妖精ボボウ」

デスクトップ型のパソコンの前には現在ザラマンデルが相手取っている豹型の素体が置いてあった。それはつまり、その少女が豹型素体の持ち主だという事。

歳は１２から１４くらい。髪は長く、前方の髪は４つの三角形の髪留めで左右に２つずつ分けて留めている。

手に持っているのはゲームのコントローラで、有線でパソコンと繋がっている。

「こいつを倒せば、フェアプレイズの世界ランキングがまた上がるわ！　ついでに周りのモンスターもやっつけて経験値もゲッ～～～ト！」

そう。彼女のパソコンのディスプレイには右手に剣を持った狼っぽいモンスターが映っている。アシュリアーナの子供達は、現実世界からはそう見えているのだ。

少女は髪留めを1つ外しながら続ける。

「さぁー武装合体しましょうね、パルダリス～～♪　ボボウはお前と同じ火の属性。攻撃力はお互い半減しちゃう。そうなったら、運動性能に優れる獣型素体（ビーストフレーム）の速さにはついて来れないわよ！」

髪留めは豹型の素体……パルダリスの口に銜（くわ）えられる形で装着された。それが意味する強化は……。

「……獣型素体の速さを見せてあげましょう！」

――――アシュリアーナ――――

パルダリスの口には、斧が銜えられていた。向かって左側は短く、右側が長い。炎を帯びたブレード。

刹那、パルダリスの足が動く。その脚力が弾き出すスピードは速く、一筋の黒き疾風（かぜ）となってザラマンデルを襲う。

ビュゥウウウ……　ガギィィンッ！！

「ぐぅ！」（速い！　追いつけない！！）

その刃はとっさにガードしたザラマンデルの拳を裂く程の威力。それなりの強度があれば、速さを上げる事によって激突時のダメージは上げられるのだ。

ザラマンデルがパルダリスの方を向いた直後、第2陣が襲う。今度はガードする暇すらない。

「ぐぁあ！！」

今度の一撃はザラマンデルの翼を切断した。どうやら高速戦によるヒットアンドアウェイがパルダリスの基本戦法らしい。相手を翻弄しつつ、確実に相手にダメージを溜めていくのだ。

ザラマンデルの四肢が裂かれ、砕かれていく現状を目にしたカナデは足を前に進めるが、キサヤによって肩を掴まれて止められた。

「キョータ君！　た、助けなきゃ――ッ！」

「何言ってんだ！　危ないから下がれよ！！　ボクだって目で追うのがやっとなんだ！　お前みたいなとろそうなヤツが行ってどうする！？」

「……ッ！　待って！　キサヤさんには見えるの！？」

「風神の名は伊達じゃない！　見えるよ。……でも見えたって……キョータの手助けなんか出来ない！　アイツを足止めする力なんてボクには無いよ！」

確かに、キサヤは普通の人間だ。身のこなしが速く、それでいて常人より高い動体視力を持っていたとしても、1対1では……いや、ザラマンデルと組んでも、相手の意識をそらす事しか出来ないだろう。

だがそれは、キサヤとザラマンデルだけならの話。

「出来る！　私には、そのチカラがあるの！」

カナデの言葉に、キサヤは呆れたように片眉を下げる。

「……お前にチカラ？　……今ギャグ聞いてる暇は――」
「お願い！　信じて！　私にはあの速さには付いていけない！　……でも、キサヤさんがアイツを私の前に連れて来てくれれば、私が絶対アイツの動きを止めるから！！」
カナデのその強い口調と強い目に、キサヤはニヤッと不敵な笑みを浮かべる。
「……信じて、良いんだな？」
「命……懸けるから！」
以前としてカナデの目は変わらない。強い意志を込めた目だ。
キサヤはカナデに背を向けながら腰の剣を逆手に抜き、膝を曲げる。駆け出すための屈伸だ。
「……分かったよ。ボクも命懸けてやる！！　待ってろ！」
青い髪がなびき、戦場にもう一筋の風が加わった。
（……クッ！　せめて一瞬だけでも動きが止まってくれれば……）
ザラマンデルがそう思った直後、自分に向かって来ていたパルダリスに一閃。左目に裂傷が出来る。
「……風神のキサヤ。参る……」
キサヤは、目では追えても肉体では追えない。ならば軌道を読み、先回りすれば良い。そして、斬ったのだ。

その衝撃により、パルダリスは銜えていたブレードを地面に落とし、ただの豹へと変わる。現実世界からのプレイヤーから見れば雑魚モンスターに一撃喰らったように見えるだろう。ならば、次の行動は心理的に明確に予想可能だ。

『グゥオオオッ！！』

パルダリスの咆哮。そして、キサヤに向けて駆け出す。……アクションゲームをする人には良く分かると思うが、標的を前にして他の雑魚に攻撃を受けて妨害されたら、腹が立つだろう。

キサヤがカナデの前に戻った時、パルダリスは先ほど自分を傷つけた対象を見つけるなり一直線に迫る。キサヤはカナデに強く、声を発した。

「来るぞ！　カナデ！」

カッ！

「ありがとう。……後は任せて」

後ろから迸る閃光と声に思わずキサヤが後方を向くと、人魚を思わせる者が立っていた。声から判断してカナデであろうとはキサヤも分かったが、いきなりの事で驚いてしまう。

……大きさ的な事もあるが。何せ、カナデとシャララの一心合体した水王ウンディーネは、キサヤの頭がウンディーネの腰に来るくらい大きかったのだ。……というか、下半身の人魚分により体長が伸びていると言った方が良いかもしれない。

ウンディーネはすぐに行動に移す。左手の人差し指を横に振り、パルダリスに冷気を飛ばしたのだ。

『ッ！！　グッ……ォオオオオッ……」

その冷気はパルダリスだけでなく、その周囲の地面すら凍らせる。RPGにおいて、氷属性といえばほぼお分かりだろう。行動停止だ。

（ッ！　動きが止まった！）

その事実に気付いたザラマンデルは、この数少ないチャンスを無駄にしないためにも自身の最大の攻撃を叩き込む。

龍を模したヘルム（甲冑）の目がギョンっと動き、口が開き、紅い光が口内から溢れ出す。

キィッ……　ズゴゴゴゴゴッ！！！

次の瞬間パルダリスを襲ったのは、炎王ザラマンデルの放った閃光破裂（フレアバースト）だった。驚異的なスピードの裏返しか、パルダリスの胴体は砕け、四肢はバラバラとなる。

――――現実世界・長崎――――

その攻撃は先日のフィストの時と同じように、パルダリスに物理

的影響を与える。
　バギンッと壊れたパルダリスを前に、少女は短い悲鳴を上げた後、泣き叫ぶ。どうやらプライドの高い性格だったらしい。
「何よこれー！　どうして素体が壊れたの！？」
　彼女はへたりと椅子に座り込んだ。
「……負けて素体を壊して経験値もゲットできないなんて……情けない……。フェアプレイズ全国大会九州地方代表楔田（せつだ）　カナ、一生の不覚！！　……でも、いつか倒してやるぞボボウめ！　くそぉー！」
　……悔しいと感じるのは相手が居るから。それも、自分が意識するに値する相手。それは、言い方を変えれば、ライバルとは言えないだろうか。もしかしたら彼女の中で、ボボウというのは追い越したい対象となったのかもしれない。
――――アシュリアーナ――――
　一方、アシュリアーナではジアがキサヤに質問をしていた。
「……キサヤ、助けてくれたキョータ達……どこかに行っちゃったよ？」
　そう。キョータ達は消えた。霞のように、静かに、始めからそこに居なかったかのように。

対するキサヤは目を閉じ、キリガの町を吹き抜ける風を感じながら答える。その顔にあるのは微笑み。

「ああ。……あいつ等、すぐどっかに消えちゃうんだよ。お礼を言う暇ないぐらいなんだよなぁー」

「……ねぇキサヤ。キョータ達って、戦士なの？」

「……違うよ。皆、覚えておいてね。あいつ等は困ってる人全ての友達なんだ。……そういう優しい心を持っているから、神様とも友達なんだよ。覚えてね。――」

キサヤは子供たちに優しく語り掛ける。今までそうしてきたのだろう。親ではなく、先生として。

「――あれが勇者だよ」

キサヤは目を開け、心の中でカナデへの評価を訂正する。

（……カナデ、ボーっとしたヤツってのは取り消すよ。あんたも、立派な勇者だね！）

――――現実世界・神奈川――――

カッ！

キーンの部屋に眩しい閃光が溢れ、カナデは床にへたれこんだ状態で安堵したようにため息を付く。

「良かった……帰れたみたい……」
『完全勝利よ！　おほほほほっ！』

……対照的にシャララはご機嫌だ。なにやら彼女の周りだけ、『タタタターッター　タッタター』というＢＧＭが流れそうである。

「カナデさん！　大丈夫ですか！？」
「大丈夫。……だけど、キーン君は何してたの？」
「うふふふ……。皆が無事なように祈祷しておりました♪」

おまけに着替えもしたらしく、白い寝巻きからいつもの魔術師ローブへと変えていた。だが、キーンはある事に気付く。今までに無かった事例に。

「……あれ？　……変ですよ……！？　キョータ君は……どこです！？」
「『えっ！？」』

キーンの言葉に慌ててカナデとシャララ、フーイも周りを見渡すが、キョータの姿はない。

「……キョータ君が消えて……アシュリアーナに置き去りになっちゃった！？」

――――アシュリアーナ――――

現実世界でキーンが叫んだのは聞こえる訳が無し。キョータは『サー……ッ』という静かな音と自分の肌に当たる水滴で目が覚めた。

「……雨……？」

周囲は豪邸の庭のような風景だが、あらゆる物が壊れ、暗い暗雲が上空を満たし、冷たい雨が降り注ぐ。そばにはボボウも倒れているようだ。

「……お前が勇者か……」

キョータが倒れている頭の方から聞こえてくる声。雨の中、荒廃した風景の中、誰かがキョータのそばに立っている。

「……我が敬う黒王様の、倒すべき敵……」

第１９話　雨に立つ者（後書き）

……さて、若干困った事に、次からの話はどこで話を区切るかってので手こずりそうです。……ま、何とかしますけどね。

第２０話　混沌地点（前書き）

……書いた順番から考えてＳｅｃｒｅｔＳｔｏｒｙよりこっちが先に書いた物だたり……（汗。

第２０話　混沌地点

現実世界。本来、今までなら戦闘が終われば現実世界に一同戻れた訳だが、今回は違った。

「どうしよう！　キョータ君がいない！　闘いには勝ったのに……どうしてキョータ君だけ帰れなかったの！？」

カナデの動揺した声に、キーンはジッと本を見詰め、自身の経験から言った。

「……きっと、こっちに帰るにも体力がいるんですよ……。ダメージが大きいキョータ君には帰るだけのチカラが無かったのかも……」

「数騎様、お友達が遊びにいらっしゃいましたよ」
「お邪魔します……」

声と小さなノックの後に、キーンの部屋のドアが開かれる。部屋に入って来たのは月島家のメイド、金子亜希とシノブだ。
亜希がぺこりとお辞儀をして退室したのを見てから、シノブはキーン達に向き合って口を開いた。

「ゴメン……今日定期健診の日だったんだ。……でも、どうしたの？」

部屋に入ってからのかすかな緊張感に気付いてか、はたまたキョータが居ない事に違和感を覚えたのか、いずれにせよ来たばかりのシノブにとっては状況が読めない。

「話は後で。……それよりシノブ君、パソコン持ってきてます？」
「う、うん……。フェアプレイズ見れば良い？」

だが、悠長に話している場合でもない。今キョータのいるアシュリアーナの様子が分からないのだ。しかし、パソコンを立ち上げた画面を見た時、シノブは目を見開く事となる。

「ッ！？　何これ……どういう事だろう？　画面が真っ黒だ」

そう。真っ黒。……それは、キーンの持つゲームの画面でも同じだった。携帯ゲーム機であれば、パソコンとの容量差は一目瞭然。処理落ちや何かしらの要因で画面が消える事も考えられるだろう。故にキーンはフェアプレイズのもともとのハードであるパソコンを立ち上げるように言ったのだが、結果は同じだったという訳だ。

シノブは困ったように眉の両脇を下げ、一言一言考えながらといった様子でその現象に関して意見を言う。

「……これがバグじゃないとしたら、ここは地形データも何も無い場所なんだ……。どこの場所でもない……存在しない所って事だよ……！」
『ッ。……どこでもない場所って……もしかして……』
「知ってるの？　シャララちゃん」

シノブの言葉を聞いた時、『むむぅ』と唸りながら反応したシャララはカナデの言葉に口を開いた。

『……昔、業魔王がたった1人で世界を相手に闘った時、業魔王は世界の半分を破壊した。その後に残ったのは、自然も、人も、動物も……全てが壊された暗黒の世界。今はそのどこでもない大地を、

【混沌地点（カオスポイント）】と呼ぶのよ』
「……この真っ黒の所、全部業魔王が壊したの……？」
「憧れ――いえ、恐ろしいほどの魔力……」

シノブの怯えた声とキーンの……若干本音が垣間見えた声の後、部屋に『ヴゥーン……』という低い音が響き、溶けていく。

「ッ。魔導白地図が発動した！」

キーンはそう言いながら懐から古ぼけた紙を取り出す。事が起こった時にアシュリアーナの地図（景色）が映る魔導白地図だ。そして、そこに映されたのは家だ。隣には耕（たがや）された畑がある。……畑に大穴が開いているのが気になるが……。

「……これって……」
「どこだろう？　……普通の家みたいだけど……」

シノブとカナデが首を傾げる中、キーンは畑の一部を凝視し、ポツリと言った。

「……これは……天さんの家ですよ。シャララさんとボボウさんがクレーターにしちゃった元・畑がありますから」
「……ホントだ……」

キーンの語尾はハートが付きそうなテンションだったが、それに応えたシノブにあるのは苦笑だ。……キョータの怪我を治せる人を探す際、ボボウとシャララが畑に激突。クレーター付き住居にしてしまったのである。

「これは天さんを連れてキョータ君の所へ行けって事ですね……。

僕が行きます」
「で、でも……ボボウ君が行けないと向こうにいけないよ？」
シノブの言葉にキーンはほんの少し考え、何か閃いたのか指を鳴らしてフーイを召喚。……いや、別にいきなりポンッと現れた訳ではなく、鳥の止まり木にぶら下がってコウモリよろしく逆さまな姿勢で上から降りてきただけなのだが。
「そうですね……。フーイ！」
『御意』《……ボボウ殿、応えてくれ……。今から貴公達を助けに行く。私達をそこに呼んでくれ！》
それは一種のテレパシーのようなモノだろう。そしてそれは混沌地点のボボウにもしっかりと届いた。ボボウはうつ伏せに倒れた体をゆっくりと起こしながら応えた。
『……う……。誰か……呼んだのら……？　でも……動けない……のら……。……だから寝るのら～……』
そんな訳で、コテッと寝てしまったボボウ。フーイは若干の沈黙から気まずそうにその事を報告する。
『……寝てしまった……』
「「何ですとー！」」
シノブとキーンは正直にツッコミ、カナデはポカーンと呆然としている。そんな中、シャララだけは冷静に対処した。……いや、手段という点でいえば、冷静とは言えないかもしれない。
『……すぅ――――――……』

息を大きく吸って、完全に怒鳴り声としてボボウに声を飛ばす。

『起きんかぁ小猿ぅ！！』

『ぎゃっ！』

その怒声は見事にボボウの耳を貫き、彼の眠りを覚ました。……及び、半泣き状態である。

『……シャ、シャララなのらー？　ボボウってサルだったのら……？』

『グズグズしてないでキーンとフーイをそっちに呼べっつぅの！サルッ！！』

サルというのはおそらく、ボボウの頭の装飾が西遊記の猿、孫悟空の頭のリングに似ているからだろう。

そして、ボボウは覚束ない意識の中、シャララの言葉に応える。

『うー……残ったチカラを全部使って……皆を呼ぶのら……！』

カッ

『……やったのら……もう……チカラが無いのら……』

ボボウから一瞬だけ眩しい光が発せられ、直後、ボボウは倒れてしまう。人間で言うと、疲れている時に無理やり動かされて満身創痍という状態だろう。

だが、指先に何かが触れ、ボボウは驚いた様子でそれを見る。

『？　……ほぎょっ！』

視線を上へ上へと向けると、触れたのは足だった事が分かった。
そしてその人物は、ボボウが会った事が無い人物。胸には鎧を着け、マフラーのような布で口元を隠している。鎧も布も黒を基調としている。

『……お前が勇者のチカラの源、焔の妖精ボボウか……』
『ひっ……ひっ……人違いなのらー！　きょわいのらー！！』

先程のシャララの怒号を更に超える恐怖で、ボボウは完全にモロ泣き。腕をパタパタしながらジグザグに逃げて行くが、何かにつまづいて転んでしまう。

『……キュー……！　何かにつまづいたのらー。……ッ！　キョータ！』

その何かとはキョータだった。仰向けに力無く倒れている。黒い騎士、ウルクはボボウに追いつくと静かで、ただし油断の無い声で言葉をかける。

『逃げたくば行け……。魔王軍兵士副長であるこのウルク、逃げる者を追いはせぬ。……だが、勇者は置いていってもらう。そのダメージでは一心合体もできまい。……主のいない妖精など、何の役にも立たん。……無駄な者よ、去れ……』
「……うぅっ……」

周りの話し声に気付いてか、キョータは薄っすらと目を開けた。

『ッ！　キョータ！　気がついたのら！』
「……ボ、ボボウ……」

キョータはボボウと、黒い騎士を順番に見て、途切れ途切れの口調でボボウに言う。

「……あいつ、凄い強そうだ……このままじゃ……。……オレは……大丈夫だから……ボボウだけでも……逃げるん……だ……！」

『良い主だ……。己の身よりも従う者を助けようとする心……さすが勇者』

ウルクの言葉に、キョータはゆっくりと体を起こしながら応える。

「違う……ぜ？　ボボウは……従う者なんかじゃ……ない……。ボボウは……オレの……大切な友達だ……」

『……ならば、そのトモダチの為に、その身を犠牲にするが良い』

ウルクはそう言うと、右腕を前に突き出した。その指に柔らかさはなく、機械的で、硬質な爪を思わせる。そして、その鋭い爪は躊躇いも慈悲も無く、キョータに振り下ろされる。

ボゥッ

『……貴様……』

ウルクは自身の爪を見ながら声をボボウにかける。当のボボウは、小さな手を前に出し、ウルクを睨んでいた。ボボウが手から炎を出し、ウルクの攻撃を防いだのだ。

『……オイラは無駄なモノだったのら。ゴミになって捨てられてた、無駄なモノだったんらよ。……でも……そんなオイラをキョータは見捨てなかった。……キョータがオイラにもう一度立つチカラと、

勇気をくれたんらよ。……そしてオイラは知ったんら。この世界に、無駄なモノなんて何にも無いんら……』

ポツポツと弱々しい言葉。だが、その中にある思いは強い。……まるで、揺れながらも、消えそうになりながらも、それでも消えまいと抗うロウソクの火のようだ。……命のロウソクのようだ。

その言葉に対し、ウルクは同情はしない。情けもかけない。ただ、右腕を軽く横に振るい、武器を構えただけだ。鋭い爪が伸びて螺旋を描き、ランスのような武器を作り上げたのである。

『……それが答えか、焔の妖精……。ならば掛かってくるが良い。騎士として全力でお相手しよう』

……来い。

第２１話　舞い降りる羽

時間はやや遡り、ボボウのチカラが現実世界に届いた頃。

「……うーん、どうもマズイ感じですよ……」

アシュリアーナに移動したキーンは箒に跨りながらそう呟いた。マイペースであり分析力の優れたキーンでも、冷や汗が流れる事態である。彼はこう続けた。

「これは飛行と言うものじゃ無いですね。……何と言うか、素早い落下。簡単に言うと墜落ですな」

……十分冷静だった。箒に跨ったまま垂直落下してこの落ち着きようである。

その頃、天はティーカップにお茶を入れて椅子に座り、穏やかな時間を過ごしていた。

「毎日忙しく生活してそんな中、昼に一杯のお茶を飲む。……こんな時に人は幸せを感じるんだな。……ささやかな幸せ、か……」

ドゴォォンッ！！！

天の右手、おおよそ５０センチの地点にキーンが落下。キーンは若干むせながら床から這い出てくる。

「ぶっはぁー！　驚きました。箒の方が急いでくれて真っ直ぐに落っこちたみたいですネ！」

……まぁ、急ぐというのは重力加速度の影響もあるためあながち外れてもいない訳だが、それより今は気遣うべき者がいるだろう。

「……」

「ッ。おや、何やら真っ白になってますね」

天を見つけたキーンの言葉から分かるように、天は真っ白になっている。それはそうだろう。穏やかな時間もお茶も家も崩壊してしまったのだ。そしてキーンは放心状態の天の手を掴み、外へ連れ出す。

「それでは正気にお戻りになる前に――強制的に大空へＧＯ！」

「ッ！！　うぎゃぁぁあ！！」

唐突な浮遊感でか、天は目を覚ましだい絶叫。及び、あまりの理不尽さに半泣き状態で抗議する。

「何なんだよいきなり来てぇ！！　どこ行くんだぁぁあ！！！」

「急いでるんですよ！　キョータ君が危ないんです！　１人で混沌（カオス）地点（ポイント）という場所に置き去りになっているです！」

キーンの言葉で天は箒に片膝ともう片方の足裏を乗せ、姿勢を正す。キョータが危ないというのもそうだろうが、彼が強く反応したのは別の事だ。

「――このまま真っ直ぐ太陽に向かって飛べ。そこが混沌地点（カオスポイント）だ」

「ッ！　場所を知ってるんですか！？」

キーンは驚いたように天の方を振り返り、天もまた静かな口調で答える。目を細めて、どこか懐かしむような、どこか悲しむような、

そんな顔。

「……ああ。よく知ってる……。かつて、そこには聖王国と仲の良かった美しい国があったんだ。でも、聖王国を護るために戦い、業魔王に滅ぼされてしまった」

「たった1人の魔法使いが国を滅亡させたんですね……」

「……そうだ。失われた国の名は【ヌースクアム】。……俺の生まれ故郷だった……」

同時刻、混沌地点（カオスポイント）ではウルクとボボウの闘いが繰り広げられていた。……だが、パワーも何もかも違い過ぎていた……。

ドゴォ！！

ランスで叩きつけられ、轟音とともにボボウは硬い地面に叩きつけられる。そして、キョータは軋む体を強引に動かし、ボボウとウルクの間に割って入る。

「もう……止めろ……！　これ以上……ボボウに手を出すな……！……俺の命をやる……から……だから、ボボウを……！」

それは懇願にも似ていた。自分にとって大事なモノが目の前で痛めつけられる現実を前に心が痛まないほど、行動に移さないほど、彼は非情ではない。

だが、支えにしていたキョータの手に、指に、小さい別の手が乗る。ボボウもまた、悲鳴を上げる体を無理やり動かし、ゆっくりと起き上がった。

『そんなの……ダメなのら……！　オイラは……まだ……諦めて無いのら……！』

その直後……。
ブンッ！
という空気を薙ぐ音と共にウルクの黒槍（こくそう）が真っ直ぐ突かれる。
『ッ。焔盾（フレイムシールド）！』
ボボウはキョータの前に出て、両手から勢い良く炎が放つ。それは渦を巻き、円盤状の盾が構成する。
威力重視の初撃を防ぎ、次のウルクの手は連撃だった。何発も何発も、ボボウの作り出した盾に突きを繰り出し、ボボウのチカラを消費させていく。
だがそれでも、ボボウは逃げ出すという選択肢を選ばなかった。
……徐々にチカラが消費するのが分かっていても。
……圧倒的なまでの力量差が怖くても。
なぜなら――
『キョータを見捨てたりしないのら！　キョータはオイラを見捨てなかった！　……だから、オイラも……絶対見捨てたりしないのらぁぁあ！！』
必要が無い存在だった自分を大事にしてくれた。見捨てなかった。だから今度は自分がキョータを助ける。それは信頼であり、そういう存在になりたいという、キョータへの憧れもあったのかもしれない。
その思いに、そのチカラ在る言葉に、ウルクは素直に賞賛の言葉を送る。
『……友を思いやる心……見事だ。だが――』

ギィンッ！！

高速の連撃により、とうとう槍は炎の盾を打ち破り、ボボウを突き飛ばした。幸い盾でほとんどのダメージを殺されたのか、ボボウ自体へのダメージは少ない。その上ボボウはキョータに受け止められたため激突のショックも少なくて済んだが、ウルクにとっては縦一線。たったの一振りで両者が倒せる状態だった。

『――我も大切な者のために闘っている。負ける訳には、いかんのだ……――』

ギィンッ！

振り上げられ、勢い良く振り下ろされる直前、ウルクの槍に物理的な衝撃と衝撃音が響く。キーンの箒空飛び降りた天は全体重を乗せた棒を振り下ろしたのだ。つまり、振り上げられた瞬間に衝撃を与える事で、次の『振り下ろす』というアクションを封じ、キョータとボボウを護ったという訳である。

そして、次にキョータとボボウの目に映ったのは羽根だ。白い羽根が空から降ってくる。それと共に、羽ばたきの音と良く聞く声が聞こえてきた。

「……なんという事でしょう……。私の大切な友をこんな姿に……」

フーイと一心合体したキーンはキョータの後ろに降り立つ。……その目にあるのは、『怒り』。

「……私……ちょっとこれって許せそうにありません……」

第２１話　舞い降りる羽（後書き）

……天さん、ホントについてませんよね。……ホント不遇な人……。おちょくられやすいというか。（↑おい

第２２話　ソルヴ

信頼する友人の助けに、キョータはホッと表情を綻ばせる。

「……キーン、来てくれたのか……」

キーンとフーイの一心合体したズルフェもまた、キョータに優しく微笑む。

「当たり前ですよ。キョータ君は勇者である前に、私の大切な友達なのですから。――皆がキョータ君のために闘ってくれています。キミが勇者である前に、人として大切にされている証ですよ」

そう言ってズルフェが視線を移したのは、天とウルクの方だ。

双方睨み合い、しかし、その均衡は唐突に、一瞬にして崩れ去った。天が持っていたのは僧兵が持っているような棒状の武器。先端にはトライアングルのような逆三角形の装飾と、その三角形の空洞の部分には２つのリングが通されている。

右足を前に、棒の先端を低く下げた状態から踏み込み、ウルクの顔を下から抉るように突き上げる。ウルクはそれを一歩下がる形で避け、さらにランスを外側から内側に振る事で真っ直ぐに突かれた天の棒を払い、返すように真横に振る。軌道上にあるのは、天の頭部。天はそれを伏せる事でかわし、更に同時進行で棒を自身の後ろで回し、右手から左手に持ち替えるなりウルクの足を狙って真横に薙いだ。ウルクのランスは真横に振った直後で天の攻撃に対応する事は出来ない。よって、一歩多めに後ろに飛び去る事で回避。それにより先程までの交戦に区切りがつき、両者再び睨み合いとなった。

そしてその攻防を見ていたキョータやズルフェはポカーンと呆然としている。今まで災難な目にしかあってなかったためだろうか。

実際に強いのを見て見直したといった様子だ。
天は棒の先を低く構え直し、ウルクに言葉をかける。

「やるねぇあんた……。俺は長い事封印されてたから知らんけどさあ、今は魔王軍にもあんたみたいなちゃんとした騎士がいるんだな」
『当然だ。我ら魔王軍、元は消えた国の騎士団なのだ。……ソルヴ』

ソルヴ。その名に天はピくっと眉を動かし、ウルクに問う。

「……どっかで会ったかな？　故郷での俺の名前を知ってるのは友達だけなんだがね……」
『知っている。かつてお前は、私を友と呼んでいた。我々の国は滅んだが、業魔王様の偉大な魔力を受け――』

ズズッ……
雨音に紛れての低い音。建物の影から、黒い鎧に身を包んだ兵士達が出てきたのだ。いわゆる、伏兵というモノだ。

『――永遠に戦い続ける死者の軍としてこの地に帰ってきたのだ』
「……業魔王たぁ、全く名前通りの酷い奴だ。自分で滅ぼして殺した国の人達を部下にしてるのか。……俺の敵は、故郷ヌースクアムの騎士団とはね。……でも、手は抜かねぇ。俺は勇者の仲間なんでね。相手が誰であろうと平和のために戦う。お前が誰かは戦って確かめてやるよ」

天はそこまで言うと重心を低くし、いつでも踏み込める体勢を作る。そしてまた、ウルクもランスを顔の前に真っ直ぐに縦に構え、それに応えた。

『良いだろう。……かかってくるが良い』

２人の交戦が再び始まろうとする中、伏兵が現れた事でキョータとズルフェも見守るだけという事が出来なくなった。押し寄せる騎士を前に、ズルフェはその大きな羽をはばたかせて飛翔。キョータとボボウを抱えて舞い上がる。

……だが、それでは――。

「だ……めだ……キーン……！　……逃げちゃ、天さんが１人になっちまう……！」

そう。ズルフェは今両手にキョータとボボウを抱えている状態。空を飛ぶ３人に攻撃が届かないのなら、天の方に攻撃が集中してしまう。

「だからってどうするんです！　私にはこれだけの数と闘う魔力がありません！　……武装合体も出来ないし、力の増幅が不可能です……！」

ズルフェとて助けたくない訳ではない。だが、彼の理性と分析力が、無茶をさせる事を妨げていた。また、武装合体が出来ないのは、現実世界から見て混沌地点（カオスポイント）は真っ暗で様子が分からないからだろう。

キョータは少し考え、おもむろにボボウの方に視線を移し、手を伸ばした。

「……チカラを、増やす……」

『……やるんらね……？　キョータ……』

差し出された手をボボウはニコッと微笑んで取るが、ズルフェは対照的に目を見開く。

「何言ってるんです！　まさか……一心合体する気じゃ無いでしょうね！？」

「……ザラマンデルの炎のチカラは強力だけど届く距離が短いんだ。……でも、ズルフェが風のチカラで助けてくれれば、凄く大きく広い炎になると思うんだ……」

キョータはそう言ってズルフェからボボウに視線を移し、ボボウと力無い笑みを交わす。そして……。

カッ

という強い光と共に紅蓮の騎士へと姿を変えた。それと共に、竜の頭部を模した甲冑の口が開き、そこに熱が集中していく。

「キーン、頼む！　オレの中にあるチカラを……頑張るチカラを全部受け取ってくれ！」

「……ッ。この身が砕けようと――受けましょうっ」

ズルフェはザラマンデルを止められなかったのではなく、止めなかった。そこで断れば、親友の意思を踏みにじる事となる。

そして、風によって増幅された炎は竜巻のようにうねりながら黒い騎士達を巻き込み、飲み込み、薙ぎ払っていく。……【閃光旋風（フレアボルテクス）】といった所だろうか。

その上、ただの竜巻のような自然物でもなく、それは確かに意思を持って動いていた。

「ッ！　ぬっ！」

天の後ろから迫る炎の竜巻は、横に逸れてから回り込み、ウルクを劫火で包んだのだ。

「……炎の竜巻が俺だけを避けてやがる……」

一方、予想以上の威力と結果にズルフェは一瞬驚きながら、次の瞬間には口の両脇を引き伸ばして笑みを浮かべた。

「……やった……やりましたよキョータ君！」

「そっか……良かった……」

ズルフェはザラマンデルを地上に降ろし、当のザラマンデルはそう言うなり地面に腰を下ろした。体力が限界に在る状態で更に消費した代償と、上手くいった事に対する安堵からだろう。

天は半ば呆れたように肩を上下させ、それでもニッと親しげな微笑みを子供達に向ける。

「無茶しやがって！　……でも、ありがとよ、助かったぜ」

『……素晴らしいチカラだ……――』

それは、ウルクの声。炎で包まれながらも、未だに悠然と立っている。その様子に天はもちろんズルフェも当然驚き、そうこうしている間にウルクの覆面が炎で焼け、顔が露となった。

『――良い仲間を持ったな。……ソルヴ』

「ッ！！　……師匠……！」

天と同じ肌の色に切れ長の目。背中の中程まで伸びる茶髪。顔には左目から右頬にかけて傷跡がある。そして今の表情は精悍で、それでいて穏やかな微笑みだった。

第２２話　ソルヴ（後書き）

……ふぅ。今話では久々に真っ当なアクションシーンを書いてみました。やっぱり、多少そっちの勘も取り戻しておかないとと思いましてね。

次はおおよそ一週間後、流星共々更新します。次の話も、読んで頂ければ幸い。

第２３話　贈り物

紅蓮の炎に包まれながらそれでも顔色一つ変えないのは、ウルク自身もう死んでいるからだろう。……死してなお、闘わされているからだろう。

『……俺が育てた弟子の中で最強の男、ソルヴよ。俺の全てを懸けて育てたお前が今は俺の敵である勇者の仲間とは、皮肉なモノだ』

「……ウルク師匠、俺を昔の名で呼ぶな。……俺はもう【ソルヴ】じゃない。……勇者を護るために選ばれし４人の戦士。選ばれた時に４人は昔の名を捨てて新しい名を名乗る。４人合わせて天魔伏滅（てんまふくめつ）と呼ばれ、４つの文字を分けて自分の名前とする。……だから、俺はもう【ソルヴ】じゃない。――」

ここで天は一度ほんの少しだけ間を置いて、それから思いを言葉として放つ。嘘偽りの無い気持ちを、昔の師に伝えるために。

「――……我が名は、天魔伏滅の天！　今はいない外の３人の仲間の代わりに、俺は命を懸けてキョータとキーんを護る」

カッ

天の後方で迸る閃光。キョータとキーンの一心合体が解けたのだ。キョータが心配そうに天を見ているのを気配で察した天は、視線と体をウルクに向けたまま優しく、労いの言葉を掛ける。

「良く頑張ったぞ、キョータ、キーン。もう心配するな。……勇者サイが死んだ時、俺達【天魔伏滅】は何も出来なかった。サイは、アシュリアーナの人達だけでなく、俺達を助けるためにたった１人で闘って死んだ。……もう、二度と勇者を離しはしない。……

今度こそ……勇者を護り抜いてみせる」

それは、キョータ達と出逢ってから考え、自分で出した答えなのだろう。先の大戦で死んでしまったサイの為に。今生きているアシュリアーナの民の為に。そして、自分を解放してくれた、小さな勇者の為に。

『……前に出来なかった事が今出来るとは思えんな、天よ』

……だが、ウルクは不敵な笑みを浮かべてそう言い、そして続けた。

『お前が思うより、遥かに魔王軍は強いと知れ。……我等が黒旗（はた）の下に、立て！　魔王騎士団よっ！！』

ズズズッ。

ウルクの掲げる黒旗。その士気に誘われるように、縛られるように、鎧を纏う兵士が立ち上がり、ウルクやキョータ達の周囲を取り囲む。

「ッ！　なんだ!?　倒したはずの騎士達が、また立ち上がった……っ！」

天の驚きの声に、ウルクは冷然と言った。

『言ったはずだ。我々は死者の軍だと。何度倒されようと永遠に死ぬ事は無いのだ。……我等不死の軍に勝てるか？　天よ』

「どうかな。……まあ、いっちょ試してみようか」

と、天は挑戦的な顔と笑みを浮かべ、ウルクもまた一歩下がり、

右腕の肘から先をゆっくりと上げた。

『……良く言った。ならば勝ってみろ。貴様達が選ばれし者なら出来るはずだ。……勝って、自分達が正義だと証明しろ』

「証明してやらぁ！！」

下ろされる右腕。それと共に死者の軍勢が迫る。そして、ドドドドドッと地鳴りと共に迫る軍勢を前に、天は棒を構えなおした。

その頃、現実世界。キーンがアシュリアーナに行ったため向こうの様子はパソコンで見れるようになったが、焦りと危機感、そして、何もサポートできない現状に地団駄を踏んでいた。

「大変だ！　このままじゃ皆やられてしまうよ！　一心合体が解けちゃってるからアイテムを送っても武装合体が出来ない……！」

「だ、だったら私がもう一度行けば――！」

「無理です！　……ボボウ君も限界です。これじゃアシュリアーナには行けない！」

ボボウの疲れきった状態から考えて、カナデとシャララがもう一度アシュリアーナに行って加勢する事は出来ない。かといって武装合体も、アシュリアーナに一心合体をしている者がいなければ出来ないため却下。

そんな切羽詰った状況の中、不意に部屋のドアが開けられた。そこに立っていたのは月島家のメイド、アキさんだった。手には宅配便と思われる箱を持っている。

「何だか楽しそうですね。……あら？　数騎様はどこかしら……？」

「……ちょっと……お出かけしてます……」

代表して答えるシノブ。……まさか別世界に行ってますなんて言

えないだろう……。アキは少し考えた後、箱に視線を移し、そして次にカナデ達に視線を移した。

「……えっと、今日ここに皇（すめらぎ）志乃武（シノブ）さんっていらっしゃいますか？」

「……あ、はい！　僕です！」

シュタっと手を挙げるシノブに、ホッとしたように持っている箱を差し出すアキ。要冷蔵と書いてあり、言わばクール宅配便というヤツだ。

「ああ良かった……。シノブさんに今お荷物が届きましたよ」

シノブはそれを受け取りながらも、不思議そうに眉を下げる。

「……僕に荷物？　……誰から……それにどうしてここに……」

「変ですよねぇ？　送り主は数騎様のお兄様ですけど、どうして今日ここにシノブさんがいるのが分かったんでしょうね？」

アキも不思議そうに首を傾げるが、すぐに笑顔になってドアの方に引き返していった。切り替えが早いというか、ポジティブな性格なのだろう。

「まあ、届いたからＯＫですね♪　それじゃ、お邪魔しました♪　後で紅茶、いれますね」

「あ、はい……。どーもです……」

アキが退室したのを見計らってから、カナデはシノブに話しかけた。

「……キーン君のお兄さんって、どんな人なのかしら……」

それに対し、シノブは自分の口の前にグーを置いてしばし考え、これまでの数騎の兄に関する話を思い出しながら返す。

「……キーン君のお兄さんは……アシュリアーナに関係しているかもしれない。……だって、贈ってくれる物は全てが本物の魔法道具（マジックアイテム）なんだから……」

そう。最初の魔導書も、箒も、魔導白地図も。全てがキーンの兄からの贈り物で、全てが『本物』だった。

「じゃあ、今日来た荷物も……！」

「……うん。……きっと何か大事な物なのかも……。良く考えてから注意して中を確認しないと――」

ガサゴソガサゴソ……

シノブは何かを漁る様な音で自身の言葉を止める。音のした方を見ると、シャララが包み紙を破いて箱のガムテープを取り、今にもイザ開けようとしている場面だった。

慎重に、注意して確認しようと言った矢先という事もあり、シノブは思わずといった感じでツッコミを入れた。

「って、もう開けてるし！」

『馬鹿ねぇ、何言ってんのよ！　生物（ナマモノ）だったらどうするの。食べられなくなっちゃうじゃない！』

「……別に食べ物と決まった訳じゃ……」（……僕の荷物なんだけど……）

要冷蔵＝生物とシャララの中で結びついたらしい。シノブの言葉

は聞こえずといった様子で、シャララはニッコリと楽しみそうな表情で箱を勢い良くガパッと開けた。

『さぁーて、何かしらー！　ケーキ？　フルーツ？　――……』

シャララの沈黙の理由は明確。想像してたどれとも違っていたからだ。要は、大ショックという状態である。

氷のベッドに置かれている白い耳に黒い体。黄色いハートの首飾りをしているそれは、猫だった。……有機物ではない、『猫』である。

第２３話　贈り物（後書き）

……キーンの兄に関してはこちらも仮説立てましたが、岡田芽武さんの考えてたのと合ってたのかは分かりません。……けど、今考えてるシナリオ上、ニライカナイの皇言霊や柊乱空の出番もありそうかな。

……要冷蔵……。今思えば、素体を大事に思っているの、かな（苦笑）？　物じゃなくて生き物として見たから要冷蔵に……。

第２４話　こげち

宅配便の箱を開けてみたシャララは硬直。彼女としてはケーキやフルーツといった美味しい食べ物だと思っていたらしい。だが、実際には猫で、シャララは怒りとショックを含めて大絶叫。

『食べ物じゃないじゃない！　生き物じゃないのさぁ！！』
「ま、待って。……これ、生き物じゃないよ！」
『じゃあ、やっぱり食べ物なのねぇ♪』

シノブの言葉にシャララは再び目を輝かせ、どこから出したのか右手にフォークを、左手にナイフをスタンバイ。シノブは慌てて猫を自身の腕の中に避難させる。

「わぁ！　そういう意味じゃないよ！！　……これは――」

ここでシノブは確認するようにマジマジと見詰め、それから言った。

「――素体（フレーム）だよ。フェアプレイズの獣型素体（ビーストフレーム）」
「それじゃあ、宛名がシノブ君だったって事はその猫ちゃんは――」
『シノブの素体（フレーム）なの！？』
「……僕専用の、素体……」

カナデの言葉をシャララが引継ぎ、シノブは自分の素体という物に微かな高揚を感じていた。

ゴシャッ！

だが、アシュリアーナでは現在進行形で戦闘が行われていた。シノブやカナデ、シャララが画面を見ると、天がキョータとキーン、ボボウとフーイを庇いながら闘っている所だ。

四方八方から攻め入る軍勢を前に、天はまず正面の兵に攻撃を加えた。突きに払いを織り交ぜながら、文字通り鎧ごと突き崩し、薙ぎ払っていく。だが、敵は何も正面だけに居るのではない。後ろからも迫っている。だからこそ天はまず正面を片付けて綺麗にしたのだ。……多少倒れた兵が居るが、天の『力』の前に問題は無いだろう。

「――すっ……。天魔伏滅流四天破杖（てんまふくめつりゅうしてんはじょう）、天の法――」

天は短く息を吸い、正面の大地に持っていた杖を突き刺しながら力を込めた。

「――剛力ッ！！」

メキメキと音を立て、上に乗っていた兵士ごと地面を持ち上げ、そしてそれをキョータ達の後ろに放り投げて後ろの騎士を地面で押し潰す。後に残ったのは、直径2メートル程のクレーター。

だが、無駄と言わざるを得なかった。岩の下から手が出てきて、次に鎧が出てきて、最後に足が出る。

魔王軍は死者の軍。死してなお操られ、戦わされているのだ。故に、自らの敵を滅ぼすまで止まらない。

天もそれは分かっているだろう。だが、それでも彼は攻撃の手を

止める事は無かった。全ては、これからアシュリアーナの人々の大きな希望になるであろう小さな勇者達を護るために。

ウルクはその様子を眺めながら、天のチカラを評する。……良く見れば彼の口を覆う布が大きくなっている。どうやら、鎧など身に纏う物も魔法で再生できるらしい。

『……素晴らしいチカラだ。……だが、所詮は人としての強さ。我々を超える強さではない。我々は人ではない不死のモノ。……勝つ事は出来ん。……だが、天。いや……ソルヴ。お前だけは助かる方法がある』

「……何？」

『お前は元々我々の国の者。我々と共に魔王軍に入って戦え。……ソルヴ。……俺の下へ帰れ……』

ウルクの提案に対し、天は左手の杖をグッと強く握り締め、ウルクを強く睨みつけた。

「……さっきも言ったろ？　俺の名は、【天】だ」

『それが答えか。……残念だ……』

ウルクは静かに目を伏せ、それだけ言うと、両手を高く掲げ、全軍に指示を飛ばす。また、この時には素顔は再生した甲冑と布で隠れてしまっている。

『全軍、勇者には手を出すな。それ以外は殺しても構わぬ。……勇者の命は、グリフィアス様が壊す！』

「……そう、か……」

キョータはそうポツリと小さな声で呟くと、両足に力を込めて立ち上がり、キーンの……そして天の前に立つ。

「……何だか俺、良い事聞いちゃった。オレだけは殺せないんだな？　……じゃあ、オレが皆の盾になれば、お前達は誰にも手は出せないんだ……」
「ッ！　馬鹿、何言ってんだ！」
「そうですよ！　キョータ君は逃げてください！」

天とキーンはキョータの肩を掴んで後ろに下げようとするが、キョータは一向に動こうとしなかった。その様子を見て、ウルクはランスを真っ直ぐとキョータに向けながら言う。

『……不思議な子だ。自分だけは逃れられる立場なのに、なぜ前に出るのだ？　……一心合体も出来まい。お前には力も武器も、何も残ってないでは無いか』
「……いいや、残ってるよ」

そう返すキョータの目は、まだ光が灯っていた。闘う光。諦めない光。無根拠な頼りない、楽観的な光ではなく、別の光をその目に湛えていた。

「一心合体出来なくても、力も武器も無くても、オレにはまだ立ち上がるチカラが残ってる！　オレの中にある勇気は、まだ挫けてない！！　オレが諦めたら、アシュリアーナの人達を裏切る事になる！　……それだけじゃない。オレを信じてくれたボボウ、一緒に闘ってくれる仲間達、そして勇者になるって決めた自分にも、嘘を付いた事になる！」

彼の戦意はアシュリアーナに生き、苦しむ人々の為に。共に闘ってくれる者の為に。そして、そうなると決めた自分自身に、嘘を付かない為に。

……自分で決めるというのは、自分と約束するという事。決して覆さず、歩き続けるという事だ。

キョータはグッと拳を固め、足を一歩前へ出しながらウルクへ詰め寄る。

「だからオレ、諦めない！　……オレは、勇者だって事を絶対諦めないっ！！」

『……』《決して諦めず、誰かの為に立って、前へ進むチカラ。……これが――》

ウルクはキョータの言葉に目を細める。……それは、生前の自分を思い出したからだろうか。そして、小さい声で言う。

『……正義、か……』

その頃、一連の会話や状態を見聞きしていたシノブやカナデは……。

「どうしよう、早く助けないと！　……でも、この素体（フレーム）全然反応しない！　どうしたら良いんだ！」

この状態で現実的な希望があるとすればキーンの兄から送られてきた黒猫型の素体（フレーム）のみ。だが、ボボウ達のように自分の意思で動く事はおろか、通常の素体（フレーム）のようにパソコンとの接続も出来なかった。

カナデも焦った様子でシノブと一緒に猫の素体（フレーム）をまじまじと見ている。

「……どうしよう！　……もしかしたらスイッチとかあるかも。後ろにボタンとか――」

カナデがそう言って猫の耳の後ろ辺りを触った時の事だ。突如『カァァァ……ッ！』という眩しい光が部屋を満たし、それと同時に声が聞こえてきた。イタズラ盛りの小さい男の子のような幼い声。

『キミが僕の主？　何か大変そうニャリン』

「ッ！！」

シノブが上、その声のした方を見ると、淡く虹色に光るシャボン玉のようなモノに、細い、猫の尻尾のようなモノがくっ付いてるモノが在った。補足を加えるなら、猫の尻尾は傘の柄のように《ユー》Uの字に曲がっている。

シャボン玉のようなモノは、暢気な口調で続ける。

『僕はキミのためここに来たニャリン。キミが僕を求めるなら、僕に名前を付けてニャリン。……そうすれば、僕はキミと共に生きるニャリン！』

「……名前……？　……キミは真っ黒で小さくて可愛いから……キミは、こげち！」

こげち。その名を呼ばれた、いや、決められた瞬間、ボボウ達同様素体（フレーム）に命が宿る。シャボン玉の中から、まるで卵が孵化するように一体の猫が姿を現した。白い耳に黒い体。赤い目。フワフワとした尻尾は耳と同じ白色だ。

『了解ニャリン♪　僕、こげちニャリン！　僕はいつでもシノブのそばに居て、チカラを貸すニャリン』

そう言ってシノブの前腕にチョコンと乗るこげち。シノブと親しげな笑みを交わす中、カナデとシャララだけは口をポカーンと開いて呆然とした様子だ。声までハモッテいる。

「『……こ、こげち……？」』

ようは、何でそんなネーミングにしたのかと。

シノブは小首を傾げ、逆に不思議そうに2人に返した。

「真っ黒で焦げてるみたいだから、こげち……？」

その言葉にシャララは思い出したようなため息を付いた。

『はぁ。……シノブは良い奴なんだけど、シノブもシノブのお姉ちゃんも、ネーミングセンスがいまいちなのよね……』

「そっか。……シャララちゃんは元はシノブ君とお姉さんの素体だった時は名前が違ったんだ。……なんて名前だったのかしら？」

シノブはカナデの問いにニッコリと微笑みながら返す。

「えっ？　お姉ちゃんは【ピーッ】って名前にして、僕は【ピーッ】て名前にしてたよ。ッ！？　あれ、声が！？」

……上の【ピーッ】は、何も放送禁止用語という訳ではない。……まあ、この子にとっては同等以上に知られたくないだろうが……。

その『この子』、シャララは、知ろうとする者は容赦なくぶち殺し確定ネ？　クラスの殺気を出していた。

『……まことに勝手ながら、一部音声をカットさせてもらったわ。……あんな恥ずかしい名前、誰1人として教えられないわよ！』

そしてフッと溜飲を下げ、こげちの方を見て彼にフォローを入れる。

『こげち、アンタも災難ねぇ。でもこげちって名前、結構良いわよ』

だが、対するこげちは目をキラーンと光らせてジュルリと涎（よだれ）を垂らしてシャララを見ている。

『……美味そうな魚がいるニャリン……』

『ッ！！　なんじゃとこらぁ！！！』

シャララブチ切れモード。先程までの気遣い態度はどこへやら。

シャララは激怒で、こげちは――冗談であって欲しいと願うが――食欲でキラーンと目を光らせて互いに睨み合う。

『生意気なクソ猫がぁ！　何でこの可憐なあたしがアンタに食われなきゃいけないのよ！！』

『魚は黙って猫に喰われるものニャリーン♪』

『魚じゃねぇ！　人魚だぁ！！　って、んなくだらない事言ってないでキョータ達を助けなさいよバカ猫！！』

「そ、そうだ！　お願いだよこげち！」

シャララはケンカ腰のままふと思い出し、シノブはおそらく、2人の争いに圧されて入り込めなかったのだろう。

それに対してこげちは、明るい口調のままハッキリと言う。

『出来ないニャリン！』

……バッサリと切って下さった。

第２４話　こげち（後書き）

……なるべく上手く分けられそうな所で分けているつもりなんですが、どうですかね……。

なお、シノブ君のネーセンの方はしばらく後で微妙に明かされます（笑）。

第２５話　小さな一歩（前書き）

本来なら、『小さな開放』とか『開放』でも良かったんですけどね～。……けど、そのサブタイを使うのはまだ早いので。

第25話　小さな一歩

現実世界。キョータ達を直接助ける事は出来ないと言うこげちにシノブ、シャララ、カナデの3人は口を歩カーンと開き、声をハモらせた。

「「『なんでぇ!?」」』

『だって僕には闘ったりするチカラが無いニャリン♪』

そんな事をマイペースにお気楽気分で言ったこげちにシャララの方から『ブチッ』という音が聞こえ、こげちに掴みかかろうとするのをカナデとシノブは必死で抑え、発端たるこげちはそれでもマイペースに続ける。

『こげちに出来るのは1つだけ。……負けないで欲しい。……頑張って欲しい。そういう想いを誰かに届ける事ニャリン』

「『そんないい加減なぁぁあ!!」』

とうとう抑えきれなくなったのか、それとも共感してしまったのか、シノブも一緒になって言う。

『確かに思いは形も何も無いニャリン。でも、人が強く想う気持ちは、本当は凄いチカラがあるニャリン。そして、本当に想いが届けば、それが奇跡って形になるニャリン!』

「「『……奇跡?」」』

『想いを受け取る側の人が誰よりも頑張ってる人なら、想いは形になって届くニャリン!』

この世は物理や熱力学、そういった物質的な法則に縛られた世界

だ。しかし、ある種の思い込み、プラシーボ効果による治療や、それ以上の、もっと大きな範囲でヒトの心が様々なモノに影響を与えているという点は有り得る。それはそうだろう。有史以前より、ヒトの世を動かしてきたのは気持ちも感情も無い『物』ではなく、『ヒト』そのものだからだ。

この海の先にはまだ知らぬ大陸がある。この技術の先には新しい領域の技術がある。そういった、直接では目に見えない『想い』、または『意志』はもちろん。願い、望み、そういった『感情的な想い』が誰かの糧になる『現実』も、あって良いのでは無いだろうか。

こげちの言葉に、シノブ、カナデ、シャララは互いに目を合わせる。

「それなら……きっと……」

「うん……！　大丈夫、きっと届く！　だって……キョータ君はいつだって諦めない、頑張る人だもの」

シノブ、カナデの順で交わされた言葉に、こげちは納得したように小さく頷いた。

『……だったら、やるニャリン。想いよ……届け！』』

こげちのフワフワで先の膨らんだ尻尾に淡い光が宿り、それをシノブ、シャララ、カナデの順で彼等の手に当てる。ちょうど、ハイタッチを交わすように軽くだ。

そしてその淡い光はシノブ、シャララ、カナデの手に触れるたびに強く、大きくなり、最後に尻尾をパソコンのディスプレイに押し当てた。画面に映された者に、自分達の願う心を伝えるように。

その頃、アシュリアーナ。

『……まだまだ子供だな、勇者よ。諦めなければ負けないと思っているのか？　……本当の闘いは、それほど甘いものではない』
「……知ってる、さ……。だから……俺は何度でも立つんだ。……頑張って努力して、【誰かに勝つ】んじゃなく、オレの中にある弱い心に勝つ為に立つんだ……っ！」
『……そう、らよね……』

天とキーンの前に立つキョータだけでなく、フーイに支えられていたボボウもフーイの手を離れ、自分のチカラで立つ。

「『……自分じゃない誰かの為に諦めない心が――』」

そして、アイコンタクトなどの意思の疎通無しで、2人は同じ行動をとる。足を曲げ、踏み出し、自分からウルクに飛び込んで行ったのだ。

「本当に強いって事なんだ！」
『本当に強いって事なのら！』

キーンの静止の声とウルクの剣が振り上げられたのは同時だった。

「無茶ですよっ！　そんな体でっ！」
『……ならば、我を倒せるはずだ。本当に強い勇者ならばっ！　――』

カッ！

『――ッ！！』

その時、上空から光が降り注ぎ、ウルクの視覚を封じた。その光は後光の光のようにキョータとボボウを後ろから照らす。天は前腕を目の前に出してキョータを見た時、目を見開いた。重なるのだ、かつて、今のキョータとボボウ同様他の為に闘う者と。

「……サイ……！」

ウルクも腕を前に出して光を抑えるが、動揺を隠せない。

『これは……！？　いったいなんだっ！』

そしてそれは、キョータとボボウも……。

『「……ッ！？　……チカラが……溢れてくる……」』

ボボウからゴウッという炎が湧き上がり、キョータを包む。そしてその中から現れたのは炎王、ザラマンデル。

ザラマンデルは一心合体して身体能力の向上した脚力でもう一歩を踏み出し、推進力を得ると同時に背中から炎を噴き出させる。

紅炎翼（プロミネスウイング）。

その言葉と技に相応しく、紅の炎とそれを従わせるザラマンデルはウルクの装甲を砕き、胴を上下に焼き切った。そしてそのまま他の兵に突進し、鎧もその内側も焼き尽くしていく。

《何というチカラ……これが勇者のチカラだというのか……！》

本来なら胴体の上下が切断された時点で即死しているはずだが、業魔王の施した『不死の呪い』はそれでも彼等を殺させなかったら

しい。

『……だが、これだからこそ倒し甲斐があるというものだ……』

「ッ！」（……消えた！　……逃げたか。……まあ、あれだけのダメージじゃ闘えねぇな）

ウルクはスゥッと風景に溶けるように消え、天は心の中でそう言うと警戒のレベルを下げる。

「……キョータ達も消えちまった。……どうやら助かったらしい。それにしても――」

天はそこまで言うと上を見た。頬に落ちる雨は止み、青空が顔を出す。それと共に、周りの景色もその色を変えていく。

「――とんでもねぇ事をしやがった。……ほんの少しの地域だけだが、混沌地点（カオスポイント）を開放しやがった……っ！」

それはまるで、黒く塗り潰された絵から、黒が抜けて元々の絵が姿を現すように。

「……緑が溢れ、鳥達が歌う、生命が満ちた美しい土地……。この景色こそ、オレの故郷ヌースクアムだ……」

その時の天の表情は、笑み。それは、小さな範囲といえど故郷が開放された嬉しさと、これからキョータ達のような者と共に闘う事の、期待にも似た嬉しさからだった。

「すげぇよ……やっぱり勇者ってすげぇ……！」（こんな素晴らしいチカラを持っていたサイ。……そのチカラは、しっかり受け継が

れている……）

一方、現実世界では……。

「……あ、れ……？」

「ここは……」

毎度恒例、地面に強かに打ちつけられたキョータとキーンは呻きながら周りを見渡そうとした時、声と共にキョータの左側に質量が加わった。ようは、カナデに抱きつかれたのである。

「キョータ君っ！」

「ッ！　カナデ！」

とはいえ弱った体で受け止めきれず、倒れそうになるキョータをキーンが受け止め、再度周りを見る。

「……ほほう、僕の部屋じゃないですか。という事はつまり――？」

キーンは思わせぶりにキョータを見て、キョータはその意味に気付いて勢いよく立ち上がって喜びを露にする。もちろん、それを察したカナデは事前に離れておく。

「やったっ！　帰ってきたぞ！」

「良かった……本当に良かった……っ！」

「絶対帰って来るって信じてたよ！」

カナデとシノブの目は若干潤み、キョータはその言葉にコクリと頷いて応える。

「ああ。……でも、皆のお陰で帰れたんだ！　……オレ、聞こえたんだ。皆の声が。……カナデやシノブやキーン、天さん……。それに、オレの心の中からも声がしたんだ……。【頑張れ、負けるな】って。……そしたら立てたんだ」

キョータはそこまで言うと、右腕を胸の前で固め、嬉しさと感謝を込めて笑みを零す。

「皆の声が、オレのチカラになったんだ……っ！」
『そうなのらー♪』

キーンはクスッと微笑み、人差し指を立てて提案をする。ちょうど、時刻も腹も手頃な時間だ。

「さぁて、とりあえず、皆で夕食食べます？　ウチのメイドさんの料理は美味しいですよー？」
「おぉ！　やりぃぃいいっ！！」

その頃、キーン宅の塀に寄りかかっている人物が居た。

「……勝手な事をしたな。……ウルク」

ゼンはケータイを右手に持ち、ウルクと通信をしているのだ。

『申し訳ありません。どれほど強いのか、自分で確かめたかったのです』
「……確かめられたか？」
『……あの少年は間違いなく勇者……。恐るべき強さです。……あるいは……勇者サイを超える者かもしれません』

「……勇者サイよりも強い、か……」

キョータがサイを越える存在。

その可能性に対し、ゼンは表情を変えず、続けた。

「願ってもない事だ。オレの望みは最強の勇者を殺す事。……どうやら願いは叶いそうだ。……勇者を殺せば――」

ここでゼンは一旦言葉を区切り、目を細める。それと共に、普段は理性と目的に埋没された感情も僅かに垣間見えた。

「――……お前達を、助ける事が出来る……」

……そこに在る感情は、単純なモノではない。……彼にとって重みと痛みを伴うような……そんな、『記憶』と『思い』なのだろう。

第２５話　小さな一歩（後書き）

……結局打ち切りになった時もゼン君の思惑明かされなかったっけな～って事で、こちらもしっくり来そうなのを考えました。

……俺の書きたいシナリオのヒント出し過ぎたかな～とは思いますけどね（苦笑）。

これで原作２巻分終了です。次回も読んで下されば幸いです。

第２６話　傭兵王国クルダ（前書き）

実はギャグが多めな原作３巻分、始まります（笑）。

第２６話　傭兵王国クルダ

「さぁ、まだまだですよ、キョータ君。僕の本気の攻撃はこんなものではありません！」

キョータ達の通う小学校。時間は食後の休み時間。……何やら物騒な事を言ってるのは自他共に認める魔法フェチ少年のキーンである。服装はいつもの紺色ローブ、そして先端にU字の装飾の成された杖――本人曰く、魔導の杖といった所だろう――を持っている。

対して、キョータもまた体育着を着てキーンと睨みあう。

「おうっ！　全力で掛かって来い！　何度だって受けてやるぜ！」

「よく仰いましたね。ならば、我が魔力の全てを全て込めた暗黒杖（ダークネスワンド）のチカラを見せましょう。……喰らいなさい！　超魔弾攻撃っ！！」

「よぉし！　来――びぼぉお！？」

バガンッという痛々しい音と共に、キョータの顎に野球の球が命中。及び、後ろに倒れる。２人が何をしていたかというと、ようはノックである。……キーンの持っているのはバットではなくどこかオゾマシイ杖なのだが、そこは彼のご愛嬌という事にしておこう。なにぶん彼は魔法フェチだ。

「顔面直撃ですね。さあキョータ君、ギブアップですか？」

「うっ……ま、まだまだぁ……っ！！」

ヤハリ軟球とはいえ相当痛かったのだろう。キョータは若干涙目になりながらも立ち上がる。

「ふふふっ。ならば行きますよ。魔弾発射♪」

「ぐはぁっ！」

今度は左頬に命中。ボールはキョータの頬にぶつかると鋭角的に上方へ跳ね返り、そのままキーンの足元に戻る。また、野次馬根性という奴だろう。その様子を見てたクラスメイトは爆笑。中には涙を浮かべるほど笑っている者もいる。

「キョータへたくそー！」

「顔じゃなくてミットで受けろよ！」

「休み時間になんでノックの特訓なんてしてるのかな？　っていうかあんな近くで構えても捕れる訳ないじゃんか。しかも打ってるのはスーパー小学生の数騎じゃん。捕れっこないって！」

やれやれと肩を竦めながら金光は呆れた風に、嫌味十分に言うが、彼の言ってる事はあながち間違ってもいない。何せキーンとキョータの距離は3メートル未満。そして打っているのがほとんどの事をそつなくこなせるキーンである以上、難しいの一言に限る。

「そんな事ないよ。キョータ君なら絶対捕れる。……皆が応援してくれるなら、キョータ君はどんな事でも出来るよ」

そう言ったのはカナデだ。

金光の目はハートになっているが、その視線は一方通行。カナデの視線はキョータの方に向いている。

（……キョータ君、合体したとき二度と負けないように特訓してるんだね。合体してもしなくても、勇者は自分が強くなくちゃいけないから。……だから、キョータ君は魔法に頼らないで強くなろうと頑張ってる）

まぁ、カナデがそう思っていても、いや、だからこそ金光は気に食わないという訳で。

「そんなの無理ですよ奏さん。皆もそう思うだろ――」
「分かんねぇけど頑張ってるから応援してやる！」
「おらー！　頑張れキョータ！」

笑み、期待、キョータの周りには、不思議とそんな子が――いや、そう導かれてしまう者が多いのかもしれない。……あらゆるモノを明るく照らす、太陽のような資質を持っているという事だろう。何より、その声をチカラに変える時点で、資質としては十分だと言える。

「おっしゃ！　任せとけ！　お、りゃあ！」

バスンッと質量を伴う衝撃がキョータのミットに叩き込まれる。

「「「おーっ！　やったぁー！」」」
「……んなバカな……」
「……やりましたね、キョータ君。――」

クラスメイトは万歳で喜び、金光は呆然。カナデもそれを笑顔で見ている。が、キーンだけはどこかイジワルな笑みを浮かべていた。

「――ならばレベルアップです♪」
「ッ！　おぎおごおぎゅごぁあああっ！！！！」

……一言で言えば、キーンも負けず嫌いという事で、乱れ打ち炸裂。キョータの声にならない悲鳴が校庭に響き渡る。

「ッ！　あっ！　ボールが逸れて人に当たるぞ！」

1人のクラスメイトの声でキョータとキーンの手は止まり、その他の面々もそのボールの先を見やる。そしてボールは、バシンッ！という高い音と共にゼンの手の平に収まった。

「キャー！　柊君すごーいっ！」

「ゴ、ゴメン！　柊君大丈夫だった!?」

前者は突如現れた目をハートマークにした女子の皆さんによる黄色い声。後者はゼンの方に声を掛けるキョータだ。

ゼンは目を閉じ、ボールを持っていた方の手の肘から先を振った。

「え？　ッ！　うわっ！」

キョータの疑問の声は驚愕の声に変わる。ゼンから投げられたボールがキョータの足元の地面にめり込んだのだ。

「す、すげぇ……。ボールがグラウンドにめり込んだ……！」

「……柊君、怒っちゃったかな……？」

クラスメイトはめり込んだボールをまじまじと見つめ、キョータはゼンに気を遣って心配そうな顔。だが、キーンだけは少し違う感情を抱いていた。それは警戒に近い。

「……確かにすごいです」（こんな事、普通の力で出来る事じゃないですよ。……柊ゼン、一体何者です……？」

一方、ゼンは歩を進めながら心の中で言う。

（人の声をチカラに変える。……斉木陽太。真の勇者への一歩を踏み出したか。奴が真の勇者ならばジュリには勝てない。……オレがやる時が来たか）

そして、目的地に着いたゼンは懐に隠れているクーエイを呼んだ。

「クーエイ、行くぞ。……校舎裏のここなら誰も見ている者はいない」

『アシュリアーナのクルダに行くんだね？　ゼン……』

「……そうだ。クーエイ、邪力法典（じゃりきほうてん）を使うぞ」

直後、閃光が迸る。ゼンの持っている―邪力法典『じゃりきほうてん》があればどこに居てもアシュリアーナに行く事が出来る。……無論、クーエイのような持ち主と心を繋いだ特殊な素体は必要ではあるが……。

一方、その光はキョータ達にも見えていた。……ただ、先程言ったとおり校舎裏からアシュリアーナに向かったので校舎裏が光った程度にしか見えない。

「ッ！　光った！」

「わぁー！」

「何だ？　変な光だぞ？」

「雷でも落ちたのかなぁ？」

っと、クラスメイトの感想としてはそんな物だろうが、キョータにキーン、カナデは違っていた。何せ彼等は何度もアシュリアーナに行っているのだ。その光はその回数分だけ見覚えがある。

（（（……この光はまさか……自分達以外の誰かがアシュリアーナに行ったのか……？　……いったい、誰が……？）））

「……珍しいじゃないか、ゼン」

ゼンが現れたのはクルダ王城内。そして、彼とクーエイに声を掛けたのは国王であるジュリ本人だった。

「お前からオレの所に訪ねてくるなんてなぁ。楽しくお話でもして茶でも飲むかい？」

セリフは柔らかで親しげだが、その目は、その気迫は友好的なそれではない。部下が連続で返り討ちになっている事実に、誇りを傷付けられた事に対する苛立ちを覚えているのだろう。……もっとも、それはゼンも同じな訳だが。

ゼンは冷静で冷淡に、静かに声を紡いだ。

「無駄な話は良い。今日は頼みがあって来た……」

「あははーだ♪　お前がオレに頼みねぇ。こりゃ笑えるぜ。……お互い嫌いな奴だと思ってたのにな。なのに頼みかよ。……良いぜ。聞いてやる。言ってみな」

「勇者を殺す役、オレに譲れ。……お前では倒せない」

「……あっ？」

その言葉は的確にジュリの自尊心、矜持（プライド）を傷つけた事だろう。ジュリの目元が言葉と共にピクリと動く。だが、それを意に介さず、気付いていても無視してゼンは続けた。

「いくら強い闘技を使えても、相手は一心合体して最強の魔導形態になる。部下も残り２人。……とても勝てはしない……」

「てめぇ、ふざけんな！」

刹那、ジュリの腰は浮き、強靭な筋力のバネによる跳躍でゼンに殴りかかった。だが、その拳はジュリより一回りも二回りも大きな手で防がれる事となる。ゼンがクーエイと邪心合体を果たし、黒王グリフィアスになって真っ向からジュリの拳を防いだのだ。

「……無駄だ……。どれほど強くとも関係ない。勇者に勝てるのは、同じように合体（ユニオン）できる者だけだ」

しかし、そんな言葉で血気盛んなジュリが引き下がる訳がない。ジュリは拳を構え膝に溜めを作る。そしてまたグリフィアスも、応戦するために意識を四肢に行き渡らせる。

その睨み合いを止めたのは、ジュリの部下の1人だ。

『お待ちください、クルダ王。これ以上我が国をバカにする発言、許せません。どうか私に、勇者と闘う機会をください』

「……エギゼか。自信あんのか？」

『クルダの闘士は無敵です』

エギゼの簡潔な答え。それはクルダの誇っていた絶対的な掟であり主義であり誇り。その意味を誰よりも解っているのはジュリ本人だ。故に、彼はその言葉に納得したように1枚の令状を構成した。

「よぉし、良いだろうエギゼ。グリフィアスにクルダの力を見せてやれ。お前の主に手紙（メール）を届けろ。2人でチカラを合わせて、勇者を殺せ」

『御意』

第２６話　傭兵王国クルダ（後書き）

実は序盤の方、もうちょっと文章を縮められるかと思い訂正を加えましたが、内容的にはほぼ変わりありません。（↑一応報告ね

第２７話　幻素体エギゼ（前書き）

サブタイの読みは、幻素体と書いて『マーギッシュフレーム』です。

第２７話　幻素体エギゼ

時間は昼休み。場所は徳島県、桑の木小学校のＰＣ実習室。

「すげぇ！　４人抜きだぜ！？」

「頑張れ！　そいつに勝てば日本ランキングがまた上がるぞ！　負けんな源太！」

会話で分かると思うが、彼等は学校、それも実習室のパソコンでフェアプレイズをやっている。……まぁ、それを言えば学校にパソコンを持ち込んでいるシノブもそうなのだが……。

ドドンッ

ディスプレイから響く撃破音と勝利ＢＧＭ。源太と呼ばれた少年が勝利したのだろう。源太は意識と視線、体を友人に向けてガッツポーズを取る。右手を左手上腕に乗せるモノだ。

なお、源太の容姿としては右手にリストバンドをして首には十字架のアクセサリー。髪はツンツンヘアーである。

「あったりまえだろ！　オレ様を誰だと思ってんだ。選ばれしクルダの闘士だぜ！」

「さすが源太、フェアプレイズ全国大会四国地方代表！　全国ランキングもこれで１０位だぞ！」

ここまで言った所で、ピローンという独特の機械音が鳴る。源太の持っているフェアプレイズアカウントのメールボックスにメールが来たのだ。

「ん、何だ？　緊急の召喚状が届いたぞ。……内容は――ッ！　焔の邪妖精ボボウを倒せだって！？」
「ボボウ？　何だソレ？」
「……聞いた事ないね」

ボボウの名に反応したのは源太だけだったらしい。他の友人2名は訝しげに眉を顰めて唸る。そんな2人に対し、源太は自分の知っているボボウの情報を話して聞かせる。

「……最近フェアプレイヤーの中で話題になってる素体（フレーム）だ。……カタログにも載ってない、謎の素体（フレーム）。突然現れて全国代表者を次々に倒していて、凄く強いらしい。弱い妖精素体（フェアリーフレーム）なのに全国ランキングで30位内に入ってきてるんだ」

源太はここまで言うと口の端を引き上げる。文字通り、実力も正体も未知の相手。ただ、強い事だけが分かっている。それは全国ランカーとして闘争本能が疼（うず）くのだろう。

「……へへっ、面白くなってきやがった。この杉野　源太様が倒してやるぜ！　オレとオレ様の素体（フレーム）、エギゼの強さを見せてやらぁ！」

所変わって、神奈川県かもめ小学校。ようはキョータ達の通う学校だ。現在、キョータとキーン、カナデは保健室に歩を進めて――否、走っているのでここは足を速めていると言うべきだろうか。

「シノブっ！　シノブ！　さっきの光見たか！？」

キョータの声と共にガラッと勢いよく開けられる保健室の横引きの扉。シノブは1回セキをして、笑顔でそれを迎えた。

「けほっ。……あ、キョータ君……」
『シノブは風邪ニャリン。静かにするニャリン！』
こげちにたしなめられてキョータは思い出したように小さくなって謝罪する。
「ご、ごめん……。具合悪いのに大きい声出しちゃって……」
「まったく、あわてんぼーです」
キーンにもたしなめられて小さくなるキョータに、シノブは首を横に振って視線を自分の膝に置いてあるパソコンに向ける。
「ううん、良いよ。……それより、光は僕も見たよ。気になってフェアプレイズを立ち上げてみたんだ。……そしたら――」
シノブはここで画面をキョータ達の方に向けて見やすくし、キョータ達もまた画面に近づく。
「――見て、ここ傭兵王国クルダなんだけど、国の真ん中にある大きな闘技場の中。誰か居るんだよ。しかも、【 邪妖精ボボウとの一対一の勝負を願う！ 】ってあるんだ」
確かに、闘技場の中央には白マントに包まれた者がおり、そのような文章がある。
補足として、クルダの闘技場はそのまま王城と繋がっているらしい。武技に重点を置くクルダらしい建て方と言えるだろう。
「……これ、決闘の申し込みじゃないですか？」
「オレと決闘？　……オレは無駄な闘いはしないぞ？」

キーンの意見にキョータが嫌そうな顔をする。だが、この闘いは無駄という訳でもなかったらしい。何故なら、キーンの懐の本が光を放ったのだから。キーンは本を開き、読める部分の内容を読む。

「……【 四王国の１つであるクルダを業魔王の呪いから開放せよ。クルダを護る闘士を倒し、王と闘え。クルダ王を倒せば呪いは解けるであろう 】って事は、今この闘技場にいるのは、クルダ王を護る闘士、という事になりますね」

「……じゃあ、どうしても闘わなきゃいけないのね。……そして、クルダの王様とも闘って、勝たなきゃいけない……」

「……だったら、やるしかない！　ボボウ、行くぞ！」

カナデ、キョータの順の発言。キョータが声と視線をボボウの方に向けると……。

『ボボウの全てのチカラを込めて、最後の一撃なのらっ！』

ボボウ渾身の一手。それに対し、シャララは不敵な笑みを浮かべて腰に手を当てる。

『ククククッ……。まったく、大バカよね、あんたは。何度負ければ気が済むのよ、小猿』

『……２０連敗……』

『う……うぅ……うわぁぁあんっ！　また負けたのらぁあああっ！！』

フーイの通算成績に対し、頭を抱えて涙を流すボボウ。そして、妖精達はそこでキョータ達に気付いたらしい。ボボウはキョータの方を見て話しかける。

『あっ！　キョータ何してるのら？』

ずっこけていた。

キョータはベッドを支えに起き上がりながらボボウに問う。

「……ボ、ボボウこそ何してるんだ？」

『オセロなのらー♪　シノブに教えてもらったのら！』

ボボウはすっかり笑顔だが、先程言ったとおり惨敗。盤上一面シャララの『白』ときたもんだ。何をどうやったらそうなるのだろう。そして、しつこいようだがボボウ惨敗。そんな訳で……。

『そして、負けたんだから罰ゲームよ♪』

『ッ！　痛いのらぁああ！　悔しいのらぁあああああっ！！！』

シャララによる脳天グリグリ、名付けて、梅干しの刑執行である。

「……それだけ夢中って事は、今までの話って……」

『？　話って？　何の事なのら？』

キョータのおずおずとした問いに対し、梅干しの刑から開放されたボボウの正直で素直な疑問。キョータはすっかり気を削がれた様に肩を落とし、言う。

「……とりあえず、行ってくるわ。オレ1人で……」

『行くんらね、キョータ！』

直後、眩しい光が保健室を包み、キョータが次に目を開けると、クルダの闘技場の上空数メートルほどの場所に出ていた。

「くそ、空に出ちゃったぞ！　ボボウ！」
『分かったのら！』

キョータの声と目配せにボボウは応え、２人は空中で一心合体を果たし、地上に着地する。目の前には白いマントで顔を含めた前進を包んだクルダの闘士と……。

おおおおおおおおおぉぉぉぉぉ！！！！

聞こえてきたのは怒号にも似た重厚な声。周囲の観客席を見れば、数え切れないほどの素体（フレーム）が客席を埋め尽くしていた。
ザラマンデルは意識を目の前の闘士に向けたまま目を周囲に向ける。

「な、なんだ！？　……凄い数の観客じゃないか……」
『きっと現実世界の他のプレイヤーがたくさん見に来てるんらよー！』

その頃、桑の木小学校。３人の視線を釘付けにしているのはもちろんザラマンデルだ。

「来たぞ！　ホントに全然見た事ない形だ！」
「それに凄い強そうだ！」

友人２人の興奮をよそに、源太はコントローラーを握り、エギゼをコントロールできる状態にスタンバイする。

「騒ぐなよ。まあ見てろって。日本ランキング１０位の強さを教えてやるぜ！　さぁ、邪妖精を退治するぞ、エギゼ！」

所変わってアシュリアーナ。マントを外して全身が露になったエギゼを一言で言うなら、ケンタウロスだろう。顔は中世の騎士のような甲冑で覆い、足は蹄の変わりにタカを始めとする猛禽類（もうきんるい）のような鋭い爪。そして前足2本、ちょうど中間の位置の関節には、鎧と共に鋭い棘が装備されている。

そして手始めに、足の棘を利用したヒットアンドアウェイの一撃離脱攻撃を繰り出すが、軽くザラマンデルの体勢を崩すだけに終わる。

「ッ！　うおっ！」（速くて重い攻撃！　……こいつ、人型でも獣型でもないぞ！）

《そうらよ！　あれは幻素体（マーギッシュフレーム）らよ！　物凄く強いんら！》

「……だからって、負ける訳にはいかないっ！」

ザラマンデルは膝を曲げ、一気に伸ばす。ザラマンデルの攻撃は全体的に近距離技なため、まずは距離を詰めない事にはどうにもできない。

一方、先程エギゼの攻撃を体勢を崩すだけで済んだ訳だが、それ自体凄い事なのだ。

「こいつ、小さいのに凄い防御力だ！」

「それに速いぞ！　ホントに妖精素体（フェアリーフレーム）か！？」

大抵の素体は先程の一撃で沈んでいたのだろう。それを何度も見ているからこそ、源太の友人は驚いたのだ。源太も若干驚いたようだが、すぐに余裕を取り戻して筆入れからプラスチックの定規を取り出した。

「確かに強いな。……でも、エギゼの力はこんなもんじゃないぜ！」

エギゼに施された武装合体。それはアシュリアーナでは円錐状の槍となり、エギゼの右腕へと装備された。【破砕槍（ブレイカースピア）】といった所だろうか。

ダッ！

勢い良く駆け出されたその速度は先程の比ではない。とっさに防御体制をとったザラマンデルを槍で引っ掛ける形で捕え、持ち上げ、地面に叩き付ける。

そして無論、その様子を見ているカナデとシノブは気が気でない状態だ。

「キョータ君！　……地面に埋まっちゃった！」

「人型の部分で相手を捕らえて獣型の突撃力で突いたんだ！　キーン君、助けに――」

「お断りです」

上からカナデ、シノブ、キーンの順。

カナデとシノブは口をポカーンと開けてその理由を問う。

「「ど、どうして……」」

「だって一対一でしょう？　そういう約束じゃないですか♪　……相手が持てるチカラ全てで正面から向かってくるのであれば、それに応えて闘い、正義を貫く者。……何度でも立ち上がり、前へ進む。それがキョータ君には出来るんですから」

それはキョータという人間を良く知る者としての信頼の形。キーンはそう言いながら、視線をディスプレイに戻す。そして彼の言葉どおり、ザラマンデルは立ち上がった。

「……確かに強いな。……でも、負けないぜ……。オレはどうしても勝たなきゃいけないんだ……！　さあ来い、お前の攻撃受けてみせるぜ！」

一方、武装合体の攻撃は自信があったらしく、友人2人はもちろん源太も焦りを隠せない。

「……こいつ……また立ち上がった……。普通じゃないよこの素体（フレーム）……」

「なあ源太、これ止めた方が良いんじゃないかっ？」

「うるせぇ黙ってろ！　こいつ、ぜってぇ壊してやるっ！！　行けぇえええ！　破砕槍（ブレイカースピア）！！」

槍を脇に固め、前傾姿勢になる事で突撃力を増したエギゼの疾駆。そしてそこから繰り出される渾身の突き。だが、ザラマンデルはそれを正面から受け止めてみせた。先端を包み込むように、左手だけで受け止めたのである。

「ッ！　破砕槍（ブレイカースピア）を真正面から受け止めやがったっ！！」

ショックを受けている桑の木小の源太に反比例するように、キーンは喜びで拳を握り締めていた。

「特訓が役に立ってますよ！」

つまり、先程行ったノックにより速い物に対する反応速度が上がっていたという事だ。そしてさらに、キーンは先程グラウンドから持って来ていた物を取り出す。野球のミットだ。

「一対一、とはいえ向こうは武装合体が許されているのですから、

こちらだって……。さぁボボウ君、武装合体です！」

その頃アシュリアーナでは、槍を掴んでいたザラマンデルの左拳が炎に包まれる。

《キョータ！　外の世界から武器が届いたのら！》

「ッ！　キーンか！」

炎の中から現れた武器は、巨大な拳だ。【紅手甲（フレイムガントレット）】といった所だろう。

外側からグローブのように装備するタイプで、強度と力を併せ持つ武器と言えるだ。そして、そんな拳で掴まれた槍がただで済む訳がない。ピキピキと音を立ててひび割れ、ついには砕けてしまった。

源太はエギゼを操作して槍を破棄。距離を取って体勢を整えようとしたが、ザラマンデルの方が一拍動作が速かった。

「うおぉぉおおおおっ！！　焔拳（フレイムナックル）っ！！」

巨大な拳を握り締め、身を捻り、体重を乗せて拳を撃ちだす。手首の辺りから炎が噴き出し、ロケットのように拳が地面と平行に飛ぶ。

エギゼは胸の前で腕を交差して防御体勢を取るが、その腕ごと拳は貫通し、胴体を粉々に焼き砕いた。それは現実世界のエギゼにも影響を及ぼし、両腕の付け根と首が胴体から切り離す。

「ッ！　うわぁ！」

「源太……負けたら素体（フレーム）が壊れちゃったぞ！」

「どうなってんだよこれっ！」

上から源太、友人2名の言葉。源太はガクガクと震えながら言葉を続けた。

「知るかよ……せっかく日本ランキング10位に入ったのに……コイツに入れ替わられちまった!!　何千人ものプレイヤーの前で日本ランカーになった謎の素体……。コイツはいったい何者なんだっ!!?」

その頃、ザラマンデルには勝者のためのリボンや紙吹雪が舞い降りていた。ザラマンデルの視線は、城に通じている門へと向けられている。

「何とか倒せたぞ……。このまま王の所まで行ってやる!　クルダ王待ってろ!　オレがクルダを業魔王の呪いから解放してやる!!」

そして王城、ジュリの部屋では……。

「……勇者が勝ったぞ。言ったはずだ。合体できない者に勇者は倒せん。……オレが殺る。文句は無いな?」

「……文句だと?」

ジュリは肩を震わせるが、それは部下が倒されて自棄になったのでもグリフィアスを恐れてでも無い。笑いだ。滑稽な者を笑う笑みだ。

「ははははっ!!　あるともよ!　文句だらけだぜっ!!　笑わせんなよ!　オレは四天王だぜ!?　どう考えたってめぇより弱い訳がねぇじゃねぇかっ!!」

「……どういう意味だ?」

目を細めて訝るグリフィアスに対し、ジュリは残り1人の部下の後ろに立ち、そのマントを外しながら言う。

「言ったとおりの意味さ。テメェに出来る事が、オレに出来ない訳ねぇだろ？」

「ッ！　幻素体（マーギッシュフレーム）!?」（……まさか、四天王も邪心合体できるのか……っ!?）

流石のグリフィアスにも動揺が走る。姿を現したのは、全体的に黒を基調とした素体だった。頭部にはU字の角。両腕の表に当たる部分には装甲があり、足は反対に細い。己の肉体のみで敵を打ち滅ぼす、クルダらしい近接戦重視の素体（フレーム）と言えよう。

第27話　幻素体エギゼ（後書き）

はい、ボボウとシャララのオセロ対決、本当に一色でした（笑）。
……まぁ、とある事で1回だけそういったのを見た事ありますが、まずありえねぇと思うでしょうね（笑）。

3巻は丸ごとクルダ編とも言っていいですね。次回はジュリのバカさ……もとい強さが出てきます。お楽しみに！

明日は流星の方を更新するので、そちらもお楽しみに。

第２８話　クルダ流交殺法（前書き）

さて、このサブタイですが、ニライカナイを読むと思った以上に面白い要素を書けそうな要素です。いずれ明かすのでお楽しみに。

（↑その台詞は後書きで言うべきでは？

第２８話　クルダ流交殺法

「こいつがオレの素体（フレーム）、ブラフマーだ」

ジュリの最後の部下、そのマントを取り、ジュリ専用の素体（フレーム）が露になる。四天王それぞれに素体（フレーム）が渡されていた事は知らなかったらしく、グリフィアスにも戸惑いが生まれた。その戸惑いの間に、ジュリは言葉を続ける。

「お前に闘ってもらう必要はねぇ。オレにはお前以上のチカラがあるんだ。……何よりも強いチカラ……勇者を殺せるチカラをな」

その頃ザラマンデルは、クルダ王であるジュリに会うために探そうという所だった。

「クルダ王を倒さないと呪いが解けないんだっけ。……ボボウ、王はどこにいるんだ？」

《大丈夫なのら。闘技祭（とうぎさい）で勝った人は王と闘う権利があるんら。きっとクルダ王の方がキョータと闘うためにここに来るはずら。クルダ王に勝った者は真に強い闘士と認められてクルダの新しい王になれるんら》

「オレがクルダ王に？　……そんなの別になりたくないぞ、オレ。……ッ！　あれっ……この光って……」

不意に空間に電気のような光が生まれ、ザラマンデルの言葉は中断される。そう、アシュリアーナへ行くたびに何度も見ている光が。そしてそこから現れたのは……。

「大魔法使い（自称）キーン参上っ！！」

『……風の妖精フーイ参上……』

いきなり飛び出た事に驚いてザラマンデルがずっこけてる事も観衆の事もお構いなし。キーンは超ゴキゲンな様子だ。

「ならば僕が王になりましょう！　そして、このクルダをどこにも負けない魔法王国にしようじゃないですかっ！」

シ――――――ンッ……

「……おや、数千人の観客が静かになっちゃいましたね。……これは……気がつかない内に沈黙魔法でもかけちゃったんでしょうか？」

「違うよ！　いきなりの出現に数千人が一度に驚いちゃってるんだっ！」

「ほほほほほっ。魔法使いともあろう者が、普通の登場ではマズイですからねぇ♪」

ずっこけから回復したザラマンデルのツッコミにマイペースに対応するキーン。だが、ザラマンデルとしてはセコンドだろうと味方が来てくれたのは嬉しい限り。

「まぁいいか。……カナデやシノブと話し合って来たんだろ？　王と闘うのに協力してくれるのは嬉しいよ！」

「……王になれると聞いて何の話し合いも無くこっちに来ましたよ？　本を開いてペカーッと」

「いきなり来たのか！？　２人ともビックリして引っくり返ってるぞっ！！」

キーンの「テヘッ」という誤魔化すような態度に、すかさずツッコミを入れるザラマンデル。
その頃かもめ小学校では……。

「……いきなり消えたと思ったら――」
「――なんて強引……」

カナデにシノブ、シャララ。絶賛引っくり返り中である。そして、カナデは起き上がりながら1つの提案をする。

「で、でも王と闘うなんて……私も応援に行った方が良いよね？」
『そうね。……そして教えてあげなきゃ。王に相応しいのはキョータでもキーンでもなく、私達って事をねっ！』
「……基本的には助けに行く方向で話しを進めたいな……」

シャララ、立ち直りながら野心を暴露。それに対し、人間2名は苦笑交じりでスルー。こげちはクールに聞いてるだけだ。
シノブはパソコンに視線を戻しながら話を進める。

「……ま、まぁ、誰が王になるかは置いといてさ、ちょっと様子を見てからにしとこうよ……。クルダ王っていうのがどんな敵か分からないから慎重にいかないと。……ただハッキリしているのは、物凄く強いって事。……だってクルダ王は業魔王四天王の1人。今までの敵とは訳が違うよ……」

一方クルダ。闘技場の門が開き、1人の人物が出てくる。褐色の肌、自信と誇りを湛える瞳。クルダ王、ジュリである。ジュリはザラマンデル達の前に立つと、意外にも丁重に挨拶をしてきた。

「傭兵王国へようこそ、勇者殿。クルダ王にして業魔王四天王であ

るこのジュリ様がお相手するぜ！」

ジュリが現れ、話した。たったそれだけなのに、観衆は沸きあがる。色とりどりの大きな旗は振られ、重厚な声が響き渡る。それは、歓喜の響き。

「ッ！　なんだっ？」

「静かだった観衆が一気に爆発しましたね」

ザラマンデルにキーンの順。キーンは「ふむふむ」と何かを考えるように頷くと、続きを言った。

「どうやらジュリとやらは超一流のお笑い芸人のようですよ。……これだけの数を一気に笑わせるとは」

「……物凄く強くて人気があるから、出てきただけで観客が喜んでいるのでは？」

「ほほーっ。プロレスの人気レスラーみたいなもんですかね」

「……たぶん」

「意味は分からんが無性に腹立つぞその言葉ぁ！！」

確かに、自分が誇りを持っている流派をお笑いだプロレスだと言われたら腹も立つだろう。……例え意味は分からなくとも、からかっている事ぐらいは分かる。

だが、観衆から見たらまんざらでもない反応で……。

『何言ってんだあいつら！』

『おもしれー！　ばかみてー！』

マーギッシュフレーヒューマンフレーム
幻素体や人間素体が主だが、その誰もが爆笑。観客席は笑いの渦に包まれた。

「おや！　僕達の会話も受けてますね！　レスラーに勝ちましたか？」
「こんなんで勝ってどうすんだよっ！」
ワハハハハハッ！
「ほらまた受けた♪」
「だから嬉しくないって！」
「……お前等……」
口元を引きつらせて怒るジュリ。……だが、彼が怒っていたのは……。
「オレより面白い事言って人気取るなぁぁあああっ！！」
「ほほほっ。精神的ダメージ効いてますか？」
ジュリとキーンの問答に置いてかれた感のあるザラマンデル。クルダ王ジュリ。……どこかズレて無いかと。
一方ジュリは、とうとうキーンのからかいに耐え切れなくなったらしい。槍投げの構えのように腕を持ち上げて、拳を固める。
「てめぇ、オレをおちょくってんなぁ！？　許せねぇっ！　クルダ流交殺法（りゅうこうさつぽう）、刃拳（ハーケン）んんんっ！！」
拳は真下ではなく、刀の背のような緩やかな曲線を描きながら振り下ろされる。その拳は肉眼で視認不可とも言えるスピードだ。
ドドッガガガガッ！！！

拳が振り下ろされた辺りから地面が割れ、その地割れは真っ直ぐザラマンデル達の方に向かってくる。

「うわっ！　いてぇ！」

ザラマンデルはとっさに腕を交差させてガード体勢を取り、迫り来る岩と見えない攻撃からキーンを護る。そしてその攻撃が収まった頃、改めて地面を見ると明らかに割れている。ザラマンデルを頂点、ジュリを底辺とした二等辺三角形の穴が開いていた。まるで、一筋の何かが進んで、その周りの大地を纏めて抉ったように。

「って、地面が割れてるぞ!?」

「ふーむ、降り抜く拳のスピードが音速を超える事で、巨大な衝撃波を発生させているようですね」

キーンの冷静な分析。地面を抉り、ザラマンデルを襲った見えない攻撃の衝撃波だったという訳だ。だが、ザラマンデルはキーン程冷静ではなかったようだ。……まあ、無理もない。音速の拳を振るい、果ては衝撃波まで生み出す。そんな生身がいて良いのだろうか。

だが、それがクルダ流交殺法なのだ。生身のまま魔法に匹敵するチカラを持つ、傭兵王国クルダにだけ伝わる一騎当千の格闘技。

『すげぇ！』

『流石だ！』

観衆からそんな声が聞こえる。その声にようやっと普段の調子を戻したのか、ジュリは自慢げに拳を突き出した。

「どうだ勇者ども！　このジュリ様の方がお前達より面白いだろっ！！」

……。

「あああああっ！！　間違えたぁ！　オレの方が強いだ、面白いじゃねぇぇえええっ！！」

「面白いというより哀れですな♪」

というかバカだ。

頭を押さえて自分の不覚っぷりを悔しがるジュリにキーンの容赦ない一言。だが、その一言がジュリを本格的にバトルモードに移行させてしまったきらいがある。ようは、ブチ切れた、という事だ。

「……哀れ、だと？　許さぁぁあんっ！　クルダ流交殺法、爪刀（ソード）っ！！」

右下から左上へ、ハイキックの軌道で振り上げられるキック。だが、それにも衝撃波が乗っているという訳で……。

「ッ！　うわぁ！」

「……ふーむ、パンチより強力なキックでの衝撃波とは……やりますねっ！」

「オレを盾にすんなぁっ！」

……どうも、ちゃっかりキーンはザラマンデルの後ろに隠れて盾にしていたらしい。ザラマンデルは起き上がるなり即気持ちをジュリに向けると、右拳に炎を纏わせる。

「くそぉ、もう生身だからって許さないぞ！　炎撃（ファイアブロー）！」

「許す、だと？　――」

ザラマンデルの炎の拳を前に、ジュリは右拳を固め、裏拳の要領で内側から外側に拳を放った。

「――お前に許してもらう事なんかあんのかぁ！？」

「ッ！！　うおっ！？　……オレの攻撃を素手で弾き返したっ！？」

そのジュリの拳はザラマンデルの炎ごと拳を弾き返す。それも、あえて裏拳の軌道――ザラマンデルから見て外側から内側の軌道――という事で、あわよくばザラマンデルの炎をザラマンデル自身へぶつけようともいう攻撃だった。

再び湧き上がる観客。その中、観客の目が闘技場に向いている今、観客席の上へ目を向ける者なんていない。その人目に付かない、一時的な死角とも言える場所に、グリフィアスがいた。

「……確かに強い」（だが、それだけでは勇者には勝てない。合体（ユニオン）した勇者の姿は最強の魔導形態。どれだけ強い攻撃を与えようとも、素手では決定的な一撃にはなりえない。合体（ユニオン）した者に自然に宿る魔力で攻撃しない限り、精霊のチカラを得て自然回復する勇者の魔導装甲を打ち破れん……）

そして再び闘技場中央。

「だぁああ！！」

「おおぉおおっ！」

バゴッという激突音。ジュリの蹴りとザラマンデルの炎を帯びた拳が真っ向からぶつかり合い、ザラマンデルの炎は吹き飛ばされ、拳にヒビが入る。また、ジュリとしても蹴りも決定打にはなりえず、互いの舌打ちのキッカケとなった。

「くそっ！」（何てキックだ、炎撃の炎（ファイアブロー）が押し返される！）
「ちっ！」（全力の蹴りでも壊れねぇ。確かにとんでもない耐久力だ！）

互いに近距離戦を得意とするため離れ過ぎない範囲で距離を取るザラマンデルとジュリ。
キーンは杖を口元に持ってきて、お茶目な口調で言った。

「流石に王様だけあって強いですね。どちらも一歩も引かない闘いです。現場クルダ闘技場からお伝えしました。スタジオにお返しします♪」

「「他人面すんなコラァァアアアッ！！！」」

ワハハハハハハッ！

ザラマンデルとジュリのツッコミと観衆の笑い声と共に、次回へ続く。

第２８話　クルダ流交殺法（後書き）

活動報告にも書きましたが、原作分が終わったらこちらもペースダウンしそうです。……まぁ、理由は色々あるって事で納得してもらえたら助かります。

第２９話　武技言語（前書き）

……やはり、流星とこちらでは世界観も何も変わりすぎているので平行して書くのは堪えますね～。……これでもこっちの書き方は心得てきたつもりなのですが……。

第２９話　武技言語

キーンのユーモアにより会場……もといクルダの闘技場では笑いが沸き起こり、現実世界のカナデとシノブは苦笑。シャララは『イエーイッ！』などと乗っている。

「わっ！　返ってきた！　……ってスタジオって……」

「ここは保健室ですよね……？」

シャララはここで無駄なテンションを抑え、現状を言う。一見、ザラマンデルとジュリの戦闘は互角に見えるが……。

『……けどマズイわ。あのジュリって奴本当に強い。いくら勇者が一心合体した姿になったって、あんな強力な攻撃じゃ何回かは耐えられてもいつかは装甲も壊れるわ。……さっきみたいに相打ちになっても、ダメージが溜まって追い込まれていくのはキョータの方なのよっ！』

そしてそのシャララの言葉は的を得ていた。現に相打ちに衝撃だけでなく、ジュリの攻撃を受けきれずにクリーンヒットした分のダメージ。それらの蓄積により、ザラマンデルの全身にヒビが走ってしまった。

実際、相打ちになる方が凄いと言えよう。一心合体により運動能力も耐久力も上がったとはいえつい最近闘い始めた小学生と、一国を武道の腕により治める王。実戦経験が違いすぎる。

「ッ！　キョータ君っ！」

そしてそのヒビはキーンからも見えていたらしく、心配する声を

上げる。しかし、ザラマンデル自身が彼の助けを拒んだ。

「ダメだ、キーン！　手を出すなっ！　アイツも1人で闘ってる！　だからオレも1人で闘う！　正々堂々と闘って、勝ってみせるっ！！」

「良く言った、勇者殿。全身ぼろぼろになりながらそれでも闘うお前のチカラを、敵ながら尊敬してやる」

そのザラマンデルの闘志にジュリもまた、闘いに飢え、それでも理性を失わない獰猛（どうもう）な闘志をもってそれに応じる。

キーンは2人の闘志にそっと目を閉じ、納得したように後ろに下がった。

「……キョータ君……。分かりました。……一対一でないと王になる権利がありませんもんね♪」

「「シリアスシーンなんだからギャグで落とすなぁあああああっ！！」」

以上、ザラマンデルとジュリのツッコミ。キーンが下がったのは単に、飛び火が来ないようにという措置だったようだ。

そしてそんな訳でギャグパート終了。

「どんな敵にも立ち向かう誇り高き者よ、敬意を払い、我が最高の技でお相手するっ！」

ジュリはそう言うと目を閉じ、精神を集中し始めた。

――……我は無敵なり……――

「ッ！　なんだ……？　ジュリの体が大きく見えるぞ！」

《武技言語ら！　クルダの闘士の中でも随一の者にしか出来ない究極の技なんら。自分で唱えた言葉を使って、自分に催眠術をかけてるのら。武技言語を使った闘士の力は、通常の何十倍にもなるんらよっ！》

――……我が闘法に、敵う者無しっ……！――

言ってしまえば自己暗示というやつだ。プラシーボ効果とも言うが、思い込みのチカラは時に肉体にも影響を与える。そして、ボボウの言う随一の者とはその暗示が一際大きく効く者の事だろう。メキメキっという音がジュリの体から聞こえ、彼の筋肉が一回りも二回りも大きくなる。

ドッ！

その増強された脚力はさながらロケットのように地面を踏み出し、駆けて来る。熊と例えるには速すぎて、ライオンと例えるには力が強過ぎる。そんな、獰猛な獣がザラマンデルに駆けて来る。

「我が全てのチカラを見せてやるっ！　行くぞっ！！　クルダ流交殺法、空牙（クーガ）っ！！」

ジュリは右の5本の指をグーで固めず、前へ向けたまま突き出し、ザラマンデルを突き飛ばして瓦礫の中に埋もれさせた。

勝負は決まった。そう判断したジュリは一呼吸を付き、静かに言った。

「……強かったぜ、勇者。……でも、さよならだ。……オレの勝ちだ」

「……空牙……。拳の高速移動で5本の指全てに衝撃波を生んで相

手に密着して解き放つ。……確かに凄い技ですね」

キーンの分析に「フッ」と不敵な笑みを浮かべると、ジュリは鋭い眼差しでキーンを見る。

「解説あんがとよ。次はお前が相手か？」

「そうしたい所ですが、止めておきます。あなたの相手はキョータ君ですから」

「はぁ？　……何言ってんだ。そいつならさっき倒したよ」

「あなたこそ何言ってるんです？　さっきキョータ君は僕と約束したんですよ。――」

ジュリが1人で闘っている以上、自分も1人で闘うと。正々堂々と闘って勝つと。

「――僕が一番信じているキョータ君が言ったんです。友達との約束を、命を懸けて護るキョータ君が言った事を、僕は信じているんです。……必ず勝つ。その言葉を、僕は最後まで信じています」

ガラッ……

「ッ！！」

「……ねっ？」

ジュリの驚きとキーンの静かな微笑み。瓦礫の中から、ザラマンデルがゆっくりと出てきて、起き上がる。その闘志に惹かれてだろうか。観客達もまた、「おおおぉぉおおおおおおっ！！！」と興奮した声を上げている。

対して、ジュリは動揺を隠せず、一歩後ろに下がる。

「……バカな……体だってボロボロじゃねぇか。なのに……なんで立ち上がれるんだよっ！」

「……何度だって立つ！　……キーンと約束したんだから……皆を助けるために、オレは勇者になったんだからっ……！　勇者がやられて倒れたら……世界が終わっちゃうじゃないか……！　それが分かっているから、オレが立って、世界を護るんだっ！！」

現在も息も絶え絶えで、全身にヒビが走るほどダメージを受け、それでも、自分以外の誰かのために……。誰かの希望となるために、倒れる訳にはいかないのだろう。

「……何が勇者だ。そんなのただの幻想だ！　そんな幻想、オレがぶち壊してやる！」

先程立ち上がった事、そしてその理由……それを可能にした『思い』の源が分かり、ジュリは押されていた。武技的にではない。精神の段階で、押されている。

ドスッ

その音はジュリの拳がザラマンデルの胴体を貫いた音。……だが、ジュリにあるのは動揺。

「ッ！」（なんだ……っ！　腕が抜けねぇ……体貫かせて固定しやがったっ！）

「……捕まえた！」

ザラマンデルは貫いた腕を掴み、ジュリの肩も掴み、ジュリを自分の至近距離に維持させる。

「……ジュリ、オレも見せてやる。幻想じゃない勇者のチカラをっ！　……閃光（フレア）――」

「ッ！」

ザラマンデルの頭部の竜の頭が口を開く。そしてその中から溢れ出る熱と炎。ジュリは無理やり抜け出るが、ザラマンデルと地面を同時に突き飛ばす形での抜け出しを取ってしまう。すなわち、今ジュリは空中。ズルフェのように飛行能力が無い限り、初期の軌道を多少ずらせる程度で完全には避けられない。

「――破裂（バースト）ッ！！！」

天へと走る一筋の閃光。ザラマンデルの閃光破裂が天を貫いた。そしてその光が収まった後、地上には倒れているジュリとそれを見つめるザラマンデルが居た。

「……敵……だったけど、最後まで正々堂々と闘ってくれて、ありがとう……」

おおおおぉぉぉおおおおおおっ！！！

観客席からは、勝者であるザラマンデルを称（たた）える声やテープ、紙吹雪が舞う。キーンは優しい笑みを浮かべながらザラマンデルに近づき、ザラマンデルも親しみと感謝を込めた笑みを返した。

「……キョータ君、約束を護ってくれましたね……」

「キーン……。ありがとうな、オレを信じて手を出さないでくれて」

「当たり前ですよ。僕がキョータ君を裏切る訳ないじゃないですか」

「……たいした……信頼だな……。――」

「「ッ！！」」

ゆっくり、本当にゆっくりだが、ジュリは手に、足に力を加えて立ち上がる。……そして、息も絶え絶えの中続きを言う。

「――友を信じられるのは本当に最高だ……。でもな、オレも同じだ……。オレを信じて四天王にしてくれた業魔王様を、裏切る訳にはいかねぇんだよ……！」

「ジュリっ！　まだ動けるのかっ！？」

キョータの言葉に対し、ジュリは「へっ」と強気に微笑むと右手をL字に挙げて、手首を前に倒した。それと共に城から何かが飛んでくる。

「……お前だってボロボロなのに立ったじゃねぇか。……オレだって立つさ……。人として闘っていたかったけど、そうもいかねぇ。……負けられねぇからな。……人じゃないチカラを使わせてもらう……」

飛んできたモノはジュリの後ろに着地し、それを見たザラマンデルは驚きで目を見開く。

「ッ！　これは……素体（フレーム）っ！！？」

「……お前達が合体するように……オレも合体出来るんだ……。それもただの素体（フレーム）じゃない。これは神型（デュオスタイプ）。……オレ達四天王は神の素体（フレーム）と合体して、自ら神となる。……見せてやる！　行くぞブラフマー！　邪神合体（デュオスユニオン）っ！！」

邪神合体。その名に相応しく、闘技場に妖しく、禍々しい光が迸

る。そしてその光が収まった時、ジュリがいた場所に居たのは、一体の存在。

人型で全体的に黒を基調としており、頭部には左右に2本の角がある。前腕から先と足全体は装甲で覆われている。そして、その身長はザラマンデルの2．5倍はあるだろうか。

「……さぁ、行こうか勇者。神のチカラを思い知れっ！」

第２９話　武技言語（後書き）

さて、神の素体と邪神合体したジュリですが、次回もまたアホな面を見せてくれます（笑）。そちらもどうぞ笑ってあげてくださ――

ボコッバギャッ！（↑ジュリにぼこられる音

……え～……とにもかくにも、次回をお楽しみに……。（ガクッ

第３０話　ネーミングセンス（前書き）

え～……このサブタイの理由ですが、読んでいけば分かると思います。

第３０話　ネーミングセンス

２つの角が特徴の神型素体（デュオスフレーム）、ブラフマー。その素体と邪神合体を果たしたジュリに対し、ザラマンデルとキーンは驚いている。理由は２つ。１つはジュリも素体（フレーム）と合体（ユニオン）出来た事。そして２つ目は、その巨体さだ。ゆうに、ザラマンデルの２．５倍はあるだろうか。

２人が驚いている中、ジュリは言葉を紡ぐ。それと共に、２つの角に光が宿り始めた。

「……閃光破裂（フレアバースト）……。確かに凄い技だが、オレにだってあるぜ、そういう技が。……見せてやるぜ！　光子破砕（フォトンブレイク）っ！！――」

キィィィっと低く、高い音が響いたかと思えば、光の光線が２つの角から放たれる。それはザラマンデル達の頭上を素通りしたが、実際それだけでも十分強力で、直撃していないにも関わらずザラマンデルはキーンとフーイを押さえて地面に踏ん張るのが精一杯。光線が進むにつれて、その暴風だけで地面が抉られていく。

そして、その強大なチカラの塊は真っ直ぐと観客席へと向かう。もちろん、観客席に居た素体達は押し合い圧し合い（へしフレーム）で避難をしている。

『わぁあ！　何でこっち来るんだ！』
『ひどいよ！』
『逃げろっ！！』

ゴパッ！

その轟音と共に観客席と逃げ遅れた素体は破砕、粉砕、融解し、

それだけに留まらず町にもその光線が牙を剥く。
その様子を見ていたザラマンデルとキーンは言葉を交わす。
「何てヤツだ！　観客の素体まで巻き添えにするなんてっ！」
「いいえ、それだけではありませんよキョータ君！　攻撃の威力が強すぎて、クルダ自体が真っ二つになってます！」
言いながらキーンが指差したのはクルダの城下町。確かに、その光線の威力で闘技場から城下町――いや、王国を囲う堅牢な壁まで大きな穴が開いている。
ザラマンデルを始めとした素体と合体した者の魔導装甲は精霊のチカラを得て自己修復が可能。……だがしかし、それだけの威力が相手では直撃すれば自己修復も間に合わず一撃で消し飛ぶ事だろう。
ジュリは言葉を続ける。
「……今のはワザと外したんだぜ？　光子破砕（フォトンブレイク）の威力を教えてお前等をビビらそうと主ってな。さぁ、オレ様自ら考えたこの技の名前を教えてやる。お前等を元の世界に連れて行く技の名……――」
ジュリの右手が人差し指を残して閉じられ、ビシッとザラマンデルとキーンを指差し、十分な溜めを作ってから言った。
「――その名も、王様光線（キングビーム）！！」
ザラマンデルは後ろにずっこけた。それはもう綺麗な弧を描きながら倒れた。その様を見て、ジュリは誇らしげに胸を張った。
「ふふふ。あまりのカッコ良さに驚いたか！」
「驚いたよ！　あんまりカッコ悪いからっ！！」

ザラマンデル、起き上がりながらのツッコミ。そしてキーンもまた、首を振って呆れを露にする。

「やれやれ。まったく、知性のカケラも感じられない名前ですね。……ふむ、自分が王様だから王様光線（キングビーム）ですか？　なら、角から出てるんですから角光線でもＯＫですね！」

自分が考えた技名を貶されてショックな様子なジュリ。……かと思いきや……。

「ッ！　つ、角……光線だと……っ！？　オレよりカッコ良い名前付けてんじゃねぇ！　角光線！！」

「どこがカッコ良いか具体的に説明しろバカーっ！」

「ほっほっほ♪　お間抜けですね、ジュリ君は♪」

上からジュリ、ザラマンデル、キーンの順。ジュリはちゃっかりキーンの提案――角光線――を引用し、頭上のビームを気にしつつザラマンデルのツッコミが飛ぶ。

だが、キーンはここでふとおちょくる表情を止め、フーイと視線を交わす。

「……でも、相手がああいう形で来るのなら……フーイ！」

『御意！』

迸る光と舞う白い羽と羽根。キーンがフーイと一心合体をし、風王ズルフェとなったのだ。

「……これは既に一対一の決闘とは言えない。護るべき国を破壊するような者に、王の資格など無いのだから。民を攻撃した時に、あ

なたの心は王である事を止めている。……ここからは決闘ではなく退治です。私はあなたを国を破壊する魔物として討つ」

「キーン……」

「行きますよ、キョータ君。協力して退治しても良いんですからね」

ザラマンデルの隣にズルフェが並び立ち、共闘の構えを取る。……だが、それでもジュリの余裕は崩れない。

「魔物として退治か。……言ってくれんじゃねぇか。そこまで言えるなら自信あんだろ？　このオレ様に勝てる自信がなぁ！　王様角光線（キングホーンビーム）っ！！」

「それに、変身してないとね。あの光線に当たったら危ないですし♪」

「……怒ってるせいかな？　全然真っ直ぐ飛んでないよな……」

以上、ズルフェのぶっちゃけ本音にザラマンデルの苦笑い込みの感想。おそらく、ズルフェの言う事に「んだとこらぁ！」という感じで顔を上げてしまい、ビームが上に軌道修正されて当たらないのだろう。

そしてズルフェは口元を引きつらせながらもう1つ本音を言った。

「……あんな名前の技にやられたら一生の恥ですし……。アレがカッコ良く思える人はよっぽどセンスが無い人でしょうね……」

一方、現実世界では……。

「……王様光線（キングビーム）。……なんて凄い威力なんだろう。……そして、何てカッコ良い名前なんだろう……！」

『光子破砕（フォトンブレイク）でしょうが！』

「……シノブ君、本気……？」

シノブがドストライクを喰らっていた。２人が呆れやら怒りやらショックな表情をしているのに気付いたのか、話題を戻す。

「と、とにかくカッコ良い名前は置いといて、これ見て！　あのカッコ良い光線のせいでクルダの町がズタズタだよ！」

……カッコ良いを連呼する辺り、本気でカッコ良いと思ったらしい。

そして彼の言う通り、クルダはズタズタだった。一撃で闘技場の城壁や地面を抉り、城下町を囲う防壁まで毀すほどの威力。そんな攻撃が何発も放たれて無事な町など無い。そして、状況はさらに緊迫する事となる。

溶岩だ。クルダは溶岩の上に作られた町。このままあの攻撃が続けば、ヒト諸共クルダという国が沈む。

「そんな……。……それなら溶岩に沈まないようにしないと……溶岩を固めれば……ッ！」

ここまで言ってカナデは気付く。自身とシャララのチカラを。彼女は自身の胸に手を置き、意志を込めた目でシノブを見る。

「ウンディーヌなら出来るかもしれない！　シャララちゃんとチカラを合わせれば、溶岩でも凍らせて固められるかもっ！」

「そんな！　無茶だよ！　……もし出来なかったら、カナデさんがどうなっちゃうか……」

「でも他に方法なんて無いよ！　お願い、シノブ君。私を信じて！　絶対皆を助けてみせるからっ！」

その言葉と意志を込めた視線に、シノブはこげちの方に視線を移す。

「……こげち」

『なんにゃりん？』

「……僕、本気でカナデさんを信じる。……だからその想いのチカラを使って、こげちがカナデさんをクルダへ送る奇跡を起こせないかな？」

シノブの素体のこげちはヒトの想いの力を奇跡へと変える事が出来る。ヒトの行動や言動はもちろん、「こうありたい」、「こうなりたい」という願望も、一種の願いであり想いだ。こげちはその想いを増幅し、想いを奇跡へと変えるのだろう。

……実際の所、想いが形となるのは日常で割とある事なのかもしれない。ただ、人間がそれに気付かなければ、単なる結果で終わる。……ヒトの幸福を願う祈りやヒトの不幸を願う呪いも、また同じ。それもまた、想いの成就だ。

そして対するこげちは、いつものように冷静に返した。

『シノブが心からカナデを信じるなら、こげちはシノブの望みを叶えてあげられると思うニャリン』

「ッ！　うんっ！　……なら僕は、カナデさんを信じるよ！」

『だったら、やるニャリン。――』

シノブは胸の前で拳を握り締め、こげちは尻尾をシノブの握られた拳に当てて次にパソコンのディスプレイに押し当てた。

『――想いよ、届け！』

保健室に光が迸る中、クルダの闘技場には危惧していた異変が起きていた。地面が割れ、そこから紅い物が噴き出したのだ。

「ッ！　わぁ！　火っ！？」

「違います！　これは溶岩です！」

そう。クルダは溶岩の上に作られた町。幾たびにもよる強力な攻撃で地盤が砕け、下の溶岩が噴き出したのだ。

ジュリはその様子を見て、口を開く。先程とは全く異なる声色で。

『……良いぜ、みんな熔けちまえば良い。民も、町も、国も……。勇者、お前達と共に、燃えてしまえ！』

「ッ！　……アイツ、何だかおかしいぞ。さっきまでと違うんじゃないか？」

「ええ。……明らかに邪悪です……」

そしてズルフェは「おそらく、」と続けた。

「おそらく、邪神合体（デュオスユニオン）とは邪悪な神のチカラを借りるのですね。……その結果、合体した者は悪魔となる……」

「そんなの許さないっ！　ヒトを困らせる王様なんて、絶対いちゃダメなんだから！」

不意にザラマンデルとズルフェの傍で光と声が生まれ、その光の中からカナデとシャララが現れる。そしてそのまま一心合体。水王ウンディーヌとなった。

「……悪い事をしたら罰があるって、教えてあげる！」

現実世界ではシノブの想いをこげちが『現実を変えるチカラ』に変換してカナデをクルダに送った訳だが、その経緯を知らないザラマンデルはポカーンとしている。

「……カナデ、どうやってここに来たんだ？」

「シノブ君とこげちちゃんのお陰！　みんなを助けられるようにって」

こげちの能力はザラマンデルも聞いている。彼が納得した笑みを浮かべたのを見て、ズルフェもまた微笑む。

「アシュリアーナで初めて3人が合体して揃いましたね。……全員で戦う時が来たのです。……ご覧なさい、もう彼には言葉が届かない。邪悪な心が詰まった悪魔になってしまった……」

ズルフェの言う通り、その素体にジュリの意識はもはや皆無（な）く、『グルルルルッ』獰猛な呻き声をあげる獣……いや、その強大な攻撃からして、悪魔という表現も大袈裟では無いだろう。

その姿とプレッシャーに恐怖が無いと言ったら嘘になるだろう。……しかし、ザラマンデルは硬く拳を握り締め、一歩踏み出した。

「……例え相手が悪魔でも、護るために闘うのが勇者だ。みんなでチカラを合わせれば……出来ない事なんて無い！　――」

彼を……いや、小さな子供達を動かしているのは『誰かの為に』という想い。

「――ヒトの為に闘えないお前に教えてやる！　ヒトの為に闘う強さをっ！」

炎、風、水と自我を失った邪悪な存在（モノ）……。
傭兵王国クルダの、最後の闘いが始まろうとしていた……。

第３１話　２つの拳

素体に飲み込まれ、自我が崩壊して暴走するジュリ。それに相対するはザラマンデル、ズルフェ、ウンディーネの３名。

「ッ！　みんなよけろ！」

獣のような雄叫びを上げながら光子破砕（フォトンブレイク）を放ってくるブラフマーに対してザラマンデルの指示が走り、３人は回避に成功するが、その超破壊的な一撃は溶岩の上に建てられた町へとダメージを蓄積させる。

「ッ！　まずい！　これ以上壊したら国が沈む！」
「動きを止めれば良いんだよね！　私がやってみる！」

ザラマンデルにウンディーヌの言葉が連なり、ウンディーヌは両手を合わせ、チカラを集中し始める。

そしてその様子は現実世界のシノブからも見えている訳で……。

「カナデさんがチカラを使う。……それなら、何か水のチカラを増やす物を送って助けなきゃ！」
『熱を奪う氷を送るニャリン！』

こげちの提案にシノブは即座に行動に移す。保健室で頭や怪我した箇所を冷やす氷を冷蔵庫から取り出し、現実世界に残るシャララの手に触れさせた。

《カナデ！　外からチカラが届いたわよ！》
「ッ！　……武装合体……氷河境界（グレイシャーボーダー）！！」

ザラマンデルとズルフェはウンディーヌの攻撃の気配を感じると空中に飛び上がって退避。
開かれるウンディーヌの両手の平。そしてそれを地面に押し当てた時、一繋がりの氷の鎖が放たれた。それは螺旋状に徐々にその円を広げていき、その内側の大地を、溶岩を、ブラフマーを凍らせていく。

『グゥオォォオオオオオッ！！』

呻き声を上げながら凍り付くブラフマーと溶岩。それはまるで、氷の激流に闘技場もろとも飲み込まれて凍てついてしまったようだ。

「やった！　アイツも溶岩も凍ったぞ！」
「だ、ダメっ！　……あれじゃ。……溶岩を凍らせる方にチカラが行っちゃった。アイツ、完全に凍ってない！　またすぐに動き出しちゃう！」

ザラマンデルの喜びに息切れ――先程の氷河境界（グレイシャーボーダー）が余程の大技だったのだろう――しながら首を横に振るウンディーヌ。確かに、バキバキバキッと音を立てながらブラフマーの体を覆う氷は砕けていく。
だが、ズルフェは特に落胆する事無く、その拳に雷を纏わせた。

「……確かに動きを止められてはいませんが、溶岩と闘いの連続で熱せられた体が急激に冷やされたのも事実。……物質の温度を急速に下げれば非常に脆くなる。……その体で我が雷、受けられますか

？」

一方、シノブもこの間単純に見ていたという訳ではなく、状況を見るのをこげちに任せて保健室にある武装合体に使えそうな物を集めていた。

「キーン君もやるんだ……。次は……この包帯で相手を絡め取ったり出来るかも……！」

現実世界でフーイの手に触れられる円柱に丸められた包帯。それは確かにズルフェの元へ届き、彼のチカラとなる。

「ッ！　ありがとう。感謝しますよ、シノブ君。……電光捕縛（ライトニングアレスト）っ！！」

近距離まで近づき、そこから繰り出される雷を纏わせた包帯はブラフマーをミイラのように縛り上げ、高圧の電流にさらし、全身にダメージを与える。

『ギッ……ゴゴガゴガァアアアッ！！』

「ッ！」

全身にヒビが入りながらもまだ闘おうとする執念。ズルフェもその執念とそこまで早く体勢を整えて攻撃を繰り出す事を予想していなかったのか、対応が一拍遅れてしまった。

迫るブラフマーの拳に防御体勢を取るズルフェだが、その間にザラマンデルが割り込んで真っ向から拳で止めた。

「ッ！　キョータ君！」
「大丈夫！　こんな拳骨……痛くない！　良く聞け、ジュリ。お前の拳骨は……お前が邪心合体（デュオスユニオン）する前の方が強かった！」

ブラフマーという神の素体と合体して力もスピードも大幅に上がったはずなのに、ザラマンデルはそう言う。断言したと言っても良いだろう。
ザラマンデルは拳同士を付き合わせたまま続ける。

「クルダ流交殺法を使っていた生身のお前の拳骨はおまえ自身のチカラだった。お前の努力がチカラとなった誇りあるチカラだった！
……でも、邪神のチカラを借りたこの拳骨、力は上がっても誇りが無い……想いが無い！　想いの無いチカラなんかで、勇者は倒せないぞ！」

ジャキンッという硬質な金属音と共に、ザラマンデルの4枚ある内の一対、刃（ブレード）の翼が展開される。そしてその刃には劫火が宿る。

「誇りを失った者にチカラは無い！　人を護る事で生まれる誇りと想いのチカラを見せてやる！！」

そして、拳を横にずらす事で相手の力の向きを受け流し、体勢が崩れた所を駆け抜ける。
それはまさに一閃突貫。ザラマンデルの繰り出した紅炎翼（プロミネンスウイング）はブラフマーの胴体に風穴を空ける。

「……お前の中に在る悪魔ごとオレが倒す。それも勇者のやるべき事なんだ……っ！」

地面に着地すると同時に翼の炎を解除するザラマンデル。その背

後には、風穴を開けられてもがき苦しむ悪魔の姿があった。そしてその背中がブクッと膨れ上がり、その中からジュリが放り出された。
おそらく、大きなダメージに合体状態を維持できず、分離してしまったのだろう。
ズルフェは即座にジュリを助けに向かう。本格的に素体と持ち主を分離してしまえば、合体している時より闘いやすいと判断したのだが……。

『ッ！　ギャオォァアアア！』

ズルフェがジュリを抱えてザラマンデル達の上空に戻った時、ブラフマーの口が三日月の様に割れてその容貌を変えていく。２本角も無くなり、次に姿が落ち着いた時、ブラフマーだった頃の面影は皆無と言えるほどになっていた。
おおよそヒトの姿をしているが、全身真っ黒で足は炎のように揺らめき、空中に浮かんでいる。丸い目に三日月の形に開かれた口。額には三角形を描くかのような３つの目。ライオンの様な、たてがみとも言える髪がある。

「ッ！　こいつ……本当に素体なのか？　なんか怪物チックだぞ！？」
「……怖い……」

そのおぞましい姿と妖しい雰囲気に、ザラマンデルとウンディーネは無意識に一歩下がる。それは、恐怖からだろう。
ズルフェはひとまず観客席にジュリを置いてから戻ってきて、口を開く。

「……主を奪われ怒り狂っているようですね。ですが、あれはもう素体ではありません。……主を無くして怒りで暴走している、魔力

で動く化け物です」

《キョータ！　今がチャンスなのら！　アイツをやっつけるんらよ！》

「ボボウか！　どういう事だ？」

容貌が変わり、おぞましい姿となったブラフマー。だが、それがチャンスだと言う。その理由を、ボボウは確かめるようにブラフマーの魔力を探って、それから言う。それはテレパシーという形で他の2人にも伝えられる事だろう。

《こいつは素体じゃないのら！　王様（ジュリ）の意識を支配して思う通りに操って、傭兵王国クルダを征服するために作られた魔導生物なのら！》

「ッ！　じゃあ、コイツを創ったのはまさか……っ！」

ザラマンデルの予想。それはボボウの次の言葉で引継ぎ、肯定される。

《これを創ったのは業魔王なのら！　今のクルダを支配しているのは、王様を操っていたコイツなんらよ！》

それはつまり、いま自分達の目の前にいる魔導生物を倒せばクルダを業魔王の呪いから開放できるという事。そこまで思い至ったザラマンデル達は志気を新たに構えなおすが、ザラマンデルは疑問で動きが止まる。

「ッ！？」（……なんだろう？　……アイツの体中に変な模様（パターン）が浮かんで来た）

そう。その魔導生物の体中に、炎のように不定形の足にすら、細かい文字の羅列――呪印（じゅいん）――浮かび上がっている。

第３１話　２つの拳（後書き）

念のための補足。サブタイの『２つの拳』ですが、これはザラマンデルと、ジュリと合体した状態のブラフマーの拳がぶつかり合った場面を指しています。

第３２話　ユニオンアタック（前書き）

さて、この話でクルダ編終了です。……そして、原作分も、また同じ。

第３２話　ユニオンアタック

そして現実世界のシノブも同じように首を傾げていた。疑問の対象物は同じだが、こちらの疑問は少し違う。

「？　……どうしたんだろう？　さっきから敵の素体が動かなくなっちゃった……。その代わり、頭の上に数字が出てる？」

パソコンの画面では、確かに魔導生物の動きが止まり、代わりに頭上に『０５：００』と表示されている。それは『０４：５９』、『０４：５８』と段々と数字が減っていく。

「……何だかカウントダウンみたいだけど、こげち、これって何かな？」

『シノブの言う通りニャ。それカウントにゃ！　業魔王の作った素体（フレーム）は主である王が奪われた時に最後の攻撃をするんニャ。自分の全てのチカラを一気に開放してそこにある全ての物を破壊するんニャ。で、この数字は自爆までの残りの時間ニャ♪』

「そうなんだー。よく分かったよ♪」

……。

「……えっ？」

あんまりこげちがクールに難なく言うが、それは相当危険な事という事で……。

「どっ、どうしてそんな大変な事に冷静に言えるのっ！」

『猫はクールなものニャ。どんな時もクールを忘れないニャ♪』

……クール宅配便に入って来ただけに？
そんなギャグは置いといて、シノブは思い切り動揺。あたふたあたふたしていたが、ある事を思い出す。

「と、とにかくみんなに知らせないと……ッ！　そういえば電話（ケータイ）が通じたはず……！」

で、テレフォンタイム。
以下、自爆の事を聞いたザラマンデル達の叫び。

「自爆ぅぅぅぅう！？　しかも残り5分切ってるのかぁあ！？」

それはもう3人して口を開いて「んな無茶な！」と言いたそうだ。

「ど、どうしよう、早く逃げた方が良いのかな！？」
「いや、そういう訳にもいきません」

ウンディーヌの言葉にズルフェは返し、続けた。

「ヤツの力は絶大なものがあります。そのチカラを自爆して一気に放出すれば恐ろしい事になります。この闘技場だけでなく、傭兵王国クルダ全体……いえ、この国にある山や川や森も、全てを無に帰してしまうかもしれません。……誰かがヤツを止めねばならないのです。人々の生きる場所と共にある夢や希望を護るために……誰かがやらねばなりません……」

後半を重く続けられるズルフェの言葉。

「……人々の夢や希望、生きるチカラを護るのは勇者の役目だよな。

――」

不意にザラマンデルがそう言い、目に闘志を宿し、拳を固める。

「――オレがここにいるのは全てを護って闘うためだ。……だったら、誰かはオレだ！　２人は逃げてくれ！　ここはオレが何とかするから、早く行けっ！」

自分は護るモノ。故に、自分が誰よりも前面に立って闘う。それが彼――キョータ――にとっての『なりたい自分』……『そう在り続けたい自分』なのかもしれない。

勢いよく駆け出そうとしたザラマンデルの背中に、ズルフェの声が届く。「ふっ」と息を吐き、その顔には微笑を浮かべている。

「……そう言うと思いましたが、キョータ君、１つだけ間違っていますよ」

「えっ……？」

その言葉に力を込めていた足から力が抜け、バランスが崩れる所をウンディーネが支える。

ザラマンデルが立ち上がったのを見てから、ズルフェは続けた。

「私達はいつでもキョータ君と共に闘ってきたのです。それは、あなたが勇者であるように、私もカナデさんも同じ勇者だからです。……だから、誰かは私達です」

その言葉に、ウンディーヌも笑顔で頷き、ザラマンデルに笑いかける。

「そうだよ！　キョータ君を置いて逃げちゃうなんて私には出来な

いもん。……どこまでも一緒。……一緒だよ、キョータ君！」
「……キーン……カナデ……」

目を見開くザラマンデルに穏やかな笑みを送ると、ズルフェとウンディーヌは視線を魔導生物に移した。その目は真剣そのもの。

「今、私達に出来る事はとても少ない。――」
「――残された時間は僅かで、自爆されたら全てが無くなってしまう……」

ザラマンデルは一歩進み出て、2人と意志と視線を合流させた。

「……それでも、オレ達は諦めないで闘うぞ。……オレ達を信じてくれる人がいる限り、最後まで諦めないっ！　みんな行くぞっ！」

ザラマンデルの掛け声で3人は魔導生物の上を取る。そしてザラマンデルは拳に炎を纏わせてストレートパンチ。ズルフェは雷を手の平に収束。ウンディーヌは冷気を指から放った。
だが、見えない障壁に遮られて逆に弾かれてしまう。ザラマンデルは空中で体勢を整えながら先程の障壁に驚く。

「な、なんだ!?　攻撃が弾かれる！」
《魔導防壁（バリアー）なのら！　あの体の模様が防御魔法（バリアー）を生み出してて、それを崩すにはいっぱい時間が掛かっちゃうのらよーっ！》
「そんなっ！　時間無いのに……何とかなんないのか!?」

魔導生物の体に刻まれた呪印。そこから発生される強固な防御壁。その上その解除には時間が掛かる。
絶対的な悪状況の中、ザラマンデルの半分叫びを入れた問いにボボウは僅かに躊躇（ためら）い、それから言った。

《……方法は1つしかないのら。3人のチカラを1つにして相手を攻撃するユニオンアタックら！　物凄い威力の攻撃だから、きっと防壁（バリアー）ごとアイツを倒せるはずら。……だけど――》

ここから先は、ボボウが言うのを躊躇った所だ。

強い力には何事も反動や制限など、そのメリットと同等のデメリットがあるという事で……。

《――ちょっとでもタイミングを間違えたら全部の攻撃が自分に跳ね返っちゃうのら！　……そうなったら、こっちが逆に消滅してしまうのらよ……っ！》

ボボウが躊躇ったのは、もちろんその危険性。成功すればハッピーエンド。失敗すれば自分達が消え去るバッドエンド。

ゲームであればいかなる形でも終わりはあるが、一般ユーザーから見ればゲームであろうが、今そこに居るキョータやキーン、カナデ、ボボウ、フーイ、シャララ。そして天やキサヤなどの人達にとっては、現実だ。直面し、打破し、駆け抜けていく、現実なのだ。

だから、やり直しは効かない。それでも、対応できるのが自分達しかいないのなら、自分達にそれを可能とするだけのチカラがあるのなら、少年達は選ぶのだろう。

「……それでも、オレ達がやらなきゃいけないんだ！」

ザラマンデルの声にズルフェもウンディーヌも頷きで応じる。

まずはウンディーヌ。シャララが彼女の脳内で指示を出す。

《私達から行くわよ！　全力の攻撃を風王ズルフェに集中して！》

「ええっ！？　キーン君を攻撃するの！？」
《ユニオンアタックは魔力を伝えて大きくするのよ！　良いからやるのっ！》

ウンディーヌの戸惑いをシャララは一喝で一掃。ウンディーヌは意を決し、手を合わせてチカラを収束。全力の攻撃を放った。

「……うん、分かった！　キーン君、パス！　ユニオンアタック専用魔法、絶対零度（アブソリュートゼロ）！」

放たれたのは彗星を思わせる冷気の塊。その弾丸。軌道上の水蒸気を凍て付かせ、巻き込みながらそれはズルフェへと進む。

《主よ、来ます。受け止めてください》
「任せてください。……クッ……！」《……何というチカラ……。吹き飛ばされそうですっ！》

右手で受け止めはしたが、その攻撃の圧力に空中で押される。それはウンディーヌの魔力で創られた純粋な意味での『力』ではなく、アシュリアーナの人々のため、大事な人が悲しまないための想いも宿った特別な『チカラ』だ。

ズルフェは魔力的な『力』と想いの『チカラ』、両面で押され、吹き飛ばされそうになったが、羽を広げ、姿勢を前に倒して踏ん張り、雷を左手に集中、収束して自身の右手の横に添えた。

「……ですが、カナデさんの力（チカラ）に私の力（チカラ）を加えて、必ずキョータ君に伝えます。……ユニオンアタック専用魔法、渦流放電（トルネードディスチャージ）！」

冷気に回転と雷が加わり、トルネードのような自然災害を思わせ、それでもそれより遥かに強い力（チカラ）がザラマンデルに迫る。

《来たのら！　キョータ、２人の魔力を受けて吸収するんら！》
「吸収！？　どういう事だよ！？」
《全ての魔力を取り込んでそれを自分のものにすればオイラ達は――》
ボボウの言葉の途中、ザラマンデルの体は２人の力（チカラ）を乗せた渦流（トルネードデ）放電（イスチャージ）に飲み込まれる。
「ッ！　うわぁあああああっ！！」
ザラマンデルに攻撃が当たった時……いや、その攻撃がザラマンデルに吸収された時、眩しい光が辺りを包み込んだ。
《――ユニオンアタック専用の魔導形態に変形するんら。オイラ達は想いのこもった力（チカラ）があれば――》
バサッと閃光の中から現れる者。それは拳が大きく、攻撃力と防御力が高い竜騎士の姿をしたザラマンデルではない。
全体的な形状はザラマンデルの状態よりヒトに近い。手足共にスラッとして長く、赤や黄色といった暖色系を基調としている。
顔はガルーダを始めとする鳥人のような顔で、前頭部には真紅の一本の角が。後頭部にも角はあるが、こちらは冠を思わせる黄色の角が３本だ。背中の翼は３対あり、腰から下の背面にはマントを思わせる布を纏っている。
《――無限に強くなっていくんらよっ！》
３対の羽を広げ、新たな竜人は飛翔する。

「見てるか、業魔王！　勇者に起こせない奇跡なんて無いんだぜっ！！　ユニオンアタック専用魔法、究極（アルティメット）……紅炎（プロミネンス）っ！！」

口から高熱と紅い光が溢れ出し、一気に吐き出されたその紅蓮の劫火は魔導生物を包み込み、焼き尽くし、呻き声を上げながらその体を崩壊させていく。

魔導生物が消え去る様は、炎が揺らめき、「ふっ」と消えるように呆気無い。

ウンディーヌは魔導生物が完全に消え去るのを確認してからザラマンデルに駆け寄る。ズルフェは何かを確かめるように上空へ高く飛んだ。

「キョータ君、大丈夫!?」

「オレは大丈夫！　……ッ！　あ、元に戻った！」

言葉の途中で長身の姿から元の重厚な竜騎士の姿に戻る。ユニオンアタックの魔法が切れたのだ。

「魔法が切れて元に戻ったのは、キョータ君だけじゃ無いようですよ」

いつの間にか降りていたズルフェの言葉、彼が上を指差し、ザラマンデルとウンディーヌは顔を見合した後ズルフェと共に上空へ向かった。

「「ッ！」」

ザラマンデルとウンディーヌが目を見開く中、ズルフェは穏やかで優しげな口調で続けた。

「……業魔王からの支配から解放されて、傭兵王国クルダが美しい姿に戻ったようです」

町の所々に緑があり、陽光に照らされた家々が、路地がありのままの姿を見せる。おそらく、業魔王の呪いにより国の雰囲気そのものが変えられていたのだろう。

「すごい綺麗」

「……やっぱり、出来ない事なんて無いよな。――」

ウンディーヌの感嘆の声に、ザラマンデルの達成感に胸が満ちた声が続く。空は徐々に千切れ、陽光の量は増えて行き、町を、周りの川を、温かく照らしていく。

「――諦めないで頑張れば、きっと続きがあるんだ。諦めないチカラが勇気と奇跡を生んで、それが新しい未来に繋がるんだ……」

トンッと交わされる3人のハイタッチ。その3人の表情は、笑顔。

その頃、シノブはというと……。

「おーい、そろそろ休み時間終わるぞー。……あれ？　斉木に月島、琴井は？」

「はぅ！？　い、いえ！　今トイレに行ってます！」（みんな！今戻っちゃダメだよっ！）

天野先生を誤魔化すのに必死だったという。

第３２話　ユニオンアタック（後書き）

次からはフェアプレイズの設定や物語を見て、「この先はこうなるんじゃね？」っていう予想と、多少のオリジナル要素を加えた話になっていきます。……実は先日、流星とフェアプレイズ双方のおおまかなプロット（物語の構成）を改めて詳しく考えてみた所、フェアプレイズの方がスケールが大きくなりそうです……。

なお、ここまで書いた身でちょっとした個人的な感想。

原作あるうちは原作どおりに～と書いてきた訳ですが、これはこれでスキルがいりますね。細かい描写込みで書くと文字数が多くなり、上手く纏めないといけない。……はしょり過ぎてもダメだし、細かく書きすぎてもダメ。バランスが難しかったですが、これはこれで貴重な体験だったかなと今は思えます。

では、次話も楽しみにして頂ければ幸いです。

原作分のあらすじ（前書き）

ほぼ名前の通りです。

原作分のあらすじ

ジュリを始めとする、傭兵王国クルダの闘士との闘い。ザラマンデルとズルフェ、ウンディーヌは3人の魔力を1人に収束して格段に強化された魔導形態になる『ユニオンアタック』でジュリを降し、クルダを業魔王の呪いから開放する。

で、ここまでが原作分です。ここで打ち切りになってしまったので、どうしても先が気になり、こうなりゃ自分で書いてしまおうってね。……中途半端は何か嫌なんで（笑）。

それでは、今後の展開をお楽しみに。……ホツマや乱空。音使いの事や彼等の詳細な事も追々明らかになる予定です。

第３３話　数日前（前書き）

はい。今回はホツマと乱空や甲斐といった『ニライカナイ組』が主です。……べ、別に「あれ？　ゼンが甲斐に身分を依頼したのって2日前じゃね？」って忘れてた訳じゃないよ～（目逸らし

ではでは。

第３３話　数日前

時間は数日前に遡り、場所は新宿。厳密に言えば、甲斐がいる非合法情報屋だ。
甲斐は椅子に座り、机に肘を組んで顔の前で手を組んで目の前の2人に切り出した。

「……とりあえず、あえて言わせてもらおう。顔知らん名前も知らんって相手を探せるかっ！」

何だかんだで溜まっていたのだろう。いきり立つ甲斐。顔も名前も知らない相手を探すなんて無茶難題を押し付けた17歳くらいの少女は怒ったようにやや頬を膨らませる。

「え～っ！　面白そうだからって引き受けたじゃん！」
「最初は確かに面白そうだな～とか、お前等の気まぐれお遊びからかい依頼だと思ったが、マジの依頼で驚いたわ！」

甲斐は面白い物は自分の目で見ておきたいという子供理論の持ち主。てっきり2人の依頼はからかい半分のお遊びだと思ったらしい。バチバチと火花を発する2人に対し、仲介するかのようにホツマが「まぁまぁ」と出る。

「まぁまぁ。2人とも落ち着いてください。……甲斐。私達の探しているモノは、戸籍はもちろん、外国からの入国手続き、出生届、住民票、社会保険記録、学歴……全てがこの世界においては未詳な存在なはずなのです。……これは逆に絞りやすいと思いますが？」
「……だから、そんな【　存在しない存在　】なんてどう調べろと。俺が生存を確認できないのは行方不明って事じゃない。それは死ん

だって事だ。……っと、ちょっと待て」

甲斐はそこまで言うとドアの方に視線を移して2人に平手を向けて話を止める様に促す。

「……盗み聞きは感心しないな。……来るなら大人しく出て来い。冷やかしなら帰れ」

「……」

甲斐のその言葉にゆっくりと開かれるドア。そこに立っていたのは、2日前に『身分』を依頼してきたゼンだった。

「おぉ、キミか。待ってろ、今書類を出してくる」

甲斐はそう言うと部屋を退室しようとするが、何か思い出したように立ち止まって乱空とゼンを見る。

「……ああそうだ。お前の苗字、そこの嬢ちゃんの戸籍から借りた。一応挨拶しておけよ。戸籍上はお前の姉って事になってるんだから」

そうして扉の向こう側に消える甲斐。そう。乱空の苗字は柊で、ゼンはキョータの通う学校に行く際、甲斐に依頼して苗字を借りていたのだ。……それも、乱空本人に無断で。

乱空はその事を知らされた時の事を思い出したのか甲斐にベーッと舌を出し、ゼンに見られているのに気付いて気を取り直し、握手を求めた。

「まぁ、一応よろしくって事で。……まぁ、こっちも色々忙しいから形だけの姉弟になると思うけどね」

「……その方がこちらとしても都合が良い。……迷惑を掛けた」

ゼンは意外と言うべきなのかもしれないが素直に応じ、ホツマの方を見た。ホツマは穏やかな笑みを浮かべて自己紹介。

「私はホツマと言います。今日は甲斐に依頼の事で相談に」

「……そうか」

ゼンはそれだけ言うと視線を甲斐の消えたドアへと移す。本当に形だけの挨拶だった。親しくなろうという意思も何も無い。そこにあるのは、純粋に自分の目的に対する決意のみ。他との関わりなどの温かさは置き去り、ひたすらに自分の目的の為にという姿勢の表れだった。

ホツマはそれに気付きはしたが深追いせず、目をゼンから逸らしつつ視界の端に捉えるだけにし、乱空は手持ち無沙汰に部屋の中を歩く。

ガチャ

どこか気まずい時間と空間は、甲斐がドアを開く音で霧消した。彼は手に茶色で大き目の封筒を持っている。

「おっ。自己紹介終わったか。ほら、住民票もろもろ含んだ身分だ。勝手に捏造しておいた」

非合法情報屋。金次第でどんな物も用意する。それが例え偽りの身分だとしても。

「……すまない」

ゼンはそれを受け取ると背を向け、足早に自分が来た方のドアを

開けて帰っていった。
彼の気配と足音が遠のいたのを見計らい、ゼンを見詰めていたホツマが口を開く。

「……彼、ベルトに人形を入れているようでしたが、何なんでしょうね？」
「ああ、そりゃアレだ。最近ガキ共の間で流行ってるフェアプレイズっていうゲームだよ。……あの子もやってたんだなぁ」

甲斐は一瞬ゼンがホツマの探している人物かもと思ったが、そうではないとすぐさま頭の中で否定した。もしそうなら、会ってすぐにホツマが分かったはずだ。……妙な話だが、顔も名前も知らないのに、会えばすぐ分かるだろうとホツマは依頼した時ぬかしたのだ。

甲斐の言葉にホツマは「ふぅむ」と考え込むように唸り、やがて甲斐に切り出した。

「……甲斐、フェアプレイズの事、調べられますか？　ゲームの成り立ちや社長、噂……ありとあらゆる情報を集めてください」
「「はっ……？」」

その言葉に甲斐も乱空も口を開ける。２人が探しているのは存在しない人間であって、ゲームではない。ホツマは両手の平を２人に向けて、暗に落ち着いて聞けと言う。

「いえ。これは全くの私個人の探究心です。……あの人形が生きているように思えたのでね。……生きている人形……それを扱うゲーム……これは、面白いですから」

ホツマの『面白い』これが出たら、まず誰も勝てない。ホツマも

ホツマで面白いか否かで決める面があるからだ。そして、そういう時はまず譲らない。……そしてそういう時は、不思議と『答え』に行き着く事が多い。また、ホツマがクーエイが生きている素体である事に気付いたのは彼の中では確信に近かった。心音や呼吸音。生物なら必ず出しているであろう『音』を拾ったのだから。

そして乱空と甲斐も、ホツマの『面白い』に対しての頑固さは知っている。故に、乱空は甲斐をジーッと凝視し、甲斐も甲斐で多少は粘ったが溜め息と共にギブアップ。

「……はぁ。……分かった分かった。まぁ、存在する対象の方が調べやすいしな。……で、これの依頼料はどっちが払うんだ？」

まぁ、依頼というからには料金も発生するだろう。乱空は何かを察してホツマから離れようとしたが、その前にホツマの手が彼女の肩を掴む。

「それはもちろん乱空が」

「やっぱりかいっ！　たまにはホツマ、あんたが払いなよっ！」

……乱空の発言からして、大抵こういった大きな払い事は乱空の担当らしい。ホツマは特に悪びれもせず、穏やかに諭した。

「いえいえ、今月ピンチでしてね。乱空の手が必要なんです」

「それはぁ、ホツマが出かけるたびにお菓子を買うからでしょ。いい加減こういう時だけ私にたかるのやめい！」

そんな2人の日常茶飯事を見ながら、甲斐は換気扇を回してタバコを吸う。

「おー。終わったら声掛けろよー」
「他人面すんなごらぁっ！」

甲斐の無関心ぶりに乱空ブチ切れ。部屋で机が壊れたり壁に穴が開いたりという、愉快な破壊音が非合法情報屋に鳴り響いた。

第３３話　数日前（後書き）

ああ、彼等の詳しい容姿を忘れたって方は、別に後の話で再び出てくるのでその時に。

今更ですが、この話から「こうかな～」って思い描いた話になっていきます。

ちなみに、甲斐は身分を用意したり人を探したり何でも屋っぽい事をやっていますが、別の仕事もあったりします。……どの道裏の職ですね。

では、この幻想が無事に終わる事を願っていてくださいな。（ぺこり

第３４話　水面下（前書き）

あ～伏線を後半とか物語がある程度進んでから明かし所で一気に明かして驚かせるのが好きな性分としては明かせないのが苦しいよ～。

第３４話　水面下

時間は現代に戻り、場所はアメリカ。フェアプレイズを運営する重役達が集まって会議をしている。彼等が話し合っていたのは、南の一国、クルダの王が倒された事だ。

「……では、ここまでの情報を整理しよう。先日、クルダを治めるボスプログラム、【　ジュリ　】が倒された。だが、その倒した相手の情報が残されていない。……バグか、誰かから侵入されたか……。いずれにせよ、これではジュリを倒した者を表彰できない」

「アレに留まらず、他の３つのプログラムもまだ誰にも倒されていなかった以上、始めて四天王を倒した者として表彰しようと思っていたのですがなぁ」

最初に言った男性に続き、むぅ、と、ふくよかな男性が唸る。それぞれの国の王を倒せば自分が王に、というのは、ユーザーに対するご褒美のようなものだろう。

フェアプレイズはオンラインゲーム。携帯ゲームにも対応させ、まさしく世界規模のユーザーを持ったゲームにまで成長している。そしていずれかの国に属した場合、スキルボーナスを与えられる。

クルダなら攻撃力、防御力など、実質的なステータスの増大。リキトアなら、画面に映されている岩や水などの自然物を操る能力（スキル）。

キシュラナなら、後にプレイヤーが自分で数々のスキルを組み込み、それに応じた技を出せるという能力（スキル）――組み合わせにより新たな技も発動可能。トランプで言うと役を揃えて、そのカード一枚一枚だけでなく、役自体も技になる――といった感じだ。

フェルシアは使いこなすのが難しい上に制限もあるためか、他の3国と比べて所属ユーザーは少ない。……ただし、使いこなせば制限を補い余りある能力（スキル）を持っている。

四天王や数々の原案を打ち上げ、実際にプログラム開発の総括も行った、フェアプレイズの真の創始者とも言える人物はここで初めて口を開く。

「……データが無い以上仕方が無いでしょう。事実を公表し、引き続き国の管理は【　ジュリ　】に行ってもらいます。出来るだけ、消失したデータを復元できるようにはしてみます。……でなければ、勝ったその人がかわいそうですからね」

彼は最後にふっと微笑み、場が少し和やかになる。彼は若い。せいぜい、２０代前半だろう。その若さに反するような実力とカリスマにより、中心人物となっているのだ。……フェアプレイズ完成後、彼と共にプログラム（内面）の開発を手掛けた者が全員不慮の事故に遭いこの世を去った時は彼の能力の高さや人柄を嫉妬して妙な噂が立ったが、それでも彼は直向（ひたむき）さで周囲の心を掴んでいったのである。

会議の結果として、ジュリの勝者への表彰の中止と、その要因と思われるサーバートラブルにより履歴抹消を正式に公表。青年が履歴（ログ）などからジュリに勝った者を特定。クルダを治める王はジュリで現状維持。

という所で纏まった。

「ふぅ」

青年は自分の部屋に戻ると息を付き、机に手を突いてパソコンを正面から見る。若干髪に隠れて目元は見えないが、その時の表情はどこか苦しげで、何かを耐えているように思えた。

「……急いでくれ……数騎。……俺が、俺である内に……っ」

真っ暗な画面に映るのは金髪の青年ではなく、真っ白の髪に灰色の肌の魔術師だった。

そしてアシュリアーナでは……。

「それで、結局ジュリは倒されたという訳か」

キシュラナ流剛剣士術の使い手であり王、老剣士ナラカの確認に対し、同じく魔王軍四天王で降魔王国フェルシアを治めるダレスはタバコをふかしながら応じる。

「ああ。そりゃもう何千人もの前で、な。その後業魔王様から頂いた素体をユニオンしたようだが、結局負けて今は自分の城で療養状態だとよ」

素体とユニオンする事で自我を失い、自分ではなくなる。その事を彼等は知らない。知ったとしても、すぐに業魔王の創った素体によって知った事自体を無かった事にするのだろう。結局の所、知らない事実は存在しない事実と同じなのだから。

「はっ。結局負けちゃったのね、アイツ。意地張って無茶するからそうなるのよ」

樹霊王国を治めるコユキは憮然と腕を組んで頬を膨らませ、チラリとダレスの方を窺う。

「……で、抜けた穴は？　これじゃあ四天王じゃなくて三将って感じじゃん」

「……既に手は打ってるさ。……ウチの配下が新しく創った降魔の試運転がてらな」

「……何をする気じゃ？」

ナラカはピクッと眉を上にあげて疑問を投げかける。ダレスの答えでは肝心の『手』が抜けている。述語や副詞を入れて主語を入れないような物だ。

ダレスはタバコのケムリを上に「ふーっ」と吹き上げると、ニヤッと含んだ笑いを見せる。伏せたカードは完全に見せない。

「業魔王様が新しい素体を創って、それを届ける。とりあえず現状維持を、だとさ」

「……負け犬をそのまま元の椅子に座らせるの？」

コユキの納得できないといった声に、ダレスは肩を竦めて首を横に振った。

「元通りとはいかないだろうな。アイツ個人はもちろん、国の権限は大幅に減る。……それで満足できなかったら、コユキ。次はお前が出てみるか？」

その挑戦とも言える問い。ダレスに惚れ込んでいるコユキは一瞬動きそうになるが、ここは一国を治める王らしく、しなやかにかわしてみせた。

「ッ！　……ふふっ。まぁ、ダレスの策がダメだったら出てやろうじゃないの」
「ふっ。それはそれで面白そうだから期待してやる」
ダレスはコユキに不敵な笑みを向けると視線をタバコの煙と共に上に向けた。
（……そろそろ、クルダに着いたか）
一方、クルダの王城。周囲は暗い。今は夜のようだ。
トンッ
小さな着地音。何者かが窓からジュリの部屋に侵入したらしい。その背には素体があり、縄で背中に固定されている。また、見つかった時に易々と正体を明かさぬためだろうか。頭からローブを被る形で顔も体も全て隠している。
辺りを見渡し、足音を消してジュリのベッドに近づき、彼のそばに素体を置こうとした時――。
「はい、そこまでだ」
『ッ！』
不意に聞こえた声に侵入者はその声のした方を見る。部屋の片隅、月の光も届かない闇の中から現れたのは、１４歳ほどの少年。黒いローブを羽織り、そばには黒猫を連れている。

「せっかく呪いから開放されたんだ。そのままにしてもバチは当たらないだろ」

『……』

侵入者の中には2つの選択肢があった。このまま逃げるか、それとも目の前の少年を倒して素体を置き、任務を完遂するか。

窓への距離を感覚で測り、目の前に立つ者の力量を考慮。その結果、素体を持って離脱した方が良いとなった。もし勝ったとしても、誰か城の者が来て騒ぎになっては色々と面倒だからだ。

足に溜めを作り、攻撃すると見せて後退を考えていた侵入者は、不意の出来事にまたも驚く事となる。寝ていたと思っていたジュリが侵入者の手をガシッと強く掴んだのだ。ジュリは腕を掴んだままゆっくりと起き上がり、新たに現れた侵入者に敵意を露にする。

「……コイツから今日辺り侵入者が来てオレを洗脳するって聞いた時は半信半疑だったが、世迷言に乗ってみるもんだなぁ、オイ」

「その一言を伝えるまでにものの５０発殴ってきたのは誰だよ」

「城の奴をボコボコ昏倒させながら面会求めてきたら、そりゃそのぐらいの反応当然だろ」

黒猫を連れた少年、キョウの嘆息にジュリは嘆息で返し、侵入者はジュリの手から抜け出そうと腕を捻ったり工夫を施すがいっこうに抜けられない。

『なぜっ……。来る事が分かった……』

「夢で」

代わりに口から突く疑問にキョウは簡潔な答えを出す。言うなれば、予知夢のようなものだ。

だが、ふとキョウの表情が疑問に変わる。

「……あれ？　……お前、その声どっかで……」

『ッ！』

キョウがその事を口走った時、途端に侵入者の動きが変わった。今までは騒ぎにならないように派手な事を控えていたが、なぜか本人の中でそうする必要が無くなったらしい。

「ッ！　熱っ！？」

熱さでジュリの手が侵入者の腕を放してしまう。何が熱いか。答えは簡単だ。しかし、非日常的だ。

炎が侵入者の手から湧き上がり、刃を形成している。……切り付けられなかっただけでも御の字だろう。

タッ

侵入者は驚いた2人の隙を突いて窓へ駆ける。キョウは急いで追うが、その時には既に窓枠に手を掛けていた所だった。

「ッ！」

外からの風が部屋を清め、それと同時に舞い降りる侵入者。だが、キョウは動けなかった。風で頭の布が外れ、その下の顔に動揺して動けなくなってしまったのだ。

……真紅を思わせる長髪と瞳。それは、この世界にはいるはずのない人物の顔だった。

グシャッ

後ろから聞こえた音で、キョウは現実に意識を戻す。音のした方を見ると、ジュリが足で素体を壊した所だった。
ジュリは舌打ちを込めて素体を見つめる。

「さっきの奴フェルシアで作られた人造人間、降魔(ルナティ)ってヤツだな。掴んだ時に人間じゃねぇって分かった。奴等は呪符を核(コア)にして、攻撃する時は自在に呪符のチカラを引き出せる」

科学的な『ハード』と呪符を用いた魔術的な『ソフト』。双方の技術の粋(すい)を尽くして創られる者が、降魔と呼ばれる存在、人造人間という訳だ。炎を出せたのは、呪符の属性が『炎』だったという事だろう。

「……人造、人間……」

あそこまで自身の知る者に似るものかとキョウがジュリの言葉を反芻している時、ジュリは一瞬でキョウとの間合いを詰め、拳を突き出す。

「……何のマネかな?」

その拳は顔のそばで寸止めされているが、ジュリとしてはこのまま当てても良かったんだがという顔をしている。

「次はそっちだ。……どうもオレの記憶が長い間抜けてな。知ってる事があったら教えろ。……その間、オレやオレの国に何があったのか」

彼がキョウの世迷言に乗ったのは自分が狙われているという事で

組んだ一時協定のようなもの。まだ疑いは拭えていない。

急場を凌いだ所で正体を明かせバカ。

といった所だろう。

キョウはその緊迫感すらも楽しむような表情で言った。

「……んじゃあ、それを話したらこっちも頼みがある」

「良いぜ？　お前から聞いた事でオレが怒り、それでお前が死ななかったら聞いてやる」

ジュリもまた挑戦的で獰猛な笑みで応え、キョウを座らせて話を聞く体勢を取った。

第３４話　水面下（後書き）

……少なくとも、俺の書く『フェアプレイズＩＦ』のフェアプレイズというゲームは単なるゲームではありません。……ってか、ゲームというより媒介ですね。００（ここまで来ると本当に自分の思い描いた秩序と伏線、謎が増えてくるな～。やっぱＩＦってして正解だったかも）

……一応言っておきましょうか。アシュリアーナも現実世界も、どっちが本当の世界ってのはありません。どちらも本当です。

第３５話　リキトアの王女（前書き）

活動報告に書いたとおり、今回は短めです。

第３５話　リキトアの王女

樹霊王国リキトア。その王たるコユキの前には、ある内容が書かれた書状が封を開けられる事無く置かれている。開けなくとも、見なくとも、その内容は分かる。

コユキは机の上の書状に目を落としながらしばし前の事を思い出す。

「――で、ウチの部下の降魔は帰ってきたけど素体はそのまま。多分壊されただろうな」

業魔王四天王の一角、フェルシアを治めるダレスはタバコをふかしながらナラカとコユキに報告する。飄々として掴み所はないが、一応の報告はする男だ。

ダレスは視線をコユキに移しながら先日の会話を出した。

「で、こないだお前は俺の策が失敗したらお前の国が前線に出て闘う、という事だった訳だが？」

挑発的で挑戦的な目。試すような目。それに対し、コユキは寸分の迷い無く応えた。

「良いわ、引き受けましょう。……私だって業魔王四天王の一角で王。一度自分が言った事は曲げないわ」

それに、クルダが堕ちたら次に出るのはウチってのは、理に適ってるしね。

などと、コユキは最後に明るく続ける。

リキトアのかつての形はリキトア王朝。クルダはその支配下に置かれていたのだ。言わば、遠い昔においてクルダはリキトアの植民地だった訳だ。かつての属国が堕ちた以上、そのケジメを取るのは支配していた側、という事である。

ダレスは喉の奥で笑い声を抑え、言葉を残して去っていく。

「くっ。……それじゃあ、危なくなりそうなら出張(でば)ってやる。んじゃ、頑張れよー」

ダレスが消えた――移動した――方向から目を外したコユキは腕を上に伸ばしながら踵を返した。迎撃に当たり、諸々の準備は必要だ。

「……さて、と」
「……コユキ嬢」
「？」

不意にナラカがコユキを呼び、首だけをナラカに向けるコユキ。

「……こちらも出来る限りの協力をしよう。……どうも、ダレスは何かを隠しているように見えてのぅ」

甲冑で表情を隠しながらも、ナラカの声色は心配している。彼から見てダレスは、こうなる事を見越してコユキに話を振っていたように思えるのだ。……今回の報告以前、ダレスの部下の降魔がクルダ城に侵入する事を言っていた時から……。

コユキはクスッと年相応のくだけた笑みを見せながら大丈夫だとでも言いたげにナラカに手を振って見せた。

「大丈夫だって。リキトアで私と闘うって事は、リキトア全体を相手するようなもんだもん。そうそう負けない。心配ありがとう、ナラカのじっちゃん♪」

「しかし――」

「それに、私はリキトアの王。……王だから、自分の言動の責任は自分で取るわ」

食い下がろうとするナラカをコユキは一蹴した。気持ちは嬉しいが、いくら場のノリでの発言でも、言ったのはコユキ自身。その責任も過程も結果も何もかも、己自身で背負う事が出来なければ王とは言えない。

そしてその事はナラカも良く分かっている。それ故に、これ以上は何も言えなかった。コユキはナラカへのお礼代わりにウインクを残して去って行った。

そして今、コユキの前に残り3国の中でリキトアが表立って闘うようにという正式な書状が届いた訳だ。

「……四天滅殺（してんめっさつ）の一角、クルダの敗北。……その埋め合わせをするには、生半可な勝利じゃ意味が無い。……圧倒的に、完膚なきまでに完全な勝利を収めなければ、四天の威厳は取り戻せない」

コユキはゆっくりと立ち上がると部屋にある水飲み場へと足を向けた。

リキトアの誇る山脈からもたらされる水は、水飲みや顔を洗ったりにも使える事だろう。……流石にお風呂は厳しいだろうが、深く、長く伸ばされた水脈はリキトア中に繋がっている。その事実と草木や岩、水等の自然を操る『牙族』の能力が合わさったらどうなるか。

コユキは真円の水面に顔を覗かせ、口を開いた。

「……水よ、我が国に異世界からのモノが来たら、我に知らせよ」

淡く、ポゥッと一瞬光を帯びる水面。それはコユキの言葉を受け、応えたように見えた。

それが終わるなり何ともなしに窓へと歩を進めるコユキ。そんな彼女に視線を重ねるのは彼女の部下達だ。今後の動きを気にして、指示を待っているのだろう。

コユキは窓枠に手を掛け、自国の青々とした緑を見ながら言った。

「……お前達は休んでなさい。私が出て、終わらせるから」

一方、フェルシア王城では、先日クルダの王城に潜入した降魔（ルナティ）が持ち主（マスター）からメンテナンスを受けていた。見た目は人間でも、中身は機械で魔術によって動いている人造人間。特殊な行動を取ったのなら、メンテナンスは必要だろう。

呪符のチカラにより腕から炎を噴き出させたという事で念のためのメンテナンスを受けていた降魔は、マスターに口を開いた。

『……本当に良かったのですか？　これで……』

降魔は帰還時、ダレスとマスターに謝罪したが、ダレスからは何故かお咎めなし。マスターたるレヴィアタンも、基本ダレスの意見に従う事が多いためお咎めなしだったのだが、未だに不安がある。ダレスの真意が読めないのだ。

レヴィアタンは降魔の腕や呪符の効力のチェックをしつつ、頭まで覆う漆黒のマントの内側から答えた。

『……どちらでも良かったのだろう。……あの男にとっては』
『？』
分からないという風に首を傾げた降魔に、レヴィアタンは自身の推測の詳細を述べる。
『……あの時、もしも成功していればそのままクルダを四天滅殺の1つとして復帰。すなわち戦力の減少を防げる。……だが、失敗したとしてもダレスには何のデメリットも無い。……リキトアが動いたのだからな』
それは、高みの見物という言葉が良く似合う。どの道（ルート）を取ってもダレス自身は傷付かない。コユキはダレスの言葉にノリ半分とはいえ乗ってしまった。おちゃらけていても王としての自覚があるコユキなら、己の言った言葉通りに自国が前面に出ると言うだろう。
その時点で、ダレスにとってどちらになっても構わないという筋書きが出来てしまったのだ。
レヴィアタンは心の中で続ける。
《……まぁ、まだ何か隠してはいるようだがな……。……ッ》
レヴィアタンの顔が上がる。降魔がまだ何か言いたそうなのだ。言いたい事があるなら話せと目で訴えられ、降魔は横に目を背けつつ、レヴィアタンの方をチラチラ見ながら言った。
『……いえ、クルダ城に侵入した時、マスターと同じ顔の者がいたもので……気になって……』
降魔の言葉に一瞬レヴィアタンのメンテの動きが止まったが、す

ぐにまた動き出し、潜めた声で口を開いた。

『ッ。……そうか。……宿主だ』

『えっ？』

『……終わったぞ』

言葉の意味が分からなかったからか、または言葉自体が聞こえなかったからか、降魔の疑問の声。それに対しレヴィアタンは答えず、簡潔に話を終わらせた。

『……はい』

降魔は、それしか言えなかった。持ち主が秘密にしたいのなら、無理に聞くものではない。……それに、何故か聞けなかった。……どこか、レヴィアタンの感情の一端を垣間見た気がして、踏み込んでは聞けなかった。

第３５話　リキトアの王女（後書き）

次回は２つの視点で２話書きます。……確率からして、一話ずつの更新となる可能性が高いですけどね。００（最近、本当に余裕が無くて……

第３６話　無名の殺法（前書き）

今回は乱空側のスピンオフって感じの話です。……久々に格闘系のアクションシーンを書いたので、若干の不安はありますがね（苦笑）。

ちなみにこれの次話ではキョータ達側の話となっております。

第３６話　無名の殺法

「……と・こ・ろ・で……」

神奈川県某所。周りをコンクリートで囲まれた住宅地にて、キャミソールの黒髪短髪少女、乱空は拳をグーに固めてわなわなと震えている。そして息を大きく吸い、盛大に叫び声を上げた。

「ホツマはどこ行ったんだゴラァァアアアアッ！」

ようははぐれたと。

ゼンが持っている素体が動いた事に興味を持ったホツマは半分興味――もう半分は、その謎を追えば自分達が探している者に会えるというある種の直感――により、甲斐がゼンが通っている学校を調べて乱空とホツマがその近辺を探索しに来た訳だ。謎の少年が活動拠点としている場所なら、他にも何かしらあるかもしれないだろう。

さて、彼女は先日までツインテールだった訳だが、何も仕事前に気合入れてイメチェンという訳でもない。そもそも、彼女は髪を切っていない。

「いっつもいっつもいっつも、ちょっと目を離した隙にあの野郎はぁあああっ！！」

……おおよそ１７歳というララ若き女性とは思えぬ勇ましさ。そして怒号。通行人から見ても、頭の上にムカマークが浮かんでいるのが見えるほどに今の乱空は怒っている。……そして、彼女の台詞からいつもホツマの奔放ぶりに苦労させられている事が窺える。

乱空は怒りながらも歩を進める。もしかしたら声を聞きつけたホツマが合流してくるかもしれないし、探索自体も進めなければいけ

ない。

「あームカつくー！」
「うわっ！？」

角を曲がる際、怒りに身を任せて拳を振り上げ、一歩踏み出すと共に振り下ろした先。そこには小学４年くらいの男子がいて、目を見開いて驚き、尻餅を付いた所だった。

たまたま角を曲がった子供達と怒りに身を任せて拳を振るいながら歩いていた乱空。どちらが悪いかは歴然だ。

「ゴメン！　……大丈夫？」
「しっかりしてください、キョータ君。立てますか？」

慌てて謝りながら手を貸す乱空に別の声が重なる。紺色のローブを着た少年だ。

このクソ暑い最中そんなファッションとは……お前は知り合いの情報屋か。

等と、乱空は心の中でローブの少年にツッコミを入れながら2人でキョータを引っ張り上げる。そこに少し紫がかった藍色の髪の少女と緑髪の少年が歩いてきて赤髪の少年を気遣う間に、乱空は子供達を再度良く見る。

自分がぶつかってしまったのは赤髪の子。互いに良い友人同士、言わば仲良し４人組といった所だろう。そして、その誰もが綺麗な目をしている。純粋で、素直で、邪な何かを寄せ付けない輝きを持っていた。

「もぉー。あんなに慌てて走るからだよ、キョータくん」

子供達を観察している間に、少女が口をムスッとへの字にしてキ

ョータを怒っていた。どうやら、純粋に乱空だけの非ではないらしい。向こうもそれなりに急いでいたという事だ。
対するキョータはちょっと圧されながらも自分を言い分を言う。
「だって、善は急げって言うじゃん！　アレからもう何日も経ってるのに何も起こらないから一度アシュ――」
「キョータ君。……それより今は、言うべき事があるんじゃないですか？」
キョータの言葉の途中でローブの少年が乱空の方に視線を向けてくる。
キョータは向こう見ずに突っ走って確認もせず角を曲がろうとした事。乱空は拳を振って歩いていた事。互いに謝れと言いたいらしい。……ローブの少年が遮った言葉の続きが気にならない事も無いが、向こうの言い分ももっともなのでここは年長者らしく潔く謝るとしよう。
「あ～……ゴメンね～。一緒に来た奴とはぐれちゃってさ～。普段からフラフラ出歩く奴だからついイライラしてて……」
右手を後頭部に回して「ニャハハ……」と苦笑いを浮かべながら謝る乱空に、キョータは首を振って謝り返した。
「ううん。俺の方こそゴメン。キーン……あ、友達の家に急いでて……」
チラッとローブの少年に移した視線から考えて、その少年の名前――というかあだ名だろう――はキーンというらしい。
喧嘩両成敗に終わった所で、乱空は改めて先程キョータが言いかけてキーンが止めた事を尋ねる。……やはりああいった遮り方をさ

れると気になるというものだ。

「そうなんだ。……ねねっ、さっき何言いかけてたの？　気になるから教えてちょーよ」

少なくとも、この時点では単なる好奇心だった。もし教えてくれるようなら教えてもらって、教えられないなら別に良い。この年頃の子供は共通の秘密を共有して楽しむものだ。

キョータも答えづらいのか、言おうかどうか迷っているらしい。先程言い掛けたのは本当に「つい」という衝動的なものだったようだ。

「えっと……それは……」

「ゲ、ゲームですよ！　ねっ、キョータ君！」

「ッ！　あ、ああ！　ゲームだゲーム！　今から皆でキーンの家でゲームをしようと思ってたんだ！」

「……ふーん。……ゲーム、ね……」

答えづらいなら別に良いと言おうとしてた矢先、キーンとキョータの言葉に圧される乱空。……何もそこまで慌てなくても良いだろうに。

（……ッ。……いや……）

乱空は心の中でその考えを静止させ、表情や態度に一切出す事無く周囲の気配を探り始めた。

「それじゃあ、僕達はこれで」

「……うん。じゃあ、気を付けてね」

キーンの言葉に乱空は笑顔で応え、互いに手を振って見送った。
乱空はその場に佇み、少年達が十分離れたのを見計らってから声を出した。

「……3人。出てきな。……あの子達に何の用だ」

それはホツマに対して怒っていた時ともキョータ達に接していた時の声とも違う。女性としての高い声は残っているが、対象に畏怖を抱かせるような重圧を込めた低い声。
それに応えるかのように、1人2人と猫の通り道のような細い路地や屋根の上から黒装束が姿を現す。
頭から足まで覆う黒いローブに、鼻から下を隠す布。こんなのが街中にいたらパニックになるだろうが、並みの者には気付けないほどに彼等は気配を隠すのが上手い。

3人の中の1人がスルリと滑るように移動し、乱空に話しかけてきた。

「……女。我等の邪魔立てせず、広めぬなら穏便に済ませよう。こちらも無駄な争いは避けたい」

後半の言葉は真実だろう。並みの者では彼等が潜んでいる事に気付けない。乱空が気付けたのは偶然ではない。乱空にそれ相応の実力があったが故の必然だ。伊達に探求者としての仕事の傍ら、父親の仕事で用心警護や暗殺を請け負っていた訳ではない。
乱空は不敵な笑みを浮かべながらも冷静に応えてみせる。

「……私がそれを飲むと思う？　もう一度聞く。……あの子達に何の用だ」

キョータ達は付けられている事に気付いてなかった。始末が目的ならそのまま奇襲を掛ければ良い。それが乱空に会うまで無かったのは、目的があくまで監視だったか、あの中で誰かが1人になるのを待っていたかの2つ。

乱空はあの子達の事は大して知らない。だが、悪い者には思えなかった。袖振り合うも多少の縁。角でぶつかるも多少の縁。放っておく訳にもいかないだろう。

「……退かぬか。……なら――」

そしてこういった怪しい者が長いローブを着る理由は想像が付く。……得物を隠し持つためだ。

言葉と共にローブの中から現れる剣。先端の形状はひし形を鋭くしたような両刃の剣だ。

「――早々に片付けるとしよう……」

1人目に続き2人3人と剣を抜き、雪崩のように乱空に迫る黒装束。波状攻撃で早々に決めようという魂胆だろう。

黒装束達にとって、乱空が退かない事も予想ができていただろう。だから大人しく現れたのだ。自分達の存在を気付くほどのやり手。そのやり手が本格的に標的達と行動を共にする前に片付けてしまおうと考えたのだ。

確かに、それは悪い手では無いのだろう。……しかし、『だが、』と言わざるをえない。

だが、それは自分達で目の前の女性を倒せると踏んだ場合に成り立つ策。もし乱空が3人の波状攻撃を破り、3人を倒せるほどの力量があった場合……。

「すぅ……」

ほんの一瞬、意識を集中するために乱空が息を吐いた直後だった。黒装束の刃が縦一線、脳天を捉える軌道で乱空に迫る。

ゴギャッ……

「……なっ……」

だが、乱空に攻撃が当たる事は無く、鈍い音と共に剣がアスファルトの地面に弾んで落ちる。乱空は拳を剣を持っていた手首に命中させて痺れさせた上に、その衝撃で剣を叩き落したのだ。

奥の2人目3人目が左右へ散開して乱空を挟み撃ちにするまでの僅かな時間。1人目の剣が叩き落された事による驚きによる僅かな怯みの時間。その間に乱空は正面の1人目を蹴り倒す。

そして2人目は乱空の左から、自分の体に巻きつけるように右手に構えた剣を真横に。3人目は乱空の右から剣を持ち上げ、左上から右下への軌道をもって乱空を切断しようとしたが、乱空はそれにも対処してみせる。……ただ、左手を縦一線に、右手を左下から右上へ手刀(しゅとう)を振っただけだった。ちょうど、黒装束の剣の軌道と垂直の軌道を描いている。ただそれだけで、逆に黒装束の剣が切断されてしまった。まるで、黒装束の持っていた刃より遥かに切れ味の良い刃で断たれたかのように。

これには一瞬の驚きでは済まなかった。剣が切断された事も十分驚きだが、目の前の女性が使った技。それは多少の違いはあれど自分達が知っている技と似ていたのだ。

「貴様何者だ！　……多少違うが、それはクルダ流交殺法に似て――」

「殺法。……へぇ、てっきり拳法って言うかと思った」

乱空が黒装束の言葉を遮った理由は明確だ。まだ夕時とはいえ季節柄日が高い。大きな声で叫ばれては後々の処理が面倒だ。そして乱空自身、ちょっとした驚きがあったのだろう。何せ一発で『殺法』という言葉が出たのだ。

「クルダってのは知らないけどさ。私の一族が今の世に伝えてきたのは闘い方じゃなく、ひたすら殺し方のみを伝えてきた流派の名すら無い古流術。――」

スッと、乱空は四肢の隅々にまで意識を集中させ、左に勢い良く体をターンさせながら足を振り上げてハイキックを繰り出して黒装束を地に伏せる。とっさに腕を頭の側面で縦に構えて防御したようだが、その腕を折り砕きながら頭部に衝撃を受けては元も子もない。脳を揺すられて倒れるのがオチだ。

もちろん、その間もう一方の敵に意識を向けている事は言うまでも無い。

「――絶対無敵の名の下に創られた殺法術には――」

不利と判断し乱空から離れようとした最後の黒装束を後ろに捉えながら、乱空は体を１８０度反転させながら踏み込み、拳を突き出す。黒装束は剣の刃を拳の軌道上に置いて防御しようとしたが、その正拳はフェイントだった。

乱空はその拳をすんでの所で止め、左足でミドルキックを繰り出す。

「ッ！！」

黒装束の右脇腹に乱空の蹴りが突き刺さり、吹き飛ばされ、塀に左半身を強打させて崩れ落ちる黒装束。

静かになった場で、乱空は言葉の最後を続けた。

「――逃げるって言葉が無い」

そして、彼女は携帯電話を取り出して甲斐に電話を掛ける。甲斐は情報屋の他にもう1つの顔を持っている。『事件』を『事故』にすり替える始末屋。それが甲斐（かい）　真紅（シンク）のもう1つの顔。

甲斐はいつもの冷静な態度で電話に出た。

「……どうした？　乱空」

「あ、うん。実は処理して欲しい事があるんだけど……」

「……はぁ～……。……お前行って早々何してんだよ……」

陰鬱な呆れるような溜め息に対し、苦笑いで応える乱空。何とも無しに周りに視線を移した時、異変に気付いた。

「にゃはは……そりゃ……色々と……ッ！　……えっ？」

「？　どうした？」

「……いや……。甲斐、ゴメン。やっぱりキャンセル」

「はっ？　おいっ」

一方的に乱空は電話を切る。甲斐は今頃首を傾げているだろうが、乱空もそうしたい状態だ。のした――倒した――筈の黒装束3名の姿がどこにもいない。最初から存在しなかったかのように、ほんの少しよそ見しただけで、姿を消してしまった。叩き落した剣も、断ち切った剣も、何もかも。

自分では動けるはずは無い。かといって仲間が回収したなら気配で察せられたはず。

不可解な出来事に警戒心を高めていたためだろう。後ろから近づき、自分の肩に触れた者に過剰な反応をしてしまった。

ポンッ

「ッ！！　……ホツ、マ……？」

一発裏拳をかましてやろうと勢い良く振り向いた乱空の目には、待ち人たるホツマが穏やかな笑みを浮かべて立っていた。彼はその笑みのまま話しかけてくる。

「どうしたのですか？　乱空。そんな恐い顔して」

「実は――……」

事情を話そうとした乱空の視線はホツマの右手に収束される。及び、言葉は途切れてキョータ達と会うまでの感情に戻った。

「……ねぇホツマ……。その手に持っているのは何？」

見た所、長方形の箱の中に人形のような物が入っているらしい。ホツマは箱を持ち上げ、変わらぬ笑みのまま答える。

「ああ、これですか？　フェアプレイズのフレームです。虎穴に入らずんば虎子を得ずと言いますからね。思い切って買ってきたのですよ」

「うん。それは箱のパッケージを見れば大体分かる。……私が言いたいのは――」

乱空はプルプルと震えながら拳を持ち上げ、ホツマをキッと睨みつける。そしてホツマも慣れきった様子で逃げの姿勢を取った。

「――こっちが色々遭ったのに、そっちは何をショッピング満喫してるんじゃぁあああああっ！！！」

「遊んでた訳ではありませんよ。これはどうやらオンラインゲームらしいので、情報を得るためにはゲームに参加して情報を得るというのも一手で――」

「分かってるけど！　分かってるけど！　何かムカつくっ！！」

この間、ホツマは乱空の拳や蹴りを避けながら答え、乱空もせめてホツマに一発叩き込むまで止める気は無いと言わんばかりに攻防の応酬が成されていた。……その間、乱空は攻撃しながら事情を説明し、ホツマは攻撃を避けながら話を聞いているのだから器用なものである。

で、おおよそ15分後。

「……なるほど。その黒装束も気になりますが、その者達から狙われていた子供達というのも気になりますね」

結局、乱空から一撃もらい頬を赤くして擦るホツマ。ケンカして収まったら、2人仲良く並んで帰るまでが、『いつも通り』だ。

「うん。……けど、あのさ……良い子達だと思うからあんまり……」

さっきまで怒りに任せてぶん殴っていた彼女はどこへやら。遠慮がちに、言い辛そうにしている乱空。ホツマは彼女の言いたい事を

察し、クスッと笑った。

「……分かりました。甲斐には、あんまり荒っぽい調べ方はしないようにお願いしましょう。そして、その子達を狙う者がいたら撃退。……で、良いですね？」

「ッ！　うん！　ありがと！　ホツマ！」

今度は一転。裏の無い笑顔を浮かべる乱空。感情表現は豊かな方らしい。

その後も2人仲良く歩いていたのだが、ホツマが余計な一言を言ってしまった。

「あ、そうそう。フレームですが、例によって私の方で金が足りなかったので乱空名義に――」

ドゴンッ

ホツマの腹部に乱空の肘が入ったのは言うまでも無い。

第３６話　無名の殺法（後書き）

乱空は本当に髪を切ってません。けど、髪の長さを変えられる物があるんですよね～。……特別な物ではなく、普通に我々の世界でもある物ですよ。

実は、乱空の殺法とクルダの殺法、関係あります。後にストーリーで明かすので、お楽しみに。

なお、乱空の父親の事とか父親の仕事の手伝いの内容とか色々驚く所があったと思いますが、いずれ父親にも登場してもらう予定です。

第３７話　四辻での出会い（前書き）

お待たせました。……週一とか言いつつ日曜でなく土曜更新を目指してたんですが、破れちゃいましたね（苦笑）。

今回の話は前話のが少し絡んでるので余裕がある時に見比べてみるのも良いかもしれませんね。

第37話　四辻での出会い

学校が終わるなり、キョータにキーン、カナデにシノブ。そしてそれぞれのカバンに忍ばせたボボウ達はキーンの家に向かっている。それというのも、業魔王の支配する四王国の一角、クルダを呪いから開放したにも関わらず、動きが起きない事である。それはで異変が起きていないという事なので喜ぶべき事なのだが、あまりに静か過ぎるとむしろ落ち着かない。よって、今日はシノブを除く3名でアシュリアーナに様子を見に行こうという計画なのである。

先頭を走るキョータは不意に立ち止まり、後ろを歩いてくるキーン達に声を張り上げる。

「キーン！　みんな！　早く来いよ！」

思い立ったが吉日。思い立ったがすぐ行動のキョータにとって、他の3人のマイペースはじれったいらしい。……厳密に言えば、シノブは体が弱いため早く走れず、カナデはシノブを気遣ってペースを合わせ、キーンはその2人を気遣うのと、彼自身元々マイペースだからという理由でゆっくり歩いている。

キーンは至ってマイペースな口調でキョータを宥める。

「まぁまぁ、キョータ君。慌てなくても僕の家は逃げませんよ。緊急の時、つまり本が光らない限り、マイペースに行きましょう」

「だけどよぉ……」

口を尖らせて後ろ向きで歩を進めるキョータ。後ろ向きという事でペースは緩めたが、それでも進んでいる事には変わりない。おおよそ、アシュリアーナが心配で内心、急(せ)いているのだろう。そのこ

と自体は悪い事ではないのだが……。
ここでキーンは、ふと思い出したように注意を促す。
「それに、そろそろ十字路です。角から来る人とぶつかっても知りませんよ？」
そう。今キョータ達が歩いているのは割と細めの道路で一戸建ての住宅密集地なためか、信号が無い。むしろ置く必要が無いと言える。下手に早く走れば家から出てきた人にぶつかってしまいかねないし、曲がり角から出てきた人にもぶつかってしまう。自然と速度を抑えなければいけないため、慣れている近隣住人は焦らずマイペースに譲り合いの精神というのが根付いている。故に、信号という人間以外の基準が必要ないのだ。だが、それでも急いでいる人やバイク。走っている人はぶつかってしまう事はある。……一応白線や曲がり角には鏡も用意されているのだが、全てが全てそれで御せる訳ではない。
そう。今のキョータのように……。
「えー。心配し過ぎだってキーン――」
「あームカつくー！」
「うわっ！？」
「……あっ」
キーンの言わんこっちゃ無いという思いを込めた声。後ろに人が居る気配とその人の声を聞いてキョータはクルリと前を向こうとしたのだが、その目前に拳が迫ってきて尻餅を付いてしまったのだ。
キーンがシノブとカナデに先に行くと目配せしてキョータの傍に行くと、ちょうど拳を振り下ろした女性がキョータに手を貸している所だった。

……おそらく、何かでイライラしていて曲がり角を曲がりながら拳を振り下ろしたら偶然キョータ君がいたんでしょうねぇ……。

キーンはそんな事を思いながらもキョータに手を貸して女性と一緒にキョータを起こす。

少し遅れてやってきたカナデがキョータにムスッとした顔で怒っている間に、キーンは不躾にならない範囲で、視界の隅に収める形で、女性を見る。

黒髪の短髪。歳は16，7くらいだろうか。そして、熱中症予防でだろう白い帽子を被っており、キャミソールを着ていて元気で素直な雰囲気の女性。……この辺では見かけない顔だ。

「だって、善は急げって言うじゃん！　アレからもう何日も経ってるのに何も起こらないから一度アシュ――」

「ッ！　キョータ君。……それより今は、言うべき事があるんじゃないですか？」

観察しつつキーンは会話を聞いていた。その中で、キョータがうっかり『アシュリアーナに行こう』などと言おうとしてしまったので、遮った次第である。大抵はゲーム、妄想の世界の話だろうと聞き流すだろうが、始めから聞かせないに越した事は無い。

キョータへ言葉を投げたのは2つの意味がある。1つは先程言ったように余計な事を言わないようにという事を暗に込めた忠告。2つめは、拳を振り上げた向こうも悪いが急いで前を確認してなかったキョータにも非はあるため謝れという意図だ。

キョータはその2つとも意図に気付いたようだが、先に謝ったのは女性の方だった。

「あ～……ゴメンね～。一緒に来た奴とはぐれちゃってさ～。普段

からフラフラ出歩く奴だからついイライラしてて……」

向こうも向こうで大変そうだ。

キーンがそんな事を思っている間にキョータ側の謝罪が済み、女性が気さくに尋ねてくる。その目は歳不相応に爛々と輝いている。興味津々といった様子だ。……隠し事や内緒事に目を輝かせるのは自分――キーン――達くらいの歳でそれも男性ぐらいだと思っていたが、そうでも無かったらしい。

「えっと……それは……」

そしてキョータも安易に他人に知らせ過ぎるのは良くないと判断してか、どう言おうか迷っている風だ。それはキーンも同じ。彼はしばし――と言ってもほぼ一瞬に近い――考え、答えを出した。

「ゲ、ゲームですよ！　ねっ、キョータ君！」

「ッ！　あ、ああ！　ゲームだゲーム！　今から皆でキーンの家でゲームをしようと思ってたんだ！」

その意図も上手く通じたらしく、同意するキョータ。

確かに、フェアプレイズがゲームである事には変わりない。……自分達にとっては正真正銘の闘いでも、それを知らない人にとってはゲームでしかない。

「……ふーん。……ゲーム、ね……」

女性はまだどこか気になるようだったが、また何か聞かれる前に会話を打ち切って立ち去るとしよう。

「それじゃあ、僕達はこれで」

「……うん。じゃあ、気を付けてね」

キョータ達と女性は笑顔で手を振り合って別れ、十分離れた所でキョータとカナデ、シノブは盛大に息を吐いた。どう誤魔化したものかと相当焦っていたのだろう。１人冷静なキーンも小さく息を吐き、キョータの方に視線を向けた。

「本当、気を付けて下さいね。前方不注意の事も、うっかり話しそうになった事も」

「うぅ……ゴメン……」

その２つに関してはキョータに弁解の余地は無い。まぁ、キーンにとってはキョータに落ち着きを取り戻せたのだから悪い事ばかりでもなかった訳だが。

「けど、あのお姉さんどことなくキョータ君と似てたよね」

反省して小さくなっているキョータを哀れに思ったのか、カナデは違う話に切り替えた。

「え、そうか？」

「けど言われてみれば確かに……」

いまいち実感の無いキョータにどこか納得した様子のシノブ。キーンは頭の中で目の前のキョータと先程見た女性の印象を比べながら「ふぅむ」と唸る。

「ふぅむ……。確かに……感情で動きそうとか活発そうとか、重なる印象は多かったですね……」

「……キーン。最初のは褒められてる気がしないぞ……？」

「ええ。ただ単に比較しているだけですから」
「「だよね……」」

先程とは別の意味でへこむキョータに飄々と手と肩を持ち上げてやれやれという態度を取るキーン。そしてカナデとシノブの苦笑交じりの同意。

カナデやシノブはおろかキーンのそれも悪意が無い事は分かっているのだが、それでもどこかムッとしてしまったキョータは勢いよく歩を進める。

「やっぱ先行くよ！　キーン家（ち）の前で待ってるから！」

居心地の悪さを体を動かす事で発散、といった所だろうか。そう言い残すなり再び駆け出したキョータにキーンは肩を竦めながらシノブに視線を送る。

せっかくだから付き合いましょうか。走っても大丈夫ですか？

キーンはそういった事を問いたいのだろう。そしてシノブもまた、その意味を察して頷いた。

「うん、僕は構わないよ。……時々は動かないと本当に体が弱りきっちゃいそうだもんね」

そう言って眉の両端を下げて苦笑いを浮かべるシノブ。カナデもその隣に並び立ち、了解したように笑顔で頷く。元より彼女は気遣いからシノブにペースを合わせていただけで、別に急激な運動が苦手という事は無い。……むしろ、水泳だけで言えば６年生にも負けないだけの実力はある。

キーンは２人の反応で笑みを浮かべ、もうずいぶん先を歩いてい

るキョータに視線を移した。

「よろしい。それじゃあ行きますか」

その後、キーンはあっという間にキョータに追いつき、何故かどちらが先にキーン家に辿り着くかの競争に発展して、そのやや後ろを走るカナデやシノブは苦笑いを浮かべながらその様子を見ていたという。

で、結局……。

「ま、負けたぁ……」

「ほっほっほ♪　学校のほとんどの記録を作ってる僕がそう簡単に負ける訳が無いでしょう。……僕の実力、忘却なされましたか？」

全力疾走という事で息を切らせているキョータとキーン。……どちらかと言えばキーンの方はどこか余裕そうだ。口の端を引き上げて三日月状の笑みを浮かべている。

彼の言う通り、学校の運動テストのほとんどの記録は彼が作っている。どうすれば能率良く、上手く出来るかを考えてそれを実行しているから、というのが彼の持論だ。

その後、キーン宅の庭に入るとメイドのアキさんが花の手入れをしていたが、その時の対応は打ち合わせ済みだ。

「僕の部屋でお勉強会をしてきますね」

「「「よろしくお願いしまーすっ」」」

これで文句は無いだろう。怪しまれる事も無い。

そして、アシュリアーナに行くべくキョータはボボウをカバンの

中から開放する。キーンやカナデ、シノブもカバンの中からそれぞれの相棒を出してあげた。

先程から『開放』や『出してあげた』という表現なのは無理も無い。プール開きも終わり、段々暑くなってくる季節に学校から来る間ただ静かに待機。……その苦しさたるや……。

『暑かったのら！』

『……助かった……』

『ぐっはぁ！　死ぬかと思ったわ！』

『……魚に同じ、ニャリン……』

上からボボウ、フーイ、シャララ、こげちの順。普段であれば魚と言われたシャララは『人魚じゃあ！』とツッコミを入れるのだが、今はその気力も無いらしい。……本来なら右に同じと言うべきなのだろうが、そこはこげちのユーモアだろう。

それぞれの素体の持ち主は謝り、キョータは苦笑いを浮かべながらボボウに言う。

「ボボウの属性って炎だけど、それでも暑いんだな」

『暑いものは暑いのら！！』

ごもっとも。

キョータは再びボボウに謝り、各々息を整えた後キョータにキーン、カナデ。ボボウにフーイにシャララはアシュリアーナに向かう。シノブとこげちは何か遭った時のためのサポート役だ。

眩しい光と共に異世界に降り立つ子供達と妖精達。着いたのは、彼等にとって一度も来た事の無い場所だった。

「……ここは……」
「初めて来る場所ですね」
「けど、緑が凄く綺麗」

キョータ、キーン、カナデの順の感想。
カナデが笑みを浮かべて周りを見渡すと、青々とした木々の間から小動物がひょこっと顔を出しては隠れ、風で揺れる木々の音は心地良く、傍には澄んだ湖があり辺りの空気を涼ませる。

だが、そこには『湖』があった。……既にコユキが仕掛けを施しておいた、『水』が……。

ビュオオオッと風を切りながらコユキは的確にキョータ達の居る場所を掴み、木から木へ飛び移り、風のように距離を詰めていく。
コユキは事前に仕掛けを施しておいた。自分の国に勇者が来ればそれを自分に報(しら)せるよう、『水』に命じていたのだ。

兵に町を襲撃させて人を困らせる事で誘き出す事は出来たが、コユキはその必要は無いと考えていた。動きが無ければ逆に不審がり、自分達の方から様子を見に来るだろうから。
……また、真意は彼女のみぞ知るという推測だが、『騒ぎを起こす事で勇者を誘き寄せる』という選択を選んだジュリへの対抗心もあったのかもしれない。自分の生まれる遥か昔とはいえ、クルダがリキトアの属国だったという事で、クルダを少なからず意識しているのかもしれない。

「……すんっ……」

風で子供達の匂いが運ばれてくる。どうやら着いた――現れた――場所から移動を始めたらしい。
コユキはクスッと不敵な笑みを浮かべて呟く。

「……逃がさないよ？　……小さな勇者さん」

四天滅殺、ひいては業魔王の威信のためにも、クルダの敗北という恥辱を拭い去るためにも、圧倒的な勝利を収めなければいけない。
その為に、彼女自身が出た。

ダンッ！

コユキは木の枝を勢い良く蹴り出し、スピードを上げる。

第３７話　四辻での出会い（後書き）

……今更ですが、キョータのような一直線素直型って書きづらいです……。……自分（俺）とタイプが真逆なんですかね～（苦笑）。

次回はようやっとあの子が合流します。キョータ達とも、物語にも、本格的にね。

第３８話　牙族（前書き）

さて、この話からリキトア編です。……コユキみたいな猫っ子って難しいわ……。ソラとはまた違う元気な子ですからね。

第３８話　牙族

「それで、これからどうするの？」

カナデの小首を傾げながらの問いに、キーンは顎に手を置き周囲を見渡す。

「……ふむ。……まずは情報収集が先です。この近くに人の暮らす家が無いか見て、今僕達がいるのがどこなのかとか、知りたい事は多々あります」

「そうだな。こんな大きい木とか、今まで見たこと無いもんな」

キーンの意見に賛同したキョータはその言葉と共に上を見上げる。木々の隙間から陽光が漏れ、風の動きに合わせて光も形を変えていく。

巨大な木々だ。根元の幹にしても、２０名くらいの子供が手を伸ばして繋ぎ、ようやっと一周出来るかというくらい大きい。現実世界にあった木より、クルダの木より、遥かに大きい。上に一直線ではなく、横にも太い枝が通っており、それも大の大人が１０名乗ってもビクともしなさそうだ。

巨大な木々の生命力、または森自体の生命力とでも言うのだろうか。それは、都会に暮らし、そういった大自然から離れて生きているキョータ達を圧倒するに十分なものだった。……木の根が地中から大量の水を吸い上げるように、キョータ達の生命力も吸い込みそうな圧倒的な存在感を、その森は持っていた。

子供達３名はしばしその森の生命力に見入っていたのだが、いつまでも動き出さない３人に痺れをきたしてか３人の脳天にビシビシビシッとチョップを下す。及び、腰に手を当ててプリプリと頬を膨

らませて怒る。

『何さっきから呆けてんの！　ただでさえリキトアは土地のわりに人口密度が低いんだから、下手をしたら森の中で野宿する事になるわ！』

おそらく、草の上で寝るのは嫌とか、虫に刺されたりするのも嫌ってのを言いたいのだろう。

……というか……。

「……シャララちゃん、この国の事も知ってるのね」

そう。シャララは今いる国に対して『リキトア』と言った。いつもながら、妖精達の知識はどこから来るのだろう。目覚める（動けるようになる）までただの素体でいたのだから分かる訳が無いし、目覚めてからも知りえる訳が無い。

カナデの呟きに対し、シャララはいかにも億劫そうにしれっと答える。

『ああん？　そんなの私達にだって知らないわよ。気付いたら持ってた知識というか、そんなもん。……前世でもこっちにいたんじゃないの？』

「前世って……んな大雑把な……。ボボウもそうなのか？」

キョータが苦笑いを浮かべ、次にふと気になったようにボボウを見る。ボボウもまた、『う～ん……』と考えて、コクリと頷いた。

『おおよそそうなのら』

『……同じく』

フーイもどうやらそれらしい。
シャララは両手を合わせるようにパンパンと叩きながら先を進む。いい加減止まっているのも嫌気が差して、こうなりゃ自分が先頭を歩いたる。という心情らしい。

『はいはい。そろそろ行くわよー。さっきも言ったとおり、リキトアは人口密度が低いんだから』

その言葉でキョータやボボウ、カナデも動き出したが、キーンはシャララに追いつくなり質問を投げかける。

「シャララさん。では、貴女が知っている事だけでも教えてもらえませんか？　新しく来た場所ではなるべく早く、その土地の情報を得ておきたいので」

それはキーンの冷静な分析力からくる結論だ。もし大型の獣が居たとして、それを知っているのと知らないのでは対応のスピードに差が出る。下手をしたら6人して腹の中、という事になりかねない。
シャララはふよふよと浮かび、進みながら答えた。

『情報ったって、そのまんまよ。アシュリアーナの北に位置する国でね、牧畜と林業が盛んな牧歌的な国。ちなみに、クルダは南の国よ』

シャララがそこまでキーンの考えを察したかは定かではないが、平坦に答えた所から見て気付いていないのだろう。
その他にも、今自分達がいるような巨大な木々だけでなく、冷涼な高原地帯もあるそうだ。話している内に、まるでガイドになった気分で段々得意げになってきたのだろう。この国の流派についても語る。

『そうそう。クルダの方はクルダ流交殺法だったけど、リキトアにもそういうのがあってね。リキトア流皇我王殺法(こうがおうさっぽう)って言って、今私達の周りにあるような自然を自由に操って攻撃してくる流派よ』

「あ～……そういえばそういう事、天さんも言ってたような……」

少し上を向き、唸りながら記憶を辿るキョータ。確か、キサヤが幻覚の呪符を使って天の家に火を付けて、その幻覚に驚いてる間に天の家にある呪符を盗もうとする少し前に聞いた事がある。『牙』族と呼ばれる半獣半人が住む国だったはずだ。

そしてキーンの方は、どこかうんざりしたような苦笑いを浮かべて溜め息を付いた。

「自然を操るですか。……厄介ですね。この場所を見ると、あちらの武器は数え切れないくらいありそうです。……例えば、上から刃のような葉が降ってきたり――」

ドドドドドッ

「「「……」」」

人間も妖精も問わず、呆然。本当に上から刃のような鋭い葉っぱが降ってきてキョータ達がこれから進もうとした先に突き刺さった。

キョータにカナデ、ボボウにシャララ、フーイまでキーンを見る。

キーンはとんでもないとばかりに首を横に振る。

「僕じゃ無いですよ失敬な！」

「……うん。……それは分かるんだけどな……」

「あまりにタイミングバッチリでつい……」

カナデの言う通り、本当に『つい』だったのだろう。キョータとカナデの両名はキーンから気まずそうに目を逸らした。

「……えっ」

逸らした先にそれはいた。高校生くらいの背丈で猫の耳のような特徴的な髪型の少女。いつからそこに居たのか分からない。いつの間にか、そこにいた。

驚きから回復したキョータはこの辺の住人かと思い近づこうとするが、ボボウがキョータの前に回りこむ。その目にあるのは警戒心と僅かな恐怖。

『……キョータ。あの人、牙族なのら。きっとさっきの攻撃、あの人のなんらよ』

そのボボウの言葉は大きい方ではなかったのだが、彼女には聞こえたらしい。溜め息を付き、冷淡な目でキョータ達を見る。

「はぁ。……やっと全員警戒心が出たわね。早く一心合体しなさい。……でないと――」

目の前の彼女が右手を左から右へ、内側から外側へ振る。その途端、彼女の周りの地面が盛り上がり、拳を成してキョータ達へ迫る。

ドグシャッ！

「――どうなっても知らないよ」

岩の拳は標的にぶつかり、止まる。コユキのその言葉は岩に薙ぎ払われた者には送られていない。その程度の事で倒れるなら、ジュ

リは倒せないだろう。

「……何者だ、あんたは」

岩の拳がボロボロと崩れ、その奥から拳を突き出したザラマンデルが現れる。そしてその後ろには、ズルフェとウンディーヌも立っていた。

岩の拳がぶつかる瞬間、一心合体を果たしてザラマンデルがその正拳で岩の拳を相殺したのだ。

何者かと問われたコユキは、その緊張感を楽しむかのような笑みを浮かべると四肢に力を行き渡らせながら答える。

「コユキ。……樹霊王国リキトアを治める女王で、四天滅殺の一角。……中々可愛らしい子が揃ってて名残惜しいけど、こっちもこっちのケジメがあるから倒されてもらうわね」

と、語尾にハートや音符が付きそうなくらい軽い感じでそんな事を言う。

それと共に彼女の周りの地面が再度盛り上がり、先程よりも巨大で勢いのある岩の拳が迫る。

第３８話　牙族（後書き）

次回は戦闘です。

第３９話　強大な自然（前書き）

あ～何か久々に真っ当な戦闘描写を書いた気がするわ……。……って、ここまで来てまだそういったのを書いてなかったという事実に我ながら驚きが……。

第３９話　強大な自然

ノーモーションで繰り出される土の拳。その大きさは５０センチほどにも及び、数は5。当たれば吹き飛ばされ、次の攻撃の隙を生み出す事になる。ザラマンデル達は再び自分達だけで対処しようとしたが、それには及ばなかった。

ズゴガガガッという激突音。煙が開けた時、ウンディーヌが先頭に立ち、水色の、氷の結晶を模した盾を装備していた。直後、崩れる土の拳。

現実世界で見守っているもう1人の仲間が援護をしてきたのだ。

シノブがシャララに持たせたのは消しゴム。それが武装合体で氷の盾となり、土に含まれる僅かな水分を盾に当たる前に凍らせて、盾に当たった瞬間その激突力を利用して破壊したのである。

そして、シノブはボボウとフーイにも武装合体を施していた。ボボウには短めの鉛筆を。フーイにはボールペンを。

ザラマンデルが駆け出し、ズルフェが飛び上がるのはほぼ同時だった。

ザラマンデルの手にあるのは炎を纏わせた剣。フェンシングの剣のように細く、鋭い。レイピアと呼ばれる物だ。

ズルフェの手にあるのは、先端に緑色の珠（たま）が付いている錫杖（しゃくじょう）――ひと言で言えば棒状の武器――だ。

まずズルフェが錫杖に付いている珠から雷を放って上空から攻撃。そしてその雷の援護でザラマンデルが接近戦に持ち込んで斬るという戦法だった。キョータとキーンは何だかんだで互いの事を理解しているが故に、そこまでの戦術を即座に組めたのである。

「……へぇ」

だが、戦闘経験からか野生の勘か。コユキがその戦術を看破し、対処して見せた。

具体的に言えば、ザラマンデルに対して向かい風を吹かせた。ちゃちな風ではない。台風並みの暴風がザラマンデルの足を阻む。

ズルフェの雷がコユキを釘打ちにしてその場から動けなくするための攻撃だとすれば、コユキ自身よりも周囲を重点的に攻撃するはず。そして、ザラマンデルの進路ではあくまでコユキの攻撃を迎撃する以外で雷を放たないはず。だからこそ、ザラマンデルへの対処だけで十分だと判断したのだ。

「ッ！　うおぉお！？」

突如発生した風に驚くザラマンデルに、後方上空からズルフェの声が飛ぶ。

「落ち着いてくださいキョータ君！　……この風、逆に利用させてもらいましょう」

ズルフェは風王の名を冠しておきながら雷を使う。それは、風を起こす事で空気中の塵を擦り合わせる事で静電気を生み出し、それを大きくして放っているのだ。そして今はコユキの起こした暴風で自分でわざわざ風を起こさなくても十分な雷を得られる。

「はぁぁあああっ！」

ズルフェの錫杖に雷が集まる。先端の珠に雷が収束され、その大きさは約６０センチ。そして錫杖を上から下に振り下ろした時、溜められた莫大な電力は槍のような形を成して一直線にコユキへと向

かう。
　コユキとしては風王という名と雷を使うという情報を聞いてから推測は付いていたが、それでも彼女は驚かざるを得なかった。理由は明確。その雷の強大さだ。見た目通りの雷球ではない。圧縮に圧縮を重ね、その一撃で大抵の魔獣は地に伏せるであろう威力が窺える。それも、突破力を高めるために先端の鋭利な槍状にして。
　ザラマンデルもまた驚いたようで、「げっ」という顔をした後に巻き込まれないように前進を止めた。

「クッ！」

　流石にこれには回避行動を取るコユキ。後ろに下がり、さらに雷球が地面を壊す際の瓦礫から身を護るために、土の壁を作り出した。爆風を後ろに流せるようにだろう。壁の前面だけ斜めになり、台形のような壁である。……爆風を防ぐにしては壁が大きすぎるように思えるが、そこはコユキの念入りというヤツだろうか。
　雷球が地面にぶつかる事で発生する地面を大きく抉る破壊と音と、抉られて飛散する瓦礫と土煙。その場に居合わせた４名はそれぞれ自分の技で防御し、煙が晴れた頃、壁の向こうからコユキが感心したような口調で言ってきた。

「やるじゃんやるじゃん。さっすがジュリを倒しただけはあるね。良い攻め手だし、良いチームワーク。……けど――」

　直後、コユキを護っていた土の壁がぐにゃりと柔らかくなり、ドロのような粘性を持った液体となる。土の壁から、硬度の要たる炭素――元素の結合具合によってはダイヤモンド並みの硬度にもなる――を減らし、地中の水分を加えたのだ。
　そしてそのドロは、コユキの意思で自在に動く。

「――森の中なんていうホームグラウンドで、早々勝てると思う？」
「ッ！　キョータ君！　カナデさん！　逃げてください！」

土の壁は巨大だった。ズルフェも雷球を放っておきながら訝しんでいた。爆風や瓦礫を防ぐだけにしてはその壁は大きい。何事も念入りにというコユキの油断も慢心も無い選択からだと判断したが、それにしたってそのような強固で巨大な壁が作れたのなら始めからそれで雷球を防御すればよかったのだ。

ズルフェは今になって気付いた。出来るだけ壁をそのままの状態で、大きな状態で残す必要があったのだと。

巨大な土の壁を液化。それはつまり、次の攻撃への布石の可能性が高いという事。

「もう遅い！」

ザラマンデルとウンディーネがズルフェの意図を掴む前に、コユキは行動を起こした。巨大な壁は巨大なドロの波へと姿を変え、ザラマンデルとウンディーヌを飲み込んだのだ。

「うわぁあああ！」
「きゃあああああ！」
「キョータ君！　カナデさん！」

2人の悲鳴とズルフェの声はいずれも津波の轟音に掻き消されて誰にも響かない。そしてそのドロの波は巨大な木にぶつかると止まり、そのまま水分を抜いて硬化し始めた。

「ッ！　……キョータ君とカナデさんを捕らえて無力化ですか……」
「そう」

ズルフェの独り言を拾ったコユキは左手で後ろ髪を靡かせながらその考えを肯定し、その理由を語った。

「そうだよ。……さっきまでの戦闘で、キミ達の中で一番頭が切れて機転が利くのはキミだって分かったから、真っ先に一対一で倒させてもらう事にしたのよ」

コユキの印象として、ザラマンデルは土壇場での度胸や勇気は人一倍だが若干熱くなり過ぎて突っ走ってしまう点がある。ウンディーヌはまだよく読めないが、何だかおっとりしてるから急な状況変化に対応出来ないだろう。ならば厄介なのは、コユキの風を利用してあそこまで雷を収束、コントロールしてみせた実力と機転を持つズルフェだろう。だからこそ、ズルフェを真っ先に倒そうと考えたのだ。

そこまではズルフェも察した。そしてその上での彼の考えは、コユキへ雷での牽制をしながら土の壁に捕われている2人の開放だ。まだまだ相手の実力は未知数。ならば自分だけで戦うより、2人を開放して体勢を立て直してからの方が良いだろう。

だが、そう考えていたズルフェの目の前で、コユキはフッと不敵に微笑む。

「……考えてる事は大体は想像できるわ。ちょっとだけ視線が2人のいる辺りを行ったからね」

そして次に、右手の人差し指を立てて楽しげな口調で言って来た。

「ではここで問題です。キミはこれから上と下、どちらを攻撃しなければいけないでしょう」

「？　……ッ！！」

ズルフェは一瞬その問いの意味に迷ったが、すぐに分かった。空気を震わせて、何かが上から来る。上を向いてみたら絶句した。リキトアの誇る巨大な木が、チェーンソーにでも斬られたかのように真っ直ぐにズルフェへと倒れてくる。

本来なら下を攻撃したいが、これでは上を攻撃しなければ巨木に押し潰されてしまう事だろう。

だが、ズルフェにはまだ手があった。彼1人だけでは対応できなかっただろうが、現実世界のシノブが武器を送ってきたのだ。シノブが持たせたのは鉛筆のキャップ。筆入れに入れている時、擦れる事で丸くならないようにするキャップだ。

それにより、ズルフェの手には一本の槍が持たされた。雷のチカラを先端に集中。チカラを一点に集中する事で木の幹を貫いて現状を打破する。

そう考えてはいたのだ。

……しかし……。

「……リキトア流皇我王殺法。……樹岩！」

「ッ！　くっ！」

本当なら一方行だけに構えて一気に貫きたかったのだが、そうもいかなくなった。迫りくる木の幹から木の拳が生成されてズルフェに攻撃をしてきたのだ。拳の大きさは通常の人間並みだが、勢いがあるので対応、迎撃せざるを得ない。それに何より、数が多い。

その攻撃の意図は明確だった。莫大な数の攻撃で横に動けなくした上で、相手にその攻撃の対処をさせる。そうなれば――。

「う、うわあぁぁぁぁあああっ！！」

ズルフェの悲鳴と巨木がその体を地面に倒し、メキメキという音と共に地面も草もズルフェも何もかも押し潰す。
――本命たる巨木の一撃も決まりやすくなるのだ。
そして……。

「ぶっはぁ！　……な、何だ今の音！」

その巨木の一撃の衝撃で土の牢が崩れる事も考慮のうちだったのだろう。土の牢からザラマンデルとウンディーネが出てきても、コユキの余裕は一切崩れない。陰り無く、明るく右手を上げて挨拶をしてみせる。

「あら。出てきちゃったのね」
「ッ！　……コユキ……」

コユキを睨みつけるザラマンデル。そして『つい』といった様子で巨木の方に目が行くカナデ。そうしている内に、彼女はある事に気付いた。

「……ねぇ。……キーン君は……？」
「え。……ッ！」

彼女の震える声にザラマンデルは目を見開く。自分の視界に映るのは一本の巨木が倒れている様とその先に佇むコユキ。ズルフェの姿はどこにもない。
その動揺を楽しむように、コユキは手を後ろ腰の辺りで組んで上半身を少し倒して言う。

「会わせてあげようか」

「「……」」

返すはザラマンデルとウンディーヌの沈黙。嫌な予感がする。自分達が土の牢に捕われる前、目の前に在るような巨木は無かった。そしてその代わりに姿が無いズルフェ。

２人の沈黙をよそに、コユキは巨木を持ち上げる。力技で無理やり起こしたというより、木が勝手に持ち上がったという感じだ。

「ッ！　キーン！」
「キーン君！！」

ザラマンデルとウンディーヌの叫びが重なる。

巨木の一撃自体で激しく陥没した大地。そしてその中に横たわるズルフェ。最初の巨木の一撃と地面に叩きつけられてそれでも押し付けられる負担で体のあちこちにヒビが入っているが、まだ一心合体は保てているようだ。……しかし、ピクリとも動かない。

恐らく、木が乗っている以上は一心合体を解除するとキーンへの体へ負担をかけて圧殺させてしまう可能性があるため、フーイが無意識にキーンを護るため一心合体を維持しているのだろう。

「……許さない」

そう言ったのは誰だろう。

ウンディーヌがそう思い横を見ると、やはりザラマンデルだった。

この場に立っている中で男性の声はザラマンデルだけなのに、それでもウンディーヌが迷ったのは理由がある。彼がここまで怒っている時の声を初めて聞いたからだ。

彼女の好きな彼はいつも明るくて優しくて……。ここまで強い怒りを、彼女は初めて見たかもしれない。

ゴゥッ……！

その音はザラマンデルの持つレイピアに、彼の背中の翼に業火が灯る。剣と翼の炎はどんどん大きくなり、ザラマンデルは剣を真っ直ぐ前に構え、刺突（しとつ）の構え。

「……カナデ。下がっててくれ」

「……う、うん……」

ウンディーヌは彼の言葉に頷き、左後ろに下がる。ザラマンデルはそれを気配で察すると意識と視線をコユキに集中させた。

「……火焔（フレイム）……刺突（レイピア）っ！！」

ゴッという轟音と共に突き進むザラマンデル。業火を纏った剣を真っ直ぐ前に構え、翼の炎を推進力にして、文字通り、そして言葉通り爆発的なスピードでコユキに迫る。その姿は、まるで地上すれすれを猛スピードで翔（かけ）る火の鳥のようだ。

第３９話　強大な自然（後書き）

次の話では色々と核心に近い伏線が――

「「「……ジーッ……」」」（↑キャラ全員から喋るなという視線）

……張られるからお楽しみに～……

第４０話　降りしきる矢（前書き）

今回は結構伏線が敷かれております。……結構分かりやすいというか、今まで物語をよく読んでくれた人は即気付いちゃうかも……。

第４０話　降りしきる矢

地を焼き、文字通り烈火の如く迫るザラマンデルに対し、コユキは防御策を取らざるを得なくなる。攻撃が速いのでそう簡単に避ける事は出来ないだろうし、何より威力自体も強大さが空気で伝わるほどだ。

後ろに下がりつつ、地面から岩の壁を迫り出して防壁とし、威力と推進力を殺そうという策だ。

「おぉぉおおおおおっ！！」

だが、ザラマンデルはその壁を貫き、貫き、貫き通す。その威力と勢いは止まらず、コユキとの距離をみるみる詰めていく。

「ッ！　くそっ！」

バギャッという最後の岩が砕ける音とコユキの悪態が重なる。

だが、ザラマンデルにあるのは『疑問』だった。

「？　あれ？」

ザラマンデルの疑問。それは彼の歩を止め、立ち止まらせるに十分な理由だった。

コユキが後ろに下がりながら岩の防壁を出して防御しようとするスピードと自分の進行スピードを考えて、本来ならたった今捉えられたはずなのだ。しかし、そのコユキがどこにもいないのである。手応えすらない。

「きゃぁ！」

「ッ！　カナデ！？」

突如聞こえたウンディーヌの叫び声に慌てて後ろを振り向くと、カナデが木の根に縛られており、その横には飄然とコユキが立っていた。

コユキはしっかりザラマンデルの攻撃をかわしていた。防御用の岩は目くらまし。ザラマンデルの意識を目の前の岩とその奥に居るであろう自分に向けさせ、ザラマンデルが最後の岩を砕くほんの少し前、本当に刹那の間とも言える時間に上に跳び、ウンディーヌの傍に降り立ったのだ。

わざわざ最後の岩で跳んだのは、ザラマンデルに「防御策は岩のみ。追い詰めるスピードから考えてこの岩を砕けば捉えられる」という認識を持たせるためであろう。それにより手応えすらない事への疑問で次のアクションを遅くしたのだ。

そして締め付けられて苦しむウンディーヌを他所に、コユキは明るくザラマンデルに手を振って見せた。

「はぁあ～い」

「くっ！　カナデ！　今助け――」

ドスッ……

「……るっ……？」

「ッ！　キョータ君！」

ザラマンデルの言葉は最後まで続かず、代わりにウンディーヌの悲鳴が走る。

コユキが明るく手を振ったのは挑発。仲間がやられ、もう1人の

仲間までピンチとなれば頭に血が上って周囲への注意が疎かになるだろうと考え、攻撃へと行動に出る僅かな隙を狙ってザラマンデルを攻撃したのだ。

ザラマンデルが受けた攻撃。それは酷なものだった。挑発により意識が完全に前方に向いた所で、背後から岩の棘で胴体を貫いたのである。棘は根元より先端の方が細く、そのままさらにせり上がるのでザラマンデルの足は地面から離れる事となる。

「こんなの！」

胴体を貫かれて宙にぶら下げられる形となったザラマンデルは何とか脱出を試みようと根元側の岩を砕こうと拳を振るうが、体重移動や踏ん張りによる攻撃力増強が効かない上に岩自体硬くて砕けず、それがダメならと自分の体を前に持ってきて棘から抜け出そうとするが、コユキが先んじて棘の先の方を太くし、抜け出せなくする。そしてさらに、貫いている部分の岩をを無理やり広げて、内側から砕こうとしてくる。

「……くっ……あっ……！」

「キョータくん！！」

メキメキと音を立てながら、少しずつ内側からの圧力で壊されていくザラマンデルと、身動きがとれず、叫ぶ事しか出来ないウンディーヌ。

コユキは余裕の態度でウンディーヌの顔を横から覗き見る。

「ふふっ。可愛いわねぇ、必死に叫んじゃって。あの子、あなたの好きな人なの？　――ッ！」

その瞬間、ここまで計算ずくで攻撃してきたコユキに予想外の衝

撃が走る。今のザラマンデル同様、内側からの痛み。正体不明の頭痛に襲われたのである。その頭痛に隠れるように、まるで映像に流れるノイズのように、記憶に無い映像と音声が彼女の脳を過ぎる。

「見て見て！　王女様！」

幼い自分は笑ってる。こんな記憶は自分には無いのに、確かにそれは幼い自分だ。

周囲はどこかの庭園。光と緑に溢れ、リキトア程の大きさは無いが、どの木も幸せそうに凛々と日光で輝いている。よほど大事にされている植物達なのだろう。

そして、自分は何かを指差しながらその人を見上げていた。その人は知ってる人だ。名前も聞いた事がある。王女リュート。聖王国アシュリアーナ、そしてジュリアネスを治める王女だ。業魔王様が魔導力を吸収した末に殺した人物だ。

活き活きとして優しい笑顔。何の陰りも無く、自分を見ている。済んだ少し紫がかった髪と瞳。

「まぁ、小鳥の巣。……上から落ちたのね」

そう言いながら上を見上げるリュート。見れば確かに上には木がある。……親鳥が居ない。木の影の向きから考えて、ちょうど食事を狩りに行っている時間なのだろう。巣には大小の小鳥が脅えたように身を寄せ合っている。おそらく兄弟だろう。……まぁ、突如巣ごと急降下したのでは、驚いてしまうのも無理はない。

ドレス自体の重さも加えて宝石などの装飾品のせいだろう。リュートは「よいしょっ」と言って腰を下ろし、鳥の巣を優しくすくい上げる。そして木の上に戻そうとするが、腕を伸ばしても、背伸び

しても届かない。

幼い自分は焦れったい様子で手を上に掲げ、ピョンピョンと飛び上がる。

「王女様！　私が返してあげる！」

「えっ？　けど身長が私より低いのに……」

不思議そうにするリュートに、幼い自分は低く下がった王女の手から巣を強奪して生意気っぽく舌を出した。

「へへんっ！　私牙族だもん！　草木を操れば――」

言いながら、幼い私は草で手を作り、その手に巣を渡すとその草の手は上に上がり、優しく枝の上に降ろした。枝が二又に別れている所に置いたのでそう簡単には落ちないだろう。

そして、リュートの方を振り向いて自慢げな笑顔を見せる。

「――ね♪」

リュートは嬉しそうに手をパチパチと叩いた。まるで、幼い私の嬉しさを共用してくれたかのように。……いや、その顔は何の裏も無い。本当に自分の事のように嬉しそうにしてくれているのだろう。

「本当。凄いわね、コユキちゃん。っと、後は私に任せて」

自分への笑顔からリュートは視線を上に向ける。幼い自分も視線を追うと、2匹の鳥が近づいてくるのが見えた。恐らくあの小鳥の両親だろう。一方の爪には芋虫（いもむし）と思われる虫が掴まれていた。

リュートは右手を斜め上に伸ばし、静かな声で言った。

「……少しお話があります」

その言葉を理解できたかのように、虫を掴んでない方の鳥がリュートの右手に止まる。それから、彼女は鳥に話しかけた。庭を歩いていたら偶然巣が落ちてるのを見かけた事。それをコユキが戻してあげた事。そして、念のために下から何かしらで固定しなおすようにとも。

鳥の巣の作られ方は様々だ。枝などをブロックのように噛み合わせ、組み合わせた物や粘土や唾液、時にはクモの巣や葉っぱの繊維など、様々な物で作られている。枝だけでは心許ないので他の素材もプラスアルファで使う事もあるだろう。

枝が二又に別れている所に置いたのでそのままにしても落ちないだろうが、風の強い日はその保証は無い。よって、事情を説明して修復してもらおうという訳だ。

小枝に葉っぱ、そして粘土があれば十分だろうという事で、幼い私はリュートに命じられるまま土から粘土を抽出して小枝と葉っぱを鳥に渡した。

小鳥はピーッと鳴いてから修復作業に勤しむ。そしてリュートは、ニコニコとしたり顔でコユキの顔を覗きこんでくる。

「ふふっ。……今この子達ね、貴女にありがとうって」

「……うん」

その時自分にあったのは、嬉しさだ。ただ、嬉し過ぎてそれを上手く表せなかっただけに過ぎない。自分が誰かの役に立ったという感覚が、幼い自分を心地良くさせる。

王女は生命と心を通わせる事が出来る。また、空気中に存在する各属性を司るモノ達にも愛されているため、もはや『生命に愛されし王女』と言っても過言ではない。

例えば、人形に自分の意思で動けるようにと願うと本当に自我を持って動き出すという風に、命を目覚めさせる事も可能らしい。…ただ、潜在的に意志があってそれを自我を持たせて目覚めさせる事なら出来るが、牙族のように岩や木など、自然のままのモノ。命は在るが意志の無い生物は、目覚めさせる事が出来ないらしい。

言うなれば、人型の人形には霊が宿るというが、リュートが目覚めさせる事が出来るのは霊が入っている人形だけで、入っていない人形は目覚めさせる事が出来ないといった感じだ。また、目覚めた側はその霊の性格のままに自我を持つといった様子である。

改めてコユキは思った。

何だこの記憶は。

自分はこのような記憶は覚えが無い。なのに何故、こんなにも懐かしく感じるのだろう。……そして同時に、悲しいと感じてしまうのだろう。

「ッ！　痛(いっ)っ」

突如コユキの太股に痛みが走る。それと共に頭痛が消えうせ、辺りは見慣れた森に戻る。太股を見れば氷が付いている。傍にはウンディーヌの指が見え、微かに冷気を放っている所から考えて、冷気によって凍らされたようだ。

カナデは恐怖でカタカタと体を震わせながら声を発した。その目には涙を湛えている。

「……キョータ君を放して……！」

……そうだ。自分は幼い勇者の顔を横から覗いた時にこの頭痛と映像に襲われた。……改めてまじまじと見ると、この顔、リュートに似ているかもしれない。

気に食わない。

腹が立つ。

むかつく。

何故だか分からないが、いや、何故だか分からないからこそ、コユキは怒りという感情に襲われていた。先程の記憶も、ウンディーヌの顔も、なぜか自分をイラつかせる。

早く終わらせよう。

コユキはその思いのままに声を絞り出した。

「……お嬢ちゃん。１つ良い事を教えてあげるわ。……命は大切になさい！」

「ッ！　あっ……」

メキメキと、いっそう縛りが強くなる。一心合体していなければ骨が砕けているであろう力だ。……いや、一心合体していても、ウンディーヌの体にヒビが入り始めている。それほどの力なのだ。

意識が遠くなる中、ウンディーヌは呻き声を上げながら視線を上に向けた。大した意味は無い。首の辺りにある根に押されて、首が上向きになったに過ぎない。

「……ぇ……？」

間もなく閉じようとする瞼。それを閉じてしまっては二度と開け

られぬであろう瞼。
意識を懸命に保とうとする中、彼女の目に光が映る。小さな光。
見間違いかと思ったが、直後、それは違う事に気付く。
最初は1つの光だったのが段々増えていき、落ちて来る。

「ッ！　何！？」

コユキも気付いたようだが、もう遅い。降り注いだ桃色の光の矢はウンディーヌを縛っていた根やザラマンデルを貫いていた土の棘を根元側と先端側、両方破壊してなおも大地に降り注ぐ。それはもう、光の矢の雨霰（あめあられ）だ。
その、降水量ならぬ降矢量に圧されてか、コユキはウンディーヌの傍を離れ、代わりに上から1人の少年が降ってきた。なお、地上付近で何故かスピードが落ちたので怪我は無い。……風が吹いて彼の落下スピードを相殺したように見えたが……。
なお、ザラマンデルは突如痛みが消えた事で力が抜け、ズルフェ同様気を失ってしまったらしい。

気道が確保できた事と矢による土煙でセキを付きながら、ウンディーヌは少年の方を見る。
現在は一心合体しているため自分の方が背が高いが、歳は自分達より上だろう。黒髪に黒い瞳。黒いローブ。ローブの背には太陽と月を模した模様が描かれている。……魔方陣というものだろうか。
そして肩には黒猫が乗っている。

少年は周囲とウンディーヌ、コユキを見て溜め息交じりで口を開いた。

「……何とかギリギリ間に合ったかな」

第４１話　不確定要素（前書き）

今回は短いです。……どちらかと言えば前話の続きって感じで、前の話と２話で１つって感じですかね。

第４１話　不確定要素

ズルフェに引き続き、間もなくザラマンデルとウンディーヌも倒せそうという時、文字通り降って来た少年。

自分の行動を妨害したという事は敵と見て間違いない。……相手を知った上で挑んだのか、それとも相手を知らず、単にザラマンデル達がピンチだったから現れただけの正義感野郎か。……後者なら数果てなくバカだ。

コユキはそういった内心の苛立ちを抑え、猫を被った明るい声で少年に話しかける。

「あらあら。どちら様かしら。……闘う相手が分かってさっきの行動をやったのよね？」

対する少年は、コユキが暗に出すプレッシャーを全く意に介さずに飄々と答えてみせる。

「誰かと問われれば、名前はキョウ。タダの通りすがり」

「……キョウ」

コユキは彼の名を反芻するが、内心では溜息を付いていた。タダの通りすがりという事は、先程の推測ではどちらかといえば後者ではないか。……少しでも考えを持って攻撃してきたのではと思った自分がバカだった。

彼女の感情が苛立ちから呆れに変わろうとする時、またはその時を見計らって、キョウはとんでもない事をぬかしてみせた。

「ま、偽名だけどね」

「……はぁ！？」

にっこり明るく慇懃に笑いながら言ったキョウに対し、コユキは怒りが再発火。ウンディーヌはポカンとしている。

戦闘の口上で名を名乗る際、偽名を使うとはふざけているのか。別の事を考えつつ、一応彼の名を覚えておこうと反芻した自分がバカのようではないか。……って、さっきも『自分ってバカじゃん？』って思ったからそれを思ったのは本日二度目。……断固認めたくない！

そういったコユキの内心の葛藤を知ってか知らずか――おそらく、察した上でワザと知らないフリをしているものと見える――キョウは次の行動に出ていた。

「ふんふんふ～ん」

彼はご機嫌に鼻歌を歌いながら、少し離れた所で転がっているザラマンデルとズルフェを自分とウンディーヌの傍に運んでいた。何で運んでいるかといえば、『木』だ。地中から根っこを出し、それで2人を掴んで自分の傍に運んでいるのである。

「ちょ、何やってんの！」

何をしようとしているのか分からないが、敵が何かしようというのだからとりあえず妨害をと、コユキは自身のチカラで、彼の操っている木を相手のコントロールから奪おうとするが、何故かそれが出来ない。というかそもそも、植物を操る事が出来るのは半獣半人の牙族だけであるはずなのに、目の前の（偽名）キョウに動物的な要素は無い。

キョウはキョウでコユキの植物のコントロールを奪おうとするチカラに気付いたかのように眉を下げて、そしてまたへらっと笑う。

「あ～無駄だよ無駄。こっちの植物はオレの制御下に置いたから、それを覆す事は出来ない」
「……何のつもりなの？」

次のキョウの言葉で、今度はコユキが眉を下げる番となる。
キョウは、自分の傍に運ばれてきたザラマンデルとズルフェに声を掛けるウンディーヌを見ながら言った。

「ああ、纏めて止めを刺せる様に一箇所に纏めてるだけだけど？」

その言葉でウンディーヌは動きも声も止まって脅えたような目でキョウを見て、キョウの肩に乗る黒猫は溜め息を付き、コユキはというと不審がＭＡＸに達したらしく眉を寄せて下げ、四肢に神経を行き渡らせる。
先程彼はザラマンデルとウンディーヌを助けている。少なくとも自分（コユキ）の味方という事は無いだろう。

「……ふざけてる？」

コユキの質問。次のキョウの発言によっては、即座に飛び掛ってくるか、自然を操って攻撃してきそうだ。言うなれば、一触即発の状態である。
……だというのに……。

「もちろん、ふざけてる」

真顔で言ってのけた。だがそれにより、コユキの疑問は怒りに変わり、それもＭＡＸを迎える事となる。
コユキは表向きはにっこり笑いながら口を開く。

「……私さ。ユーモアのある奴は嫌いじゃないんだけど、今はそれを流せる気分じゃないんだよねー。……だから、さ――」

彼女の足が強く地面を踏みつける。それとともに、周囲の木々が先程ズルフェを押しつぶした時のように、幾重にも重なるように倒れてきた。

「――お望み通り潰れちゃえ」

だが、彼女は……いや、コユキのみならず、ウンディーヌも気付いていなかった。キョウの本当の狙いを。

キョウはにっと不敵に微笑むと右手を斜め下に下ろした。

「その影、使わせてもらう！　ダーク！」

彼の声を受け、黒猫が彼の右手を降り、そして地上に降りる。その、キョウだけではなく、ザラマンデルもズルフェもウンディーヌも、全てを内包するだけの大きさの影の上に、倒れてくる巨木の影に、ダークは降り立った。

ダークが降り立った地点から、異変は起こる。影の色が濃くなり、内に入れば逃れる事など出来ないと思わせるほどの『闇』となる。

「！　これはっ！」

コユキもまたその現象に驚き、警戒のために『闇』の範囲外まで後ろに飛び去る。

そうこうしている内に次の動きが起きた。キョウが、ダークが、ザラマンデルが、ズルフェが、ウンディーヌが『闇』に飲まれていく。まるで、底無し沼にはまって沈んでいくようだ。

「な、なになになになにっ！？」
「ちっ！　そういうこと！」

真っ黒な『闇』に飲み込まれていく様子に戸惑い、恐れるウンディーヌとキョウの意図に気付いて木の落下速度を上げようとするコユキ。キョウの意図、それはつまり子供達をこの場から逃がそうという意図だ。

だが、コユキが木の速度を上げた頃には3人の勇者達は闇に飲み込まれており、術者たるキョウも胸の辺りまで沈んでいた。そして彼は、にっこりとコユキに微笑んで手首から先で手を振る。

「それじゃあ、また会う日まで。御機嫌ようー」

ズズンッという轟音と共に巨木が倒れ、幾重にも木々が重なっていく。

「……」

コユキの表情は淡々としたものだった。それは結果が分かっているからだろう。キョウが『闇』に飲まれるのと木が倒れるのはタッチの差で前者の方が速かったから。

コユキは肩を1回上下させて息を吐き、木を元の通りに持ち上げる。大地の損傷も元に戻し、戦闘が始まる前と同じ静かな森の状態を作ってから、彼女はポツリと呟いた。

「……全部、狙ってか……」

彼が登場してから終始コユキをなめた態度だったのは彼女を挑発するため。怒らせて巨木を倒れさせる大技を出させ、その影を利用する。最初からそのつもりで――いや、そんな事をしなくても、例

えばコユキが葉の刃を飛ばしたり地面から拳を作り出して攻撃したとしても、ザラマンデルとズルフェを自分の近くに移動した時のように、木を操作して攻撃を防御すると共に、その自分の操作している影を使って先程の『闇』を使う事が出来る。

おそらく、先程の『闇』は別の場所へ移動するためのモノだろう。

「……何者……？」

コユキの声は風に揺れる木々の音色でかき消される。

彼女が攻撃するように仕向けて、攻撃をした時点で彼等は逃げる事に成功する状況が出来上がる。そういう『状況』を作り出し、可能にしてしまえる不確定要素（ジョーカー）の登場。

不確定な存在は、誰であろうと不安にさせる。それは、業魔王四天王たるコユキとて例外ではない。

第４１話　不確定要素（後書き）

……ホント、オリキャラって思う通りに書けるって点では書きやすいけど、時々「……こんな頭良くて大丈夫か……？」ってなるわ。

……下手をすると主人公達より目立っちまう。

第４２話　キョウ（前書き）

今回の話の始まりはキョウの家からです。……一つ所に留まれないのに家？って疑問を持った人は相当鋭いですねー。

第42話　キョウ

「……んっ……」

小さい呻き声と共に、少年の瞼がゆっくり開けられる。

「！　キョータ君！」
「……カナ、デ……？」

瞼を持ち上げたキョータの視界には見知った少女が映っており、彼女は涙を流している。

ここはどこだろう。……頭と背中がふわふわするから、自分はベッドに寝ているようだが。キョータは視線を右に移す。クルダにあったような内側が木の家。……家具や装飾が少ない。カナデはそちらに座っている。左を見れば、ボボウがすやすやと寝息を立てていた。

キョータはここでフッと安堵の表情を浮かべるが、次に何故こうなったかの事を思い出した。

「！　コユキは――ッ！　痛っつ……」
「キョータ君！　まだ寝てなきゃダメ！」

カナデは起き上がるキョータの肩を掴み再びベッドに押し付ける。心配してくれるのは良いが、何故自分が助かっているのかが分からない。戸惑うキョータの頭に、コツンと何かが乗る。右側に座っているカナデがキョータの斜め上を見ているという事は、左側の誰か――おそらくこの家の家主だろう――を見ているのだろう。

そしてその人物は、キョータがそちらを向く前に声を掛けてきた。

「その子の言う通り、まだ寝てた方が良い。……ま、目覚めて良かったねという事で、いる？　お茶」

キョータに話しかけてきた者の容姿は、宵闇を思わせる黒い髪と穏やかな光が灯る黒い眼。歳は十四歳くらいだろうか。キョータの第一印象として、着ている服がどこか合わない気がした。彼の服は自分達の世界のような柄の多い物ではなく、この世界の人間が着るような質素な物だが、彼には自分達の世界の物すら古いように思えた。……非常に不思議な話ではあるが。

奇妙といえば、部屋の中なのに手袋を取らない点もだろう。それも、右腕だけ。……袖も長く、まるで腕を丸ごと隠しているかのようだ。

「あ、うん。頂きます。……えっと……」

目の前の自分より年上の少年から紅茶の入ったカップを受け取ったキョータは、少年の名が分からないせいか少し困っているらしい。

少年はカナデの分を渡して自分の分を口に含みながら、キョータの疑問に答える。

「ん、ああ。オレはキョウ。しがない流れ者の魔術師だ。これ以上の事は、もう1人の子が目覚めてから話すよ」

「ッ！　そうだ！　キーンは！？」

キョウの言うもう1人の子というのはキーンの事だろう。キョウはカナデに視線を移すと、彼女はスクッと立ち上がりながら自分のいた場所を開けた。

「！　キーン！」

カナデが座っていたのは2つのベッドの間だったらしい。キョータの右側のベッドには、キーンが穏やかな寝息を立てていた。隣にはフーイもまた同じように寝ている。

キョウとカナデは以下のように言う。

「まだ寝てる。……一応呪符で手当てはしたから、後は目覚めるのを待つだけだと思うがな」

「今はダークちゃんが見てるの」

「？　ダーク、ちゃん？」

『なのら？』

「！　ボボウ、目覚めたのか！」

キョータの疑問にボボウの声が連なる。彼が目覚めた事で、キョータは喜んでボボウを笑顔で抱き締め、そしてボボウもまた照れながらも答える。

『キョータの声がして目が覚めたのらー。……ここはどこなのら？』

「どこって……」

キョウの家、としか言い様が無い。

家主の方を見ると、紅茶に角砂糖を2つ3つと追加していた。……カップ1つにそれは甘過ぎないだろうか？　キョータの中で疑問が入れ替わる前に、2人の視線に気付いたキョウはボボウにも先程キョータにしたように自己紹介をする。

ボボウにキーン。フーイにカナデ。来た時のメンバーの安否が続々確認されている訳だが、まだ1人だけ取れていない。カナデの相棒たるシャララだ。だが、キョータが今日に確認を取るまでもなく、彼女は自身の存在をアピールしてきた。

『あぁ、私はここよ、ここ。あんたの上の棚』

「え？　……あっ」

いた。

後ろを向いてそこから視線を上に向けると棚があり、その上に金魚バチがある。シャララはその金魚バチに入って、ぬくぬくと水に浸かっていた。

「で、これがダーク」

「えっ――わぁ！？」

キョウの声にキョータがそちら――キーンのベッドの方――を見ると、目の前に黒猫が。キョウが猫の脇を持って自分に近づけていたらしい。

驚くキョータを見て笑いを堪えるキョウはダークと呼ばれた猫を自分の膝に乗せながら弁解をする。

「悪い悪い。あ、シャララにはカナデと一緒に手当ての手伝いと看病をお願いしてたんだ。2人に礼言っとけよ」

「あ、うん。……カナデ、シャララ、サンキューな――」

「んで、これがダークな」

「……」

礼を言おうとした矢先に再びダークを目の前に持って来させられる。……他人のペースを奪って、そのリアクションで楽しんでないか、この人。

そんな彼のイタズラ心を見かねてか、とうとう注意をする者が現れる。

『はぁ。……キョウ、いい加減イジワルは止めません？』

「えっ」

『のら？』
『？　私、何か変な事言いました？』

変というか、猫が喋ったら普通は驚かないだろうか。……いや、友人の相棒のこげちも見た目黒猫なのだが、こげちはボボウと同じように動くし喋る特殊な素体で、対してダークは綺麗な黒い毛並みで、本物の猫だと信じて疑わなかった。

カナデとシャララは既にその黒猫が喋る事を知っているらしく、特に驚いた様子も無い。

「ダークちゃんは、キョウさんと一緒に私達を助けてくれたの」
『ま、流石に喋った時は私とカナデも驚いたけどね～』
「そうなんだ。……ダークもありがとうな」

キョータはそう言いながら『つい』といった様子でダークの頭を撫でる。ダークは特に嫌がる様子はなく、気持ち良さそうにキョウに抱かれつつ、キョータに撫でられていた。

『どういたしまして。お役に立てて何よりです』

そしてその主たるキョウもまた、嬉しそうに笑みを浮かべる。

「ダークはオレの創った魔法の中でもトップクラスのチカラを持ってるからな。ちなみにこの家も――」
「魔法っ！？」
『……？』
「「「……」」」

突如ガバッと起きたキーンと、その声に反応して寝ぼけるようにウトウトと目覚めるフーイ。２人に対し、一同は無言で彼等を見つ

める。どうやら魔法という単語に反応して飛び起きたようだ。しかし、彼とは初対面のキョウとダークは呆然としている。そして、目が覚めたら見知らぬ家という状況に陥っているキーンもまた混乱している。

とにもかくにも3者を落ち着けようと、キョータとカナデは顔を見合わせてキョータはキョウに、カナデはキーンに事情説明。キョウにはキーンが魔法というキーワードに強く反応するという事を、キーンにはキョウとダークに助けられた事を話した。

以下、キョウとキーンのリアクション。

「……そういう奴も居るんだなぁ……」

「……そういうリアクションは慣れてますよ……。まぁとにかく、助けてくれてありがとうございました。……けど、どうやって……」

「あのコユキからキミ達を逃がす事が出来たかって？」

お礼を言うという事で眉間を緩めていたキーンは一転。不意に疑問で眉を顰める。キョータもボボウも、カナデもシャララも気になるらしく、キョウとダークに視線を寄せる。

キョウはダークを膝に置きなおして瞳を伏せ、息を吐きながら言葉を紡ぐ。

「……そうだなぁ。目覚めた所で、話しても良いか。何度も同じ説明をするのは何か嫌だったから、全員目覚めるまで事情の説明は待ってたんだ」

ようは、二度手間が嫌と。

「お前達がコユキと交戦してた時、オレはちょっとした用事でフェルシアにいた。……ちょっと気になる事があってな。その時に……」

そこから時間は遡り、場所はフェルシアに移る。

「……降魔（ルナティ）がフェルシアに多いとは聞いてたけど、まさかここまでとはね……」

クルダ城に忍び込んだのがフェルシアに多く見られる降魔だと聞いて探りにきたのだが、あまりに普及され過ぎていて尻尾を掴む事は容易では無さそうだ。

フェルシアは、国土の多くが山岳地帯で鉱物資源が豊富なためか技術水準が高い。降魔とは、その科学力と魔法の力の結晶という訳だ。また、フェルシアは王都フェルシアを盟主とした都市国家群で構成されており、王都フェルシアを中心として各国家間の結束は強いが、それぞれの国に自治権があるため政治形態などは多種多様だ。

キョウが忍び込んでいるのは、王都フェルシア。人が隠れるならあえて人が多い人の中という訳だ。一応スパイのような立場なので、身を隠すなり何なり手を打たなければいけない。いつもの目立つローブは懐に仕舞い、代わりに町の人が着ているようなありふれた服を着ておく。……肩にダークを乗せているため若干目立つが、許容範囲だろう。

困ったように頭を掻くキョウに、ダークは声を潜めて耳元で話しかけてきた。

『《……どうします？　流石に長く居ると怪しまれそうですし……》』

「（そうだなぁ……ッ！　……リキトアにでも行くかな）」

リキトアに行くと言う前に、彼はふと何かに気付いたように顔を上げて、それからリキトアに行こうと返した。ダークはこの事から、何かしら理由があるのだと思って問い返す。

『《？　何故リキトアに？》』
「……王女様と子供達が相対したっぽい。……子供達が現れてから短時間。こりゃ罠でも仕掛けられて捕捉されたかな」
キョウの扱う魔法の一部は、牙族の使う技と近い。そのせいか、コユキのような一流でチカラの強い牙族が能力を使うと、何となくそれを感知できる。
また、キョウにとってキョータ達が『どこから現れるのか』は分からなかった。彼にとって、突然今まで存在しなかった場所に子供達が現れるような認識だ。……まるで、次元そのものを覆う結界に穴が開いてそこを通ってやって来るように。
キョウは歩を進めながらダークに命じた。
「ダーク、適当な細路地に入ったら移動、頼めるか？」
『分かりました。……その後は？』
「飛ぶ」
「で、後は、あ～……見たのカナデちゃんだけか。……ダークの移動術でフェルシアの闇からリキトアの闇に移動して、フライ、言ってしまえば空飛ぶ魔法かな。それで戦ってる場所まで移動したと」
「ああ、それで上から攻撃が来た訳ですね」
カナデは合点がいった様子で平手をポムッと合わせる。キョウはコクリと頷き、補足を加えた。
「そう。ダークは影を闇と見なし、その闇を介して、一度行った別の場所に移動できる。それでリキトア国内まで移動したら、空飛ん

で上から助っ人攻撃バシュっとね」

一通り説明した訳だが、キョウは彼等がいつも突然現れている事を疑問に思っている事を伏せた。不明な事をおいそれと喋るのは後々に情報の混乱を導くかもしれないからだ。

それに何より、キョウにも用事がある。それを聞くのはそれが終わってからなり、もっと親しくなってからでも良いだろうとキョウは考えていた。

ぽうっ……

「「「ッ！」」」
『『『ッ！』』』
「んお？」
『光りましたね』

キーンの枕元に置かれた本に光が宿る。不意の事で少年達とその素体達は驚いたが、キョウとダークは割と平然としている。おそらく、キーンの看病をする際に持ち物をチェックして、その本に宿ったチカラを感じたのだろう。感じた後はもう、魔術的な何かがあるなら何があっても驚かない用意をするだけだ。故に、最悪の場合を想定しておくのだが……。

「爆発するかと思った」
『私はその本から怪物が出てきて襲ってくるのかと』

2人の意見は物騒すぎやしないだろうか。……というか、むしろその想像を楽しんでいる。……まぁ、その状態になっても平然とクリアしてしまいそうな余裕を雰囲気で放っているが……。……いずれにせよ縁起でもない。

「……んな訳ないでしょ……」
「……ダークちゃんまで……」
「……」（……そういう魔法生物や魔術的仕掛けも、魔術師らしくて面白いかもしれませんね♪）

キョータとカナデは冷や汗交じりでげんなりとし、キーンは無言で頷いただけだ。
だが、付き合いが長いという事でキーンの中で仄かな期待があったのを察したキョータは彼にも半眼を送る。

「……キーン……？」
「はっ！　おほん。え～っと、本ですよね、本。……何々？　【自然溢れる国に来た勇者の次なる試練。魔力奪いしモノに捕われし仲間を開放せよ】　……天さんの時と似てますね」
「じゃあ、天さんの仲間？」
「いえ、そこまでは……」

カナデの考えに、慎重派のキーンは首を傾げる。確かに文面は似ているが、昔の天の仲間のそれか、はたまたまったく別の反業魔王の者を指しているのか分からない。……自然溢れる国は今キョータ達がいるリキトアだろうが……。

「ああ、ちょうど良いわ」

それを言ったのはキョウだ。彼は1人好都合とばかりにうんうんと頷いた。

「実はオレはある人から頼まれて、業魔王側に捕らえられた者を助けて回っているんだ。んで、ちょっとフェルシアに寄り道しちまっ

たけど、本来なら次はこの国、リキトアに捕われた者を開放しようと思ってたんだ」
「……そこに僕達がコユキと戦っていたからせっかくだから助けようと」
「おまけに、手伝ってもらおうと」
キーンの言葉にキョウが続く。にんまりとして、「いや～助かった助かった」と顔で語っている。
そのどこか憎めない調子の良さに、キーンとカナデは苦笑交じりで答える。
「……まぁ、助けてもらいましたしね。その位は」
「私も良いですよ」
「……」
『？　キョータ？』
こういう時真っ先に同意するであろうキョータの様子がおかしい。ボボウが彼の顔を覗きこんだ時、キョータは俯きながら、ポツリと小さい声で言う。
「……オレ、行って大丈夫なのかな……。……ちゃんと、助けられるのかな……。……不安なんだ……」
それは、敗北が彼の心にもたらした『不安』だった。

第４２話　キョウ（後書き）

ふにゃあ……。実は次話はもう書きあがっているのですが、やっぱり心理描写が多い話って苦労するわ……。

まぁ、今まで一撃必殺で勝ちっぱだったので、こういう『展開の影』を作るのも良いかなと。……光や栄冠ばかりの話で、さらに深みのある話って、少なくとも俺には書けないのでね。

第４３話　太陽の翳り（前書き）

う～……自分の楽な描写ばっかり書いてたら結果平坦な物語になりそうだから割り切ると言えば割り切るけど、やっぱ落ち込んでる子やそれを立ち直らせるのは難しい……。

第４３話　太陽の翳り

天と同じ天魔伏滅の一角が捕まってるという情報を得たキョウはキョータ達に救助――というか手助け――の依頼をしたわけだが、俯いたキョータの口から出たのは不安に満たされた言葉だった。

「……今回はオレ達だけで、それもキョウが助けに来てくれたから良い。……けど、今回は人を助ける……人の命がかかってるかもしれない。……恐いんだ。……もし助けられなくて、その人の命まで失わせてしまったらって……」

今までの彼の『強さ』を支えていたのは、人も物もモノも大事にし、失いたくないという想い。その、もの達のために自分が戦わなければいけない。護るために闘いたいという想いからだった。

しかし、初めての敗北は彼の明るさを翳らせる。ほとんど一矢すら報いれぬほどの実力差が、彼の中に『もし護るべきものを護れなかったら……』という不安を生ませ、蝕む。

「……キョータ君……」

「何を言ってるんですかキョータ君。それでも――」

「分かってる！　……分かってるんだ。オレ達が闘わないといけないって。……けど……」

カナデとキョータの言葉につい強くかえしてしまうキョータ。

彼だって分かっている。自分達がアシュリアーナの人達にとって希望と映る様に闘わなければいけない事を。そして解ってもいる。

……今の自分が様々な不安に押し潰されそうでいつもの自分でなくなっている事も。

それでも、抑えようと思えば思うほど、挫こうと思えば思うほど、

一度生まれた不安は彼の心に絡み付いてくる。

「……そういえば、言い忘れてたな」

湿った雰囲気が漂う室内。そう、ぽつりとキョウが呟く。そして彼は、キョータとキーン、カナデ。そして三人の素体達を見る。

そして、穏やかな笑みを浮かべて軽く頭を下げた。

「クルダでは、キサヤを二回、キリガの子供達を一回助けてくれたそうだな。オレからも礼を言う」

「えっ。キョウさんキサヤさんやあの子達と知り合いなんですか？」

キョトンと目を見開いて驚くカナデ。キーンを始めとする他の面々、落ち込んでいたキョータ含め驚いているようだ。

キョウは肩を竦めながらその子達の事を思い出したように苦笑いを浮かべた。

「まぁな。立ち寄るたびに遊び相手になってるからすっかり顔馴染みだ」

キョウは続ける。

「……それと、会った時に伝えてくれって複数人から伝言を預かってる」

「複数人？　……って、誰です？」

尋ねたキーンの予想としては、キサヤ辺りが頭に浮かんだ。先程キサヤの話も出たし、可能性としては十分ありえる。

そしてその予想は当たっていたらしく、キョウは預かっていた伝言を再生し始める。

まずはキサヤ。

【お前等、とうとうクルダ王を倒したそうじゃねぇか。やるじゃん。……それと、僕も他の国に行く事になった。今まで助けてくれたお礼の方は、その先で会ったら言うよ。何かコイツにお礼の伝言まで任せるのが癪だからね】

「……と、笑ってくれやがった」

と、最後は溜め息交じりで言うキョウに、カナデとキーンは苦笑交じりで困った顔を浮かべた。……キョウとキサヤ。仲が良いのか悪いのか分からない。

「……それは……」

「え～っと……あ、キサヤさんが他の国に行くってのは？　僕は直に子供達と会ってませんが、キサヤさんがあの子達を置いてくなんて考えられないし……。話を聞く限り、キサヤさんは子供達を大事にしていたそうですからね」

キーンはキリガの子供達と直には会ってない。会ったのはキョータとカナデで、キーンは現実世界でお留守番をしていた。そして、キサヤが子供達の先生役として大事にしていたのはキョウも知っている。相応の理由があるというだけだ。

「ん～……ジュリが、国中の孤児を主都で纏めて世話するって言ったからな」

「？　いまいち話が繋がらないような……」

「それが説明すると結構めんどくてなー」

キーンの疑問にキョウは溜め息付きで返す。

その後説明した彼の話はこうだ。何でもキョータ達がクルダ王ジュリを倒した後、キョウはこっそりジュリに会いに行ったらしい。そこで、業魔王に操られていた頃の自分がどういった事をしていたかを聞いたジュリはせめてもの罪滅ぼしとして自国で起こった紛争――いや、もはや蹂躙と言っても良いだろう――で孤児となった子供達を纏めて主都で保護しようという考えを実行したそうだ。

なお、キョウがジュリの元に訪れた際、ジュリに再び邪神素体（デュオスフレーム）を渡して業魔王の支配下に置こうとした刺客がいたが、その話はまだしなくても良いと判断して伏せておいた。

「で、見知った顔が一緒に保護に行った方が子供たちも安心するだろうって事でオレも一緒に行って、んで、その時にキサヤの伝言も一緒に預かったって訳」

以下、子供達三名とシャララ、フーイ、ボボウの順。

「「「……」」」

『確かにめんどくさいわね、それ』

『……長い』

『覚えられないのら～』

キョウもまた、「確かにな」という風に頷きつつ、もっと手早く纏める。

「まぁ、改心した王様は善行に精を出すようになりましたって感じに覚えてくれれば良いよ。……っと、ジュリからもその時伝言を預かってたんだっけ。……【何か色々世話になったみたいだな。お前達の事だから他の国でも色々するんだろう。そうなったらその騒ぎはオレ達の耳にも入ってくる。その時はお礼を言いながら助けに行

くぜ！】だとさ。……礼は自分の口で直接言うって意固地でな～」

にししっとイジワルに笑うが、意固地と評する割りにジュリに対する嫌悪などそういった感情が見えない。おそらく、彼自身そういった人柄に好感を持つ性格なのだろう。

ここで、今まで黙っていたキョータは瞳に『興味』の光を宿して尋ねる。

「……ジュリって……」

「ん？」

「ジュリって、操られてない時ってどんな感じだった？」

最初は自分でも思うほどに小さい声で言ってしまい、キョウに聞き返されて二度目でちゃんと言うキョータ。自分達が会ったのは業魔王に操られていた頃のジュリであり、どこまでが彼の地なのかが分からない。

キョウはキョータの聞きたい事とその意味を理解したらしく、思い出すように上を向いて、それから言った。

「……ん～……基本的には堂々とした奴で、自分と自分の武技、自分の国に誇りを持ってる奴で、あと手合わせもしてみて思ったが、ネーミングセンスが壊滅的ってキャラ。……どこまで自分の知ってるジュリと同じだった？」

にやっと頬杖を突いて尋ね返すキョウに、キョータは自分の知るジュリの人柄を思い出し、笑みを浮かべる。操られていた時も、それから開放された時も大差ない。ほとんど、自分達が出会ったジュリそのものだった。それはどこか、久しぶりに会った友人が、良い所を変わらずにいてくれた様な嬉しさと似ている。

キョウはキョータを安心させるかのような穏やかな笑みを浮かべ

つつ、言う。

「あのジュリも、素直でないながらもお前達に感謝してた。ジュリだけじゃない。キサヤやキリガの子供達、あと、でっかい拳の奴から町を護ったとも聞いてる。あの町の人達も感謝してたよ。……お前達のやってきた事は無駄じゃない。そうでなければ、誰も感謝なんてしないだろう」

因果応報。良い事をすれば良い事が、悪い事をすれば悪い事が起こるという考えだ。

自分が「こうしよう」と意図して行動した『因果』。そして、行動の結果として起こった『因果』。人は思い至らぬ所で因果の糸を引く。後者はその最たる例だ。自分のほんの些細な一言が相手を傷つけてしまうこともあれば、反対に救う事もありえる。

拳の奴が暴れている時、キョータには町の者を助けようという考えと意志があった。だがまさか、その事を覚えていてくれて、感謝してくれていたという事は思わなかった。

助けてくれたら感謝くらいするだろうと思うかもしれないが、その時のキョータは闘う事に必死だったし、何より今まで彼は感謝等の『何か』を見返りに闘っていた訳ではなかったから。

だが、今は事実を知った。

キョータの胸の中で彼等の顔が浮かぶ。そうすると、何故だか心にトクンと温かい液体が落ちたような気持ちになった。

キョウは続ける。

「だから、自信を持っても良い。一回やちょっとの負けじゃ、あいつ等はお前達を悪く言わないさ。むしろ、一緒に闘おうと加勢に来るかもな」

ここでキョウは気軽なラフな口調から、真剣な目と口調で言う。

「……これだけは忘れるな。お前等は独りでもないし、一人でも無い」

そう言う彼の顔は、本当に僅かに寂しさを帯びたが、気付けた者はいないだろう。

そして彼の言葉に続くように、キーンとカナデも自身の心を言葉に乗せてキョータに言う。

「そうですね。……キョータ君？　灯台下暗しの原理で僕達の事忘れてません？」

「そうだよ。……もしキョータ君が独りで抱え込んでたら、私、怒るからね？」

灯台下暗しというのは遠くに在るモノより身近に在るモノの方が見えなくなる事であり、そして独りで抱え込むというのは、裏を返せば周りの者に心を許していないという事でもある。

……もし誰かが傷付き、不幸の道に居たとしたら、その者を慕う者も傷付くし辛い。本人が様々なモノに不安を覚え、苦しむとするなら、それを慕う者は本人を心配する気持ちと、何も知らないが故に何も出来ない自分に対する気持ちで、自分を追い込んでしまう。

だからカナデはキョータに怒ると言ったのだ。ようは、少しは自分達にも頼れと。苦しんでいる内実を知って何かが出来るとは限らないが、せめて話して欲しいと。

現に、今彼女は口をムとして眉を寄せて怒った顔になっている。

だが、その怒りの裏にある自分を心配する気持ちはちゃんと感じ

た。

キーンやカナデが心配してくれて、クルダの人々や子供達の感謝の気持ち。そしてキサヤやジュリは感謝の他に何かあったら加勢に行くと言ってくれる。

キョータは目を閉じて一回深呼吸をした。それらの事が嬉し過ぎて、その感情を落ち着かせるために。そうしなければ、感情で心が一杯で何も話せなさそうだったから。

そして、目を開けた彼の瞳は太陽を思わせる光を取り戻していた。暖かくて優しく、強い太陽を。

「……ありがとう、本当に」

キョータはすぐに考えている事が表に出る。それは素直という事で、彼の良点の一つだろう。そして彼の短い言葉の中には、落ち着けていてもなお強い『嬉しい』という感情が垣間見える。

キーンやカナデ、ボボウにフーイ、シャララは笑みを浮かべて、銘々にキョータに絡む。冗談を言ったりツッコミを入れたり、それに笑ったり。

彼等が自分達の『日常』に戻ったのを見届けたキョウは席を立ちながら言う。

「んじゃ、とりあえずお茶淹れてくるわ。もう冷めちまったからな。出発は飲んだ後」

「「「はーい」」」

子供達と妖精達の返事。カナデはお茶出しを手伝うといったが、キョウはしれっと断った。

そしてキョウは後ろの子供達の声を聞きながら、そしてお茶を淹

れながら、先程自分が言った事を思い出して失笑。

「……。独りでもないし、一人でも無い、か。……これは自戒だな、どちらかというと」

その言葉を言い終わると共にお茶を注ぎ終わり、子供達の方に顔を向けると同時に、その表情も感情も深くに沈めて飄々と明るい席に戻る。

……その、懐かしさと寂しさを混ぜたような表情と感情を。

第４３話　太陽の翳り（後書き）

実はストックはこっち（フェア）の方があるんだよねぇ……（白目どうも最近書いてて楽しくてね。……もうすぐ書きたい所だから、楽しみなのもあるかな。

では、次話もお楽しみに。

次回、キーン君が暴走します♪　魔法フェチとして興奮する意味でね。そちらもお楽しみに！　００（……ただ、長い↓お、ここ切り良くね？↓……あれ？一つ目が短い……　な感じになったので短いです……。

第４４話　クリエイト（前書き）

今回は割りと短めですね。次話のとキリの良い所で分けたらこうなりました（苦笑）。

第４４話　クリエイト

ザッザと草を踏む音。キョウを先頭に、キョータにキーン、カナデ。そして三人の妖精達はそれぞれの主に抱かれて森の中を歩いている。

「～♪」

これから天の仲間である『魔』の救出に行くというのに、心地良さ気に鼻歌を歌っているのはキーンだ。彼はとある理由で超ご機嫌なのだ。

その理由はおおよそ半刻前（　三十分前　）に遡る。

一行はキョウの家の外に出ており、キョウは三人の子供達と三人の妖精達に確認を取る。その手には何故か、文庫本サイズの本が開かれていた。

「よしっ。最後の確認。忘れ物は無いな？」

その問いに子供達と妖精は頷き、それを確認したキョウは左手に持っていた本を閉じた。途端、目の前に在った家が忽然と、唐突に消えてしまったではないか。当然、子供達は大いに驚く。

「なっ！？」

「魔法ですなっ！？」

上からキョータに、そして恐らく一番分かりやすかったであろう

キーンの順。キョータの方は素直な驚きだが、キーンの方は目をキラキラさせてキョウとその左手の本を見ている。……意外にもカナデは驚かない。

キョウはその迫り具合に若干引いたが、すぐに彼が大の魔法好きの魔法フェチだという事を思い出す。

「あ、ああ。まぁな。……クリエイト（CREATE）って魔法でね。中は全部白紙で、書いた物を実体化させる事ができる」

それはもう、休みたい時はふかふかベッド付きの家だろうが、雨の時は傘だろうが、必要に応じて自由自在だ。

だてに魔法フェチという訳ではないという事か。キーンは飲み込み早く、「ふむふむ」と頷く。

「つまり、僕たちを看病する時は家を実体化させたと」

「……それじゃあ、カナデが驚かないのは……」

キョータの視線を受け、カナデは隠していた事を打ち明けるようにはにかむ笑みを浮かべながら頷いた。

「うん。ダークちゃんのチカラでこの平地に移動した時、何も無い所から本を出して『家』とか『ベッド』とか必要な物を書いたらそれが突然現れたの。その時は本当にビックリしちゃった」

カナデは基本的に純粋でおっとり型なので、その時驚く彼女が目に浮かぶようだ。

補足を加えるなら、クリエイトを出す前にキョータにキーン。ボボウにフーイを木陰に寝かせてから本を出した。なお、ダークのチカラで今居る平地に出た時はその辺の木の影から一人ずつ出てきた。コユキと相対した時は、一気に逃げるために出来るだけ大きめな影

が必要だった。しかし、一度逃げてしまえばのんびり一人ずつ出しても大丈夫だろう。
そしてここで、興奮を抑えきれなくなった魔法フェチが大噴火。

「……す、すすす……すっばらしいぃいい！　何も無い所から本を出して、その本に書いた事が実体化！　これぞ魔法！　……あぁ、今、僕の頭は幸せな妄想でいっぱいです……」

……自分で『想像』ではなく『妄想』ってのが分かってるのだなぁ……。まぁ、話を聞いたり目の前に当たり前にあった家が消えたのを直に見れば彼の性格上そうなるのだろうが。
だがここで、キョータは「あれ？」と疑問に思った顔で首を傾げた。

「あれっ？　この世界の魔法ってそういうのだっけ……？　……前に天さんに見せてもらった時は呪符を使ってたような……」
『そう、それよ！　確かにコイツからは魔力を感じる。だけど、呪符の気配が全く無いの。クリエイトで家を出した時、私もそれを疑問に思ったわ』

この世界の魔法とは、空間に在る神様達のチカラを呪符を介して借り、現実に反映させる事にある。だが、キョウの使う魔法は呪符の気配がしないのだ。それはつまり、彼の魔法は自分達の見た魔法とは別系統であるという事。
好奇心満点な子供達と妖精達の視線に、キョウとダークは顔を見合わせて困った笑みを返した。

「まぁ、一口に魔法と言っても色々なパターンがあるって訳だ。……さて、そろそろ行くぞ。これから少し歩く事になるからな」

そうして半ば強引に話は切られた訳だが、それでもキーンはいまだ興奮冷めやまず、鼻歌交じりで歩いているという訳だ。……それから時折御機嫌テンションで魔法に関する質問を受けているキョウは、どこか気疲れしている模様。

だが、次のキーンの質問は少し違っていた。不意に思い出したように、といった感じだ。

「あ、そういえば先程【　ある人に頼まれて捕われた者達を解放している　】と言ってましたが、それは一体……」

「ん、ああ……」

キョウとしては違うジャンルの質問が来て助かったという感があったのだが、それはそれで答えづらい。彼も彼で、まだ全て識っている訳ではないのだ。

そして何より、今日初めて少年達と出逢った時、ある疑問が生まれた。厳密に言えば、その中の一人に覚えがあった。直に逢うのは初めてだ。夢で少年達の姿を視る事はあった。だがしかし、『気』まで近いとは思わなかった。

「？」

「……いや、何でも」（……まさか、な）

どう答えようかと考えつつカナデを見ていたキョウの視線に気付いたのだろう。カナデは首を傾げるが、キョウは首を横に振ってはぐらかした。

普通は気になるだろうが、カナデは意外にもアッサリ引き下がる。だが、それはある事を問うためだった。

「……じゃあ、私からも質問です」
「ああ、ドウゾ」（……お返しか……っ！？）
後半を棒読みで返すキョウ。……何だか、答える答えないは別にしても質問は受けないといけない空気になっている。カナデの人格を疑われないために言っておくと、彼女は計算でそう言った訳ではない。
キョータとキーンも何の質問だろうと注目する中、彼女は言った。
「キョウさんとキサヤさんってどんな感じで出会ったんですか？」
まぁ、女の子ならそういうのも気になるだろう。彼がキサヤの名を言う時、そこに親しさを感じられたから気になるのも無理は無いだろう。
キョウはどこか虚ろに「あぁ……」と呟くと依然楽しそうなキーンをチラリと見て、苦笑いを浮かべて困ったように眉を下げる。
「悪いけど、またの機会にな。……そろそろ魔が捕らえられてる洞窟に着くし」
そしてキョウは視線を前へと向ける。それと同時に、彼の意思とは関係無しでその時の記憶が思い出された。その記憶に連想するワードを受けて不意に思い出される事は良くあるだろう。

第４４話　クリエイト（後書き）

……ああ、ホント。純粋系の子は書くのが難しい……。おっとりとか行け行けガンガンとか……。

「「……」」

……そう睨まんで？　キョータ君にカナデちゃん。……え～次話は過去編です。キョウとキサヤがどんな感じで出逢ったのか。……ようやっと流ロクＳＳとの最初のコラボ部分を回収できるかな。

第４５話　進むか止まるか（前書き）

今回は過去編。流星のロックマンＳｅｃｒｅｔ　Ｓｔｏｒｙの１６話、『一人分の咎』とコラボしています。００（やっと書けた～。コラボ点１つ。

第４５話　進むか止まるか

それはまだ、彼がアシュリアーナに訪れて間もない頃。
彼が訪れた時には既に業魔王は中央のジュリアネスはおろか四王国を支配し、生き返らせた死者達を操って残党狩りをしていた頃だ。その中には、脅威を示して立ち向かおうとする者が表れるのを防ぐための無駄な蹂躙もあった。
もっとも、その頃の彼はそれを知らず、たまたまその場に居合わせたに過ぎない。

「うわぁあああああっ！」

燃え盛る町。振り上げられた剣には斬った者の血がこびり付き、次はお前だと男性に訴えるようだ。男性は目を閉じ、腕を顔の前に交差させる。しかし、鋭い剣相手にそんなのは焼け石に水だろう。
シュッと空を斬る音。それと共に剣は振り下ろされる。……しかし、その剣が男性の血に塗（まみ）れる事は無かった。

「？」

いつまでも自分を襲わない凶刃を不思議に思い、男性は恐る恐る目を開ける。そこには黒いローブを羽織った少年が立っていた。……斬りかかろうとした鎧の騎士は見当たらない。……いや、首を動かして少年が見据えてる先を見ると、数メートル近く離れた位置に鎧の騎士が吹き飛ばされていた。

「パワー（POWER）」
「？」

少年の呟いた言葉に眉を下げる男性。少年は男性の方を向き、言った。

「魔法のチカラでオレの腕力を上げて思いっきり吹き飛ばしたってだけ。大丈夫ですか？」

「あ、ああ……」

『それを言うならキョウ。あなたの手も大丈夫ですか？　殴る時良い音しましたが』

「？　ね、猫……？」

不意に別の声がしてそちらを見たら、そこにいるのは何の変哲も無い黒猫。だてに魔法が存在する世界の住人という訳でも無いらしく、極度に驚くというのは無かったらしい。キョウは苦笑交じりで「ああ、まぁなんとか大丈夫」と言い、男性の手を取って引っ張り上げる。だが、その直後男性の顔は再び恐怖に染まる事となった。

「わ、わわわ！　前々！」

キョウは男性の方を向いていて、男性はキョウの後ろを見ていた。そしてその方向にいつの間にか剣士が距離を詰めていたらしく剣を振り上げていたのだ。死者ゆえか、無言で近づいてくるから気付きにくい。

だが、彼は特に驚く様子無しですんなり対応して見せた。おそらく、足音で近づくのを感じていたのだろう。……辺りでも悲鳴が飛び交っているため音を拾うのは決して容易い事ではないはずだが……。そこは彼の年齢不相応の戦闘経験が成せる技といった所だろう。

「ああ、うん。……ウッド（WOOD）、この辺一帯の剣士の動きを封じろ」

彼の言葉に呼応するように、地面からボゴッと音がしたかと思う

と木が湧き出て剣士を絡め、上へ上へと持っていく。辺りを見れば、他の剣士も同様に木に絡みつかれて行動不能の状態へとなっている。

キョウは「ふぅ」と息を吐くと男性に向き直る。なにぶん彼はまだこの世界はおろか国がどういった状態なのか分からない。それを聞こうとしたのだ。

「さて、短めにするからちょっと聞きたい事が――ッ！？」

だが、あくまで『聞こうとした』だ。彼は突如、正体不明の痛みに襲われる。その痛みの原因は右腕らしく、苦悶の表情で腕を押さえている。

「だ、大丈夫ですか？　……ひぃっ！？」

男性もそれに気付いたらしく、彼を気遣おうとするが、あることに驚き、3歩彼から離れてしまう。

まるで右腕が別の生き物であるかのように、動いている。まるで、腕の形をした液体が泡立つように。まるで、彼の腕の中で別の生き物が蠢いているかのように。

そしてその痛みにより集中力が途切れたせいであろう。最初に木に絡めた――キョウと男性を襲おうとした――剣士が木から地上にずり落ち、立ち上がり、再び二人へ剣を振り上げる。

「くっ……そっ！　ウォーティ（WATERY）！　彼の者を突き飛ばし、我に降りかかる凶刃を掃（はら）え！」

その言葉と共に二つの現象が起こった。一つは彼が言ったとおり水の柱が横にとび、剣士を突き飛ばした事。そしてもう一つは、彼にとって良いものではなかった。

「！　ぐっ……」

腕だけではなく頭にも痛みが走り、雑音だらけの声が聞こえてくる。一つを聞き取る事など到底不可能とも言える、たくさんの怨嗟の声。

彼の腕には彼を許すまいとする恨みが取り憑いている。まだ自分は黒い繭の中に居ると思わせるため、一割は元の世界のミラー（MIRROR）に任せている。しかし、それはつまり残りの九割は彼の右腕となり、彼に罪を背負わせている事を意味する。自分が背負うべき咎は、自分で大部分を背負わずしてどうするか。

キョウがこの世界に来てから、厳密に言えばこの腕を得てからこういった事は無かった。彼は自分の記憶を辿り、やがて一つの可能性に行き着く。

（……まさ、か……）

彼は、先程より活発に蠢く腕を見る。

魔法を使うたびに痛みが激しくなっている。……いや、単なる魔法の発動だけがこの痛みの原因とは考えづらい。この世界に来た時、周辺の様子を見るためにフライ（FLY）で空から辺りを見渡した事があったが、その時は特に変化はなかった。ならばありえるのは、短時間で複数の魔法を使った事か、または防衛のためとはいえ敵意を持って魔法を使った事の二つだろう。

『！　キョウ！』

「！」

彼の推測がここまで及んだ時、ダークが必死な口調で声を発す。

意識を外に向けてみると、ゴウッと右腕が弾けとんだ。ヒトの腕の形は崩壊し、黒い渦となってありとあらゆる物を巻き込み、突き飛

ばしていく。ヒトも、物も、なにもかも。そしてその黒い竜巻に飲まれて地面に叩きつけられた人は寸分たりとも動かない。

「止めろ止めろ！　……もう……止めてくれぇえええええ！！」

彼の懇願にも似た叫びは竜巻の轟音にかき消されて聞こえない。ダークは何とかキョウの足にしがみ付いているが、それがやっとの状態だ。そしてキョウ自身も、痛みに悲鳴を上げている。

だが、どんな災厄もいずれは終わる。キョウの腕の災厄もまた、終わりを迎える時が来る。

竜巻の轟音や悲鳴に隠れるように、声が聞こえる。

「も・……止・てよ……。ツバサァァアアアアアッ！！！」

「ッ！！？」

それは元の世界にいるはずのヒトの声。本来この場にいるなどありえないが、彼はそこまでの思考が行く事は無く、とっさに彼女を巻き込むまいと全力で黒い竜巻を元の腕の状態に押さえ込む。具体的には、自身の魔力で黒いモノを覆い、強引に腕の形に押さえ込むというものだ。

完全に腕の形に戻した時、彼は彼女がいた方を向く。瓦礫や屍が転がる荒涼とした地で、赤い瞳が自分を見ている。

ああ、傷付けずに済んだ。

その事が分かって安堵した時、彼は意識を失った。

「んっ……」

目が覚めると、主に木で作られた天井が目に映る。見知らぬ天井だが、この世界の住民の家という事は分かる。枕の上で首を横に動かすとダークもおり、寝息を立てている。

「おっ。目が覚めたのか」

「？」

声のした方を向いて、その人物を一瞬ながらも自分の知る人物だと思ってしまったのは目のせいだろう。自分の知る人物と同じ赤い瞳。その内に秘める意志の強さも似てるが、髪の色も声色も違う。

彼女はキョウに近づくと手を差し出して自己紹介をしながら握手を求めた。

「僕はキサヤ。倒れた君をここまで運んだ者さ」

「……オレはキョウ。ありがとう。……他の人は……？」

もし助かってるヒトがいるならば謝りたいと思ったが、キサヤは首を横に振った。

「……いや。あの中で生きてたのはお前と、お前の横に寝てる猫だけだ。……この家も、離れていたから無事だっただけで家主は多分巻き込まれて死んだだろうな」

「……オレのせいだな……」

寂しく、悲しげに、苦しげに失笑するキョウ。あの腕の暴走がどういった仕組みで起こるか分かっていなかったとはいえ、それはキョウ自身の手で殺めたも同然だった。

キサヤは、キョウがヒトを殺めたのが初めてという事を察した。そしてその上で、特に思い遣る事無く強く言う。

「……で、これからどうするんだい？」
「？」
「こうやって意気消沈で立ち止まり続けるのか、それとも起こった事は仕方が無いという事で割り切って進むのか」
「……」
俯き、黙るキョウにキサヤは続ける。
「僕としては、アレだけの被害を出した張本人だからあのまま放って置いても良かったんだけど、あの時アンタは僕の方を見て自分で押さえ込んだ。……って事は、アレはアンタの意思じゃないって事だ。だから、助けても良いと思えた」
キサヤはここで目にチカラを込め、真っ直ぐにキョウを見て彼がキサヤから視線を外す事を許さない。
「……もう一度聞く。アンタはどうしたい」
自分のショックに甘え、意気消沈で過ごすのか。それとも、現状と過去を受け入れてその上でどうしたら生き抜けるか、自分や他を護るにはどうすれば良いかを考える。そのどちらを選ぶかの『選択』だ。
キョウはしばし自分の中で考え、やがて応える。
「……進む。……逢いたい奴等がいるからな。まだ立ち止まる訳にはいかない」
現状を分析してどうすれば生き抜けるかを考え、そのためのベストを尽くす。

それはもはや野生界の考えだ。平和な環境や境遇ではそこまでそんな事を考えなくても良いだろうが、今のアシュリアーナはそのレベルに達しているといえよう。

キョウの返事を聞いたキサヤは満足したようにフッと和らぐような笑みを浮かべるとキョウの肩をパンッと勢い良く叩いた。

「よし！　それで良い。悩むなんて無駄だからな。どうすれば現状を打破できるか考えもしないくせに悩んでる奴は嫌いなんだ」

嫌いと言いつつキョウに暗に【　立て　】と言ったのは、そういうのを見るのが嫌いなだけなようだ。だから、不器用ながらも励ましたと。

その事にキョウが苦笑いを浮かべている時、キサヤが不意に思い出したようにキョウの顔を見る。

「あ、逢いたい奴等で思い出したけど、それってソラって奴？」

「！！？　な……なぜそれを……」

普段の彼なら適当にはぐらかす事も出来ただろうが、あまりに予想外かつ唐突な問いだったため思いっきり動揺してしまった。おまけに若干赤面してたらしく、キサヤはうんうんと訳知り顔で頷く。

「あ～なるほどなるほど。っと、そう睨むなって」

キョウが睨んでるのを見て両手を前に出してどうどうと宥めるが、目が笑っている。その後の彼女の弁解によれば、寝言でソラの名前を呼んでいたらしい。

その事実を聞いたキョウは先程より目に見えて赤くなって弁解をする。

「ま、まぁ奴等って言ったとおり、他にもいる訳でだなぁ……」
「いや～今のご時世で彼女彼氏の関係は止めて置いた方が良いぜ？何かと物騒だし」
「だから！　そういうのじゃないって！」

一言一言区切って強く言うキョウの高い声に反応したように、ダークがむくりと起きて眠気眼（ねむけまなこ）で辺りをキョロキョロと眺めた。

『……何事ですか』
「あ、猫が喋った」
「話を逸らすなぁぁああ！」

それから、キョウとダークはキサヤの誘いでクルダにあるキリガという町へ行く事となった。キョウとしてもこの世界の情報が欲しかったし、キサヤとしても子供達の遊び相手にちょうど良いと思ったためだろう。

なお、後に聞いたのだが、確かにキサヤが居たのはツバサが最後に赤い瞳を見た方角だったが、声は出していないと言う。それに何より、『ツバサ』という名を知っているのはこの世界にはいないはずだ。

とある理由で彼が一つ所に一定期間以上留まれないと知ったのはその後。それ以来、彼はクルダを始めリキトアやキシュラナ、フェルシアを巡ってアシュリアーナの情報を集めていった。彼の右腕に巻かれている黒い包帯はその旅の過程で彼が自作した物であり、ある程度痛みを抑えられるように魔力を込めた布に呪印を描いた物だ。

そして、時間は再び現代に戻る。

『……キョウ。そろそろ洞窟が見えてきます』
「！　……ああ」

ダークの声で意識が過去から現代に戻ってくる。
キョウは立ち止まり、後ろを付いて来る少年達の方を振り向いて言った。

「さぁ、行くぞ。……天魔伏滅の一角を助けに」

キョウだけではなく、登場人物たちは進んでいく。己が業を背負いながら。時にしゃがみこみ、立ち止まりたくなる時もあるだろう。それはそれで良い。振り返る事も大事な事だ。
だが、無慈悲な時は流れ続け、目を瞑り、立ち止まるヒトを押し流してしまう。
生きたければ目を開けろ。どうすれば生き抜けるかを考えろ。危機的状態なら、なおさら生き抜くための思考を止めるな。……知識も記憶もフルに活用して、考える事と行動する事を放棄するな。

第４５話　進むか止まるか（後書き）

後半の『生きたければ目を開けろ。どうすれば生き抜けるかを考えろ。危機的状態なら、なおさら生き抜くための思考を止めるな。……知識も記憶もフルに活用して、考える事と行動する事を放棄するな。』ってのは、３１１の震災の時、俺が自分に言い聞かせていた事です。

当時東京にいたという事で、大した怪我にも状況にもなりませんでしたが、それで、出来る事を探して実行しない理由にはなりませんからね。

携帯がしばらく真っ当に使用できない事は予想できたので、地震時やその後の対応や情報を広げる事はしました。

……ま、実際の酷い所にいても、まだ死ねないので生き抜くにはどうしたら良いかって、そんな考えは変わらないでしょうけどね。遠慮なく思考をフル回転させていただきます。

さて、次話は天魔伏滅の『魔』の救出その１です。どのくらいの長さになるかは不明。……自分のペースから考えて、最低でも二話は確実に行くでしょうね……（遠い目）。

第４６話　助けを拒むという選択（前書き）

やっぱ、一週間毎だから前の話を忘れてしまって読み返すって事がありそうだなぁ。……いや、それはそれで感心持ってくれてるって事で嬉しいんだけど、書いてる側としては申し訳ないなと。

もっと頑張れれば良いんだけど、生憎どう頑張っても一週間に２～３話が限界だからストックが溜まらず、中々上げるペースを上げられないという。

で、今回は天魔伏滅の魔救出の話です。三話構成なので、一気に読みたいって人は再来週に三話纏めて見るって手もありますかね。

第４６話　助けを拒むという選択

「さぁ、行くぞ。……天魔伏滅の一角を助けに」

キョウは子供達の方を振り返り、子供達もまたその言葉に頷く。

なお、先頭から順にツバサ、キーン、カナデ、キョータ。三人の妖精はそれぞれの持ち主のそばを浮いて進んでいる。

洞窟内は例によって暗く、じめじめしている。……自然豊かな土地柄のためだろうか。天が捕らえられていた洞窟（牢獄）より空気中の湿度が高い。現に、暗い足元に目を凝らせば所々苔が生えている。

（……これは、夏はきつそうですねー）

などと、キーンは頭の片隅で関係の無い事を思って苦笑いした。湿度＋温度はジメッとした暑さで乾燥した暑さよりも性質が悪い。そうキーンが苦笑いを浮かべた時、彼の肩に何かがポテッと落ちる。彼の相棒のフーイである。

「おや、どうしましたか？　フーイ。疲れました？」

彼はそう問いつつ、違うと思う。肩に乗るフーイを振り返るように見た時、僅かに後ろを歩くキョータとカナデ、その相棒の妖精達もまた、ポテッと疲れたように持ち主の肩に乗っている。フーイ一人ならともかく、三妖精共々となると偶然では収まらない。

そしてそれはやはり偶然では無いらしく、フーイは眩暈（めまい）に悩まされるように頭を抑えながら言った。

『……いえ。……そうではないのですが、妙な感覚です。……微々

ながら、徐々にチカラが奪われていくような……』
『具体的には、魔力が何かに奪われていく感覚ね……』
『チカラが出ないのらー』

自分たちも同感だと続くシャララとボボウ。そしてその会話は無論先頭を歩くキョウにも聞こえている訳で、彼もまたその異変に気付いたらしい。少し辺りを探るように見渡し、そして空気そのものを探るように感覚を尖らせる。五感も第六感も総動員だ。
そして、納得したように頷くと後ろの子供達を振り返る。

「こりゃ、急いだ方が良いみたいだな。……どうも、この洞窟内に厄介なのがいるみたいだ」

今の訳分からない状況と相まって、彼の言葉には説得力がある。
……だが、一つ疑問がある。

「……そりゃ良いけど、何でキョウさんは平気そうなの？」

彼も魔術師だったはずだ。なら、彼もまた魔力を奪われているだろう。カナデの問いに、彼はサラッと返す。

「魔力のケタが違う」
「「「……」」」

そこまでアッサリ答えられてさらには平然としていると、悔しいという感情すら湧かずに「ああそうか」と思ってしまうから不思議だ。
が、この勝気な人魚はそうもいかなかったらしく……。

『何かムカつくわぁ！　アンタが高い魔力を持ってるってのは分か

るけどちょっとは言葉を選びなさいごらぁ！』
「シャ、シャララちゃん。お、落ち着いて……」

カナデは仲を取り持ってシャララを落ち着かせようとしたのだが、キョウはしれっとその努力を無に帰す。

「んーキサヤの話で合体した時は爆発的に魔力が上がるってのは分かるけど、直接見た訳じゃないからなー」
『ハッ！　だったらこの後見せてあげるわよおんどりゃあ！』
「……シャララちゃん。……落ち着いて……」

流石のカナデも止めるのを諦めて一応といった感じで言うに留まる。そんな感じで、シャララがキョウのからかい相手（またの名を遊び相手）になった時、ふと前の暗がりから声が投げかけられた。

「……騒がしいわね。一体何なの？」

その声で全員が前方を見ると、一人の女性が岩に寄り掛かって不審がるようにキョータ達を見ていた。歳は十六、七くらい。水色の瞳に橙の髪。女性というのもあるだろう。質素ながらも上下とも服がある。ただやはり、捕虜という立場上腕や足首は何かで繋がっているらしい。

「……あれが、魔、さん……？」
「いや、だからあんたら誰？」

誰宛でもなくポツリと尋ねるキョータに、怪訝そうに眉を下げて疑問を露にする魔。

キョータ達は自分達が助けに来た事を伝える。それに対する魔の反応は、捕らえられていた天と同じだった。疲れたようなため息を

つき、その後笑みを作って言う。

「心配ありがと。けど、遠慮しておくわ。……助けようとする者が現れたり、私自身が逃げ出そうとすると怪物が出てくるから」

その笑みは、自分は大丈夫だからと子供達に訴えて安心させるための措置。そして彼女の言う怪物とは、天の時のドラゴンのような怪物の事だろう。

だが、そこで引き下がる子供達ではない。

「そんな事いうなよ！　こんな所に捕まえられてるのを見て、放って置ける訳無いだろ！」

「僕達はこう見えて天さんも助けています。少しは信用してくださいな」

魔は天を助けたという事実にピクッと反応して改めて子供達、そして妖精達を見て、改めて溜め息をついた。

「へえ。そりゃ大したもんね。……けど、相性が悪いわ。……私を捕らえている魔物は――」

彼女が言いかけた刹那、小さくズルリという音が響く。そして魔は、その小さな音を拾うなり言いかけた言葉を中断してキョータ達に叫ぶ。

「――今すぐ下がりなさい！」

「えっ？」

戸惑うキョータの声。そしてキーンやカナデも同じように戸惑いをその顔に浮かべる。だが、キーンは何かに気付いたのか上を見る。

そして声を上げようとしたのと、キョウが3人を突き飛ばしたのはほぼ同時だった。

「避けろ！」
「へっ！？」
「きゃ！」
「上――わぁ！？」

上から順にキョータ、カナデ、そして上に注意を促そうとしたキーンの悲鳴だ。多少荒っぽかったが、何とか子供達を敵の射程内から逃す事ができた。そしてキョウもまた、急いでその場を飛び去る。

ボドッ　……ジュゥウウウ……

直後、上から若干緑が入った透明な液体が降って来て地面に落下。大地を溶かす。人体に落ちた場合、間違いなく大事（だいじ）になる。

その事はキョータ達も理解したらしい。子供達は背筋に冷たい物を感じ、キョウは先程までの軽い表情から若干の緊張が漂い、引き締まった表情となる。そして魔は、ギリッと歯噛みして彼等から目を逸らした。そしてそれと同時に、頭上から先程の攻撃をしてきた物が降りてくる。

「……こいつは洞窟に入った奴の魔力を吸い、それで自分の溶解液の酸を強めている。……どうやらあなた達も少ないとはいえ魔力を持ってるみたいだけど、コイツは魔力を吸えば吸うほど強くなる――」

地に落ちたそれはウツボカズラに似ていた。そして知ってる方も多いと思うが、ウツボカズラとは……。

「――食虫植物なのよ……」

だが、目の前にいるそれはもう『食虫』どころか『食人』だ。とにかく大きい。特有の壺のような形の部分も、大の大人が簡単に入りそうだ。

キョータはその姿に驚き、カナデはその姿の醜悪さに気持ち悪くなったのか思わず口に手をやり、キーンは信じられないとばかりに目を見開く。

「一見ウツボカズラに似てますが、まさかツルを自在に動かせるとは……」

そう。現実世界のウツボカズラはあくまで植物であり、寄って来た相手を捕らえて溶かし、食らうだけでツルを動かすなどの積極的な捕食行動は取れない。だが、目の前のそれはツルを自在に動かせるようだ。天井から降りてくる際、その巨体をゆっくり下ろすという力の調整が出来るくらいに。

そしてキョウは地面を見て、それだけではない事を語る。

「……いや、それだけじゃないようだ。……やっぱり、この洞窟中に自分の根を張り巡らせてるみたいだな」

「それって、つまり……」

「先程魔さんが言ったように、この洞窟内にいる限り常時ボボウさん達の魔力を吸われるという事ですね」

カナデがどう要約したものかと考えてる時にキーンが助け舟を出し、キョウが頷きで返す。

「そう。……おそらく、地面に触れていようとボボウ達みたいに空に浮いていようと、空気中に漂い出る魔力を吸われるだろう」

そして魔もまた、彼等の言葉にうんざりといった様子で頷く。

「そっ。……上から溶解液を落として対象と溶かして、地中に張り巡らされた根でその養分を吸う。……残った鎧や骨は……」

彼女の視線が別の場所に移る。子供達もその方を見ると、暗がりにくすんだ白や銀が見える。溶け残ったモノの置き場所なのだろう。

「……あなた達の他にも、かつての仲間がこの場所を探し出して助けようとしてくれた。……けど……皆溶けてしまったわ。……私の、目の前で……」

かつての仲間。共に笑いあい、共に飯を食べたり、共に闘った仲間。その者達が、自分の目の前で人の形を失わせていく。……苦しみの断末魔とその情景を彼女の目と耳に焼き付けながら。

それに、と、彼女は続ける。

「……それに、私がその人達を殺したようなもんなのよ……。……そんな私が……私だけが……助かって良い訳無いじゃない……！」

一瞬子供達はその言葉の意味を量りかねていたが、すぐに気付く。彼女の手足が今、何に捕らえられているのかを。そしてその食人植物が何から魔力を吸収するのかも。

「……その、手足のってまさか……」

キョータの呟きに魔は寄り掛かっていた壁から離れ、手と足が見えるようにする。

「……そう。……コイツの根。……私の手足に巻き付いた根が私の魔力を吸収して、その魔力で仲間達を溶かしていたのよ……」

それは、一人の少女が背負うには重い。……自分の魔力が吸収され、それが自分を助けようとしてくれた人を根こそぎ奪ってしまった。命を、未来を。その中で彼女は思ったのかもしれない。自分が助けを拒めば、入っても引き返せば目の前で無残な姿になるのは見なくて済む。だから彼女は、『けど』を多く使ったのかもしれない。

……魔を捕らえるそのおぞましい植物は訪れる者から未来を奪い、そして反対に彼女には、「生きてるだけで上々。脱出などの高望みはしない」といった諦めを与えたのかもしれない。

第４６話　助けを拒むという選択（後書き）

え～三話構成になった理由ですが、書いてて段々長くなっていくという、もはや癖のようなもの（比喩やら状況説明や会話でついつい思ったより長くなる）なので、その辺はご容赦を。……この話書いた時は二話で済むと思ってたんだけどね。

第４７話　規格外の魔力（前書き）

今週も風邪やら何やらありましたが、何とか出来ました。

第47話　規格外の魔力

食人植物の溶解液は魔の魔力を元に酸を強めている。それは、間接的ながらも魔の手で殺めたようなもの。

その事はキョウはもちろん子供達も理解したらしく、彼等は一様に押し黙る。件（くだん）の植物はツルを動かしてはいるが、キョータ達の方を向いて動かない。……魔力を探って、一番美味しそうなのは誰か品定めでもしているのだろうか。

そんな中、ポツリとカナデは魔に問う。

「……それでも、本当に外に出たいという気持ちは起きないんですか？」

「……言ったでしょ。……私はもう、私のせいで誰かが傷付くのは見たくないの。……あなた達のような子供が死ぬのは、尚更見たくない」

言外に言っている。早く帰れと。

子供はこれからの未来を背負う大事な存在。金銭はもとより、何モノにも代えられない宝。それが、天魔伏滅の共通の認識なのかもしれない。

「……止めないよ」

「？」

声が小さくて聞こえなかったのか、魔はキョータの言葉に首を傾げる。彼は右手を強く握り、強い視線を送った。

「オレは引き下がらない。ううん、引き下がりたくない！　ここで

引き下がったら、多分オレはずっと後悔する！　……もう、負けたくないんだ。自分自身には特に」

初めての敗北は、彼に一時翳りを与えた。もしまた負けて、自分の大事な者を失う事になったらという恐怖。彼にとって、親友や仲間という『繋がり』は特に大事だ。その思いの強さゆえに、恐怖も大きかった。それに負けて、普段なら踏み出せていた一歩。『決心の一歩』が踏み出せなくなっていたのである。

だが、思いや行動の結果は因果の流れに従って自分に返る事を知った。誰かを思い、行動すればその誰かが自分を支えてくれる。自分の意思で、自分がやりたくて行動している事が相手にどういった思いを与え、どう思ってくれるのかを知った。

だから、再び彼は立ち上がろうと思った。自分の選んだ事で、後に自分が後悔しないように。そして自分の行動で誰かが自分を支えてくれた時、その誰かに災厄が訪れないように。……全てを、護れるように。

そう言うキョータの肩に、ポンッと優しく別の手が置かれる。

「それに、護りたいって気持ちには大人も子供も関係ない。……ですよね？　キョータ君？」

それは天を助ける時、天に対してキョータが言った言葉。

キーンがキョータの肩に手を置いてそれを言ったのは、自分もキョータの考えに賛同し、共に闘うというのを示すためだ。そしてカナデもコクリとキョータに頷き、キョウもまた、溜め息をついて肩を竦めた。その溜め息の中に嬉しさが垣間見えるのは気のせいではないだろう。

「やれやれ。聞いたとおり、視たとおりのお人好しな子供達だな、

ホント。そんな訳で――」

キョウはあくまで軽い笑顔で魔を指差す。

「――諦めて大人しく助けられろ。真っ直ぐだからな、こいつら」

「ってかそれだと真っ直ぐ馬鹿って聞こえるんだけど!?」

「違うのか？」

キョータのプンスカとした噛み付きをスンナリいなすキョウ。その時、キーンは（多分）親友の援護のために動いた。

「キョウさんも何だかんだで協力してくれてるので同じでは？」

「こら魔法フェチ。一言多い」

ビシッとキーンを指差すキョウ。

そのやり取りを見て、不覚にも魔は微笑み、今までの自分ではあり得なかった望みを抱いてしまった。自分も、この笑いの中に入ってみたいと。

「……馬鹿やってないで、やれるもんならやってみなさい。……そろそろ……抑えるのも……限、界……だから……」

言葉が最後まで続くか続かないか。その時だった。魔の体はガクリと体勢を崩し、地に座り込む。子供達はそれに驚いて彼女に近づこうとするが、案の定植物が邪魔をする。

ツルを鞭の様に振るい、進路を妨げる植物にキョータは舌打ちをすると肩に乗るボボウの方を見る。

「くっ！　ボボウ！　行けるか!?」

『行けるのら！』《……何でか分からないけど、歩いてる時より楽

なのら……》

そう。洞窟内は植物に魔力を吸われているためかダルかったが、その事を口にした後から少し楽になった。この部屋に入ってからはなおさらに。……吸われる量が減ったからだと思ったが、その理由がサッパリ検討もつかない。

ボボウが言い終わるか否か。食人植物から放たれる溶解液。地面に当たるまでも無く、空中を飛んでる時でも強い酸の臭いが鼻を突く。

バシュゥ……

だが、酸は大地はもちろんキョータ達にも当たらなかった。一心合体しているためキョータではなくザラマンデルに、というような言い回しでも無い。

「……ＳＨＩＥＬＤ（シールド）」

キョウが左手を前に出し、見えない防壁によって防いだのだ。そして、溶解液は地に落ち不快な気体を辺りを満たす。

キョウの後方でキーンとフーイの一心合体したズルフェは一時、『魔法』に目と意識を奪われていたがすぐに復帰。状況の分析に入る。

「ふぅむ。……この溶解液は厄介ですね。こちらの対処は炎と雷と氷。蒸発させる危険のある私とキョータ君ではイタズラにこの不快な空気を洞窟内に充満させてしまうでしょう」

おまけにここは洞窟の中。風などで外に出るにはそれなりの時間が掛かるだろう。つまり……。

「出来るだけ早くアイツを何とかする必要があります」
「おまけを言えば、この臭いは長く吸ってると体に異常が起きそうな感じだなー」

ズルフェの言葉に補足を加えるキョウは、袖で口元を塞いでいる。強い魔力を持っているとはいえ、彼は生身の人間なのだ。

「けど、それだと何で今まで魔さんは平気だったのかしら？」
「そっ、そんな事より……早くどうこうして……」

ウンディーヌの疑問はもっともだが、魔の様子がおかしかったため思考から行動にスタンスをシフトした。三人の勇者はキョウより先頭に出て、そしてズルフェはウンディーヌに言う。

「良いですか、カナデさん。さっきも言ったとおり、僕とキョータ君の攻撃だと奴の気体を増やしてしまう。そうなるとキョウさんや魔さんが危ない。そこで――」
「私が奴を凍らせれば良い訳ね。分かった」

ズルフェの言葉に真剣な目でしっかりと頷いたウンディーヌ。その後ろのキョウはくっと含むような笑いをすると自分のやる事を申し出た。

「やれやれ。氷の魔法ならオレも扱えるんだが、まぁ譲ってやるよ。……自分に負けないため、だもんな」
「ッ。……すみません」

ズルフェは彼が氷も扱えるという事に若干の驚きを覚えたが、すぐに彼の真意に気付き、小さな笑みを返すく。自分達の手で解決し

て、明確に立ち直るためのキッカケにしろと言う。だからそのすみませんは、詫びでもあり、お礼でもある。
キョウは「さてとっ」と言うと地に左手を置く。

「……今から、オレがあいつの動きを鈍くしてやる。常時腹一杯の状態にさせて動けなくしてやるよ」
『！　わざわざ自分の魔力を吸わせるつもりですか！？』

信じられないという目でダークはキョウを見て、ザラマンデル達もギョッとした顔をする。魔力を吸われてさらには相手も強くなる。そんな選択をする奴がどこにいるという話だ。
キョウは不敵な笑みを浮かべながら返す。

「アイツは魔力を普段以上に吸ってる状態だと大人しくなるみたいだ。おかしく思わなかったのか？　アイツの最初の溶解液から結構魔と話してたのに、アイツはオレ達に攻撃してこなかった。それは、その間魔がいつもより多めにアイツに魔力を供給して大人しくさせてたって事だ」

この短時間で良く見ていたものだ。小さな勇者達とダークは驚きと半信半疑で魔の方を見ると、あからさまに目を逸らしている。そして、唇がポツポツと動いた。

「（バラすなっつの。……子供達に心配かけちゃうじゃんか……！）」

だが、目を逸らした事で図星と判断されたらしい。見事にバレてしまった。

「……凄いなぁ……」

それは、ザラマンデルの心からの正直な感想。彼女も天同様、自分に出来る最善で誰かを護るために奔走できる人間なのだ。
お前もそうだろと言いたいが、キョータにとってそういった大人は素直に尊敬できるのだろう。灯台下暗し。自分の事だからこそ見えない事もある。
そしてザラマンデルの「自分も負けてられない」という思いが伝播したのか、ウンディーヌは意を決した顔で進言する。

「あの……私がユニオンアタックをする！」
「「へっ！？」」
「「『？』」」

驚きの声はザラマンデルとズルフェ。純粋に疑問の声はキョウとダーク。そして魔だ。
ザラマンデルとズルフェが驚いた理由は単純明快。

「い、いや！　ホントに良いのか！？」
「そうですよ！　危ないです！　もし失敗したら全ての魔力が自分に跳ね返ってしまうんですよ！？」

どうしようもなく危険だという事だ。だが、カナデはその澄んだ瞳に若干の不安と緊張を覚えながら考えを変えない。

「良いの。この場合、私の能力が一番有効なんでしょ？　なら、私だって頑張りたい！」
「……カナデ……」
「……分かりました」

二人とも渋々という感じだが何とか了承。

そしてキョウもまた、彼等の気持ちに乗ろうとしていた。別に今のままでも十分動きを鈍らせられるだろう。しかし、彼等が本気で行こうというのに、自分が手を抜いていると後味が悪い。

「……ダーク」

『……分かりました』

しかし、キョウの声はワクワクした声だ。そしてダークは知っている。彼のワクワクした声の時は何言っても無駄だと。こちらも不承不承といった感じで納得。

キョウは懐から小さなカプセルを取り出し、それを開いた。ポンッという音と共に、元のカプセルとは比較にならないくらいの大きなローブが姿を現す。ザラマンデル達が驚いて意識と声をこちらに向ける前に、キョウは大まかな説明をする。

「魔力のあるモノを小さく保存するカプセル。んで、このローブは――」

そう言いながら、彼はローブに腕を通さず、肩にそっと乗せる形でローブを羽織った。

「オレの魔力と共に織り込んで作ったから、言うなれば魔力のブースターだな」

途端、空気が変わったと錯覚させてしまう。彼がローブを羽織った途端、植物が吸収しきれない魔力が彼から溢れ出る。そして不敵な笑みのまま、現在進行形で多量の魔力を送られている植物へ言い放つ。

「……さぁ、お望みの魔力だ。たっぷり喰らいな」

第４７話　規格外の魔力（後書き）

溶解液の気化した臭いですが、手早く言えば『長く吸うと危険デスよ♪』って感じの気体だと思ってください。←ぇ

……魔、結構板挟みかもな～……。……さて、原作の牙族の設定は使うか否か……。

第４８話　改めて、『一歩』（前書き）

お待たせしました。

ふっふっふ。今回のは我ながら良く書けた方だと思ったり。魔、救出編最終話です。

第４８話　改めて、『一歩』

キョウの隠していた本領発揮の魔力はザラマンデル達を驚かせたが、今は驚いてる場合ではない。吸うのに夢中な内に、強くなる前に、仕留めなければいけない。

「カナデ！」
「カナデさん！」

ザラマンデルとズルフェの声に、ウンディーヌもコクリと頷く。

「大丈夫！　いつでも良いよ！」
「よし！　行くぞ！」

そのキョータの声で三人は動き出した。ユニオンアタックは三人の魔力を収束させ、最後の、二人の魔力を受け取った者が攻撃するという連係技。ズルフェの渦流放電（トルネードデスチャージ）。そしてザラマンデルの究極紅炎（アルティメットプロミネンス）と順調に技は繋がっていく時、ウンディーヌの中でシャララが頭の中で語りかけてくる。

《……不安？》

それはいつもの勝気な声とは違い、心配が見え隠れする優しい姉のような声だ。ウンディーヌはかすかに微笑むと心の中で答えた。

（……少し）
《無理もないわね》

シャララはそう、苦笑しながら応じてさらに続ける。

《けど、大丈夫よ。貴女ならきっと出来る。ま、私がいるから出来るって言っても良いんだけど、貴女だって私の認めた女の子なんだから、きっと出来るわよ。あのいけ好かない魔術師に、女の子の底力見せてあげましょう！》

（……うん）

その勝気な声を聞くと、元気になる。おっとりしてる自分に欠けている勝気さ。けど、それを自分自身で補完する必要性を感じられなく思うのは、今の、二人で一人という関係が好きだからだろうか。

……その言葉の中に、余裕ぶっているキョウを驚かせようという意図が見えてはいるが……。

カナデは小さく返した返事を大きく、しっかりと返した。

（うん！　私達の手で、この場面を乗り切ろう！）

そう。この一戦を、再び歩き出す一歩にするのだ。再び、三人で。

……いや。自分達の事を思ってくれて、支えてくれる人達と共に。

その人達と、自分達のために。

その瞬間、眩い光が辺りを満たし、強大な魔力がウンディーヌの中になだれ込む。

光が収まり、その者はゆっくりと目を開けた。……二人の魔力を吸収し、ユニオンアタック専用の魔導形態になったウンディーヌが。

ウンディーヌの状態では人魚のような容姿だったが、今の魔導形態は二本足だ。丸い宝玉の留め具から流される髪。髪型はツインテール。額の装飾には、海の青を思わせる澄んだ宝石があしらわれている。古代の女性神官が着る様なサラリと流れるような長いスカー

ト。腕には、手の甲から肘にかけて重くなって動きを阻害しない程度の装甲があり、手の甲の辺りにも額と同じ、青い宝玉がある。
だが、ウンディーヌ自身は外見の変化よりも他の事に驚いていた。

「……凄い……」

今までのウンディーヌの状態より格段に魔力が上がっているのを感じる。明確に違いが分かるくらいに。魔力のケタが違いすぎて、比較できないくらいに。

《くぉら！》
「わっ！？」

自分の変化に驚いていたらシャララから渇が来た。つい驚いて声を上げてしまう。

《何ちんたらしてんの！　やるならとっととやるわよ！　一応時間制限あるんだから！》
「わ、分かった……」

そういえばクルダでのジュリとの闘いの時も、ザラマンデルのユニオンアタックの魔導形態が解けていた。早めにカタをつけなければなるまい。
ウンディーヌはキッと植物の方を睨む。闘い方は、不思議な事に頭の中にある。まるで、この地の精霊がシャララを通じて教えてくれるように。

ビシュッと植物のツルがウンディーヌに伸びる。捕らえて溶解液の溜まる壺に落として溶かし、養分として吸収するためだろう。だが、そのツルが届く事は無かった。柔軟なツルは彫刻のように宙に

固定されてしまったのだ。ウンディーヌは何もしていない。ただ、見ていただけ。

氷結眼（フリーズアイ）

見て、意識を向けたモノを任意で凍らせる技だ。この場合、植物の体内、その体液を凍らせた。見て、意識を向けただけだと味方を凍らせてしまう事もありえるが、任意、つまりはウンディーヌが最終的にその対象を凍らせるか決められるので、うっかり味方を凍らせてしまう事も無い。

だが、ここで予想外の出来事が起きた。目の前の食人植物は魔力を吸うほどに強くなる生物。ならば、一定量を超える魔力を得た場合、生物として一段上の状態に変化する事もありえる。俗に言う、進化である。

どろっ……

「！　げっ！」

「……」

ウンディーヌの後ろにいるザラマンデルとズルフェ。その内、ザラマンデルから零れたのは不快な物を見た声で、後者はウンディーヌだ。彼女もまた、目の前の物に眉を顰めている。

植物はさらに大きく成長し、ツルからも液が出始めたのだ。……良く見ると溶解液が出ているツルと出てないツルがある。おそらく、あちらも自分の意思で個々のツルから溶解液を出す術を身につけたのだろう。生物的な本能、直感による学習能力といった所か。

ウンディーヌも流石にそのおぞましさにたじろいだが、後方で魔力を放出するキョウは笑みを浮かべる。それも、勝利を確信したような笑みだ。

「はっ。ツルからも溶解液、ねぇ。なら、奴の体内はさぞ水分で一杯だろうな」

岩をも溶かす溶解液。なら、それであの植物自体が溶けないのは何故か。答えは簡単だ。自分の体で溶解液が触れる部分に、予め反対の液を出しておけば良い。酸性なら同濃度のアルカリ性で中和できるし、その逆もまたしかりだ。今までは壺の中しか溶解液は無かったが、今はツルの末端まで溶解液が行き届いている。ならばそれは逆説、体外には溶解液を。そして体内にはその溶解液を中和する液体があると考えられる。

ズルフェも、そして少し遅れてザラマンデルも気付いたようだ。そしてキョウは、二人が気付いた事をウンディーヌに言う。

「氷使いのお前なら、その意味が分かるな？」

「えっ……。……！　うん！　行くわよ、シャララちゃん！」

《オッケー！》

ウンディーヌはシャララと声を交わすと、自分の右手に意識を集中し始めた。そして、ピキピキと音を立てながらその手に錫杖（しゃくじょう）が生成されていく。空気中の水分を凍らせて作っているのだ。生成された錫杖は、ウンディーヌの身長を僅かに超える程度。上端には水色の宝玉が付いており、その周りには土星の輪のように三つの輪が回っている。一つは平行に。他二つは一つ目に対し僅かに角度をつけて。また、下端には何も装飾は無い。

ところで、先程『輪は回っている』と言ったが、文字通り回っている。ただ浮いているのではなく、水の流れのように廻り、回っている。

その姿は、本当に神官のようだ。

ウンディーヌはその錫杖を地面に突き刺す。
本来なら食人植物はすぐにでもこの手を止めるべきだったのだが、進化してもなお満足に吸いきれぬキョウの魔力の膨大さ――植物は魔力を吸って満腹の間は動きが鈍くなる。そして、生物的な進化を果たして吸う容量が増えてもなお、キョウの放つ魔力を吸収しきれず動けないという状況――に圧され、それに何より、先程のウンディーヌの攻撃に生物としての本能として恐怖を覚えて迂闊に動けなくなっている。

ズズッ……

小さな地鳴りがする。それは目に見えて大きくなっていき、ついにその姿であり元凶を現した。
ドバッっと、多量の水が現れたのだ。遥か地下を流れる地下水脈を呼び起こしたのである。そしてその水は食人植物の真下から現れた。
さらに、ウンディーヌは地上に出てきた水にもう一つ手を加える。ウォーターカッターのように水に高圧を加え、食人植物を貫いたのだ。まるで、巨大なバラの棘が迷い込んだモノを串刺しにするように。
そして最後にウンディーヌは、ポツリと言う。

「……氷河時代（アイスエイジ）」

刹那、ウンディーヌ以外の面々は空気すらも凍り付いたと錯覚してしまった。キョウもまた、口には出さないが素直に驚いている。いや、感嘆の息すら漏れる。
巨大な食人植物が幾重もの水の槍で貫かれ、凍りつく。それはさらにおぞましいものに思えるが、目の前のそれは違う。事実で言え

ば変わらないはずなのに、透き通った氷は見る者に感嘆の息を漏らさせ、芸術とも言える氷像と化していた。

直後、洞窟を眩い光で溢れ、氷がその光を反射していっそうその場を明るくする。

「……うっ。……あれ？　……あの子達は……」

魔が目を開けた頃には、キョータ達は姿を消していた。自分の手を見ると、あの植物のツルはボロボロと崩れていく。……中まで凍っていたらしくヒンヤリして凍傷になっていないか心配だが、命と軽度の凍傷を比べたらどちらがマシかは一目瞭然だ。

彼女は「ふぅ」と息を吐いて肩を上下させ、消えてしまった幼い勇者たちに言う。

「……ありがと、小さな勇者さん」

彼女がここに留まっていた理由はもう一つあった。だが、それは彼女の中で自分で叶えたい願いとして在り、今は彼女が外に出るという意思の邪魔をする事はない。

（……コユキ。……アンタの事も、きっと……）

一方、現実世界。キーンの家。

「うっ……ここは……」

いつも通り体を強かに打ち、背中を擦りながら起き上がるキョー

タ。

「！　皆！」

自分達がどこにいるか気付く前に、現実世界で待っていた者が喜びの声を上げる。シノブだ。よっぽど心配したのだろう。そして戻って来てくれた事が嬉しかったのだろう。その眼は潤んでいる。

「シノブ！　……じゃあ、オレ達……」

キョータの声をキーンが継ぐ。……徐々に沸き立つ感情がある。

それは――

「戻って来れましたね」

――やり遂げた喜びと無事に帰ってこれた喜び。

「うん！」

そして、最後にカナデが笑顔で頷いた。

シノブもメガネを外して涙を拭きつつ、笑顔で頷く。万事上手くいった、かに思われたが……。

「な、いつ帰ってきたんですかぁ！　っていうか人形が！　人形が！」

「「あっ……」」

月島家のメイド、アキさんがドアを開けてバッタリ。見事にボボウやフーイ、シャララが空に浮き、動いているのを見てしまった。

「それにさっき私部屋を出たばっかりですよ!?　どこから入ったんですか!?」

文脈からして、彼女はキーンを始め子供達がいなくなってる事を心配して何度か戻ってないか様子を見に来ていたらしく、つい先程はキョータ達が帰って来る直前に部屋を出ていたらしい。して、音がするからドアを開いてみたらバッタリという感じだ。

「え、え～っと……」

キーンでもこの状況をどう潜り抜けたものか悩んでいるらしい。窓から入ってきたと言いたいが、生憎キーンの部屋は二階だ。窓のそばに登れるような木がある訳でもない。そもそも、素体が動いている事自体見られてしまったのだ。言い逃れは出来そうに無い。

「えいっ」
「えい？」

不意にした声でキーンの声に疑問が宿る。その声はついさっきまで聞いていたはずだが、ありえないという先入観で個人の特定が遅れてしまった。

その方を向いて確認する前に、アキさんはバタリと音を立てて倒れてしまう。

「！　アキさん!?」

流石に優先順位として彼女の方を気遣うキーン。幸い、気を失っているだけらしい。そしてその行為をやった人物は若干の戸惑いを滲ませながら飄々と言う。

「……何か困ってるみたいだからこの部屋に入った記憶を消したんだけど、迷惑だったか？」

「「「！　キョウさん！？」」」

アシュリアーナにしかいない、存在できないと思われたキョウとダークだった。なお、アキが気絶したのは記憶を失った事による二次作用のようなものだろう。

「いや、ってかここがどこなのか教えてくれると嬉しいんだけど……」

『同じく』

そう、彼は困ったように頭を掻いているが、戸惑っているのはキョータ達も同じなため中々次の声が出せない状況にあった。

第４８話　改めて、『一歩』（後書き）

次回から現代編で、それもキョウ中心となりますが、その分これまで謎扱いだった『音使い』の能力が明らかになる章でもあります。……スランプ突入したっぽいけどね～（遠い目）。どうも、文章が思い浮かばないという。

第４９話　現代入り（前書き）

……いっちゃなんですが、どことな～く東方における幻想郷と現実世界ってこの作品におけるアシュリアーナと現実世界と重なるんですよね。無論、比べるもんでも無いし他意も無いんですが。

……幽き接点を持つ二つの世界というのが、似ているのかな？

第４９話　現代入り

「えっと……まず僕たちが今いる世界ですが――」

黙っていても進展が無いと判断したのだろう。キーンはキョウに大まかな事を説明する。非常に言いづらいながらも、キョウのいたアシュリアーナは現実世界ではゲームとして存在する事。今自分達がいるのは、その現実世界でのキーンの家だという事。自分達は現実世界とアシュリアーナを行き来して闘っている事。

キョウも今まで自分が住んでいた世界が現実世界で言うゲームの中という事実に最初は驚いていた。だが、話が進むに連れて自分の中で情報が整理されていったのか、一通りの話が終わる頃には冷静な顔に戻っている。

「……なるほどなぁ」

そう、キョウは納得したように頷いていたが、それでもどこか不確定な所があるかのように顔を疑問で歪ませた。

「……けど、本当にあの世界はゲームの中なのか……」

それはキョータ達に対する問いというより、自分の中で吟味するための問いである。話を聞きながら周囲の空気を探っていたのだが、今まで自分がいたアシュリアーナにもこの現実世界にも、そのどちらにも秩序としての命を感じる。人間や動植物とは違う。その世界を構成する要素ともいうべき存在、その躍動する命の感覚だ。

自然のチカラを借りる魔術師だからこそ探れる事だろう。

分かりやすい例えを言えば、我々の体その物だ。

我々の体は、約六十兆個もの細胞から成り立っている。それが日々新陳代謝という形で死に、生まれ、我々の体を形作っているのだ。それは言うなれば我々の中に多量の命が在る事を意味する。細胞自体も生きているのだ。そして、当たり前に死んでいく。

幾千もの命によって一つの命が形作られる事実。それは、この世界と我々に対しても同じではないだろうか。……我々人間を始め動植物や虫、細菌。それら全てが、この世界という大きな生命体を形作るピースになっているのでは無いだろうか。

それからキョウは自身の心の中で呟く。

（……それに……アシュリアーナとこの現実世界……。どこか似ている……）

建築様式も着ている服も科学水準も違う。だが、先に述べたこの世界その物としての命の癖が似ているのだ。まるで、一つの受精卵に刺激を与える事で二つに分け、二人の人間として産むように。世界自体が、クローンのように。……もっとも、こちらはアシュリアーナほど空気中に魔力は無く、相応の違いはあるようだ。

と、ここまで思考を働かしていた時、ふとシノブは口を開く。……妙におどおどしている態度から見て、キョータ達が戻ってきたらすぐ言うつもりだったのがキョウとダークが来るというイレギュラー。そして彼等に対する説明を優先して自分が言いたい事を躊躇っていたようだ。

「あ、あの……僕も一つ言いたい事が……」

「？　何だ？　シノブ？」

無垢に尋ねるキョータに、純粋なシノブは頭を下げた。

「……ゴメン。……魔さんを助けるって話は分かったんだけど、洞窟で闘ってる時、ちょうどアキさんがしょっちゅう様子を見に来てサポートできなかったんだ……」

『あのメイドが来るたびに、シノブはパソコンを閉まって出してを繰り返していたニャリン。シノブを責めないで欲しいニャリン』

そう。洞窟での闘いはシノブにとって本当に一部しか把握できていない。そしてこげちのフォロー通り、シノブはアキが来るたびにパソコンを出し入れしていたのだ。キョータやキーンが映ったパソコン画面を、アキさんの前にストンと置いておく訳にはいかないだろう。

キョータやキーン、カナデは顔を見合わせるとにぱっと笑い、何でも無いと言わんばかりに言う。

「誰もシノブを責めたりなんてしないぜ」

「それに、バレたらバレたで後々面倒そうですからね。アキさんは良い人なんですが心配性ですから」

上からキョータとキーンの順。二人の言葉にカナデとキョウも頷くが、内心は苦笑いを浮かべていた。

（（溜め息付かんでも……））

と。ダークも穏やかにその様子を見ていたが、そろそろ一釘刺しておこうという感じで子供達――主であるはずのキョウ含む――に言った。

『さて、談笑している所すみませんが、辺りは暗いようです。……ここが貴方達の世界だというなら、自分達の家があるはず。……ご家族、きっと心配していますよ？』

その言葉にキョータとキーン、カナデはギクッとし、窓の外を見る。ダークの言う通り既に外は暗く、夕暮れの赤は全く見当たらない。

「やっべ！」
「ううむ……。これはアキさんが心配するのも頷けますね……」
「……どうしよう……」

キョータとカナデの顔にあるのは、『母親に怒られるー』という恐怖だった。……まぁ、一緒に暮らしているからこそ怒ってる光景は何度か見てきたわけで、それは子供にとって怖いものなのだろう。やはり。

だが、この中で唯一別の事に驚いている者がいた。

「……ね、猫が……」

シノブは愕然とした面持ちでダークを凝視している。ダークとキョウは顔を見合わせ、会得がいったように頷いて彼の次の言葉を待つ。次のシノブの言葉は用意に予想可能だ。きっと……。

「猫が喋ったぁあああっ！」
「お前の素体もだろ」
『貴方の素体もでしょ』
「うっ……」

予想通りの言葉に息ピッタリで返す今日とダーク。それに対しシノブは勢いを削がれたようでたじろいだ。確かに、ダークの事で驚くならこげちの方はどうなんだという話だ。

このままではシノブがキョウにからかわれるかもしれないという

事で、キーンは話を変える。

「……えー。それじゃあキョータ君とカナデさん、シノブ君は僕の家の勉強会が長引いたと言って置いてください。それと、気分転換で外に出た時もあったとも。これなら、もしアキさんがそれぞれの家に連絡していたケースを考えても対応できるでしょう」

そして、とキーンはキョウとダークの方に視線を移して続けた。

「キョウさんとダークさんはこのまま僕の家に泊まってください。目立つのは控えたいでしょう」

ダークはともかく、キョウはアウトだ。何せ今来ているのは魔術師が着るような怪しいローブ。キーンは小学生だから趣味で済むが、キョウ――外見が中学生――となると一際関心を引き、目立つ。泊まる部屋が多いという意味でも、目立たないようにあまり出歩かない方が良いという意味でも、キーンの家に泊まるのが得策だろう。

そのキーンの意図にキョウも気付いたようで、礼を言いながら頷いた。

おおよその話が落ち着いた所で、キーンの部屋のドアが叩かれる。誰かとギョッとなるキョータ達だったが、キーンは心当たりがあるようで「大丈夫」と手で制し、ボボウ達には人形モード――単に喋らず大人しくしている状態――になるように目配せしてから声を掛ける。

「どうぞー」

「ったく。いつ帰ってきやがったんだお前等」

ドアが開かれると同時に放たれる声。……通常、入った後言うのがマナーだと思うのだが……。そもそもそれ以上に……。

「警察への連絡はわざわざ行くのめんどいし、電話で良いか。……アキは何で倒れてんだ？」

自身の言葉どおりめんどくさそうに、淡い黄色い長髪の女性は頭をポリポリと掻きながら溜め息を付く。文脈からして、アキが家に残ってこの人は警察に届出に行っていたらしい。

キーンはアキの事に対して滑って転んで気絶したという嘘を飄然と付き、キョータは若干身じろぎながら女性を見る。

「……誰？」

ラフな物言いからしてキーンと親しい者だろうが、どんな関係なのか分からない。対するキーンは、しれっと何とも無い風に紹介する。

「ああ、アキさんと同じく、僕のお世話をしてくれるメイドの雅（ミヤビ）さんですよ」

「メ、メイドさん……なんだ……」

「おう。よろしくなー、カズキの友達」

そう、カナデに対して親しげに笑いかけるが、カナデが驚いたのは、いや、この場でキーンとフーイ以外の面々が驚いたのは別の事だ。

（（（……この人ホントにメイドさん……？））））

一応の家主であるキーンを含めて「お前等」と言う態度。……これが仕える側の態度と言えるだろうか……。さらに、その疑念に加速をつける事態が目の前で起こる。

「時にカズキ」
「はい、何でしょうミヤビさん」
あくまで平坦な会話。だがこの後、ミヤビの脚が牙を剥く。具体的には、キーンを蹴った。
「客がここまで長く居るなら先に言えこらぁ！　客に出す茶の追加とか色々あんだろ！」
バカァン！　と良い音がしてキーンの体は宙を舞う。
（（（ウソ！　メイドさんが主を蹴った!?））））
キョータやカナデ、シノブにキョウ。ボボウにシャララ、こげちにダークの心の中の突っ込みは見事にハモり、そのツッコミが言い終わるのと同時にキーンは華麗に着地。……頭を蹴られてそこから空中で体勢を整えて……。……本当にコイツは小学生か……。
そして自身を蹴ったメイドに対し、親指を上にビッと立てて見せる。
「ふっふ。流石ミヤビさん。良い蹴りです。……優れた戦士ですね」
「だからあたしはメイドだっての」
今度は茶の乗っていた盆を顔面に投げつけ、キーンの顔は再びのけぞる。なお、お茶は近くにあった台に乗せてから投げたのでお茶に被害はない。
これらの事をキョータ達が止めなかったのは何の事は無い。互いに慣れきっていた様子だったからだ。……多少度が過ぎているかもしれないが、主従漫才のようにも見えなくは無い。優れた戦士とい

うキーンの冗談に、即座に、かつ慣れきった調子でツッコミを入れたのだから。

それからアキが目覚めるまでの間、一同はその荒っぽい主従漫才を見る羽目になる。

一方、所変わって新宿。

「……！　……どうやら、我々の手に届く所に来たようですね」
「……ホツマさぁ。……不敵に微笑むのは良いんだけど、それに何を言いたいのかも分かるんだけど……」

乱空の声はどこか呆れがある。何故なら……。

「熱心にゲームしながらシリアス口調で言われてもぜんっぜんカッコ良く感じないから」

しかも何故か暗い部屋で。どこのゲーヲタだ。

ホツマは「まぁまぁ」と乱空を宥めつつ部屋の電気を付け、向き直る。

「さて、それじゃあ明日にでも行きましょうか。……場所はそう……神奈川辺りでしょうかね」

第４９話　現代入り（後書き）

次回は、二話で一話構成です。……流石に合計２４ＫＢ（文字数１万字以上）を更新ってなると読む側が疲れるでしょうから。

なお、もう一人のメイドのミヤビさんですが、原作キャラです。本当のホントに主であるキーンを蹴ってます（笑）。

第５０話　白昼の襲撃者（前書き）

今回と次話で音使いの諸々を明かします。

追記。訂正。日付的には土曜日です。後々のプロットを見たらその方がしっくりきそうだったので。００（実を言うと、この時代学校は土曜日もありましたからね。第一と第三土曜日は学校だったのですよ。なので、不自然さは特に無しと。逆に、土曜日を休みにした方が時代的に不自然になるので。

第５０話　白昼の襲撃者

「～♪」

鼻歌交じりで、キョウは神奈川の町を散策する。キョータ達が学校――今日が終業式で、明日から夏休みらしい――に行ってる間、暇なので近所を散策しようという訳である。服はキーンの兄のを借りた。ダークはお留守番だ。こっちの人間は『非日常』というのに疎そうだから、猫と一緒に歩いてるのは目立つ。

そして公園に着いた時、彼はストンと地べたに座って改めて辺りを見渡す。湧き上がる噴水。小鳥は木の上やコンクリートの大地の上に降り立ってまた空へ。それはもう……。

「……平和だねぇ」

としか言えない様な情景だった。

「さて、と。……始めますか」

そう言うと、彼は地に手を置き、意識を集中し始める。

キョウが外に出たのは何も暇だからというだけではない。この世界とアシュリアーナで異常なまでに『癖』が似ていたため、それを調べにきたというのもある。地球やその世界自体の意識に問いかける事で、より詳細な情報を探ろうとしているのだ。大袈裟に言えば、その世界の正体や成り立ち、とも言い換える事が出来る。

「……！　……なんだ、この違和感……」

キョウの感じた違和感は本当におかしなものだった。昨日までは、

まるで現実世界とアシュリアーナはクローンのようだとしか感じていなかった。だが、改めて詳細に測って気付いた事がある。……アシュリアーナとは関係無しに、この現実世界だけが何度か創り変えられている。アシュリアーナと比べて格段に魔力が少ないこの世界で。

（……魔力とは違う。……別のチカラで……？）

彼の推測がそこまで及んだ時、その推測を読んだ様な声が掛けられる。

「ええ。創り変えたのは私達です」

「！」

声を掛けられた次の瞬間、そちらへ振り向こうとしたキョウの視界の隅に何かが見える。それも、明らかな敵意と相応のスピードを持って。

「な、何だいきなり！」

見た目の年齢に反し、キョウは修羅場を潜り抜けている数が尋常でなく多い。かろうじて避けてターンをするように回転しながら立ち上がり、突然の襲撃犯を睨みつける。

相手は二人。一方は高校生くらいの女子。短髪で腰にはドクロがあしらわれたベルトをしている。……どんなセンスだ、というツッコミは置いといて、もう一方は十代後半か二十代前半の男性。薄い茶髪に穏やかで理知的な目をしている。……だがどこか、底知れない。穏やかさの裏に何かを隠しているような、得体のしれなさがある。

総じて、第一印象として対極コンビという印象だ。自分の意思を

ガツガツ外に出す少女と、自らを悟らせず、内でチカラを強める男性。

最初に口を開いたのは少女だった。にぱっと無邪気に笑い、両手を腰に当てる。

「まぁ、そう思うよね。何でいきなり襲われるんだって。けどまぁ――」

次手が来ると思った時には蹴りが飛んでいる。ホップステップジャンプの三テンポを必要とするまでも無く、二歩で勢いを付けてとび蹴りをしてくる。

「！」

少女の靴裏を上腕で防御するが、筋肉がミシミシと嫌な音をする。

「――アンタがいるだけで迷惑だから、早々に消えてくれると嬉しいんだよ」

そんな事を満面の笑顔で言う。……流石のキョウも、肝が冷えるのを感じた。キョウも人の事は言えないが、場慣れしている。退けるだけでなく――いや、むしろ相手を殺める戦いの方が多かった気配だ。

「……身に覚えの無い事で消されてもこっちが報われないんだけどねぇ」

そこで不敵な笑みが浮かべられるのはキョウの癖とも言えるが、それでも彼は感情を抑えている方だ。

あちらの二人組が自分を消したいように、こちらにも死ねない理由がある。

目の前の彼女はそんなキョウの表情を見て眉を顰めたが、それはあくまで一瞬の葛藤だったようだ。バックステップで距離を取り、改めて敵意を示すように拳を突き出してくる。

「何かそっちにも色々あるみたいだからこっちも敬意を表して相手をする。……本気でね」

「……へぇ」

素直に驚いた。

最初、彼女の髪と瞳は黒だと思った。典型的な日本人の特色だと。だが、それは違った。黒だと思われていた髪はウィッグで、目はカラーコンタクト。その奥にあったのは、純白の髪と真紅の瞳。彼女は『アルビノ』だ。

アルビノ。遺伝子疾患の一つで、先天的にメラニン――人間や動植物、原生動物において形成される色素。太陽からの紫外線を吸収し、太陽光線のダメージを抑える役割を持つ――が欠乏している固体を指す。手早く言えば、遺伝子的な突然変異だ。

そして目の前の少女は、改めて標的であるキョウに自身の名を明かす。

「あたしは柊　乱空！　そっちにいるのはホツマ！　理由はややこしくなりそうだからカットするけど、アンタを消させてもらう！」

「……上等」

この時、冷静な彼なら気付いたであろう違和感にキョウは気付かなかった。本来、人を殺めた事のある人間には様々なモノが憑く。殺された者の恨みや自身の自責の念。それら全て、目の前の少女から感じなかったのだ。むしろ、好感すら持てるほどの何かを持って

いる。

（……強い）

魔法無しとはいえ、白兵戦でここまで苦戦したのは久々だ。時に強く、時に柔らかく受け流し、彼女の武技は剛と柔を併せ持ち、形式ばった公式種目ならともかく、正真正銘の命を懸けた実戦においては、公式においてのプロを寄せ付けないだろう。

が、ここで少し疑問が沸き起こる。彼女の強さはどこで得たかもそうだが、それ以上に周りの人が無関心過ぎる。散歩に来たご老人や見回りの警官や掃除のボランティアのおじいさん、まばらとはいえ人がいるのに何故ここまで無関心なのか。……そもそも、気付いてすら居ないように見える。

その疑問に気付いたのか――ってかよくもまぁそこまで人が何かを思った時にそれに関する事を言えるものだ――、乱空は下から抉るように拳を突き上げながら言う。

「ああ、ホツマが音のチカラで皆の目からあたし等を消してるから気付かれる事は無いよ。ホツマは私ほど動ける訳じゃ無いからね」

なるほど。どうやらホツマと呼ばれた薄茶髪の男性が加勢に来ないのはそういう了見らしい。だが、音で人の目から自分達を消しているとはどういう事なのか。

「？　音？」

その問いに乱空は「答える義務は無し」と言葉と足の二つの意味で一蹴。キョウがその蹴りを避けた直後、さらに「あ、」と思い出

したように付け足してくる。

「あ、動けないと言っても闘えない訳じゃなく、約束があるから。……どっちかが闘ってる時、助けを求めない限り助けないっていうルール。それがあたし等コンビとしてのルールなのさ」

「……なるほど」

それは意地でも矜持でもない。例え自分の方が数が多くとも、相手が一人である以上自分も一人で立ち向かい、求めない限り手を貸さない。それは、相手が遥かに強くても、相手方の方が数が多くても、変わらないルール。……まるで、自ら劣悪な状況に投げ入れて自分を鍛えるかのようだ。

「おっ。理解が早いねー」

……だからなんで人の心が解るんだよ……。

「（……今の私じゃ表層しか視えないけどね）」

「あ？」

良く聞こえなかった。乱空はふっと息を吐いて腰を回し、蹴りの構えを取る。

「何でもない、よっと！」

「！」

生物としての本能としか言い様がない。その蹴りはどこか危険だ。ハイキックの軌道だったので伏せる形で避ける。

バキッ……。

背後から何かが折れた音がする。

「？　ッ！」

気になり、バックステップで音のした辺りまで下がって乱空から距離を取り、音のした方を見ると木の上部がバッサリ切られていた。下手な盆栽師が慣れない大鋏（おおばさみ）を持って、くしゃみをしてバッサリやってしまったような感じだ。

「なっ……」
「隙あり！」
「！」

蹴りで離れた木が切れる。その事実に驚いているキョウに、文字通り弾丸のように乱空が突っ込んできた。その脚力は地面を強く蹴りぬくカタパルト。そしてそのスピードから繰り出される拳。速度は重さ。おまけに硬質な指輪を付けている右手で殴ろうとしているメリケンかっての。

こちらが驚いている時に突っ込んできたので回避するには遅すぎる。

ズンッ

「……受け止め、た……？」

さっきから音だの何だのキョウばっかり驚いていたが、今度は乱空が驚く番だ。キョウは左腕一本でその拳を止めたのだから。

「……パワー（POWER）。……まさか、この世界で魔法を使う事になるとはね」

パワー（POWER）は肉体強化。使い手に常人離れした怪力を付加する魔法だ。

本当に、魔力の薄いこの世界、それも白兵戦で使う事になるとは思わなかった。だが、そうでもしなければその拳を止められなかっただろう。下手に真っ向から受け止めたら肘や手首、要所要所の骨が砕けていたかもしれない。

「……乱空。どうやらそのチカラのようです」

今まで黙っていたホツマがそんな事を言う。途端、乱空の目により強い闘志が湧き上がる。

「！　……そう」

彼女の両手が緩やかな動きで広がっていく。その緩やかな動きに反比例するように、彼女の指先には先程の空を飛ぶ蹴りのような威圧感が発せられている。

「！」（こいつ、指からもさっきのを！？）

ヒュッと風を切る音と共に、内側に閉じられる両手。キョウは乱空の腕の動きから予想される見えない攻撃の軌道上からかろうじて避けるが、頬を掠って液体が伝うのを感じた。

乱空は無言で第二波用意。キョウは舌打ちして備えるが、ふとある事を思う。

（……あれ？　……この技……どっかで……）

見覚えがある。それも、まだそう日が経っていない頃。

「！」

だが、再び空を切る音と共に見えない斬撃が飛んで来てそれを避けざるを得なくなる。その後もキョウは円を描くように斬撃を避け、乱空もまたそれを追うように斬撃を飛ばす。

「こんの！　いい加減当たれぇ！」
「無茶言うなっての！」

誰が自分から無駄に傷を負うか。
この時、キョウと乱空はあるミスをした。キョウは見えない斬撃を避けるために余裕無く、避ける先を考えず避けた事。そして乱空は、キョウを倒す事に意識を傾けるあまり、周囲の状況が見えていなかった事。

「っんの！」

親指を除く四つの指から横薙ぎに放たれる斬撃。横に広い攻撃なら容易には避ける事は出来ないだろう。だが途端、ホツマの声が飛ぶ。

「乱空！」
「！　やばっ！」

彼女も自身の攻撃の軌道上にある者に気付いたらしい。キョウの近くに、押し車――小物入れを兼ねた歩行器――に伝って歩いている老婆がいる。おそらく、昼の陽気に誘われて散歩に来たのだろう。ホツマが消しているのはあくまで戦闘時の音や姿。キョウと乱空が闘っているのはあくまで公園で、別次元ではないのだ。狙いを誤れば、攻撃が一般人に当たる事もある。

「っんの馬鹿！」

流石にキョウも焦り、急いで間に入って乱空の方――見えない斬撃の方――に手を向ける。

「シールド(SHIELD)！」

ズシャ！　という、一般人には聞こえない音が響く。それと共に、安堵からキョウは溜め息をついた。キョウの張った見えない防壁により、キョウも後ろの老婆も怪我一つない。キョウは一応といった感じで後ろを振り返り、老婆の安全を確認すると次に乱空の方に視線を移す。その目にあるのは、怒り。

「……おい。……何言いたいか分かるよな？」

動きや手際から見て、ホツマと乱空は裏の仕事もこなすプロだ。何か考えがある訳でもなく、ただ単純なミスや浅はかな考えで一般人を巻き込むのはド三流だ。

「……」

乱空も自身の非を自覚しているのか、拳を下げて俯く。

せめて一言謝って諸々の説明をしてもらおうか。と、キョウが乱空に詰め寄るのを間にホツマが割って入る事で防ぐ。

そして彼は、キョウと乱空二人に向けて言った。

「消す必要が無くなりました」

「「はっ！？」」

驚く乱空とキョウの声が重なる。二人はそれぞれホツマに喰ってかかった。

「何でさ！　コイツの魔法ってののせいで禍神（まがみ）が！」
「ちゃんと分かるように説明出来るんだろうな！　……ってか禍神ってなんだ！」

そのギャーギャー騒ぐ様子たるや、まるで喧嘩する犬のようだ。
そんな血気盛んな二人に対し、ホツマはあくまで冷静に「まぁまぁ」と手を前に出して宥めつつ、二人に対して言う。

「まぁまぁ。乱空の問いにも、そちらの――」

ホツマの声が途切れる。どうやら、自分（キョウ）の名前も知らず襲ってきたようだ。キョウはその事に対し呆れ半分、怒り半分で憮然と一言だけ名乗る。

「キョウ」

そしてホツマは頷くと改めて言った。

「キョウさんの疑問にも、答えて上げられるでしょう」
「……」

キョウとしては名前も知らずにいきなり襲ってきた事を詫びて欲しかったが、そそくさとホツマの説明が始まった。

第５０話　白昼の襲撃者（後書き）

さてさて。キョウが乱空に感じた『何か』ですが、これはニライカナイの原作を見た時失笑しました。あまりにも堂々というか真っ正直で。

……さて、『ジュリ』と『ゼン』、そして『乱空』の技が『近い』事、気付いてる人がどれだけいますかね。……見えない斬撃。

第５１話　創り変えられた世界（前書き）

二つの意味でお待たせしました。一つは更新。もう一つは、今回ようやっと二人の音使いが何故キョウを狙っていたのかの詳細が分かります。……そして、『キョウ』という名前の意味も、ね。

第５１話　創り変えられた世界

「……さて、まずは音の話から始めましょうか」

何から話すか考えていたのだろう。僅かな沈黙の後、ホツマは口を開いた。それでも、全く知らないキョウ相手にどう説明しようか、考えながら話しているらしい。その口調はゆっくりだ。

「……一言で簡単に言うなら、言霊を用い、人間を含めた動植物、果ては物である原子核をも欺く絶対催眠とでも言いましょうか。……言霊の事は、ご存知ですか？」

「……ああ、いちおうな。……けど……」

言霊の事は、一応術師の端くれとして知ってはいる。我々が何気なく使っている言葉にもチカラがあり、それが人に影響を与えてしまう、言わばヒトだけが使える『鎖』だ。しかし、いきなり生物はおろか物質まで欺く絶対催眠だと言われてあっさり信じるというのは出来ない。だからこそ、キョウは最後に『けど』を付けたのだ。

その不信がるキョウの心を察したのか、ホツマはクスリと笑うとキョウに言って聞かせる。

「そういうリアクションなのも無理はありません。……見せて上げましょう。どの道、もっと説明したい事はあるのですから。……目を閉じてください」

「……」

キョウは無言で目を閉じる。ホツマと乱空はそれを確認してから目を合わせ、乱空は右手を、ホツマは左手を持ち上げ、拍手するように打ち鳴らす。パンッという拍手特有の高い音と共に硬質な音が

鳴るのは、彼等の指に指輪がされているからだろう。

「……さぁ。もう目を開けて良いですよ」

「……ッ！　……これは……」

驚いた。

その声に誘われ目を開けてみれば、先程までの和やかな公園とは一転変わり、どこかの屋上に移動していたのだ。

「我々が神奈川に居るという世界的、自己的認識を欺き、京都に居るという現実に欺いたのです。ご理解頂けましたか？」

「……」

無言で頷くキョウ。これは音のチカラを納得せざるを得ない。自分達の「自分達は神奈川に居る」と思っている認識を欺き、さらには世界の「この生命体は今神奈川に居る」という認識も欺く。それにより、結果として京都に移動したわけだ。非現実的なトンデモ話に聞こえるが、動植物や物質、言い換えれば世界そのものさえも欺く絶対催眠というのを前提として考えれば納得できるだろう。

……下から楽しげな子供の声が聞こえる所から見て、どうやら学校のようだ。さらに、男性の声が若干低い所から見て中学以降だろう。

「ここ、あたしの学校。……仕事が忙しくて中々来れないけどね」

「？　しご――」

そう、乱空はにゃははと笑みをキョウに向ける。先程までの敵意はどこへやら。……おそらく、ホツマがもう襲う必要は無いと言ったからだろう。ずいぶん信頼しているようだ。

キョウは彼女の言う『仕事』というのが気になり、聞こうとした。

抜群の実践重視の体術を必要とする仕事とは何なのか。気にならない訳が無い。だが、あくまで『聞こうとした』だ。問おうと彼女の方を向いた時、キョウからは言葉も思考も、表情も消え去った。

その視線の先にあるモノに気づいたのか――もっとも、彼等からしてみれば始めから説明するつもりだったのだろう――、ホツマは口を開く。

「……あれが禍神（まがかみ）。私と乱空で封じ、人の目から消している存在です。……私達の使う音とは非常に幅広く使えます。全ての認識を欺けるという事は、世界を形作るヒトの意識を操作して目の前の危機を感知させない事も可能だという事。……むしろ、音とはこちらの用途に使う事が多いですね」

こちら。つまり、あのような非日常的な、ヒトの営みを脅かす存在が関わる方面だろう。

禍神と呼ばれたモノは、とにかく巨大だ。一見、ナーガという半人半蛇（じんはんじゃ）を思い浮かべる。膨らんだ胸からみて恐らく女性だろう。腕は四本。蛇のようなのっぺりした顔で、体表は鱗に覆われている。蛇の尾である下半身の大きさを含めれば、その全長は高層ビル三個分にもなるだろうか。何もない空気中から鎖が出ており、それで全身を縛られている。

ホツマは左手を持ち上げて指輪をキョウに見せながら続ける。

「誰も知らないと言う事は、実際にあった事でも無かった事になる。……この指輪から鳴る、高周波で驚異的な広範囲集団催眠術が全てのヒトに何も無いという幻想を与え、禍神はいないという世界を創りあげた。結果、禍神はいないという概念が世界を支配し、禍神がヒトの目に見え、禍神が実体化するのを食い止めているのです」

ヒトは自分の意識する事しか感じる事は出来ない。自分の共感で

きない事は共感できないし、自分の知らない事や見てない事、聞こえない事は無かった事と同じ。そこに当たり前に在ろうと、感じられない事は存在しないのだ。

それを、地球上の全生物、全物質規模でやっている訳だ。そしてその要となっているのが、二人の指にある指輪なのだという。音楽で例えるなら、乱空やホツマがギターで、指輪がアンプのようなものだろう。

「……それとオレが狙われた理由、何か関係あるのか？」

問いつつ、キョウの中では直観めいた核心があった。わざわざヒトの目に見得ない存在を自分に見せているのが何よりの証拠だ。

その問いに真っ先に反応したのは乱空だ。彼女は手の平を上に向けて中指を立てるという独特の指差し方で肯定する。

「そっ。……あたし等は二回、世界を創り変えているんだ。一回は禍神が存在しない世界を創るために」

「しかしそれは、禍神が存在しない世界、つまり我々音使いも存在しない世界を意味します。あれらの存在を封じるために、我々音使いが存在していたのですから」

「それって狙われた理由の説明になってない気が――」

「ですが」

そう、ホツマはキョウの言葉を打ち切る。説明には順序があるという事で、ワザと遠回しに説明したようだ。

「そこに貴方の存在が絡んでくる」

「アンタの持つ魔法っての？　それが禍神を刺激して、その世界に存在しない禍神を復活させてしまうかもしれなかったのさ」

「……それでオレを消そうとしたわけね。早いとこ影響を無くすた

めに」

ホツマはそれに頷き、肯定する。

「ええ。禍神だけ復活しては、封じる事が出来る存在がいない以上、人類には滅びの道しかありません」

「だからこそ、私等は再び世界を創り変えた。禍神も、音使いも存在する世界を。そして創り変えたら即禍神の動きを封じて、アンタを消せば万事完了、って感じだったんだ」

それが、二回目の世界創造だ。

ホツマは「ですが」と区切り、不意にキョウの右手に視線を移した。

「……ですが厳密に言えば、今日あなたと会って分かった事ですが、その右手があなたの魔力に邪気を付けているようです。……カビカビのフィルターに風を送るとカビの胞子が部屋に送られるようなものでしょう」

「……なるほど」

物凄く分かり易いが、物凄く日常的な例えだった。……乱空の「うわっ」という顔からして、以前そのようなドジを犯した事があったらしい。……さぞ部屋がカビ臭くなっただろう。

乱空の視線からしてそんなドジを犯したのはホツマだろうが、当の本人はいたってマイペースに応じる。

「ですが、今日あなたと乱空が闘っている様子を見て解りました。……あのお婆さんを護るために前に出た時、あなたの瞳から」

「？　……瞳？」

「ええ。目は時に口以上に物を語りますから。……あなたの瞳の奥

にある郷愁の念。その更に奥にある、互いに想い合える存在も」
「……」
プライバシーも何もあったものではない。キョウが内心で引いているのを察してか、ホツマは穏やかに小さく笑いながら言う。
「別に常時読んでいる訳ではありません。必要のある時だけですよ。……心音も思考も、音も、いずれも波のように伝わる。私はそれを感じるだけの事」
「……そうか」
まぁ、考えてみれば元いた世界の親友も近い能力を持っていたと思い直し、納得する事にした。
ここでふと、ホツマは穏やかだった目に真剣な光を宿して言う。
「ですが、だからこそ消さない事にしました。大事な人を待たせているヒトを消しては、待っている人が報われない。……貴方がどれだけ貴方のいた世界のヒトを想っていたのかも、そして貴方を想うヒトの気持ちも、とても澄んだものでしたから」
「……ああ。……まぁな」
後半のホツマの顔は優しく穏やかで、キョウの顔に仄かに小さい笑顔が咲く。それは自分のいた世界にいる者達に対する愛おしさと、少しの寂しさからくるものだった。
「ふぅ。……まぁ、あなたがもうちょっと自分の考えを外に出すタイプなら、もっと早く闘う必要がない事に気付けたのですがね」
「ぐぅ……」
一転。溜め息付きの一言に唸るキョウ。ポーカーフェイス過ぎる

のも問題だ。ホツマは「冗談ですよ」と笑う。

「禍神の方はこれまで以上に封印を強めるという事にしましょう。原因があなたその者というよりその右腕から出る邪気だと分かった以上、封じやすい」

「漠然とした何かに対策を練るより、正体の分かったヤツの方が封じやすいって事だね」

ホツマは補足を加える乱空に頷いた後、再度キョウの方を見る。

「良ければ、貴方のいたここことは違う世界の事を話してください。自分達の居る世界とは違う世界。……それはとても、面白いので」

「……たまには、良いかもな」

キョウがそう思えたのは、今までアシュリアーナにいた頃を含めて昔の事を話せる者がいなかったからだ。話せる事が、何故だか少し嬉しい。

元々自分のいた世界の事は、この世界より遥かに科学技術が発達した世界である事を。そして、ある者の依頼によりアシュリアーナというこの世界と良く似た世界に居た事を。ホツマは興味深そうに、乱空に至っては夢物語を聞く子供のようにワクワクした目でそれを聞いていた。

なお、キョータ達の事は一応伏せておく。

「――で、こっちに来てぶらぶら歩いていたら――」

「あたし等に襲われたって訳だ」

「そゆこと」

乱空と指を差しあうキョウ。……単純馬鹿同士、割と早く意気投合している。

一方、ホツマは感慨深げに「ふぅむ」と唸る。

「ふぅむ……。鏡合わせのような世界。……だから私達が感知出来なかった訳ですね」

「うんうん。全く持って不覚――……あれ？　アシュリアーナ？」

「ええ。そう言いましたね」

乱空はある事に気付いたらしいが、ホツマはまだらしい。鈍いホツマを焦れったそうに、乱空は八重歯を出して相棒に手加減した蹴りをお見舞いする。

「いい加減察せ馬鹿！　アシュリアーナってゲームの舞台じゃん！」

「……おぉ」

ひらりと避けつつ、納得したように左手を右手にポンッと打ちつける。どこまでも暢気なホツマとそれに焦れったさを覚える乱空。キョウはそんな二人に呆れを込めた苦笑いを浮かべつつ、その世界がこの世界から見てゲームであっても、その闘いは実際に起こっている事を話す。これもまたホツマ達に伏せているが、ゲームの中の闘いという事で割り切られてはキョータ達に申し訳なく思えたからだ。

ホツマは顎にグーの手を置いて俯く。少し考え込み、やがて顔を持ち上げて口を開いた。

「……貴方から聞いた事を整理して考えたいので、今日の所は帰りましょう。目を閉じてください」

言われるままにキョウは瞼を下ろす。ホツマは若干鈍いが達見だ。しかし、それでも情報の整理は必要だろう。

神奈川の公園に着き、その別れ際、ホツマはキョウに声をかける。

なお、乱空はウィッグとカラーコンタクトを付けて典型的な日本人に戻っている。

「早く帰れると良いですね。……その名前も、そういう事でしょう」
「……気付いていたのか」

背を向けようとしたキョウはホツマと乱空に向き合い、無表情に言う。ならば必然、自分自身(キョウ)の名前が偽名である事も気付いただろう。

「勘で」
「……ねぇ。名前って？」

飄々と何でも無いという風に答えるホツマに問いかける乱空。ホツマはしゃがみこみ、指で地面に字を書いた。カタカナで、『キョウ』と。

「……これが彼の名前ですが、これを漢字に直すと……」

そしてホツマは『キョウ』の字の傍に『↓』を書き、漢字を描く。ただ一文字、『郷』と。

「……郷。……故郷(ふるさと)。……早く元の世界に戻りたいという願いを自身の名にしたのでしょう」

同じ読みでも漢字が違い、意味が違い、込められし願いも違う。言葉は生きているのだ。

……それは時に、『同じ読みだが別の漢字』という繋がりを作ってしまう事もあるだろうが。……そう、それはまるで鎖のように。

……因果の鎖で繋がる『業』のように。

そうして、キョウとホツマ達は別れた。
ガタッ！
そして時間は夕食。キーンの家でそのままご馳走になっている訳だが、キョウが不意に立ち上がる。キーンが驚いてどうしたのか問う中、キョウはワナワナと震えて握り拳を固める。
「あ、あああ……あいつ等のせいかぁあああ！！！」
「うっせぇえええ！　食事は静かに食いやがれぇえええ！！」
勢い良く叫んだは良いが直後にメイドのミヤビから説教が飛んできた。まぁ、流石に主であるキーンにするような盆投げアタックや蹴りは無いが……。……いや、主だからこそやってはいけない気もするが……。
その頃、キョウの言う『あいつ等』は……。
「……そろそろ気付きましたかねー」
「？」
こちらも食事中。口に物を頬張りながら乱空は首を傾げ、ホツマはいたってマイペースに暢気な笑顔を浮かべる。
「いえ。次に会う時が恐いなと」
「？」

分からないという風に首を傾げる乱空に対し、無言で食事を進めるホツマ。疑問に思いつつ、乱空も「まぁ良いか」という心情にいたり、食事を再開した。

さて、キョウが怒った理由だが、キョウがアシュリアーナに来たのはかつて勇者と共に闘った者達を助ける事が目的。しかし、キョウが着いたのは何故か捕まってしばらく経ってから。リュートの事だからなるべく早く、出来る事なら搬送中――渓谷などの細い道ならどれ程の大隊だろうと少数でキョウと闘わざるを得なくなるため、キョウにとってはやりやすい――に助けて欲しかったのだろうが、それが出来なかったのだ。

その事実を前提として話を進めよう。

ホツマ達はアシュリアーナが実際にある事を知らなかった。知らない世界の事まで創り変えられる訳がない。現実世界では創り変えられた分の時間が経ち、アシュリアーナではそのままの時間が流れる。それを二度もやったのだ。それも、二度めはキョウがやって来る直前。それがキッカケで、時間の流れにズレが起きたのである。

だから端的に言ってしまえば、助けやすい時期にキョウが間に合わなかったのは二人の音使いのせい、という事になる。

ホツマが話を切り上げたのは、情報の整理も勿論ある。だがしかし、ズレが起きたのが自分達のせいだと気付いたらほぼ確実にキョウは拳骨の一、二発でも降そうと襲ってくるだろう。だから、逃げさせてもらった訳だ。

第５１話　創り変えられた世界（後書き）

そんな訳で、キョウがリュートとの約束を護れなかったのはモノの見事に二人の音使いのせいでした（笑）。

……何かキョウの心がずいぶん素直になってますが、その辺は離れたからこそその重要さに気付いたとかそんなんです。……だって、アイツが『愛おしさ』なんて、ねぇ……（苦笑）。

……さて、今回引いた伏線ですが、実は『明日へ』の最後にもちょこっと絡んでます。流石にまだまだ明かせませんけどね。

第５２話　切り人（前書き）

あ～……段々原作には無いオリジナルの設定が増えて行く～……。

第５２話　切り人

場所は新宿。某公園。時間は夜。周囲も暗く、時間が時間のためほとんど人がいない。居るとすれば、精々若い不良ぐらいだろう。

「……」

だが、今晩そこに居る人物は別に公園内の物を壊したり落書きしたりして歪んだ自己表現をするような稚拙な若い不良ではない。……まぁ、若い事には変わりないが。

「……すぅ……。切人（キリヒト）……」

少女は小さく息を吐き、そう呟くと広げていた右手を水平に薙いだ。それから一（いち）を数える間に切断される空き缶。指先に意識とチカラを集中させ、振りながら放つ技だ。

「……調子は良いようですね、乱空」

「！　ホツマ」

暗がりから音も無く飄々と現れるホツマに少し驚いた表情をする乱空。

乱空は若干照れたような笑みを浮かべつつ答えた。

「うん。調子は悪くないよ。……なんか、キョウからアシュリアーナの事を聞いてから落ち着かなくてさ」

「……なるほど。それで、もしもの事があったら自分も加勢しようと技を磨いている訳ですか」

乱空の意図を掴み、納得するホツマ。それに対し乱空は快活に頷く。

「そゆこと！　……ってか一つ気になったんだけど……」

「？　何ですか？」

ハッキリと目に見えるのに何ですかも無いだろう。

乱空は内心でそう言い、ホツマの腕にぶら下がっている物を指差した。

「……その腕にあるもんは何？」

ホツマは良くぞ聞いてくれましたと言わんばかりに堂々と手に持っている袋を乱空に見せ付けた。

「新宿サザンテラスにあるクリスピークリームドーナツです。ネットで美味しいって見つけて、一回買ってみたかったのですよ。一緒に食べましょう？」

クリスピー　クリームドーナツ。流行が少し去ってきて、ようやく大して並ばずに買える様になってきた商品だ。ふわふわの生地で老若男女に人気があるとか。

そして、ホツマは甘党だ。その事は乱空も理解している。一緒に食べようというのも、彼の善意からだろう。それも分かっている。

……だが、少しは自分達の状況も考えて欲しい。

「……いくら？」

「……」

沈黙と共に乱空から目を逸らすホツマ。

ドーナツだから精々二百未満だろうが、それはあくまで単数の場合。箱となると二千近くはするだろう。ホツマの手にある袋はどう見ても一箱というレベルでは無い。それでもたかがドーナツだし、大した値段になら無いじゃん。と思う方もいるかもしれないが、彼等はなにぶん……。

「……ホツマもよぉ～く知ってると思うけど、あたし等の仕事って収入が安定しないんだよねー……。親父の仕事の手伝いはあくまで手伝いって事でサービス残業扱いだし」

ゆったりとした動きで徐々にホツマとの距離を詰める乱空。ようは、貧乏と。まぁ、時折乱空の父親の秘書である雪野さんから同情されていくらか頂いた事はあるが、それもホツマが甘い物を買ったり気分で国内や国外に旅行に行ったりですぐに無くなってしまう。

「……」

「！　逃がすかこらぁ！」

ホツマは無言で逃げ出した。乱空は叫び声を上げて雄々しく追い駆け始める。

「……」

「！　走りながら食うなぁ！　あたしの分残しときなさいよねっ！」

まぁ、やはりせっかくだから自分も食ってみたいという事で。

一方、場所はアシュリアーナのクルダ王城。時刻は夕方。二人の

音使いが一方の世界を修正したズレにより、多少の時差も働いているらしい。

「ふぃー。……あーしんど」

クルダを治める王であり、先日業魔王の支配から解放されたジュリはその日の訓練を終えて自室に戻る。側近――素体ではなくその世界の人間――からの労いの言葉とタオルを受け取り、額の汗を掻きながら窓に寄る。風呂の用意が出来る間、少し夕方の風でも浴びるとしよう。

「？　あん？」

下の方から小さな声とぶつかり合う音が聞こえる。目と耳を凝らして良く見ると、中庭で二人の闘士が拳を交えていた。どうやら、規定の訓練時間が終わっても自己的に訓練を続けているらしい。……双方の実力を見るに、初級者が上級者に訓練の手合わせを申し込んで鍛えてもらっているらしい。

「ご苦労なこったな」

努力家な初級者に対しても、付き合いの良い上級者に対しても。

（だったら俺を誘えば良いのに）

とはジュリも思ったが、流石に出先の素人から見てに頼むというのは恐れ多いのだろう。だが、それでも思ったのはジュリ自身の戦いを好む性分の強さという他無い。

「……」

実力が大きく開けた二人の組み手。それを見ていたジュリは、ふと昔の事を思い出す。

……そう。昔自分も、ああやって付き合わされたな、と。そして、その時自分に頼み込んできた相手は……。

時間は今から数百年前。ホツマと乱空が戻したのはあくまで現実世界の時空のみ。アシュリアーナは現実世界で同じ時間を繰り返す間も変わらずに時間と出来事が流れていたのだ。現実世界が夜でアシュリアーナが夕方という時差は、大きな時差のほんの一部だった訳だ。

二人の音使いが時間を巻き戻し、再び再生させた時が単純に人類が地球上に生まれた辺りからと考えて、約六百から七百万年。その間の時差が僅か数百年というのは少なく思えるが、それにも理由がある。……が、それはまたの機会に語るとしよう。

「王っ！」

幼い声が城内に響き、遠く前方を歩く人物の歩を止めさせる。それから少し遅れ、クルダ王の側近が王に来訪者の報告をする。

「ジュリ様。ヌースクアムの王子がジュリ様に武技を教わりたいと――」

「聞きゃ分かる」

魔力の強い人間はその強大な魔力で自身の老化を抑えて長寿となる事が可能――また、自身の中を流れる時を止めて歳自体を取らなくする術もある――だが、アシュリアーナの人間は世界に満ちる魔

力が多いためか、平均して魔力の低い民族であるクルダ人であっても長寿が多い。手早く言えば、老化が遅いのだ。

また、ヌースクアムは四王国に護られしジュリアネスと懇意にする国で、兄弟国とも言える。現女王、リュートの人望もあってか、四王国の人はジュリアネスだけでなく、ヌースクアムも敬っていた。だが、ジュリにとってはお堅いのは苦手だし、何よりヌースクアムの王子が苦手だった。

オレ（ジュリ）は辟易とした返事を側近に返し、軽く溜め息をつくと振り返り、早足で近づいてくるクソガキ……もといヤンチャ王子の方を向く。

「……ナンデスカ、オウジサマ」

完全に心の籠もって無い棒読みだ。

ジュリは若く――見た目の歳で十歳――してクルダの王になった。ハッキリ言って、武技という点においては歴代稀に見る天才だ。多少ガサツで戦いを好む傾向があるが、自身の才能に過信せず、持ち前の向上心によって得た地位だ。クルダは前王に決闘を申し込み、勝てば新たな王になれるという仕組みなので、それがジュリの天賦の才能と底知れぬ努力を示してくれるだろう。

辟易とした自分と違い、目の前のチビガキ……もとい王子は子供特有のキラキラした紅い目で自分を見てくる。髪が白いのは地の色だ。……しかし、一体何用だろう。

幼い王子はジュリが辟易としているのに気付かない様子で、来訪の理由を告げる。

「クルダ流交殺法を教えてよ！」

そうきたか。……おそらく勇者サイや、ヌースクアムの誇る四人の戦士の強さに感化されているのだろう。もちろん返す答えはこうだ。

「ダメだ。オレ達にとって自分達の武技は誇りだ。その誇りを王子様相手とはいえ安易に教えられるか。大体、まだお前ガキだろ」

「……王だってガキじゃん……」

「……あぁん？」

ジュリの答えにズゲッとツッコミを入れる王子。歳は大して違わないが、地位と実力の観点でジュリは王子を下に見ていた。そんな相手からガキと言われたのだから、腹が立つのも無理からぬ事だろう。

「……上等だ。庭出ろ。オレ達の殺法がどれだけ難易度高いか見せてやるよ」

……が、今回は王子の作戦勝ちだ。ジュリのプライドの高さと売られた喧嘩は買う主義な性分が災いし、見事に乗せられている。陰で王子がガッツポーズを取り、側近が溜め息を付いたが、当のジュリは全く気付かない。

そして中庭。

「でぃやっ！」

「……ほぅ」

思わず感心してしまった。

練習用の垂直に立てられた円柱の木は蹴られた辺りからバッキリ折れる。どうやら基本的な身体能力はあるようだ。憧れてから自分の元へ来る間、ちゃんと鍛えていたのだろう。

だが、それではまだ初歩の初歩に辿り着いたに過ぎない。木を脚力で毀すのでは、まだ二歩ほど足りないのだ。

「どうやら、基礎的な力はあるようだな。……けど、まだ甘い」

ジュリはそう言いながら王子に近づき、並び立つ。そして、ゆっくりと腕を上に持ち上げ、拳を固める。その先にあるのは、先程王子が蹴り壊した物とは別の木の柱。

「……オレ達の殺法術の極意は刃だ。心に刃を置き、己が肉体にて敵を斬るのが目的」

ヒュンッと風を切る音が聞こえた気がした。途端、正面の木の柱の中心を境に切断。及び、その切断面の周囲にはヒビが入り、余波は大地をも抉る。

王子が息を呑んで驚いている中、ジュリは言葉の続きを口にし、言葉を終わらせる。

「……打ち壊すんじゃなく、切断するんだ」

「……王……。切られた所の周りとか地面とかも壊れてるんだけど……」

「うっせぇ！　ウチの殺法に伝わる言葉なんだからしかたねぇだろ！」

痛い所を突かれてしまった。歳若き王は、歳が近いというのもあり容赦なく王子に言葉で噛み付く。

アシュリアーナでは当たり前に魔法によって自然の摂理から歪められた生物や、悪い魔法使い（俗に言う犯罪者）によって作られた魔導生物もいる。一言で言えば、物騒だった。そのため、単にその部分のみを切断するよりも、周囲も壊した方がダメージを与えられ

るだろうという先人達の創意工夫が受け継がれて来た。
ジュリと王子がそれを知ったのは、しばらく後の事である。

時間は再び現代に戻り、窓から下を見ていたジュリはポツリと言う。

「……備えねぇと、いけねぇんだろうな」

先日城に忍び込んできた掴めなくて胡散臭い奴の話だと、業魔王の側に王子もいるらしい。

「……お前が何で……」

あれほどまでに他を護る者達に憧れ、自分もそうなりたいと願い、努力した人間が、何故国民を苦しめる業魔王の側にいるのか。それがジュリには分からなかった。
ジュリはポツリと、その者の名を紡ぐ。

「……ゼン……」

……失われし王国、ヌースクアムの王子の名を。

第５２話　切り人（後書き）

次話はちょい原作の話です。ちょ～っと観かするには難しい設定が原作にありましてよい。（↑てめぇはどこの不死鳥海賊だ

第５３話　暴力メイド（前書き）

いくぶん長らくお待たせしました。

今回の話はちょこっと原作分のを、ね。一応主たるキーンに対して暴力制裁のメイド、ミヤビさん。彼女の秘密をね。……流石に、あのキャラの強さ（個性の強さ）は放って置けなくてね（苦笑）。主を蹴るって……。

第５３話　暴力メイド

日曜日。具体的に言えば、キョウがホツマと乱空と出会った翌日。時間は午前六時。文字通り朝飯前だ。ボボウはすやすやと寝ている。

「……」

今、キョータは黙々と目の前の悪魔――全国の小学生の敵である宿題――に立ち向かっている所である。夏休み初日。通常なら、「うっしゃあ！　待ちに待った夏休みだ！　思いっきり遊ぼうＺＥ！」と言いたい所だが、昨日学校から帰る際、キーンの提案で後々動きやすいように出来るだけ宿題は速めに終わらせる方針となったのだ。肝心な時に宿題の懸念が頭にあっては、闘いに集中できないだろう。

「……ふぅ」

一段落付いたキョータは肩を上下させて息を吐き、ぼんやりと窓の外を眺めた。

「……よりによって夏休み初日が元々休みの日曜日って……何か損した気分だなぁ……」

何と言うか、初日を無駄にしたような気分という訳だ。せめて一日後にずれてくれれば日曜の休みと相まって多く感じたのに。

キョータは気持ちを切り替えるために再び「ふぅ」と息を吐くと、視線を机に移して問題を解き始める。なお、今解いているのは国語だ。算数よりは国語の方が五十歩百歩程度――ようは、大して違わないけど少しはマシ――には得意なため、そちらを先に取り掛かっている訳である。

一方、所変わって月島家。

「カズキ様、素敵な日曜の朝ですよ！」

キーンの部屋のドアが叩かれ、その後響く快活な声。月島家のメイドの一人、アキがカズキを起こしに来たのだ。

「さぁ、早く起きてください。朝食の時間です」

ドアを開いてみると、キーンはもう起きていた。もっとも、就寝用の白いローブを着ている所から見て、起きてからそう時間は経ってないらしい。キーンは作業を止めてアキの方に笑みを返す。

「アキさん、おはようございます。もうちゃんと起きて、私なりの朝の祈りの真っ最中ですよ」

「あぁ……何だか素敵で爽やかな日曜の朝が一気にドス黒くなってます！」

カズキのこういった趣向は良く知っているが、慣れてもいるが、それでもどこか「うわぁ」と思ってしまう。アキは感じた事をそのまま表情に出す素直な性質なのでなおさらだ。

キーンが憧れているのは聖職の清らかな術者というより黒魔術の怪しげな術者な方だ。部屋にある置物も黒いロウソク立てやドクロ、魔方陣など怪しげな物ばかり。雰囲気もバッチリだ。

が、キーンにとって自分のやりたい事をやれている至福の時が、アキにとっていつも通りの戸惑いの時は、すぐに終わる。

「何バカな事やってんだ！！」

後頭部にムカマークを浮かべつつ、ミヤビの手から放たれる茶を置く用のお盆（金属製）。それは寸分の狂い無く予定通りのルートを通り、キーンの頭部に命中した。

「愚かな事をやってないでとっとと飯を食え飯を！　それとも、この春日（カスガ）　ミヤビの作った朝飯は怪しい祈りが無いと食えねぇってのか！？」

せめて手より先に口を出して欲しい。キーンの顔面からはプスプスと煙が出て、後頭部を打ちつけたためか倒れたきり動かない。

「ミヤビさん駄目ですよ！　私達二人はカズキ様のご両親にお仕えしているんじゃないですか！　そのご両親が外国にいる間は私達の主人はカズキ様です！　もっと大事にしないと――」

「このボクに魔導ガードをさせない攻撃をするとは……」

……せっかくのアキのフォロー。素直に受けておけば良い物を、キーンは起き上がって怪しい笑みを浮かべつつ、さらには右手の親指を立てながら余計な事を言う。

「ミヤビさん、あなた凄腕の戦士ですね♪」

「うるさいクソガキ。良いから飯を食えって言ってんだろ」

案の定、再び鉄拳制裁が降りかかる。……いや、鉄拳というのにも語弊がある。何せ、ミヤビが用いたのは足だからだ。キーンの額に踵を乗せ、そのまま踵を視点にして上向きにしたつま先を左右に振る。踵グリグリ攻撃だ。

その残酷描写には流石に慄いたのか、アキは叫び声を上げる。

「ミヤビさん駄目ですってば！！」
「騒がしいなー。一体何が……」

眠気眼を擦りつつ、キョウも客間のある隣の部屋から歩いてきて廊下からその惨状を見る。そして、沈黙。

「……先下降りてるぞー」
「見てないでキョウさんも止めるの協力してくださーい！」
「……はぁ」

逃げようと思ったがアキに言われて渋々ミヤビを宥める事に。一応居候の分際だ。早々断れない。……まぁ、キョウ自身女性の頼みに弱いというのも多分にあるのかもしれないが……。

なお、キョウの居候はキーンが二人のメイドに頼んで許可を出させ、キョウ自身は一人旅をしていると言っておいた。これなら、早く家に帰れという家出してきた子供に言うセリフは言われないだろう。

そしてその朝食。いつもながら豪華な物だ。花の模様がされている食器に綺麗に磨かれたスプーンやフォーク。パンにスープ、紅茶、ポテトサラダにプチトマトなど、全体的に洋風の献立だ。テーブルの下に置かれている皿とミルク、そしてキャットフードはダーク用だろう。ダークがそれを見てたじろぐ中、キョウは料理の豪華さに思わず失笑を浮かべてしまう。

「今日もまた凄いな」
「ほっほっほ。ミヤビさんの料理はどこに出しても恥ずかしくない

くらい凄腕ですからね」

会話を弾ませるキョウとキーンの左手側に水が置かれる。キョウの方はアキが、キーンの方はミヤビが置いた。そして先程の会話を聞いていたのだろう。ミヤビは憮然とした態度で断言する。

「料理だけじゃない。何だって凄腕だ」

……まさかとは思うが、キャットフードも作ったのだろうか。

キーンは納得したように頷き、ミヤビの方をジッと見る。

「なるほど。とりあえず我が仲間となっていざ闘いの地へ――」

「良いから食え、冷めんだろ！」

ピスッとキーンの脳天にミヤビの片手チョップが降り注いだ。反対側の席に座るキョウは良く飽きないなぁという半ば感心を含んだ溜め息を、後ろに立っていたアキはうんざりしたような溜め息を付く。

そして朝食を食べ終わり、キョウとキーンは口を揃えて言う。

「「ご馳走様でした」」

キョウは下で何とかキャットフードを食べ終わったダークを抱きかかえ、撫でて労い、キーンは「さぁて」と手を合わせた。

「さぁて、今日は日曜。予習復習の日ですね」

「まぁ、勉強なさるんですね。エライです！」

と、アキは正直にキーンを褒めるが、キョウとミヤビは薄々キー

ンの考えている事が分かるので何も言わない。
アキの言葉にキーンは「ええ！」としっかりと頷くと口の両端を引き上げて怪しい笑みを浮かべ、どこから出したのかマイ杖を掲げる。

「ええ！　今日は呪いの仕組みのお勉強です♪」

やっぱりキーンはキーンだった。ある意味案の定というべきか、アキは嬉しそうだった表情から一転。困ったような表情に変わる。ミヤビはすでに食器の片付けに移っている。イッツア無関心だ。

「学校の勉強じゃ無いんですか！　ミヤビさんも何とか言ってください！」
「？　何を？」

突然話を振られたミヤビは一瞬疑問で眉を下げるが、アキが叫んでいた事を思い出して彼女がキーンに何を言いたいのか察した。だが、その答えはアキとは違っていた。

「……飯はちゃんと食ったし、カズキはちゃんと学校の勉強はやってんだろ？　やる事やってんなら、休みに何したって良いんじゃない？」
「……ミヤビさん……」

ミヤビの言葉にジーンとなるキーン。

「魔法に理解を示してくれてありがとう！　良かったら僕と一緒に魔法の勉強を――」
「しねぇよ」
「暴力反対！」

キーンの言葉はミヤビの投げた言葉と盆で遮られる。それに対しアキが悲鳴を上げたのは言うまでも無い。
その後、キーンは自身の勉強――呪いの勉強――をしつつ息抜きにキョウやダークと様々な話をした。

夜。キーンが机に突っ伏して寝てアキが彼に毛布を掛けてあげている時、月島家の庭に何者かが蠢いていた。三人の人影。
頭から足元まで続く黒いローブを被り、金属製の額当てをして鼻から下は布で隠している。先日、キョータとキーン、カナデを付けていた者の仲間だろう。

「人の家の庭で何やってんだ？」

音も気配も消して闇夜で行動する三人に声が掛かる。

「カズキの家はでかいからなぁ。泥棒やら誘拐犯やら良く来るけどなぁ、あんたらも悪い人っぽいね」

ミヤビはその眼に敵意と余裕を滲ませつつ、続けた。

「大人しく帰るなら許す。……帰る場所は、アシュリアーナかな？」
「！　何故アシュリアーナの事を知っている！？」

侵入者側は単なるその家の者だと思っていたのだろう。まさか、自分達の来た世界の名前が出るとは思っていなかったのだ。
三人は次々に抜刀。ミヤビに襲い掛かる。

「騒ぐなよ。――」

だが、ミヤビはそれより早く懐に飛び込み、蹴りで一蹴。薙ぎ払う。

「――カズキが起きるだろ」

ドサッと倒れ、霞のように消えていく刺客達。この者達を現実世界に送ってきた者が、失敗したのを感知してアシュリアーナに戻しているのだろう。

「……この戦いの鍵を握るのはカズキだ。それは敵も知っている。どこにいたってアシュリアーナの魔は襲ってくる。私は、カズキを護るためにカズキの兄に頼まれてここに来たお手伝い(メイド)さん兼ボディガードだ」

それは、普通ならわざわざ口に出す事でもない。だが、今回は意味がある。物陰から様子を窺っている居候に聞かせてやるためだ。ミヤビは視線を家の近くの物陰に目をやり、声をかける。

「で、そろそろ真面目に聞いておきたいんだが、お前は何者だ？」

「……気付いていたのか」

その呼び掛けにキョウとダークはあっさりと物陰から出てきた。その理由は次のキョウの発言で明かされる。

「ま、アレだけ腕が立てば気配くらい探れて当然だな。……初めて会った時から疑問に思っていたさ。単なるメイドにしては四肢の筋肉に無駄が無い」

その言葉にダークが驚いている所を見ると、どうやらキョウはダークにもミヤビが相当腕の立つ者というのは知らせていなかったらしい。

キョウの言葉があくまで抑えている所を見ると、どうやらアキやカズキに聞かれないようにしてくれるらしい。それはつまり、少なくとも今現在は目の前の胡散臭い少年に敵意は無いという事。

ミヤビはそれを察すると腕を組み、チラリとダークの方を見る。

「ただモンじゃ無いのはその子もだろう？　アキは単に、動物と一緒に一人旅なんて変わってるって言ってたが、私にだってその猫がただの猫じゃない事ぐらいは分かる」

ハッキリ言って、四肢の筋肉まで観察されていた事に対して負けず嫌いというか意地での反論だった。見抜きには見抜きで対抗という訳だ。……まぁ、存在を知るだけで実際的には霊や魔力を探る術をミヤビは持っていないため、それは勘と言わざるを得ない。しかし、キョウに並びダークも観察して、ダークがどことなく人間染みている事が分かった。ジッと見るミヤビの視線を気にする仕草を見せたり、試しに与えてみたキャットフードを嫌がる仕草を見せたり。……まるで、猫の皮を被った何かのように。

ミヤビは視線をキョウに移し、その視線を鋭くする。

「……さぁ。私が何者かは名乗ったんだ。次はお前が正体を明かせ」

言外に言っている。雰囲気で言っている。白状しなければさっきの黒装束同様ボッコボコに蹴ると。

「……ああ。分かった」

そんなのはゴメンだし、何よりキョウはミヤビの正体が分かって

それが自身の良しとする者なら明かすつもりでいた。ただ、少し話す内容は選ばねばなるまい。

キョウは、あくまでアシュリアーナから来てしまった事を語る。実際にはその前に自身のいた世界があったのだが、それは『今後もしも必要になったらその時に話す』で良いだろう。

聞き終わったミヤビは、予想通り怪訝そうな顔をしている。

「……なるほどなぁ。……全部を話しているようには見えんが、カズキもお前を信頼しているみたいだし、ここは一応お前を信じるとしよう」

「そりゃ助かるよ」

キョウとしては、どうもキョータ達の知らない裏の所で何かが動いている気がして気になりはした。しかし、ここで深く聞いてしまえばこちらもこちらの事を深く話さねばならない。それはミヤビも同じで、キョウに対してまだ何かあると思っても推測しか出来ない。

（……ま、これだけは最終確認として確認しないとな）

深くを探れない状態で、その分からない事で悩んでいても仕方が無い。ここはカズキを護るメイドとしてこれだけは確認しておこう。

「……最後に一つだけ聞く。キーンに危害を及ぼさないだろうな？」

もしもほんの少しでも偽った様子があれば即座に行動に移す。ミヤビにはその覚悟があった。

「……ああ。……オレが近くにいる以上はさっきみたいなのからも護るよ」

その覚悟の燃える瞳に射竦められつつ、キョウはしっかりと頷いた。そんなのはミヤビに言われるまでも無い。キーンに限らず、キョータ達は皆正直すぎる。それはどこか、元の世界の親友に重なって放って置けそうに無いのだ。

その気持ちに嘘が無い事を彼の瞳を見て読み取ったのか、ミヤビは「ふんっ」と小さく鼻を鳴らして腕を組む。

「……ふんっ。……なら良い。メイドの私の仕事を取らない範囲で――……何だ？」

「ん、あぁ。悪い、つい」

怪訝そうに、若干不機嫌そうにキョウを睨むミヤビ。不覚にも小さく笑ってしまった。このままでは問答無用で実力行使をしてきそうだったため、キョウは弁解をする。

「いや、ホントゴメンって。……本当にキーンの事が大事なんだって思ってな」

「当然だ。私はカズキの兄からカズキを頼まれたんだからな」

そう言い切る彼女の顔は、自身の役目に対する誇りに満ちている。つい微笑ましくて、どこか嬉しくて、キョウは笑みを抑える事が出来なかった。

「だったら――」

そして朝。陽光が窓から差込み、鳥たちの声が心地良い。キーンは就寝用の白いローブを着た状態で伸びをし、陽光に顔を向ける。

「ふふふ。……素敵な月曜の朝ですね。こんな爽やかな日は――」

バッと彼は机の上に置かれていた杖を取り出し、上に高く高く、精一杯掲げる。その口の両端は引きあがり、怪しげな笑みを湛えている。

「――朝の祈りができますよ♪」

「起きたらさっさと着替えろ馬鹿者！」

「ミヤビさんっ！」

バカァンッという小気味の良い音を伴い、キーンの頭は傾げる様に傾く。いつも通り、金属製のお盆をミヤビに投げ付けられて脳天ドストライクという訳だ。

アキはおろおろとキーンの気遣いに行き、キョウはその様子を廊下から聞いていた。そして彼は苦笑しつつ、昨晩ミヤビに言った事を再度思う。

（……だったら、もうちょっと大事にしてやれよ。……物理的に）

第５３話　暴力メイド（後書き）

次回は長かった話を二話に分けたので若干短いです。……いっそ、来週一回待ってもらって、その次の週で二話纏めて更新ってのもアリかもしれませんね。

第５４話　初めてのアシュリアーナ（前書き）

今回は長いのを二つに分けて、さらにはどこかキリが悪かったので一挙二話更新です。……まぁ、その分来週はフェアプレイズＩＦの更新はお休みさせてもらうと思いますが……。

あ、サブタイの事ですが、実はまだアシュリアーナに行ってない子がいたなぁって思いましてね。ほら、一人だけ行かずに終わるって何か罪悪感が、ねぇ？（苦笑

第５４話　初めてのアシュリアーナ

月曜日。キーン宅。

夏休みに入って最初の月曜日。ようやっと休みに入ってお得感を感じられる日になった。平日が休みになってこそ休暇がありがたく思える。で、今日は夏休みの宿題をキーンの家で一緒にやるという名目で彼の家に集合。及び、アシュリアーナの様子を見に行こうという算段だ。

部屋にはキーンと居候のキョウの他に、キョータにカナデ、シノブ。そしてそれぞれの素体が集まっている。

「さぁ、早速アシュリアーナに行くか、それともそれぞれの苦手な宿題を終わらせてから行くか、どうしますか？」

「……いやっ。……それよかキーン……」

と、キーンはキョータとカナデ、シノブに尋ねるが、キョータとしてはキーンに対し、逆に尋ねたい事があるらしい。彼の視線は真っ直ぐとキーンの頭に向けられている。

「……どしたんだ？　それ……」

「それ？　どれ？」

「……頭だよ。……キーン君……」

『痛そうなのら～』

キョータの言葉が分からないと言いたげにキーンは首を傾げるが、その事は他の面々も気になっていたらしい。シノブとボボウが続く。

……実際、痛そうだった。キーンの脳天には何かでぶつけたのか大きなタンコブがある。人間を手抜きギャグタッチで描くと頭はお団子のようにまん丸になるわけだが、ちょうどダルマのような構図だ

と思ってもらいたい。ダルマの胴体がキーンの頭だ。
声には出さないが、カナデもその事は気になっており、心配しているようだ。……が、こげちやシャララはおおよその理由を察したためか納得したように小さく頷いただけである。なお、この家に住んでいて理由を知っているであろうフーイとキョウ、ダークも何も言わない。……それ所か、キョウはおかしそうに笑みを抑えている。及び、ダークに睨まれる。
キーンは「あぁ」と納得したように小さく頷くと自身の右手でタンコブを擦った。

「いやはや。ミヤビさんから一発、盆の一撃を喰らいましてよ～」
「……だからって……」

でかいタンコブだ。
ミヤビが主が相手だろうと容赦ない態度なのは知っているが、そして納得もするが、だからといってここまで大きいタンコブが出来るほど強く打ち付けるものだろうか。

「キョウさんは止めなかったんですか？」

キョータが半ば呆れを含ませた様子でキーンを見つめる中、カナデの問いにキョウは肩を竦めつつ、あくまで飄々と答える。

「だって下手に止めるとこっちにまで飛び火が来そうだったんだもん」
『あんた一応居候でしょ……』
「まぁまぁ。そんな事より、どうします？」
「……アシュリアーナに行くか、宿題を終わらせるか……」

流石のシャララもあまりに自然体なキョウに呆れて口を挟むが、

このままでは話が進まないと判断したのだろう。キーンが議題を戻し、シノブは考えながらといった様子で顎に手を置き、呟く。
キーンはそれに対しその通りと言いたげに人差し指を立てて口を開いた。

「そう。……本来なら宿題を出来るだけ終わらせて今後動きやすくしたい所ですが、キョウさんもいますからね」
「あ、そっか。キョウさんって向こうの人だから早く返してあげないと。……あれ？」

キーンの言いたい事を理解したらしいカナデは途中で言葉を止める。そもそも何故アシュリアーナの人間であるキョウが現実世界に来ているのか。

「僕もその事は昨日聞きましたが、知らないそうです」
「そりゃもう全くな」

カナデの問いたい事を察したのだろう。キーンはそれに対し答え、キョウも頷く。何でも昨日朝食を食べた後、呪いの勉強をしながらそういった質問もしたらしい。

「……そうなんだ」

呪いの勉強……。相変わらずのキーンクオリティにカナデは苦笑いを浮かべつつ納得する。

「……一応言っておくと、オレの方は気にしなくて良いぞー」（多分、次元移動でこっちとアシュリアーナ行き来出来るだろうから）

アシュリアーナはゲームの中であり、同時に現実世界同様人の命

の重さがある。キョウから見て、キョータ達はそう認識している感がある。しかし、先日公園をぶらつきつつ探り、この現実世界とアシュリアーナは鏡合わせと言うべき関係だという事に気付いた。

アシュリアーナという世界はゲームという仮想現実の中だけの存在ではなく、実際に在る。そしてその入り口となる媒介が、『フェアプレイズ』というゲームという訳だ。……いや、もう一つ忘れてはいけない要素がある。キョータの素体であるボボウだ。昨日、キーンから質問されると同時にキョウもいくらか質問をしていたのだ。それによると、アシュリアーナへの移動にはボボウが必要なのだそうだ。

なお、これらのキョウの推測は子供達には話していない。彼等はまだ自分をアシュリアーナの住人で何故か現実世界に来たと思っている。アシュリアーナとはまったく別の世界から来たという発想には至っていない。ならば、そのままでも別に問題は無いだろう。

実際に在る世界なら、次元移動で一人だろうと行き来できる可能性がある。故に、気にしなくて良いと言ったのだ。ようは、どちらでも良いと。

「……いや、やっぱりキョウをアシュリアーナに送り届けよう。向こうの世界にはキョウさんがいなくなって心配している人がいるかもしれない」

「あぁ、そういえばキョウさん、キサヤさんと友達でしたね。……確かに心配しているかも」

キョータの言葉にキーンが続き、キョウは右手を腰に、左手で頭を掻きながらキサヤの人柄を思い出す。

「ん～……アイツが心配、ねぇ……。……無いとは思うが、一応見に行ってみる、かな……？」

語尾が疑問系って、どんだけドライな仲なのだろう。
子供達や素体はその事で苦笑いを浮かべ、キーンは思い出したように口を開く。

「あ、思い出したのですが、シノブ君って一回もアシュリアーナに行ってませんよね。折角ですし、今回行ってきては？」

言われて見ればそうだ。
シノブは最初キョトンとして、遠慮っぽく上目遣いで窺ってくる。

「えっ……。……いっ、良いの……？」
「ええ。今回はあくまでキョウさんを送り届けるだけ。もし何かあっても、カナデさんか僕が一緒に行けば問題ないでしょう」

そのキーンの言葉に、シノブはうずうずと喜びを隠しきれ無いという風に口を笑顔で引き上げた。

「う、うん！　行きたいよ！」

その喜びようから見て、やはり行きたかったのだろう。シノブは素体のこげちの能力もあり後衛、現実世界からの援護が役割のようなものだが、やはり小学四年生の男の子。異世界等のファンタジーには惹かれるモノがあるのだろう。
キョータにキーン、カナデは喜びを分かち合うように笑みを送り合うと話しを次に進める。誰が行くかだ。

「……さて、それじゃあ誰が行くかですが――」
「キーン君とキョータ君が行きなよ」
「「「へい？」」」

彼女から提案するとは珍しい。カナデの提案で同時に彼女の方を向くキョータとキーン。そしてシノブ。キョウはまだ付き合いが浅いためか、逆に同時にリアクションを取った男子達に驚いていた。

カナデは「そんなに驚く事かなぁ」と苦笑いを浮かべつつ自分の考えの詳細を言う。

「えっとね。今回はキョウさんをアシュリアーナ、あわよくばキサヤさんの所に送り届けようって目的だよね。だったら自己紹介の意味を兼ねて、一回会ってる私より会った事無いキーン君の方が良いと思うの」

「ふぅむ……。そりゃ確かに一度自己紹介はしておきたいですが……」

そりゃ、魔法使いフェチの変人である反面、彼は礼儀正しく理性的な方であるため、一度は挨拶と自己紹介はしておきたいと考えていたのだろう。キーンが「むむむぅ」と唸っている時、キョータは明るい口調で口を挟む。

「良いじゃん。キーンもシノブもキサヤも仲間だもんな。ちゃんとお互いの事を知ってもらいたいし。んで、仲良くもなりたいしな」

皆が和気藹々としていて、幸せなのを喜ぶ彼らしい。そんな彼に、キーンは色々な危険性を考えていて馬鹿馬鹿しくなってきた。クスッと微笑み、頷く。

「ですね。……それじゃあボボウ君、お願いできますか？」

『うー。分かったのらっ！』

ボボウは元気にシュタッと手を上げて意識を集中。その直後、部

屋に眩い光が満ちた。今回はキョータとキーンを始め、シノブやキョウも一緒だ。

第５４話　初めてのアシュリアーナ（後書き）

何でキーンの頭にタンコブがあったかは前話を確認ください（笑）
。

ってか今思えば、我ながらめんどくさい構成にしたものですね～。
それぞれが知っている、認識している事柄が微妙に違うのでこちら
でも脳内整理に手こずります。

次話の５５話は一時間後の１１時に更新されます。

第５５話　世話好き教師（前書き）

まぁ、前話の流れから誰かは大体分かりますかね、世話好き教師（笑

第５５話　世話好き教師

バシュゥっとアシュリアーナの平地に光が迸る。と同時に四人の人間と三体の素体、そしてダークが空中に現れた。そして……。

「ふぎゃ！」

運悪くキョウが三人のクッションとなる。下から順に、キョウ、キョータ、キーン、シノブ。そしてダークとこげちはシノブの両肩にちょこんと着地した。他の素体達は宙に受けるので問題ない。

なお、キョウはイザという時のためだろう。自身の魔力を増幅させるローブを予め着ている。

『キョータ、大丈夫なのら～？』

「ああ、大丈夫。……ってかそれを言えば、キョウの方がきつかったんじゃないか？」

上から順々に降りていく中、ボボウはキョウの上から起き上がるキョータに尋ね、キョータはキョウの方を気遣う。彼は自分含め、上に2人も乗ったのだ。相応に重かった事だろう。キョウは「よっこらせ」という言葉が似合うようにゆっくり腕で上体を持ち上げ、立ち上がる。そして、前面の土埃を払いながら返した。

「まぁ、何とかな。……しっかしここは……」

改めて辺りを見渡すと、どうやらクルダとは違う事が窺える。土は草の緑に溢れ、辺りに人の住んでいる家も無い。クルダでも人の少ない郊外というものが存在したが、道はちゃんと補整されていた

しポツポツと家もあった。

「……リキトア、かな……」

キョウは有事の際にやってくるキョータ達と違いこの世界を渡り歩いている。それぞれの国の特色は知っているはずだ。その彼が言う以上、ここはリキトアで間違いないだろう。

「……そうなると、キサヤさんとは合流できそうに無いですね」

「あ～そっか。キョウをこっちに送り届けたは良いけど、キサヤがいるのはクルダだっけ」

キーンとキョータが順々に唸る。

どうせ送り届けるなら、キサヤが先生役としているキリガの町とまではいかなくてもせめてクルダに着いて欲しかった。このままキョウを置いていくのはどこか無責任だ。……キョウの実力ならそう簡単に倒される事は無いだろうが、道中何があるか分からない。

キョウは苦笑交じりで気にしなくて良いと言おうとしたのだが、それより早く口を開いた者がいた。

「まぁ、お前等が気にする事じゃ――」

「僕がどうかしたか？」

「「「！　キサヤ！」」」

キサヤが後ろからひょっこり輪の中に顔を出した事で驚く子供達と素体達。キョウやダークも驚いている所から見て、彼等も気付かなかったらしい。……流石盗賊。気配を消して近づくのは十八番という事だ。しかし、前提からしておかしい。

「けど、何でお前がリキトアに……」

キョウの問い掛け通り、キサヤはクルダの片田舎、キリガの町を拠点に盗賊活動をしていたはずだ。今のご時世、出張活動は得策ではない。むざむざリスキーな選択をするほどキサヤは自惚れてはいないし、腕が立つからこそ油断や予断無く活動する事を心掛ける。

キサヤの方も疑問に思った事があるらしく怪訝そうに片眉を下げるが、それでもキョウの問いに答える。なお、今のキサヤは藁(わら)で編まれた籠を持っていて中にはパンなどの食料がある。

「……お前とクルダで別れてからしばらくして、クルダ王のジュリが来てね。戦争孤児のあいつらを引き取ると。改心したって噂を聞いた時は半信半疑だったけど、一国の王から頭を下げられちゃあね。断れないよ」

仕方が無いとでも言いたげに肩を竦めるが、その時の誠意でジュリの事を信じたらしい。彼の事を語る顔に嫌悪感は無い。けど、とキサヤは続ける。

「……けど、何だってお前がキョータ達と一緒に？　僕は買い物の帰り――」

クイッとキサヤの首が自分の後ろを指す。両手が荷物で塞がっているため、首で指したようだ。おそらく、その方向に街があるのだろう。

「――でキミ達を見つけたんだけど。……ってか、増えてないか？」

最初のお前はキョウに対して。後半はキーンとシノブの事だろう。しかしまぁ、キサヤの問いももっともだ。彼女から見たらいつどういった経緯でキョータ達とキョウが出会ったのか気になるだろう。

そんな事もあり、キーンの紹介を含めてキョウが説明した。

「ああ、この紺色ローブはキーン。緑髪の大人しそうなのがシノブ。キョータとカナデのダチだとよ。オレは……数日前にこいつらと会って今もばったりご対面って感じかな」

……嘘を付いても飄々としていられる人だから説明役として都合が良いというのもあるが。確かにキョウと出会ったのは数日前だが、今ここで彼と再会した訳ではない。しかし、まさか別の世界にキョータ達もろとも行ってましたとは言えない。彼の嘘は深い所まで踏み込まれないためのものだった訳だ。

一方、キサヤはそう言うキョウを不審そうな目で見ている。

「……ふぅ～ん。……お前って平然と、飄々と嘘付くからなぁ……。……まぁともかく――」

と、彼女の瞳は不審から快活な明るさに変わってキーンを見る。

「――初めましてだな、キーンにシノブだっけ」

「ええ。初めまして、キサヤさん。（将来的には）大魔法使い（志望）の月島数騎です。キーンと呼んで頂きたい」

文章的には（括弧の中を除けば）ちょっと変わった自己紹介で済むが、それでもキサヤは感じた。そして確信した。こいつ、月島数騎は変な奴だと。

（いや、ちょっと待て）

とキサヤは内心で思いなおす。そもそも、魔術師といえばキョウも喰えない性格だ。……魔術師には変り種が多いのだろうか……。

……キーンの自己紹介を聞くまではシノブの方に気が向いて――カナデみたいにボケーとして大人しそうだから――少しからかおうと思っていたのだが、そのプランもしっかりと崩れてしまった。

キサヤが自身の推測の渦に飲まれようとしている時、引き上げる声が掛かる。

「……ってか、お前どこに帰る予定だったんだ？　キリガの子供達はジュリに任せてこっちに稼ぎ拠点を移して、その拠点への買い物帰りとか？」

「ん、ああ」

キョウに呼ばれて我に返ったキサヤは顔を上げて口を開く。

「気に食わない事に、おおよそその通りだな。王がちゃんとしたから治世が安定して、向こうの方が稼ぎやすいってのはあるけど、僕自身色々な所を回ってみたかったからね。リキトアに移って空き家を頂戴して、今は買い物帰りって訳だ」

この世界ではキサヤの職業である盗賊も正当な職業だ。治世が安定して道中の魔物が減ればそれだけ仕事がしやすくなる。盗賊が正当な職業として成り立っている辺り、まさしくファンタジーの世界である。

「……で、また先生をやってる訳か」

「！？　なっ！？」

キョウの言葉でキサヤ動揺。どうやら図星らしい。が、言い当てたキョウはキサヤの方を見ずに先程キサヤが向いた方（町）とは反対の方を見ている。及び、言い当てられた理由を暗に言う。

「向こうからちっこいのが走ってきてるぞー」
「「キサヤー！」」」

幼い子供達の声。三、四人だろうか。キサヤは溜め息を付き、近づいてきた子供達と向き合う。

「……お前等なぁ。念のために大人しくしてろって言ったろ？」
「だって～」
「だってじゃない。今はまだ危険な時代なんだから」

等とキサヤが子供達を注意している時、キョウはキョータ達にけらけらと笑いかける。

「大方、こっちでも孤児を見つけて放っておけなくなったんだろうな。こう見えて、結構キサヤって世話好きなんだ――」
「おい、キョウ」

キョウを呼ぶキサヤ。その顔は言っている。「余計な事をぺらぺら笑顔で言うな」と。及び、反撃タイムだ。

「……ソラの件、口にされたくなかったら黙れ」

キョータやキーン、シノブ、素体達。そしてキサヤが先生役を請け負っている子供達にとっては何の事か分からなかったが、それがキョウにとっての地雷だったのは間違いないらしい。……それを指されたキョウの顔から察するに、よっぽど恥ずかしいエピソードだったようだ。

「！　てめぇキサヤまだ言うか！　照れ隠しなら他に言葉があるだろう！」

「別に照れてないっ！」

口ではそう言うが、実際キサヤの反撃は世話好きと言われた事に対する照れ隠しもあったのかもしれない。現に、キョウの照れ隠しという単語でキサヤの血気はさらに上がった。

キサヤとキョウがいがみ合い、キョータや素体達は呆然。リキトアの子供達もまた、先生が珍しく怒っているのを見て呆然としている。……ダークが慣れきった溜め息を付いた所から見て、割とある事らしい。

二人がさらに噛み付き言葉を重ねようとした時、少し離れた辺りからズドォッと爆音が鳴り、煙が立ち昇る。

「！　何だ！？」

「あっちは……さっき僕が買い物してきた町の方角じゃないか！」

驚くキョータと煙の立ち上る方角を見て高く声を響かせるキサヤ。言われて見ればなるほど確かに、先程キサヤが首を動かして指した方角だ。さらに、風に乗って叫び声が聞こえてくる。おそらく、業魔王側の戦力からの襲撃だろう。

第５５話　世話好き教師（後書き）

いやはや。個人的な主観ですが、飄々と気軽そうに見えて、実際キサヤも結構面倒見が良いんじゃないかなと思いましてね。でなければ、キリガの町で子供達の先生役なんてやらないでしょうし。

では、十中八九来週はお休みする事になるので、また再来週にお逢いしましょう。

第５６話　タッグバトル（前書き）

お待たせしました。かれこれ、２週間ぶりですかね。……少し前半の話を弄ってはいたけど。少しとはいえ、削れる所は削って読みやすくってね。

第５６話　タッグバトル

キョータとキーンは即座に町へと走り出し、キョウはそんな三人の背に声を張り上げる。

「キョータ！　キーン！　悪いけど町の方はお前たちに任せた！」
「えっ？」
「行きましょう、キョータ君！」
「えっ、あっ、うん……」

キョータはキョウの言葉に振り返るが、すぐにキーンに背中を軽く叩かれて進むように促される。キョウの方は気になるが、今は困っている人達の方が優先だ。キョータはそう判断し、意識と動きを前へ戻した。

街に着くと、人々が濁流のように押し寄せてきた。早く町から避難するためだ。キョータとキーン、ボボウとフーイはその流れに逆らって進み、とうとう町を攻撃する対象をその目に捉える。

「！　やっぱり――」
「僕達の世界の素体でしたね」

炎に焼ける町の中、狂気を振り撒く者は二体。
一体は牡鹿を思わせる風貌をしている。黄色く、大きく伸びた２本の角。白銀の装甲から白く、しなやかな筋肉が垣間見え、全体的に落ち着いた雰囲気を纏っている。例えるなら、悟りを開いた聡明な仙人といった所だろうか。

もう一体はゴリラ型。関節部を除いて全体的に硬質で、白兵戦を得意とする近接型というのが窺える。中でも赤い拳は大きく、重量感がある。攻防共に重宝するだろう。カラーリングだが、顔や胴体、拳や膝から下は赤い装甲で包まれ、上腕や太股（フトモモ）など一部の箇所は緑だ。

キョータとキーンは互いに目配せすると、次にそれぞれの素体に視線を送る。

「ボボウ！」
「フーイ、行きますよ」
『分かったのら！』
『御意』

一方、現実世界。牡鹿型とゴリラ型を駆る者達は……。

「おっ！　こいつらかぁ」

鈍った銅の髪の色を持つ少年――歳は小学五年位だろう――は興味とワクワクした関心を画面の向こう、自分達の素体と相対する者達を見る。

ベッド――二段ベッドの一段目――に座ってコントローラーを握り、指示通りに町を襲っていた訳だが、ザラマンデル達が現れた事で興味のあまり、ベッドから腰を上げて身を乗り出した次第だ。

「……乗るなよ剛也（ゴウヤ）。重い」

だが、自分の前に座っていた人物から注意を受けてしまう。注意

をした人物は床に座ってコントローラーを握っており、その肩に剛也が乗りかかって来たという顛末だ。目を合わせず、鉄のような黒い髪だけを剛也に向けて雰囲気で言っている。

重いんだよバカ。とっとと降りろ。

と。剛也と呼ばれた少年は「悪い悪い」と適当な口調で謝り、腰をベッドに戻しながら自分に容赦ない視線を送ってきた人物に笑いかける。なお、二人の傍にはコントローラーの他にキーボードが置いてある。

「けど、面白そうな奴等だよな。新星のように突如フェアプレイズに現れて日本ランカーをバッタバッタと倒していく。そして遂にはクルダ王も倒して……すげぇって思わねぇか？　鈴也（レイヤ）」

鈴也と呼ばれた少年はベッドの側面に背中を預け、静かな口調で口を開いた。

「……まぁ、ね。……個人的には、運営から僕等上位ランカーの兄弟に町を襲う命令が届くって方が気になるけど」

鈴也の剛也に対する態度がやけに容赦ないと思ったら兄弟だったらしい。剛也が座っている二段ベッドは普段二人が寝ているベッドなのだろう。ちなみに、剛也はゴリラ型。鈴也はユニコーン型である。

数時間前、時間で言えば夜間。二人のパソコンにメールが届いた。座標が書かれており、その町を攻撃しろというものだ。メールが届く二人が第一に思ったのは、「あぁ、とうとう来たか」というものだ。ランキングに入っているプレイヤーに町を攻撃しろだの特定の素体（ボボウ）を倒せというおかしなメールが来るのはネット上でも噂になっ

ており、嘘かホントか、闘った後素体が壊れるという話まで出ている。

理由と理屈は分からないが闘った後素体が壊れるかもしれないリスク。それを知ってなおその命令を受け入れたのは、強者としての好奇心と言う他無い。鈴也も冷静な口調ではあるが、内心は剛也同様、どのカタログにも載っていない未知の相手に興奮しているのだ。

鈴也は髪をベッドに擦りつけながら上を向き、剛也を見る。なお、兄弟と書いたが厳密に言えば双子である。

「相手も二体。どうする？」

「あ～……オレは拳がでかくて龍みたいな奴。アレも多分パワー型だろ」

ようは、対抗してみたいと。

「分かった。それじゃあオレは羽の生えた奴だな。……それと剛也」

「？」

苦笑交じりで頷いて視線を画面に戻した鈴也は、声だけを剛也に向ける。

「お前の素体のスキル、パワー型って言うのか？」

剛也はそれに対し、ククッと堪えるように笑い、コントローラーから片手を離してしれっと答えた。

「うるせぇよ。……んじゃそろそろ――」

「――行こうか」

剛也の意識と視線が画面に向かうのと同時に、鈴也も完全に意識をフェアプレイズの方に向ける。

「！　キョータ君！」
「分かってる！」

轟！　と空を裂きながらゴリラ型の拳がザラマンデルへと向かう。ズルフェは一瞬ザラマンデルへのサポートかもう一体への警戒か迷ったが、それは結局一瞬。バチッと空気の爆ぜる音が聞こえたかと思うと、牡鹿の角に電気が発生している。目一杯頭を上げ、電撃を収束している様子だ。そして、角が振り下ろされると同時に雷が一直線にズルフェに向かってくる。

「っ！」

ズルフェはそれを避け、牡鹿型を警戒しつつ雷の行く先を見る。頭を上げて電撃を収束。角を振り下ろす事で電撃を放つ。初見とはいえ避ける事が出来たのは、分かりやすいモーションが故だろう。……いや、それ以前に、直前で狙いが甘くなったような……。

ズシャァ！

……が、威力は高いらしい。ズルフェにかわされた後屋根を掠めたのだが、通過した箇所は縁に黒ずみを残すだけで消し飛んでいる。

「……これは……簡単には加勢には入れさせてもらえなさそうですね……」

ザラマンデルの方は元々目先の事に集中してしまう性質のためゴリラ型の方と交戦を開始している。そしてズルフェもまた、最低限ザラマンデルとゴリラ型の戦いを意識の片隅に入れつつ、牡鹿型との戦いを開始した。

時間は僅かに遡る。

ゴリラ型のパンチが迫る中、ザラマンデルは拳を固めて前へ突き出した。

「おぉおおおっ！」

互いの拳はガギィンッという硬質な音を伴いつつ弾かれ、互いの上半身が仰け反る。

「！　こいつ――」

よほど自分の素体のパワーに自信を持っていたのだろう。剛也の顔は驚きで満たされる。

「――オレのゴリリの拳に打ち負けない！？」

「……だからいつも思うが、そのネーセンどうにかならないか？」

呆れたように尋ねてくる鈴也。お陰で雷の標準が鈍り、狙いが逸れてしまった。だが、双子のネーミングセンスの悪さには互いに言いたい事があるようで、剛也の方も不満そうに口を尖らせて鈴也を見た。

「んだよ～。鈴也だってサンダーディアなんて厨二チックな名前付

けやがって」
「な、何が悪い！　カッコいいじゃないか！」

どうやら自覚はあるらしい。戦闘中であるにも関わらず後ろの剛也を見て恥辱やら怒りやらで赤面している。なお、ディアのスペルは『Ｄｅｅｒ』。ようは、鹿である。

「ほれほれ。闘いに集中しろ～」
「むっ……ぐぅ……」

剛也より冷静という自覚を持っていた鈴也としてはその剛也に窘められるのがこれ以上無いほど屈辱だった。

「……分かった。ここからはどちらが先に互いの相手を倒せるか競おうじゃないか」
「上等だ」

……既にお気づきの方もいるかもしれないが、この双子は仲が悪い。互いが互いを反面教師とし、反対であろうとしているのが何よりの証拠だ。

「むっ？」
「……おや」

一方、アシュリアーナのザラマンデルとズルフェ。ゴリリとサンダーディアが一時動きが止まって――ちょうど二人が現実世界で睨みあっている時だ――警戒していたが、二体の纏う雰囲気が変わった。……何か来る。

「……それじゃあ、まずは僕から」

そう言って鈴也は器用に足元に置いてあるキーボードを足の指で押す。途端、サンダーディアの角に雷が集束されていく。それと同時に頭が上がり、そして振り下ろされる。

「！　くっ！　こっ、これはっ……！」

避ける事が出来なかった。先程の雷は小手調べだったらしい。今度のは避ける事が出来なかった。雷を放つ前に暴風を吹かせて動きを阻害。そこに集束ではなく拡散型の雷。ダメージは低いが、避ける事は容易ではない。命中性重視の属性攻撃だろう。

「！　キーン！」

「こっちは大丈夫！　ッ！　キョータ君足元っ！」

「へっ？　っ！　うっ……わっ……！？」

突然地面から巨大な木がメキメキと大地を割って競り出てきた。足場が不安定になり、バランスを取るのに精一杯なザラマンデル。そこに迫るゴリリの拳。

「しまっ……！　うわぁぁあああっ！」

ゴリリの拳を受けたザラマンデルは後ろに吹き飛び、先程まで無かった物に衝突する。

「な、なんだ……？　……これは……」

呻きながら立ち上がり、後ろを見るザラマンデル。

元々ザラマンデルは装甲が厚く、敵の傍で戦う白兵型。まともにパンチを受けても、そのダメージは最低限に抑えられる。彼が割りとあっさり起き上がる事が出来たのはそのためだ。

そして、ザラマンデルが見たのは土の壁だ。無論、そんな物先程までは皆無だった。とすれば、あの二体――確率の高いのはゴリラ型だろう――の能力で出したという事。

「木や土……これって……」

《間違いないら。自然を操るチカラ……あいつ等はリキトアの戦士なんらよ！》

ボボウの言葉が言い終わると同時に第二波が来た。単なる土壁は巨大な腕へと形を変える。振り下ろされる土の拳。ザラマンデルはそれを左拳で砕き、同時に、迫っていたゴリリの拳を右拳で弾き返す。

第５６話　タッグバトル（後書き）

次回は色々解説や設定があるのでやや長めです。

いやはや。余談ですが、久々に処女作である『明日へ』を読み返してみて、色々思うもんですね。懐かしいし、今と昔の違いとか自分で認識できたり。お陰で、自分の書き方を思い出せたり。……かれこれ相当ブランク長かったですからね～。

……思い出せた後に書いた話は５８，５９話ですけどね（苦笑）。

もうちょっとお待ちください。

第57話　スキル（前書き）

今回は結構長くなってしまいました。まぁ、結構設定とかは凝りましたけどね（笑）。

第57話　スキル

キョータ達の世界に存在する、ゲームとしてのフェアプレイズ。このゲームの主要となる国（ＭＡＰ）は四つ。クルダ。リキトア。キシュラナ。そしてフェルシアだ。

各国には『永劫契約』というシステムが存在し、それを交わす事で各ＭＡＰを自由に移動する事は出来なくなる――移動のためには特定のアイテムが必要――。言うなれば、自分の属したい国専属の護衛になるという事だ。しかし、自由に各国を渡れなくなる代わりに余りあるメリットを得る事が出来る。

それが、各国の特徴に沿った『スキル』である。

リキトアに属した場合のスキルは、一言で言うなら属性攻撃だ。水や土など、自然に在る物を利用して攻撃するスキルである。所属すると決めて以降、レベルアップのたびにスキル成長ポイントが溜まっていく。そのポイントを使って各属性攻撃を取得。そして強化していくのだ。ちなみに、所属して最初のスキルはポイントゼロでも取得できる。注意点として、それらのスキルはいきなり強力な技を覚える事は出来ず、順を追う必要がある事だろう。例えば、土属性レベル一のスキルを覚えたとしても、次にいきなりレベル五へは飛べないわけだ。

無論、一つの属性にポイントを振り分ければ振り分けるほど術の準備時間やクールタイムは短くなり、技の威力は上がるが、育成方針は人それぞれ。満遍なく振って万能型にするのも手だ。例えば水を特化させたとして、戦う場所（フィールド）が草原や岩地など水の無い場所では完全に白兵戦で勝つしかなくなるだろう。なので、ある程度戦い慣れた上位プレイヤーは二つ以上の属性をこなす事が多い。

そして、このスキルにはさらに面白い点がある。

「チッ！　やっぱりこいつパワーが高い！」

土の拳を砕かれ、自身の拳も弾き返されたゴリリ。そしてそれを悔しがる剛也。ならばと、剛也は足元のキーボードのキーを押す。手はコントローラーで塞がっているので足で押すしかないが、リキトアプレイヤーは大抵こんな感じだ。

弾き飛ばされたゴリリが地に足を着けた直後、再び地面はメキメキと割れて太い木の幹が現れ、ザラマンデルに迫る。

「むっ！　またかっ！　炎拳（ファイアブロー）！」

やはり木と炎では炎に軍配が上がるようだ。ザラマンデルの炎の拳はしっかりと幹を捉え、パンチの威力と炎の火力で巨木を焼き尽くしていく。

先程言った面白い点だが、まず最初にこれだけ言っておこう。

覚えるスキル属性の選択に『木』は存在しない。

それは、『木』という属性は複合属性だからだ。力強い木々は豊かな土と豊かな水によって育まれる。つまり、『木』のスキルを覚えるには『水』と『土』の二つのスキルランクをある程度まで高めなければいけないのだ。二つの属性が合わさって初めて発現するスキル属性なのである。

そして、特殊なのは雷もまた同じ……。

「……やはりこの攻撃は当たるか。次は奴の回避パターンを見極める……！」

再び角に集束される雷。行動阻害用の風と拡散型の雷撃。その効果を確認した鈴也は次の手を打つ。

プレイヤーには、それぞれ癖というモノが存在する。右側に攻撃が来たら左へ。左側に攻撃が来たら右に避けるのは想像に難くないが、では、中央ならどうだろう。右にも左にも、空中であれば上にも下にも避けられる状態。そういった選択の自由がある時、人は無意識にある一定の選択をするものだ。例えばＲＰＧのダンジョン。ＭＡＰが無い状態で左右のどちらを選ぶか。人により違えど、そこには無意識に選択してしまうパターンが存在する。

鈴也はそれを見極めて戦う、分析型のプレイヤーなのだ。感覚として、少しずつ詰みに近づいていく詰み将棋の感覚に近いだろうか。

「また雷ですか。何度来ても――！　体が……」

動かない。

どうやら、先程の攻撃には雷によるマヒが付加されていたらしい。鈴也達ゲームだと認識しているプレイヤーにとってはバッドステータスの一つだが、キョータ達のようなフェアプレイズ内部にいる場合の認識としては、感電で体が上手く動かない状態だと思ってもらいたい。

「クッ！　間に……合え！」

太い柱状の雷槍をすんでの所で避けるズルフェ。

「……広範囲の雷でマヒを狙い、相手の動きが止まっている間に中

央へ攻撃。相手も中々やりますね……」
「……一回目。……右、か」
ズルフェの感心と、その中に余裕を含ませた不敵な笑み。そして、鈴也のデータもまた着々と溜まっていく。
（……念のためだ。まだまだ実験が必要だな……）
何分未知の相手だ。念には念を入れる必要がある。鈴也はここから様々な攻撃パターンを繰り出していく。
雷だが、これは『風』の属性ランクを一定（スキルランク二十）まで高めると木の枝のように分岐して現れるルートだ。一方、例えば雷を選べば元々の風を使えなくなるというのは無く、スキルポイントを振れば双方成長させる事が可能である。
また、先程スキルレベルは一から五などいきなり飛ぶ事は出来ないと言ったが、『木』と『雷』は多少特殊だ。『木』は『水』と『土』の成長度に応じてスキルランクが上がっていくので、わざわざ『木』を高める必要は無い。そして『雷』も、途中からスキルツリーが分岐する事で習得という特殊な習得法のせいもあり、習得した技のランク＝風のスキルランク（二十）となる。つまり、雷は一、二、三と順を追う必要なく、いきなりランク二十の技を覚える事が出来るのだ。……まぁもっとも、そこからはそれぞれの判断で『風』か『雷』でポイントを振っていく事になるのだが。
……なお、一応属性として『火』はあるが、自然界にそのまま火がある訳でもなく、素体が火属性の場合、その素体に纏われる炎を基点に使わねばならないという事で応用性が低く、他の属性と比べて極める人はやや少ない。……攻撃力は全属性でトップではあるの

だが……。

無論、このような有用で強力なスキルは他の国にも用意されている。

クルダに属した場合は攻撃力や防御力、ＨＰなど基本パラメーターへのボーナスだ。本来ならそれらの数値はレベルアップでしか上がらないが、クルダに属するとそれだけでレベルに応じたボーナスが与えられるのだ。つまり、素体のレベルが高ければ高いほどボーナスの数値が高くなるのである。

レベルアップの概念だが、これは他のゲームと大差無い。自分の素体をフェアプレイズに登録した時は人間型だろうが幻型だろうがレベルゼロから始まり、他の素体や遭遇怪物（エンカウントモンスター）を倒して一定の経験値を溜めるとレベルアップ。パラメータアップ用ポイントが纏めて蓄えられ、それをプレイヤー自身が自由に割り振っていく形だ。故に、全く同じ素体でも扱う人間によって特徴が現れる。まさしく、千差万別、十人十色という言葉が相応しいだろう。長所を高めるのもアリ。弱点を補うもプレイヤーの判断次第という訳だ。

驚くべき事に、これらの設定や概念はたった一人の青年が立ち上げたモノだ。……プログラム開発に関与したのは多く居たが、その全てが謎の死を遂げるなど、きな臭い噂が立ってはいるが……。

ゴギャン！

三たびぶつかり合うザラマンデルとゴリリの拳。ゴリリの攻撃をザラマンデルは見事に弾き、そしてゴリリもまた、見た目と違い機敏な動きでまだ一発もザラマンデルの決定打を受けずにいた。しかし、双者の心情は全く違う。

ザラマンデルは拳を交えた後距離を取り、ここまでの打撃戦で感じた事を考える。

（……やっぱりだ。クルダの奴……拳が鉄球みたいなのに比べてパンチが軽い。……このゴリラの方が拳が小さいからか？）

確かに質量とスピードはそのまま威力に反映されるが、この場合は先程述べたスキルのせいだ。

リキトアはあくまで周囲の自然を利用した間接的な属性攻撃。その多角的、かつ多彩な攻撃で相手を追い込み、翻弄する事に真髄がある。しかし、直接の打撃戦では攻撃力や防御力、機敏性など、基本的なステータスにボーナスが掛かるクルダ陣営の方に軍配が上がるのである。ゴリリの拳がクルダのフィストに比べて軽く感じたのはそのためだ。

そしてその事は剛也も理解しており、彼の顔には僅かに焦りが見え始める。

「チッ！　やっぱりリキトア陣営のパワーじゃきついか！　……だったら……」

だが、その焦りはすぐに表情の裏に隠れる。後半の言葉を紡ぐ彼の声色は酷く静かだ。それは、独特のプレッシャーだった。荒々しい獣のそれではなく、凛と張った風も波紋も無い水面の如く、静かな緊張感を醸し出している。その気配を真後ろに感じている鈴也は、溜め息を抑えつつ小さく微笑んだ。

（……ふっ。……やっと本気になったか）

鈴也が分析型のプレイヤーだとすれば、剛也は感覚型、直観で闘うスタイルだ。普段は騒がしく、集中力もへったくりも無い。リキ

トアのランキングでもギリギリベスト十に入るくらいだが、一度スイッチが入ればその集中力は圧巻と言う他無い。戦場と戦況の全体を見て、最善手を直観で選び出す。その状態になれば、リキトア内ランキング一位の鈴也ですら弄ぶほどだ。

完全感覚型のプレイヤーのため自由にその集中力を発揮できず、スイッチが入るまで時間が掛かるのが難点だろうか。

左右からの土の壁をジャンプでかわし、上からの巨木のプレスは焔を背中の翼に纏わせた紅炎翼（プロミネンスウィング）で突貫したザラマンデル。そしてその直後、視界の端から突っ込んでくる影が見えた。

「むっ！」

土と木の一撃は死角に潜り込み、一撃を加えるための布石。そして、場所（フィールド）も先程までとは違う物になっていた。別に移動魔法で別の場所に移動した訳ではない。ゴリリは木を生み出せる。それにより、火の気の残る壊れた町はみるみる森へと様相を変えてしまったのだ。攻撃や防御に木を生やし、その木々を使って身軽に動く。まさに、密林に住むゴリラである。

しかし、ザラマンデルも伊達にクルダ王であるジュリに勝った訳ではない。白兵戦を得意とするクルダの陣営とこれまで戦ってきたのだ。反応速度は上がっている。

ザラマンデルは拳を固め、カウンターの準備をする。先程までのゴリリの動きは体で覚えてしまったのだ。例え周囲の環境が変わっても、向かってくる敵は一人である。

「おぉおおおっ！」

迫るゴリリに向かって腰を捻りつつ、体重移動と共に突き出される拳。ゴリリの拳はザラマンデルの右側頭部を掠り、ザラマンデルの拳はゴリリの腹部にヒット。……という完璧なカウンターパンチだったはずだが……。

……ザァッ……

「ッ！　木の……葉……？」

ザラマンデルの拳がゴリリだと思われたモノの腹部に当たると同時にソイツはバァッと弾け、幾万もの木の葉に変わる。操れるのは何も木の幹のような大きく、硬い物だけではない。葉のような柔らかく、脆い物も操れるのだ。

「ッ！　これってっ！」
《キョータ！　罠らよ！》

ザラマンデルと彼の中のボボウが気付いたのはほぼ同時。だが、その時には既に気配を消して近づいていたゴリリが間近にまで距離を詰めていた。そう、今回のように自分そっくりな分身を作って相手の注意を引く事も可能なのである。

「しまっ――ぐっあぁぁぁああっ！？」

真後ろに居ると気付いた時にはもう遅かった。ザラマンデルはゴリリの拳を受けて空中を直進する。そしてその先には、先端を鋭利にした木の幹が。

「クッ。二度も同じ手を喰うか！」

前回のコユキ戦。ザラマンデルは木の幹で串刺しにされた。そうなれば行動の自由が失われ、相手に囚われたも同義。一気に不利になる。

ザラマンデルは突き刺さる直前、先端が鋭利な幹の先端付近を両手で掴み、突き刺さるのを防いだ。その後は、掴んだ腕を伸ばしながら離す事で棘から離れつつ地上に落下。後は地面に落ちるだけな訳だが……。

メキッ……

そう、落ちる先の地面から小さく音がしたと思った矢先、地面はみるみる様相を変えていく。それは言うなれば、巨大な岩のハエ取り草だ。

「ボボウ！　紅炎翼の勢いを使って飛べないか！？」

《ダメらよ！　時間が無いのら！》

背中から高圧高温の炎を噴き出しながら突っ込み、眼前の敵を焼き切る紅翼。その炎の勢いをロケットのように使ってハエ取り草の範囲から逃れようと思ったが、そうもいかないらしい。

「くそっ……」

バチンッ！

ザラマンデルが地上に落ちると同時に、ハエ取り草は閉じられた。

「キョータ君！」

この間、無論ズルフェとしては加勢したかった。木の葉を用いた分身といい、急に相手の知略が上がった。その事ですぐにでも加勢したかったのだが、目の前の獣がそれをさせてくれない。

ザラマンデルの相手をしているゴリラ型が木を生やし始めて戦闘環境がみるみる変わっていくのは戸惑ったし、目の前の鹿型がその巨木の幹を足場に使ってズルフェを巧みにザラマンデルへと近づけまいとする動きには手を焼いたが、ズルフェもまたその巨木を逆に利用して盾として身を護ったりしたのでお互い様だ。その『お陰』か『せい』か、ここまで互いに決定打を与えられずにいる。

『……』

「クッ！」

沈黙と共に目の前に立ち塞がる鈴也の駆るサンダーディア。意地でも向こうの邪魔をさせないつもりか、一対一にこだわるかのどちらかだろう。

「どきなさい！」

いずれにせよ、友を助けるためにも退いてもらう。ズルフェは右手を前へ突き出し、雷を迸らせながら左手を右手の傍に持って行き、後ろに引く。するとどうだろう。真っ直ぐ伸ばされた右手から後ろに引かれた左手の間に、雷が繋がっている。そして右手側もまた、上下に雷が伸びて弓矢のような形状へと変わった。

文字で見ると長い時間に思えるが、ズルフェがこの雷の弓矢を形成したのは約三秒だ。

「……雷矢（ライトニングアロー）」

静かに紡がれる技の名。そしてそれと反比例するかのように激し

く空を焼く雷。雷矢は速度と貫通力に優れた技。至近距離から放たれて、避けられる訳が無い。そう。サンダーディアは避けなかった。避けられないなら避けなければ良い。代わりに、その一撃を逸らした。

雷というのは、自分の通りやすい最短の道を選ぶ傾向にある。その物質より雷を通しやすいモノを自分の周りにバリアのように纏えば、そのバリアに沿って雷は逸れてくれる。……そう。そのバリアは例えば、雷などだ。

「……サンダースルー」

サンダースルーは雷系のスキルの名前。自分の周囲に雷を纏い、相手の雷を逸らせるスキルである。しかしもっとも、鈴也の中にも驚きがあった。

（……バリアにも相当な負荷が……。……コイツの雷、やはり相当強力だ……）

雷系の技には絶大な防御力を誇るが、やはり絶対ではない。バリアには防御値が設定されており、攻撃を受け続けたり強力な攻撃を受けると負荷が溜まって仕舞いには破れてしまう。防御値はレベルが上がるに連れて上がり、破れ難くなる。そしてサンダーディアのレベルも相当なモノだが、それにも相当な負荷を与えるズルフェの存在に驚きを隠せなかったのである。

「……けど、相手も驚いている事も事実。一気に攻勢に回るぞ！サンダーディア！」

バチッと空気が爆ぜ、角に集束される雷。ズルフェは小さく舌打ちをすると一旦距離を取り、相手の攻撃の対処へと回る。サンダー

ディアの角からズバァッと勢い良く放たれる雷槍（らいそう）。それはズルフェの胴体へ向けて飛んでくる。

「軌道が直線。……これなら避けられますね」

素早く右横へのステップで避けるズルフェ。しかし、鈴也の顔には笑みがあった。サンダーディアの体の向きを即座に右に移し、キーボードでコマンドを入れる。

「ふっ……。データ通りだな。サンダーラピッド！」

サンダーラピッドは雷の弾丸を任意の方向に三連射するスキル。準備時間が無いので牽制や大技と大技の繋ぎに使われる事が多い。その三発は狙い通りにズルフェに全段ヒットした。

「くっ！」（僕の回避方向を読んだような一撃。……まさかこのプレイヤー、戦闘の中データを集めて戦うタイプ……）

しかし、全段ヒットしたとはいえ、たったそれだけで相手のスタイルを見切ったズルフェもまた、賞賛に値すると言えるだろう。ズルフェはサンダーディアを警戒しつつザラマンデルの方を見る。

「……どうやら、助かったようですね」

ホッとした口調で息を付くズルフェ。ザラマンデルの両前腕には盾が装備されており、それで岩ハエ取り草の一撃を凌いだのだろう。おそらく、現実世界のカナデが武装合体で援護したのだ。

「……とはいえ――」

ズルフェは再び緊張した面持ちで目の前で静かに構え、佇む鹿を見る。

「――あまり長引くのは、得策では無さそうですね……」

第57話　スキル（後書き）

なお、永劫契約を交わして一つの国に属した後、他の国に移動するには課金アイテムが必要です。（↑この辺はリアルだな～

兄弟がランカーという状況ですが、これにも一応の理由があります。……火、というより、そもそもリキトアに属する者自体……。

それと、ちょい『炎』に関しての補足です。

他の属性はコマンドを送ると即準備時間が発生。終わり次第スキル発動という流れですが、炎は素体の纏う炎を別の物（例えば木）に燃え移らせ、そこからコマンドを送るという流れのため処理が一つ余分に掛かります。それで戦いのテンポが一段遅れ、相手にペースを掴まれる。それ故に、他の属性と比べて極める人が少ないのです。

第５８話　リキトアの戦士（前書き）

お待たせしました。

今回はザラマンデル視点からスタート。地上の土壁で出来たハエ取り草に挟まれそうになる所ですね。

第５８話　リキトアの戦士

時間は僅かに遡り、ザラマンデル視点。

「くそっ……」

左右から迫る大岩の壁。ゴリリは大地を持ち上げ、ハエ取り草のようにザラマンデルを挟み込もうとしていたのだ。そして現在ザラマンデルは空中で自由に身動きが取れず、紅炎翼の火力（プロミネンスウイング）でロケットのように空中を駆けようにも技の発動より挟まれる方が速い。

せめて胴体や頭部へのダメージを減らそうと腕を胸と頭に持ってきた直後、バチンッと言う音と共に岩に挟まれた。

「……終わった、か……？」

剛也の呟き。しかし、彼は自らその言葉を訂正する。その顔には、不敵な笑みがあった。

「いや。……まだだよな、ボボウ！！」

確証は無い。しかし、直感が言っている。まだ、ボボウは終わっていないと。なお、ボボウという名を知っていたのは、メールで『邪妖精ボボウを討て』とあったからだ。

ズズッとくぐもった鈍い音。それは先程ザラマンデルを閉じ込めた岩からする音だ。それと共に、岩が赤く変色して変形していく。

……ちょうどザラマンデルを閉じ込めた辺りが赤く変色し、膨らんできたのだ。それは、中の熱により岩が熔けている事による変色と変形。

剛也は不敵な笑みをさらに広げる。久々の好敵手との闘い。血湧

き肉踊る強者との闘い。それが彼に、今までで最高のゲームへののめり込みを見せていた。

「おぉおおおっ！！」

自分の動きを封じていた、自分の体に密着していた岩を熔かし、左右の自由を取り戻したザラマンデルは雄叫びと共に上下に拳を打ち鳴らす。直後、ザラマンデルを挟めていた岩の壁は轟音を立てながら崩れ、ザラマンデルは地に降りる。

ザラマンデルが窮地を脱したのは武装合体によるものだ。現実世界のカナデは岩の壁が左右から迫るのを見てキョータとキーンの筆入れから消しゴムを取り出し、持たせたのだ。その武器の形状は、盾。左右の前腕に付けられた盾は本人の属性――つまり炎――の影響を受け、その熱で岩を熔かしたのだ。盾の前方には鋭い爪のような突起が付けられており、防御だけでなく攻撃にも一役買うだろう。

ザラマンデルは心の中でカナデに礼を言うと、ゴリリに意識を集中させて突進する。

武装合体を果たしたザラマンデルはゴリリに肉弾戦を挑み、ズルフェは相手がデータを集めて戦うタイプのプレイヤーだと察して意図的に自分の癖を偽るなどのフェイントを使いだす。これだけ見ると状況はまだどちらにも傾いていないように見えるが、実際はそうでもない。

ゴリリは自身の生み出した木を攻防はおろか身軽に移動するための足場とし、そしてサンダーディアの方も、ゴリリの作った木の足場を利用して飛び回り、ズルフェを翻弄しつつ攻撃を重ねていく。

……戦闘環境が刻々と変化する事でザラマンデルとズルフェが戸惑っているのに対し、ゴリリとサンダーディアはその環境に見事に順

応しているのだ。

「くっ！　やっぱり厄介だな。こっちは木が邪魔で動きが制限されるのに、向こうは自由に動けるなんて……」

《生み出したのが奴等だから、向こうは戸惑う事が無いんらよ！》

「だったら……！」

ザラマンデルの左右の盾から炎が湧き上がる。自然物という事で躊躇いから木に攻撃できなかったが、このまま動きを封じられてなぶり殺しにされる訳にもいかない。突き進む先の木は全て燃やして状況を切り開く。だが、その意図を察した剛也は即座にコマンドを実行する。

スキルには属性、ランク毎に準備時間とクールタイムが存在し、ゴリリのスキルは土、水、木。この三つの内、最も準備時間の短いのは水だ。そしてこの状況で使えるスキルとは……。

ボゴッ

その音と共にザラマンデルの傍の木に変化が生じる。木の表面に丸い穴が空いたのだ。音が小さかったというのもあり、ザラマンデルは気付かなかったが、属性を司り、密接な関係を持つが故だろう。妖精であるボボウは自然物のチカラが強まっているのを感じ、ザラマンデルに忠言する。

《キョータ！　早く離れるのら！　右側の木から何か来るのらよ！》

「へっ？　何かって――！　うわっ！？」

前腕に装備された盾が割りと大きく、側面を広くカバーできるというのが幸いした。ザラマンデルは言葉の途中でボボウの言う何かに襲われたのだ。

水だ。

水がジェット水流のような勢いで木に開いた穴から飛び出てきたのである。木は根から吸い上げた水を道管（どうかん）――木の内部における水の通り道――で枝の先々にまで行き渡らせている訳だが、それはつまり木の中には水を通すための仕組みが成り立っているという事。後は簡単だ。一つの大きな道管を作り、穴を開けて地中の水を一気に吸い上げれば、その穴から多量の水が勢い良く出てくる。

通常なら貫くための攻撃。だが、ザラマンデルの装甲の厚さは並みではない。盾に当たった水は盾の半分まで貫くもそこで遮られる。しかし、その水の勢いは止められず、ザラマンデルは吹き飛ばされた。

「おわわわわっ！　……でっ！？」

「！？　キョータ君！？」

どうも、戦闘途中のズルフェにぶつかってしまったらしい。ザラマンデルはすぐに謝ろうとするが、ズルフェは血相を変え、右手で上を指差す。

「キョータ君！　上うえ！」

「？　げっ！」

指された方を見てみると、サンダーディアが真上を取り、角に雷を迸らせている。都合良く二体――ザラマンデルとズルフェ――が一緒になったという事で、この機会に二体同時にダメージを与えようという腹だろう。ところで先程ズルフェは右手でサンダーディアを指差した訳だが、実は左手は絶賛対策を練っていた所だ。

バチッと爆ぜる音が後ろからも聞こえ、首を後ろに回すザラマン

デル。

「？　……あっ」

視線の先、ズルフェの左手の平には、雷の球が出来上がっていた。上を取られてザラマンデルに呼びかけると同時に、カウンターのための雷球を用意していたのだ。サンダーディアの技はそれなりの大技らしく、準備時間が長い。そこをダメージが低いとはいえ即座に出せる技を撃てばどうなるだろう。ダメージを与えると共に、体勢を崩させて大技はあらぬ方向に。それで戸惑っている間にこちらの大技を当てる。それがズルフェのとっさに思いついた戦術だ。

ズルフェの目配りでそれを察したザラマンデルは、ギリギリまでサンダーディアを引き寄せた所でズルフェの上から退避。今までザラマンデルが目隠し（ブラインド）となって隠されていたズルフェの雷球は彼の手から離れ、真っ直ぐに飛んでいく。

「ッ！　くそっ！」

それは鈴也にとっても不意打ちとも言える攻撃で、彼は自身の技をキャンセル。代わりに風のスキルを発動させた。

自身にいずれかの方向から風を吹かせ、軌道の修正やスピードアップを図るスキルだ。その軌道の修正は主に空中でのそれに使われる。鳥形のように元々飛べる者を除き、地上戦が主な者は空中では攻撃を避ける事が出来ない。しかし、そのスキルが空中での回避を可能にする。

「ッ！　避けた！？」

「……なるほど。風を使いましたか」

ザラマンデルの驚きとズルフェの分析。ズルフェが読み取る事が

出来たのは、彼の属性が『風』だからだ。サンダーディアの用いたスキルと同じ属性だから、空気中のその属性の動きが良く分かるのである。

風で回避したサンダーディアの先には木の枝があり、そこに着地するつもりだろう。飛ぶ方向まで見極めたうえでの回避。さらに言えば、あの場面で一か八か自身の攻撃が間に合うか否かの賭けに出ずに回避を優先した所から見て、慎重な堅実さも持ち合わせているらしい。つくづく抜け目無いプレイヤーだ。

ズルフェがその事に感心しつつ唸った時だ。

ガスッ

「「ッ！！」」

これにはザラマンデルもズルフェも驚いた。サンダーディアが木に辿り着く前に、割り込むようにして木が横から伸びてきてサンダーディアに激突したのである。サンダーディア自身は即座に風を纏って防御壁を張りつつ下から風を吹かせてゆっくりと軟着陸したが、そこからズルフェは見つけた。

何でも無い、不慮の事故とも言うべきアクシデント。だが、それからズルフェは牙城を崩すキッカケを得たのだ。

「……キョータ君。良く聞いてください」

「？　……」

ズルフェがザラマンデルに策を囁いてる間、ゴリリとサンダーディアの攻撃は止まっていた。それというのも……。

「剛也！　お前あのタイミングで！」

「……仕方ないだろ。木の準備時間は長めなんだから」

口論をしていたからだった。なお、剛也の口調がローテンションの理由だが、集中モードに入るといつも彼はこうなのだ。考えた事を口にする思考ですら、戦闘の方に回している。

そして先程もスキルの準備時間の事は話したが、木は遅い方だ。ちなみに準備時間が速いのから順に、風、水、雷、火、木、土といった所である。

剛也が自身の足場にと思って出した木の枝。しかし、木属性のラグは大きく、一旦発動したスキルは戻せない。木を伸ばそうとした先にサンダーディアが飛んできたのに気付いた時には、もうスキルは発動していた。先程の事故はそのためだ。

「ッ！　来た」
「ッ！　クッ！」

剛也の呟きで鈴也は悪態を堪えつつ画面に顔と意識を向ける。

ザラマンデルは紅炎翼の火力を推進力に変え、ゴリリに突っ込む。そしてズルフェもまた、空中に舞い上がり雷の弓矢を生成。サンダーディアに狙いを定め、放つ。それに対し、ゴリリは木の陰に隠れた後木をよじ登り、先程同様木々の間を身軽に動いてザラマンデルを翻弄する戦術。そしてサンダーディアはズルフェの雷矢を軽々とかわし、角に雷を集束。自身の攻めの機会を窺う。

一見先程までと同じだが、ザラマンデルとズルフェには確かな戦略があった。

「えっと……まずは……付かず離れず、いつでも掴める距離で！」

ザラマンデルはズルフェに告げられた事を頭に思い浮かべ、ザラマンデルは飛び上がり、木々に隠れたゴリリを追う。

一方ズルフェの方は、先程とは明らかに違う戦術を取っていた。

「……さぁ。大魔法使いらしく、ド派手に行きますよぉ！！」

雷矢をかわされた彼の顔には笑みが。戦略における彼の役目は、ここから始まる。

第５８話　リキトアの戦士（後書き）

さて。剛也がボボウの安否を確信した事ですが、これにはある理由があります。……現実世界の人間から見てゲームでも、ちゃんと世界としてはある。ってのがヒントですかね。……むしろ、現実世界の方が『合わせた』に過ぎません。……これ以上を言うとこのシナリオにおけるネタバレになりそうなので伏せますか。

次回はゴリリとサンダーディア戦、決着です。お楽しみに！

第５９話　道（前書き）

お待たせしました。今回の話でゴリリとサンダーディアとの交戦、決着です。……まぁ、その後さらにちょっとあるんですがねー（遠い目

第59話　道

ズルフェの手を中心に、空気中に激しく雷が迸る。

「過電圧世界（ボルテックワールド）ッ！！」

「ッ！」

鈴也の顔に驚きが広がる。先程まで隙が少なく、出の速い技を使っていたのが、急に大技を出してきたのだ。

過電圧世界。その名の通り、莫大な電圧を誇る電撃がズルフェを中心に放たれる広範囲攻撃型の技だ。それは確かに強大で、木の葉から水分が蒸発。萎びるほどだ。

鈴也は攻撃判定外に出つつ思考を巡らせる。

（……どういう事だ。……大技を出して無理やり勝負の流れを引き寄せるつもりか、それとも破れかぶれか……）

思いつつ、後者は無いなと否定した。相手は自分がデータを基に戦うと見抜いた上に自身の癖とは反対の行動を取るフェイントを交えてきた。そんな頭脳派が破れかぶれで隙の大きい大技を出すだろうか。

「ッ！　おっと」

考えを巡らせている間も攻撃は来る。ズルフェは動きの止まった――鈴也が思考を巡らせていたため――サンダーディアに雷矢を放ち、鈴也はすんでの所でかわす。

そしてズルフェは再び先程の大技の準備と思われる仕草をする。

鈴也は一瞬、二度も隙の大きい大技を選択した事に戸惑うが、彼の中にもまた勝負師としての血が入っていたらしい。不敵な笑みを浮かべ、呟いた。

「……良いよ。そっちがそのつもりなら、誘いに乗ってやろうじゃないか！」

出す前に出の速い技で先制攻撃。先程相手（ズルフェ）に使われた手を使わせてもらおう。いや、頭の切れる相手の事だ。むしろそれを誘っているのかもしれない。その誘いに乗ってやる。鈴也はそこまで考えを巡らせて、その先を思考から音として口に出す。

「ただし！　ただでは突っ込まないよ！」

彼がコマンドを入れたのは二つのスキル。一つは攻撃用として雷を体――鹿型やユニコーン型など角を持つ素体なら角――に纏わせて相手に突撃する『ライトニングタックル』。そして、自身に雷を纏わせる事で相手の雷を受け流す『サンダースルー』だ。

自身に突っ込んでくるサンダーディアを見て、ズルフェは笑みを浮かべる。

「……掛かりましたね」

そう言ってズルフェは構えを解き、電撃を手に纏わせたまま前方に手を構える。

「ッ！」（何だ！？）

何かあるとは思っていた。しかし、まさか真っ向から受け止める事だとは思っていなかった。先程も述べたが、スキルは一度発動す

ると解除は不可。キャンセルできるのは準備時間の間だけだ。故に、サンダーディアは突っ込むしかない。

「……くっ！」

バチッという音と共にズルフェの手とサンダーディアの双角（そうかく）が激突する。

だが、鈴也は思い違いをしていた。風王ズルフェというデータが少なかったのは要因としてあるが、ズルフェはパワー型ではなく遠距離支援型だ。真っ向から相手の攻撃を受け止めて反撃という戦闘スタイルは、元々向かない。ズルフェが行ったのは、そんな『剛』の技法ではない。

「はっ……あぁあ！！」

相手の雷に打ち負けないために自身の手の雷はそのままにしていたが、それでも相手の電撃の威力で痛みが走る。ズルフェはそれに耐え、突撃する力を逆に利用して別の方向に飛ばした。

剛ではなく、柔の技法。合気道の要領でサンダーディアを投げ飛ばしたのだ。そしてその先には……。

「ッ！　剛也！」

「ッ！」

ザラマンデルと交戦していたゴリリがいた。

付かず離れず戦っていたザラマンデルは戦っている内にゴリリの動きに慣れていき、今まで翻弄されてきたのがピッタリマーク出来るようになっていたのだ。当初のズルフェの計画では、翻弄され、ワザと隙を見せてそこから第二段階へ、というものだったが、ここから先は結果オーライと言えよう。何故なら、元々ゴリリとサンダ

ーディアを干渉させようという策だったのだから。
サンダーディアの落ちてくる地点から離れようとするゴリリ。しかし、ザラマンデルはゴリリの腕を掴み、逃がさない。

「このっ……」

剛也は振り解こうとゴリリの腕を振り回させようとする。しかし、その前にザラマンデルは胴体をゴリリに寄せ、拳を掴む方とは逆の手でゴリリの下腹の辺りを押さえ、上に投げ飛ばした。

「せぇー……のっ！」
「まずっ――」
「しまっ――」

剛也と鈴也がその意味に気付いたようだが、もう遅い。
ズルフェに受け流されたサンダーディア。そしてザラマンデルに投げ飛ばされたゴリリ。二体は空中で激突した。サンダーディアは依然として角に雷を帯びており、ゴリリはサンダーディアの鋭利な角と雷の一撃を浴びる事となる。

ズルフェが気付いたゴリリとサンダーディアの弱点。それは、チームワークが噛み合っていないという点だ。
サンダーディアは既に出ていた木のみ足場とし、跳躍と同時に現れた木には対応できていなかった。本当に協力体制が出来ているのなら、先程サンダーディアが木に当たった後も、ザラマンデル達とサンダーディアの間に木の壁を作り、そして木の葉をクッションとする事で、サンダーディアの落下のショックを和らげるなり出来ただろう。ゴリリがそうしなかったのは、本当は協力体制が出来ていない事に他ならないという事ではないだろうか。

ズルフェから見れば、ゴリラ型は奔放に戦っており、鹿型はそれに合わせてそれぞれ別に戦っている。そういった風に映った訳だ。

そしてその推測はどうやら正解だったらしい。それぞれで戦っているという事は、突然の干渉には判断が鈍るという事。そう、例えば、一方の技が発動している時にもう一方をぶつけてやれば……。

「ッ！　まずい！　ゴリリがマヒった！」
「こっちも角がお前のゴリラを挟んで取れなくなってる！」

前者はサンダーディアの雷でマヒして慌てる剛也。どうやら、超集中モードは終わったらしい。そして後者は、どうやらゴリリのボディーが角にジャストフィット。すっぽりはまって衝撃を加えないと取れない状況になったようだ。

そしてその隙に、ザラマンデルとズルフェは締めの一撃を放つ。

「今です！　キョータ君！」
「おぉ！」

ズルフェはザラマンデルに叫びつつ右手に雷を集束し、ザラマンデルもまた頭部の龍の頭を模した甲冑。その口に紅い焔が湧き上がる。

「ボルテクスプレッシャーッ！」
「フレアバーストッ！」

上方のズルフェからは台風のような暴風を交えた雷が。下方のザラマンデルからは火山の噴火のような高温の炎が二体の素体に襲い掛かる。

「うわわわわっ……わっ！？」

剛也の驚いた声。二体の攻撃を喰らった途端、自分達の素体にヒビが入り、壊れてしまったのだ。鈴也は呆然と「……ホントに壊れた」などと呟いているが、剛也は何故だか大爆笑。負けて素体まで壊れたショックで壊れたかと心配になった鈴也は彼を気遣うが……。

「あ？　ああ、大丈夫大丈夫。壊れてなんか無いって」

と、笑い過ぎて涙が出たらしい。目を擦りながら笑顔を見せた。そして、「けど」と続ける。

「オレが集中力をフルに発揮して、そのオレに勝つ奴がいるのが嬉しくてな」

「ッ。……」

剛也の言った事で彼の今までを思い出す鈴也。

彼の集中力はムラがあり、戦果は安定しない。しかし、その代わり一度ゲームにのめり込んで集中すれば無類の強さを発揮する。それこそ、四国合わせてもトップクラスに入るほどに。だが、それ故に彼は心のどこかでつまらなかったのでは無いだろうか。結局、自分が集中力をフルに発揮してはほとんど勝てる者はいない。結局、本気の自分と渡り合う事が出来る者はいない。……それは、一種の孤独には繋がらないだろうか。

だからこそ、今回の敗北には意味があった。今回の一戦、剛也は今までで最高にゲームに集中していた。その剛也に勝ったのだ。

それは彼に、まだまだ終わりじゃない。まだまだ『強さ』には先がある。

そういった事を、思わせてくれたのでは無いだろうか。そう思えた時点で、剛也はまた歩き出せるし、今いる先にも進める。……そして、自分も……。

鈴也が剛也の意志に触発されようという時、剛也は居心地悪そうに苦笑いを浮かべる。

「……へへっ。……やっぱ変かな。負けて嬉しいなんて」

「……いや。――」

変なんかじゃない。

「――僕も同じだ。……一緒にもっと強くなろう」

「ッ。……おうっ！」

鈴也に差し出された手に一瞬剛也は戸惑ったようだが、すぐに勝気な笑顔を浮かべて鈴也の平手を叩く。鈴也は叩かれた手の平を擦りつつ、剛也にジト目を送る。

「……ちゃんと握り返せよ」

「へへっ♪」

まったく。

調子の良い双子の一方にしょうがないなぁという笑みを浮かべつつ、鈴也には気がかりな事があった。

（……けど、勝負の最中、どこか剛也が遠くに行った様な……）

すぐ後ろにいるはずの剛也。しかし、その彼がどこか遠くにいったような、段々この場所から離れていってしまうような、不思議な感覚を覚えた。……ちょうど、ボボウを岩の壁に閉じ込めた辺りか

らだろうか……。

（それに……）

次に彼は、剛也のからかいを受け流しつつ壊れてしまった素体に目を向ける。

（……負けて素体が壊れるなんて……何で……。……レベルを上げると共に、少しネットの噂を探ってみよう）

鈴也はそう、心に決めた。

一方、キョータ達は……。

「……戻って来れた、かな……」

「みたいですね。……たださー」

キーンは語尾を伸ばしつつ、自分達の下にいる者に視線を留める。

「なるべく早くどかないと、シノブ君が潰れますよ？」

「ッ！　わわわっ！？　ゴメン、シノブ！」

そう。現実世界に戻った時の位置は、下からシノブ、キーン、キョータ。シノブは体が弱いため、子供二人の体重とはいえ結構な負担だ。キョータ、キーンの順で慌ててどけると、シノブは何故か慌てた様子で口を開く。

「キョータ君！　皆大変だよっ！」

「？　何が？」

とりあえず、眼鏡を付け忘れているようなので傍に落ちていた眼鏡――二人の下敷きになったショックで取れたのだろう――をシノブに渡す。

シノブは礼を言いつつ、早口に言った。

「キョウさんが四天王のコユキに攫われたんだっ！！」

第５９話　道（後書き）

なお、サブタイの『道』は、剛也と鈴也を指しています。集中力を発揮すれば無類の強さを誇る剛也と相手の癖を見抜き、着実に追い詰める鈴也。二人にはまだ先がある。道は続いている。そういった意味でと。

さて。後もう少しでリキトア編も佳境ですかね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7881m/

幻想世界英雄列伝フェアプレイズ　ＩＦ

2011年12月24日10時50分発行